

どらごんれでいいらばーず！！！！～現代日本で竜娘にTSしたけど同じ超可愛い竜娘（問題児）と支え合ってハーレム生活を満喫します！！～

囚人番号虚数番

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

どこにでもいる大学生主人公洋野黎人はある日の夜に恐ろしい化け物を見てしまった。次の日、自宅の前で謎の少女と出会い突如殺される。

そして……目が覚めると女の子になっていた!?!さらに黎人を殺した少女は自らを竜と名乗って……

「今から言う内容を受け入れてくれれば命だけは助けてあげる。なんなら元に戻る手伝いもするわ」

「レイト、あなたの家に私を匿って」

更に少女を目的にやってきたのは黎人の友人の資産家の美人の娘と彼女のメイド。しかし彼女らは彼女らで実は大変な秘密を抱えていたのだ!

「これから家族として末永くよろしくおねがいします」

「此処から先は機密事項だ」

目次

転生したら竜だったけど境遇的に全く笑えない	1
ざんねん、緋色の竜は殺人鬼でした、あーあ	11
人間性（漫画、ゲーム）を竜に捧げた男	20
竜と人は一線を越えた。出会って一日、同性で	30
5 持つべきものは協力者、だが客にしては棘がある	40
ヤンデレってあるけどけど子持ち殺人鬼相手でもゴールインしちゃ	
うんだなあ（白目）	53
流石金持ち、やるのが派手だねえ	63
ファミレスで喜ぶ竜	73
ドキツ★コスプレだらけのファッションショー	83
10 街に潜伏（お出かけ）する竜	93
街に潜伏（お出かけ）する竜 その2	99
実家に帰省	109
餐龍の緋の刃	120
嗚呼鮮血を振りまいて	129
15 白濁に溺れ彼は死す	142
俺、死す？いいえ今回もいつものです	149
健全な精神は健全な肉体に宿ればいいな	159
鳴葉は竜だった可能性が微粒子レベルで存在した……？	166
月輪式完全神学教室	173
20 深淵がこちらをなんとやら	183
殺人鬼もたまには甘えたい？	191
追憶	199
「鳴葉稻荷」 狐誘う因果の神域	205

Dragon bed?	212
25 Dragon lady	218
Dragon impact	226
秘匿	233
対物性愛の秘密	240
薔薇で出来た百合の造花共によるデート	250
身勝手な彼女は何処へ	260
紅白の竜	265
そして運命は動き出す	272
「鳴葉大社」月に吠える獣	278
神域	285
苗床	291
龍の黎明と竜の始祖	298
登り竜	307
あなた達への説明	315
生贄の竜の緋刃	320
暁と龍の明日	328
ハレの日ケの日、饗宴の終わり	334

転生したら竜だったけど境遇的に全く笑えない

俺はある日見てしまった。深夜の郊外、友人との飲み会の帰りだった。普段酒なんてろくに飲まない俺が男女数人の集まりで無茶したのが悪く帰り道で気分が悪くなる。帰宅まで耐え切れず遂に俺は路地裏で食べた物を吐瀉した。

何とも言えない匂いの物を吐き出し少し正気が戻る。口の中が気持ち悪い。手持ちの金で水を買ってきた。近くの自販機を思い出しつつ路地から出る。

路地を出るその前、びちゃびちゃ、びちゃびちゃと水音を聞いた。きつと俺以外の誰かの嘔吐の音だろう。だがそれは水たまりで水が飛び散る音で吐くにしてはあまりにも多すぎる。臃げな意識で彼が心配になってしまった俺は路地を曲がり音の主と垣間見た。

それは前傾姿勢の小柄な人の形をしていた。だが細部の特徴はどこか爬虫類に似た作りだ。頭は赤い甲殻、体は鱗に覆われ全身が赤く濡れている。臀部には短い尾が生え、両手両足の鋭い爪は猛烈な鉄臭さを放つ。それは間違いなく尋常な生物ではない。

化け物は俺の気配を察しゆっくりとこちらに振り向いた。橙色の目が俺の顔を睨みつけた。だが幸いにも俺は目を合わせなかった。猛烈に目を引くのはその野蛮な風貌とは真反対の技工に飛んだ装飾がなされた両刃剣を化け物は握っていたのだ。

恐怖で酔いが吹っ飛んで俺は全速力で走りその場から逃げ出した。あれは何だったのか、どうしてあそこになっていたのか、そんな些細なことなど考える余裕はない。その日は不運にも出会ってしまったそれに怯えながら布団に潜った。

「で、何が見えたのかい？ もう一回言ってみてくれ」

『血に塗れた人形の化け物』。いや、俺も流石に酔ってたから信じられない。でもどうにも多分アレは幻覚とかじゃない気がする。でも笑うのは止めてくれ、ナツメ。ひいろはどう思う？」

「ふふふ、夜道で襲われないようにしばらくはお酒はお家で楽しみましょうか」

俺は洋野 黎人(ひろの れいと)、大学生2年だ。何の変哲もない一般的な日本男児である。で、今話しているのは友人のナツメとひいろ。同学年で同年代の中のいい友人だ。先日の飲み会というのがこいつらとの集まりで、たまにはどっかで飲もうとなったのだ。今は俺がその帰りに見た物を彼らに話す。当然ながら信じられない。だって俺も信じられないのだから。

「でも怪物なら夢かもしれないね。もし最近世間を騒がせてる『殺人鬼』と黎人さんが出会っていたらどうなっていたか分かりませんよ」

「いやそりゃないだろひいろ。そいつの現場、最新ニュースだと隣町だろ」

殺人鬼、ここ最近街に現れて無差別に人を殺して回る謎の人物だ。目的は不明、襲われた人も特に一貫性もないらしく未だに犯人は捕まっていない。共通しているのは被害者は多量の出血と噂では体の一部がミンチ状になって死ぬそう。でもこの付近で怪しい何かがないならせめて俺達だけでも警戒すればいいかな。

「でも今はいつかの事より今の心配をしましょう。単位はいくらあっても困りませんかからね」

「だな。というかお前ら今日平気なのか？ ひいろは酒豪だからいい

として、ナツメのアレはどう考えても不味くねえか」
「うん、今朝から頭が痛いし気持ち悪くて死にかけた。四限前でどうにか誤魔化せられたから今は平気だよ」

ナツメはグツと親指を立てた。青ざめた笑顔でされるとウザいが昨日を思い出して同情する。というよりひいろがおかしい。何でビールサーバー一つ枯らして一人で2件目も行ってるのに平気なんだこの人。あと何故ナツメはそれを知った上で何で酔い潰そうとした。バカなの？ 俺何度も止めたよ？

くおーい、講義始めつぞー

と、そろそろ講義が始まる。話を切り上げよう。それからの特筆すべきことも無く抗議は終わり俺たちは家に帰った。そこで一度みんなで例の場所を見てみようかと帰り道恐る恐る全員で行ってみた。

「血の跡はあるけどこれは喧嘩の跡かな？ 高さと大きさに壁に頭がぶつかったっぽいね」

「ですね。じゃあ今日のところは不明ってことでまた明日。さようならナツメさん、黎人さん」

俺には怪我の分析なんてさっぱりだ。だがそこには確かに血の跡はあったが確かに化け物と評すには少ない。やっぱり見間違いだっただか？ 不思議に思いながら俺はバイトをしてから帰宅する。

夜遅くに自宅のアパートに帰る。今晚の飯はどうしようか、近日の課題、趣味のゲーム、そんな些細な事を考えながらいつも道理自分の家に向かう。が、しかし今日はいつもとは違った。

「……居場所は、この筈よね」

「(誰かいる?)」

玄関前の廊下で誰かが立っている。見た所小学生から中学生くらいの赤い服の女の子だ。赤髪で、年齢にしては大人びた上質な赤いワンピースでこのアパートには不釣り合いだ。よく見ると頭には白い巻いた角の飾りと短い尻尾? のアクセアリを着けている。きっと友人の家に尋ねに来たのだろう。うん、そうであって欲しい。

別に誰かの来客なら無視でも構わない。だが彼女の前の扉こそ俺の部屋の入口だからどいてほしい。彼女はこの辺りでは見ない顔で俺とも面識はない。過去にも見た覚えはないしマジで誰なんだあいつ。

あ、彼女と視線が合った。なんか鋭い目つきで見られてる。彼女からしたら知らない人がじっと見ているのだ。警戒されるのも仕方ない。とりあえず俺は家に帰りたい。彼女に理由を尋ねて親に引き取ってもらい帰ってもらおう。

「ねえ君、俺んちの前でどうしたの?」

「っ!?!」

瞬間、俺は膝から崩れ落ちて倒れこむ。というより一瞬で手足を切断され、結果重力に従い胴体が落下しているのだ。彼女は残った胴体にも一撃を叩き込む。胸から腹にかけての袈裟切りは人間を殺めるには十分だった。最後に追い打ちとして静止し俺の瞬きの間に乱舞で体全てを肉片に変える。

「(……………え?)」

余りにも一瞬で行われた一連の攻撃は己が肉片になる過程でも意

識を保っていた。絶命の前に見えたのは日常の空間に赤い線を引く両刃の緋剣と血を纏い舞う彼女だった。

「つい殺しちゃったけど……この人昨日の奴じゃない。全く、嫌な偶然ね」

「まあいいや、やっちゃったからには責任位取ってあげようか。まあどちらにせよ人生は終わるわね」

「……うっわ、やっぱ」

「……………はっ！ はあはあ、はあ……………朝？ とうか何で布団にいるんだ」

目が覚めたら自宅の寝室だった。時刻は午前8時、窓から差し込む明かりがこれほど有難いと思つた時は無い。なにせ昨日俺は、うん、夢だ。俺が死ぬ悪い夢を見て気分が悪い。幸い今日は休日だからゆっくりしよう。

「(そうだ、あれは夢、夢だ)」

だが夢にしてはあまりにも鮮明で体がどうなっているか気になる。服を脱ぎ体の各部を見る。あの夢のような即死級の傷は無い。だが肉体に何か違和感がある。いつもより体が細く、心なしか着慣れた服も大きく感じる。とうかさつきから声が高くなっている。なんだ、風邪か？

「あー、あーあーううん。いやこれ女の声みたいだな。というより……これ俺女になってないか!？」

跳び起きてスマホで一枚自撮りする。すると写真に写ったのは男物の服を着た白髪の少女だった。背丈から年齢はギリギリ高校生くらいに見えなくもない。白い肌、青く濁った瞳、頭には大きく、そして透き通った角。背後に白い蛸鱸のような白い尻尾が生えていた。一応下半身も確認する……ああ我が息子、十数年もの間お世話になった。

一息ついて考える。何なんだこの体？ 神秘Maxの軟体動物の萌えキャラみたいだけど尻尾とかは無意識に動いてるから生物の物らしい。触れてみると冷たく湿っている。感覚もまるで初めからあったかのように鮮明だ。頭の角は柔らかく弾力がありゴムに近い触り心地でこちらは感覚は無い。詰まるところこれらの人外の部位は本物だ。

これからどうしようか。今日が休みとはいえいつかはまた社会復帰しなければならぬ。だがどう見てもこの体は異形でまともには生活できないだろう。とりあえず今は友人で信用できるナツメらにでも相談しよう。彼らは胡散臭いが技量だけは確かだ。

ガチャ

「ああ、起きたのね」

部屋の外から昨日の彼女が入ってきた。しかも勝手に台所を使われたように開けたドアの先からは何かが焦げた匂いがする。

俺は反射的に部屋の隅に逃げた。いくら少女でも相手は俺を殺した殺人鬼である。ここがアパートだという事を忘れ震えながら大声で叫ぶ。窓を割ってでも逃げ出さなかつた僅かな理性と対話を試みた冷静さがあるだけ良かった。

「お前昨日俺を殺した奴だな！俺の体何してくれてんだ！」
「昨日はごめんなさいね。でも治療出来てるし生きてるだけ良かったじゃない」

謝る気のなさそうな謝罪の後彼女は俺の体を一瞥する。そして喋れるし動けるなら体は平気か、そう一言口からこぼした。

「で、自分の体について知りたいの？」

「ああそだよ！　っーかお前は誰だ？　一体何のためにここにいる!？」

「あーはいはい、いっぺんに聞かれても私も話せないわよ。まずは一度落ち着きなさい」

彼女は情けなく怯える俺を無視してどんどん近づく。俺は極限のストレスに耐え切れずたまたまそこにあつた目覚まし時計を彼女に投げつけた。

だが彼女の方は冷静だった。飛んできた時計を何処からともなく取り出した怪物も持っていたあの剣で二分し、加えて…………

「暴れるんじゃないわよ！」

ズバァン

目にも止まらぬ早業で剣を振り下ろし俺の首元ぎりぎり寸止めする。遅れて風を切る音が鳴り衝撃波で肌の一部が切れて血が流れた。だが出血には変わりなく急速に前進の力が抜ける。ついでに下着の一枚が少しだけ生暖かく濡れた。

「あ、ああ……………」

「やーっと落ち着いた。私は餐龍【緋刃】、竜よ。今は人型だけどね」

竜？ 耳を疑ったが彼女は自身のことを竜と称した。しかも名前も日本人名からはかけ離れている。

「昨日のことは覚えてる？ あなたは多分人外の何かを見たわよね」
「っ!？」

何でそれを知ってる。友人には昨日の話をしたけれど彼ら以外には話していない。俺以外の誰かがまた別に知っているのなら話は変わるがきつと彼女が表したいのはこうだろう。「お前が見た赤い化け物はこの私だ」。

「その反応、凶星ね。早い話、私はあなたに竜の姿を見られたの。だから「殺しに来たのか？」それはあなたの返答次第ね。その前にあなたの体についてちよつと話すわ」

刃を俺に向けたまま彼女は俺の体について話す。

「昨日あなたに驚いてうっかりぶつ殺した。それで私の都合もあつて手持ちにちよつと治療出来る物資があるから治したわけなんだけど……結果あなたは副作用で人を辞めて竜になったの。私としてはこれから考えるとそつちのほうがありがたいけどね」

「（これは生存を喜ぶべきなのか、殺された挙げ句人を辞めた悲しみに暮れるべきなのか迷うな）」

「けれど実を言うと私も困っているのよね。だから今から言う内容を受け入れてくれれば命だけは助けてあげる。なんなら元に戻る手伝いもするわ」

元の体に戻るのか!? この体についてはまだ何も知らないけれど今後の人生のためにも早いところ元に戻らないと。俺は命欲しさ

と人生のため無言で首を縦に振る。

「あなた、名前は？」

「黎人、洋野黎人」

「レイト、そう、分かった。レイト、あなたの家に私を匿って。必要であれば私もできる限り協力してあげる。というより、断れるはずないわよね？」

彼女、餐竜は両刃剣の刃をちらつかせる。断れば殺すという意志は明確に伝わってくる。勿論彼女を受け入れるしかない。

「……」コクツコクツ

彼女は剣を下ろしそして自身の腹に突き刺した。刃渡り的には体を貫いてもおかしくないのに逆に剣の方が体に溶けていく。そして完全に剣は彼女の体に吸い込まれて無くなった。

原理は分からないけれど彼女が人ではない、それだけは絶対だろう。

「交渉成立ね。それじゃレイト、宜しく」

こうして、俺と竜の奇妙な生活は始まった。

ところで、さつきから台所から漂う焦げた香りは何なんだ。

「朝食の肉。人って肉を焼かないと食べないらしいでしょ？ 適当にやったら焼けたわ」

「(え、でも焦げてない?)」

不安になって台所に行くとコンロの上にフライパンと黒い塊が置かれていた。冷蔵庫の中身を確認すると買っておいた肉が確かに無くなっている。分量的にもあの黒い塊が肉で間違いない。

「でもなんか話と違うわね。硬いし苦いし食べられたもんじやないわ。人間って本当にこんなのを食べるの?」

……奇妙な生活、続けられるかなあ。

ざんねん、緋色の竜は殺人鬼でした、あーあ

協力関係は成立したのでお腹がすいたしとりあえず二人で朝食を食べることにした。さつき焦がした肉は捨てた。緋刃は焦げていても構わないと言っていたのだがさすがに食べさせる訳にはいかないのでメニューは昨日の余り物だ。

食事を通して知ったのは彼女はやはり人の生活に疎いらしい。自称竜は伊達でないらしく素手で食べようとしていたのを慌てて止めて、箸は勿論使えなかったからスプーンを使わせた。幸い俺が出した飯は男の一人暮らし特有のシンプルな飯だけど彼女はおいしそうに食べてくれた。

「うーん、噂に聞いた調理って最終的にこうなるのね」

「ほぼ焼くだけの奴だけだな。因みに竜って何食べるんだ？」

「私は雑食、でも大体は沢山手に入るお肉を食べてた」

雑食と指定している当たり竜にもいろいろあるらしい。

腹も満たされ次にやるべきことは今後の為の根回しだ。突然の女体化とかの怪奇現象を他人に話すのも憚られるけれど背に腹は代えられない。ここは友人に頼ろう。

電話……は朝だし声が変わって信用してもらえないか分からないのでメールで約束を取り付ける。あ、そうだ。念の為餌替わりに俺らの自撮り写真も送ろう。

「緋刃、ちょっと来て」

「ええ、でもその道具は何かしら。噂に聞く機械よね」

「スマートフォンだ。あと尻尾が見えてるからもつと近づいて」

女体化は伝えるとしても竜だとはまだ知られたくない。俺の角も見えるとまづいからもつと顔が画面中を占めるようにしたい。試行錯誤の末に納得する構図を見つけた。が、映えを考えたらお互いの

体がかなり密着してしまっている。

「これでいい？って何ドキドキしてるのあんた。緊張はいいけど失敗しないでよね」

「(女友達とでもこんな事したことないぞ) う、うん、じゃあ撮るぞ」

シャッター音とともにフラッシュが焚かれた。

「ひゃっ」

「あつやべ、フラッシュオンにしたままだった」

「光るなら先言いなさいよー!」

緋刃に叩かれながら写真を確認する。よし、ちゃんと撮れてる。角と尻尾も目立たないしこれで十分だ。仲の可愛い女の子が二人で映る、あるいは姉妹の写真みたいだ。後は適当に文面を考えて、とりあえず衣服とバイト関係の処理を手伝ってもらうか。服はよくサイズを見誤るからなるべく人力で買いたい。それに……報酬はまああいつだし俺がプライドを捨てれば工面できるだろう。写真を添付して送信した。

送信して数秒、返信が返ってきた。「今日はバイトと女子会があるから明日朝一で飛んでく」とファイル付きで返ってきた。ファイルは……あいつ好みのいい趣味をしたアパレルブランドを纏めた表だった。あいつ、確か今の時間いつも寝起きだよな? まああいつだし。

で、次は現状理解のために改めて自己紹介をする。

「改めて俺は洋野 黎人。人間の頃は普通の男子学生だった」

「学生?」

「あー、将来の為に学校で勉強してた」

俺から話すことは少ない。ただの一般人だから当たり前だ。緋刃は俺というより人間そのものについて多く聞いてくるから一度彼女の方の話をすることにした。

彼女は餐籠【緋刃】、年齢は不明、出自も不明。ただ心の赴くままに旅をしながら生きてきたらしい。しかし近年の竜同士のコミュニケーションでのいざこざで急遽仲間内からの脱出を余儀なくされ人間の社会に出てきたらしい。そのせいで碌に下調べもせずに来たから人間については殆ど知らないそう。

トラブルについては関わりと厄介な奴に絡まれてしまい、俺の家に非難したのも念のためとのこと。余程参っていたのか彼女の語りは何処か重く遠い目をしていた。辛いことを思い出させるのは失礼だしこれ以上の言及は避けよう。

「竜の社会も大変なんだな。てつきりファンタジーみたいに野生で悠々自適じゃないのか」

「寧ろ何にも無いからこそ交流のある竜は大切なよ。だから群れる事もあるし簡単な社会構造もあるの」

「へーじゃあ友達とかはそっちにいるのか」

「いないわ。私群れないし」

「え、仲間内のいざこざが原因なのに追い出されたの?」

「だから『群れる事も』なのよ。私は今みたいな時以外人づきあいなんて御免だわ。あそこからだって自分から出て行ったの。だってあいつらも普通に獲物横取りするしそのくせ殺したら群れ全体でリンチしに来るのよ!異常よあいつら」

……思った十数倍野生じゃないか。あとよくそれで生きてたな。いくら強いとはいえ数人に追われて逃げ切るのは凄いな。

「まあね、体格は小さいけれど無い分剣の腕には自信あるのよ」

そう言い彼女は昨日使った剣を出した。過程をよく見ると爪で肌を傷つけて出血させ、その血が剣になっっているみたいだ。

剣は柄にも刃が取り付けられたファンタジーでたまに見るような両刃剣だ。緋刃の名に相応しく髪色とよく似た緋色の刃を持つ。刃渡りは身長程長く薄い。昨日はこれを玄関前の通路で振っていたのか。後で通路を見たら案の定玄関前が戦場みたくとんでもなく傷だらけだった。

数日程管理会社からの電話に怯えることとなった。後に知ったが傷が多い場所が隣の家に近く、幸いにも俺には被害が何もなかった。

昨日見た限り彼女の体調は140cmくらいだった気がする。普通の格闘技ですら体格が小さいと苦労するとは聞いている。なのにあって己の身一つで生きてきたのだ。彼女の剣裁きは先日身をもって知ったし腕前は痛いほど分かる。だから純粹に武人として優れているに違いない。

「お前一步間違えたらフルボッコなのによく逃げ切ったな」

「逃げる？笑わせないで、皆肉片に変えてやった。襲ってきた奴らも群れの女子供も」

「……………ん？」

いきなり物騒な事を口走り耳を疑う。

「群れの虐殺は楽しいわよ。混血は特に凄い。多民族混合特有の異常な発色の血が嵐みたいに散って水たまりで混ざるの。そのとき肉と一緒に碎けた甲殻と骨が体を貫いて更に傷を増やして興奮で出血する。首を狩った時の吹き出る血を浴びるのもいいわ。さっきまで生きてた生暖かい体液が体中に降りかかる。時々水圧で私も大けがするけれど痛みなんてどうでもよくなるくらいうつつりしちゃうの」

彼女はそこで止まらず更に過激な内容を興奮気味に語る。血と肉が散る残虐非道な行いを顔を赤くし恍惚としながらどこまでも情熱

的になっていく。段々と息も荒くなり時折全身を震わせ明らかに尋常でない彼女に俺は興奮し恐怖し狼狽えた。

「あなた、血は好き？」

「え？ ひっ……！」

不意に問いかけられ彼女と目が合う。完全に油断していた、濁り光の無いすわった目と目が合った。だが幸運にも彼女は怯える俺に気づいてはつと正気に戻る。

「ご、ごめんなさい。つい驚かせちゃって」

「あ、ああ。そうだよな。根は竜だからすげえ殺気だったぞ。でも人間社会だと殺人は重罪だから間違えても絶対するなよ、マジで」

無性に危険な香りがするので先に牽制しておく。彼女は受け入れてくれたけれどちよつと残念そうだ。野生で命のやり取りをしてきたから寂しいのかもしれない……というより、これを真つ先に聞くべきかもしれなかった。

「えーと、確認したいんだけど人の世界に来てから何か殺した？」

「あなたと会うまでは旅をしながら1ヶ月くらい人間を殺して回ったから4, 50くらい。途中そこらの獣も食べてたし……70匹は食べてる」

「ルートは？」

「北の方からほぼ直線状に移動して最近此ここに……うーん、場所の名前を知らないからどうにも言えないわ」

「あー、うん。ちよつと調べるから待ってて」

ここ1ヶ月の例の殺人鬼についてのニュースを簡単に調べる。適当なニュースサイトは勿論、ネットの皆様のコメントからも適当に情報を探す。うん、ったわ。思いつきり「巷で噂の殺人犯は〇〇県から

南下中、数日後には??県に辿り着くと予想される。地震との二重苦で鳴葉民は死ぬ」って考察されてる。しかも当ててるし。ちなみに鳴葉は隣町だ。

死体の様子も決まって切り刻まれたミンチ肉、これはもう断言しよう。絶対犯人コイツじゃねえか。で、地図と死体と事故現場を眼の前の野獣に突きつけた。

「んー、あつこの現場は記憶にある。自分の趣味の跡が誰かに見られるなんて悪趣味な奴もいるのね」

「何でそんな楽観してるんだよ。つまりお前の悪行が世間に知られてるんだ」

「えー、別に人に知られるくらいならいいんじゃない？犬猫に恥ずかしい所見られても特に何も思わないでしょう？」

「お前が龍の仲間内から追い出された理由を今痛感してるよ」

クツソ、さつきからの言動からするとコイツさてはサイコパスすぎて追い出されたな。人を食料としか考えず同族の竜を殺めるのにも何の躊躇もない。それどころかこつちが何で引いているのか不思議そうな態度だ。

「で、何で私の趣味を気にしてるわけ？」

「いくら協力者とはいえ殺人鬼を匿ってるのは不味いんだよ。絶対竜同士でも嫌な顔されたる」

「まあ面倒ごとには違いないね、来る奴皆怯えてたし。でも人間って予想以上に面倒くさいのね。同族すら殺しちゃいけないだなんて窮屈極まりないわよ」

不味いな、このままだと緋刃が警察に捕まる。目を離している間に人だった肉片を持ってこられたりしたら俺の身も危うい。そうじゃなくても時間が経てば警察の方が彼女を突き止めるのもあり得る。ここで説得し殺害を抑えてもらわないと今後の人生に関わる。

「……あつ！というかお前こそこのままだとかかなり不味いんじゃないか」

「何よ、人に悪行が知られたって世界は広いし最悪追手だって人間でしょ？」

「お前の話だとまさにお前みたいに人に紛れる竜もいるかもしれないだろ。で、お前の殺し方って目立つから仲間内の誰かが人として生活していて尚且つお前を知ってたら不味いんじゃないか？」

俺の指摘に彼女はまだ不満げだ。だが数秒後急に顔が青ざめそして小さくブツブツと呟きだす。

「あああああどうしようどうしよう！そうよ何有名になってるのよ。あいつから逃げる為に人間の交じりに来たのに。これじゃあ同族が見たら一発でバレちゃうじゃないの！私のバカあ……」

「じゃあほとぼりが冷めるまで大人しくしてような」

彼女は苦虫を噛み潰したような顔で渋々納得した。で、彼女の問題が片付いたので次は俺の体についての話題になる。竜なら緋刃が詳しいかと思いい俺がどういいう竜なのか聞く。すると意外な答えが返ってきた。

「あなたみたいな竜の姿は見たことない。鱗も甲殻もない、カタツムリみたいな竜なんて水竜でも覚えが無いわね。体を再生したのが物が物だし希少種かどの竜の種類にも属さない新種の竜だと思う」

まさかまさかの珍しい種類の竜らしい。つまり情報が無い以上時間をかけて特性を理解していつか体を元に戻さないとイケないな。

というかこの人外の部位ってどうなってんだ？尻尾は軟体動物の体みたいでふとした時には動いてる。一応手で軽く押さえれば止まらなくはない、けれど離れたらまた動く。犬猫の尻尾かな？角もた

まーに動いてるっぽい。

「緋刃、人に紛れてる時角とか尻尾隠したか？」

「？ 隠さなくていいと思うけれど。人だって獣の一種だし尻尾くらい何を今更」

「え？」「え？」

沈黙、お互いがお互いを理解できないという風に見つめ合い固まる。

「……あの、それっていつの時代の人類の話でしょうか」

「え？じゃあよく見る欠損個体って隠してたりとかじゃ無くて本当に初めから生えてなかったの？」

「無い。というか数万年単位のレベルのどつくの昔に無い」

また両者沈黙。その隙に俺は人類の進化と適当な臀部付近の画像を証拠として彼女に見せた。すると彼女は顔尾真っ赤にして無知を悟られまいと手で隠した。もう思いつきり見えてるけどね。

「あ、あああああ!!そ、そそそうよね!そんな常識もちろん知って……「いや誤魔化せねえよ!えまっってそんな常識中の常識すら知らないのに何で人類と関わったの!?!ねえ何で!?!竜って勝手に上位種族とか妄想してたけどアホなの?」

「適応力、知性、文化全部において人類の上位互換よ!人類は新しい種族で文明を持つてるから潜伏先に人気なの。でもたまーに、ほんとたまーにいる勉強に興味のないバカとかがノリで行ってたりすると知らなかったりするわ!勿論私は知ってたけどね!」

「いや明らかに知らない反応だったよな!?!仲間から追い出されて下調べもせず人間社会に潜り込んで挙句目的忘れて人殺し回った上さっき肉焦がしたくせに。お前アホか、アホなのか!?!」

「うっさいー!」

照れ隠しに緋刃は俺の頭をぶつ叩く。だが当たると同時にぶちつと嫌な音が鳴りひんやりとした液が頭上から飛び散った。反射的に叩かれた頭に手を伸ばす。すると彼女の手が当たったところにあつた角が無くなっている。

「ああああ!?!角折れたああああ……あ?」

「あつごめんなさい。そんなつもりじゃって何ぼーつとしてるのよ。そこまでショックだった?」

「……………あ、いや、何かまた生えてきてるみたいなのがして」

スマホカメラで頭を確認してみるとじわじわ折れた角の断面が滑らかになってきている。

「へー、再生能力ねえ。中々便利な能力じゃない」

「そ、そうだな（やっぱり軟体動物じゃないか）」

因みに尻尾はやる前から感覚があるのは知っているので絶対にやらない。緋刃が切れ味はあるから痛くはしないと冗談で云ってきたが当然断る。

とりあえず自分の体の事はしばらく置いておこう。今は緋人との生活を軌道に似せる事に尽力しよう。

人間性（漫画、ゲーム）を竜に捧げた男

「そーういや緋刃って下調べ無しでここに来たのによく日本語扱えるよな」

「調べたって言ってるでしょうが。竜は異種族間の言語処理機能が強い。ある程度知能のある種なら何時間か会話聞けば言語取得できる。たまにそれもすっ飛ばす奴もいるけどね。三巻目頂戴」

「はいよ。読めない漢字があれば教えてくれ」

「ありがと。当て字以外平気」

積み上げた本から緋刃に漫画を渡す。現在彼女に人間社会と情操教育の為に適当な漫画を読ませている。俺自身アニメや漫画は流行り物から何本か面白そうな物を選んで嗜む程度だ。だけど昔偶然買った日常系を持っていて彼女に読ませている。俺も久々に読んだが面白い。久しぶりにまた適当に買ってみようかな。

だがそれ以上に彼女の反応は興味深い。一度読んだ本なのでどの巻のどこがどんな場面化はある程度把握している。彼女はどうかや顔に感情が出やすいタイプらしくどんな場面に何を考えているか分かりやすいのだ。問題は分かりやすいとはいえ反応する箇所と種類が点でバラバラで一貫性が無く参考にならないことだ。自分に知りえない何かが見えているのか、多分何も考えていないのかもしれない。

数分もすると彼女が3巻目を読み終えて本を閉じた。

「……ねえ、もっと別の無いの？もっとゴアなのじゃないと飽きた」

「（ゴアってどこで知った）にしては熟読してる風に見えるが」

「あなたに言われたから仕方なくよ。で、ある？」

あるにはあるが只のバトル系の漫画だ。一応一卷を彼女に渡す。ページをペラペラと捲り数ページおきにピタッと指が止まる。そつとページを盗み見ると彼女らしくやっぱり戦闘シーンだった。

「……チツさっきの返して」

どうやら満足しなかったらしい。文句を垂れつつも日常物を読み始めた。でもストレスが溜まって殺人される前に何かしら対策しておくか。とりあえず協力を頼んだ友人には代理でR18Gハードリヨナ総編集同人誌を買ってきてもらおう。で、俺にすぐできる事といえば……

「じゃあそれ読んだら別の事でもするか」

「別の事？それで私を満足させられるならいいけれど」

「……ちよつと待ってろ」

俺は漫画を片付けてゲームを起動した。そして適当なソフトを見繕い起動する。こういう時に趣味のゲームが役立つとは思わなかった。彼女も興味を引いたようで本を置いて画面に見入っている。

タイトルが表示されNEW GAMEから新しいデータを作成、そこで彼女にコントローラーを渡した。

「成程、これが『テレビゲーム』って奴ね。さっき見漫画で見た」

ゲームの内容は王道のファンタジーアクションゲームだ。初めてのゲームには高難易度だけれど竜も出てくるし彼女にも関りがありそうだ。グロを求めるなら最適解はホラゲーや洋ゲーだろう、だがこれらは説明できる程やりこんでいないしこれでなければならぬ理由が別にあるのだ。

彼女はそう意気込んでキャラメイクを開始した。数多のパラメータを慎重に設定し程なくして彼女の面影のある赤髪の少女のAvatarが出来上がる。

「よし、上手くできた。どう、結構自信あるんだけど」

「うわ、めっちゃ上手い。これ本当に初めてかよ。あと作ってもらってんだけどこのゲーム結構難しいから駄目そうなら別のもあるかな」

「竜を舐めないで、人の玩具なんて一瞬で終わらせてみせるわよ」

そうして彼女は意気揚々とチュートリアルを開始した。

30分後

「こ、これ本当に最初の敵なの？さっき操作説明あったばかりよね!」「ボスだし当然強いぞ。しかも残念なことにこれ倒さないとチュートリアルが終わらない。つまりゲームはまだ始まってないぞ」「冗談でしょ?」

ゲームを開始して三十分、彼女は直剣と盾片手に同じボスに挑み続けて死にを繰り返していた。計算道理である。出会ってからずっとやりたい放題された仕返しも兼ねて私怨で選んだゲームだ。高難易度で有名な作品に初心者が挑めばこうなることは当然の結果だろう。一応このボスは一度倒せば楽な部類だけれど初見プレイヤーが手を出したらこうなることも無理はない。

「ううう……ああもう！次に死んだらもつと簡単ゲームにして！それか黎人が倒して！」

死亡数にして十数回、ついに再戦のストレスに耐え切れずに緋刃がキレた。それでもなお敵の攻撃を華麗に回避し剣を敵に当てている。何度か小突かれて攻撃を受けているもほかすり傷で最初に比べれば大分上手くなった。

「コイツ強すぎでしょ。あんたコレ本当に倒したんでしょうね!？」

「勿論何回も倒してる。コイツ弱いし」

「これで弱いとか竜より修羅じゃ……で、でも私だってもう少して倒せそ」お、今の一撃で行動パターン変わったな「ああああああああああ!また覚えなおしじゃないのおおおお!」

この後新たに加わった行動パターンに苦戦しつつも回復が尽きて体力をミリだけ残してどうにかやり直さずに倒した。最後の1撃を入れて敵が膝から崩れ落ちた瞬間彼女は勝利を察して立ち上がりガッツポーズした。

「やったああああ!倒したああああ!」

「チュートリアル終了おめでとう」

「どう、これが竜の実力。人とは一味も二味も違うのよ!……で、なんか知らない人が出たけど。え、竜に挑んだ恋人を探せ?ふふーん、どんなのが来ようと私がけちよんけちよんに倒してあげる!」

強敵を倒した事で気分のいい彼女はかなり自慢げだ。なんだかコイツを見てると小さい子供を見ているみたいだ。こいつの突破率が8割を超えてる事はしばらく黙っておこう。

「アー!ソレマモレナイコウゲキジヤナイ!

「(文句垂れながら死に続けてるみたいだけど楽しんでるみたいだな)」

このまま緋刃の殺人癖を誤魔化し続ければいいのだけど。早急に人らしい生活に慣れてくれればいいな。

で、俺は俺で調べ事だ。まともな情報があるとは期待していない。しかし彼女の話を聞く限り竜とは人の生活にも潜んでいるらしい。

ならば俺と彼女の例みたいに何かしらの接点位あるかもしれない。「竜 現実」とネット検索する。サジェストと検索結果にはアニメやゲームの話題しか出てこなかった。当然といえば当然か。

「うーん、SNSも軒並み駄目だな。一か八か掲示板とか個人ブログも漁ってみるか」

数年前からの過去ログを手あたり次第漁ってみる。こっちも大抵は下らない情報ばかりであり役に立たない……あ、オカルト板で面白そうなUMA目撃スレを見つけた。そこでのレスの写真の一枚に見切れた竜の姿の緋刃が映っていた。体の一部でもおぞましい人外の姿にちよつとトラウマが蘇り静止した。

「……よし、ブクマだけしてこれ以上の詮索は止めておこう」

これ以上気分を悪くする前にタブを閉じる。でも一つ分かった。緋刃を顔を知るものがいれば人間社会にいれば居場所を探し出せる。それは彼女にとっては不味い上この上無い、だがどうしようもない。だから今は見つからないことを切実に祈るしかない。

にしても……あの夜出会った化け物は現実のものだったのか。あんな恐ろしい化け物が今は隣の可愛い女の子だとは、まるで夢のようだ。どちらかといえば悪夢だが。しかも俺も女の子なので寧ろ夢なら覚めてほしい。

「(どうして俺だけ……何で殺人鬼と一緒に生活しなきゃなんないんだ。こう、せめてこっちも防衛手段の一つでも取れば安心なんだけど)」

出会いがしらでボコボコにされてるから実力差は証明されている。彼女は竜で俺は人、生物としての強さは抗いようもないくらい絶望的なのだ。

……あれ、でも今つて俺も竜なんだよな。もしかすると今なら一矢報いることができるかもしれない。

「(いや、まだその時じゃないな。喧嘩が出来るほど体術は出来ない。第一緋刃とは協力関係じゃないか)」

パソコンを閉じる。彼女はゲームにまだ夢中で装備が重装備に大剣と大盾になっていた。そして前に立ち塞がる巨体で火を吹く竜と廃城で戦っていた。

「お前の同族の中には今戦ってるみたいな竜もいるのか？」

ふと気になって聞いてみた。

「……現実の話ならいなくはない。だけどこんなコテコテの竜はかえって少ない。私の剣技みたいに誰かしら一点特化してる変人ばかりよ」

「例えば？」

「色々あるけど私流に分類分けするなら能力持ち、やたら体の一部位が進化してる、技術に特化してるかな。私は技量特化って言える」

「文明とか無いのか？」

「文明と言われれば怪しい生態系？って奴に近いかな。そもそも竜の世界はこの言語じゃ説明しにくい。でも人の考えたこの世界も面白いと思うわね」

良く分からないけどとにかく竜もいろいろあるらしい。

「じゃあき、俺みたいなのから竜になったりもできるのか。お前が人になれるみたいに俺も竜の体になれたり出来ないかって思うんだ」

すると彼女は難しい顔になる。直後ゲームのキャラが死んだ。あ

あなたのせいで死んだ、と文句を吐き、続けて画面の竜みたいなのをここで出す気なの？と皮肉を言われた。成程、つまり今はやってはいけないのだな。と同時に何故普段の日常で竜を見ない理由の一つが分かった気がする。

「……で、答えた代わりにボスの攻略手伝って。体力半分からの開幕攻略がどうしても攻略できないの。ちよつと見てくれる？」

彼女の隣に座りコントローラーを借りステータスと記憶を頼りに現状からの勝ち筋を考える。で、何を思ったのか彼女はレベルを上げず使用不可の武器防具を使っていた。多分そこら辺の強そうな武器を拾って使ったのだろう。逆によくこんなのでここまで来れたな。

「あーこのステータスだとそりや難しいよな。というかレベルとか上げなかったんだな。途中レベル上げてくれる人いただろ」

「人？さつき敵と間違えて殺しちゃった」

「えっ!? あーうん、ゲームでも人の話を聞こうな。あの人がないと体強くてできないから（事故死か。でもあの人が復活するよな）」

とりあえず防具を外し武器を初期装備の直剣に持ち替える。彼女は弱そうだけどこれで勝てるの？と疑問を抱いていた。だがさつきの状態よりかはマシだろう。まあ俺は初見は遠距離戦法で戦ったけどね。疑問を抱きつつも彼女は幾度目かの戦いに挑む。

適正な武器と軽装で機動性を上げたから敵の攻撃を避けやすく、尚且つ手数が増えてダメージも上昇している。結果より早く安全に件のHP50%以下に到達した。これには彼女も上機嫌で短い尻尾が素早く揺れた。

「よし、そろそろだ。敵が引いたら懐に飛び込め」

「!? 本気で言ってるの。でもあの巨体ならできなくはなさそうね！」

出来ないし最高よ！ありがとう、あなたも元人として誇っていいわね
！」

「分かった、分かったから放して、あ、そこ首、首閉まってごうん……
！」

そういうえば首元には緋人からもらった傷があるんだった。腕を汚してないかな。薄れる意識の中で細腕を見ると傷の無い白い肌だった。

「……って、確か人助けに来たの忘れてた！」

だが彼女は次に何をすべきか思い出したらしい。俺を放してゲームに戻った。

「げほっげほっ……つぶね！三途の川見えたぞ今」

「この先に道が続いていて、アイテムまであるじゃない。一体何かしら」

彼女は何気なく鎧を着た遺体から二重の指輪というアイテムを入手した。装備品のように説明文には思い人を残して死地へと向かう騎士が決意の証として持っていた物とある。性能は序盤にしては破格の性能だ。

「……え？」

「この死体があの人のお恋人みたいだな」

俺は答えは知っているから何も言わない。緋刃は暫く硬直し、装備の情報を二三回確認してから件の依頼主の元へ向かう。そして指輪を返した。そして会話の後一度体力を回復しようと休憩を挟んでから再び彼女の元へ向かった。するとさつき人がいた場所に彼女がおらず、騎士の遺体の指輪が落ちていて、その近くの崖際に別の指輪が

落ちていた。

「これあの人達の遺品じゃない。せつかく残してくれたんだし有難く使わせてもらいましょうか」

「そうだな。次のボスはボス後の道を直進すると着くぞ。時間も良い所だし一旦その拠点を解放してから止めるか」

この後次のセーブまでは特にトラブルもなく辿り着いた。ゲームを止め、インスタントのみの昼食を取りながらお互いゲームについて語り合った。

その裏で俺は緋刃の行動について考察してみた。意外にも彼女は容量がいい。ゲームの中では説明を聞けばちやんと分かってくれし事故以外では無暗な殺人はしない。行動も理性的で初めてのゲームが高難度でもここまで攻略出来て物覚えもいい。それに何より嬉しいのは一応人間的な感性を持ってくれている。詰まる所、もしかしたら彼女の殺人は人為的に抑制する余地があるかもしれない。

なんて彼女との生活に勝手に活路を見出した。

竜と人は一線を越えた。出会って一日、同性で

緋刃とゲームをしながら過ごして更に数時間、現在時刻は夜だ。そろそろ時間的に風呂に入ろう。もちろん一人でだ。緋刃はパソコンでアニメを見せているし10分位なら放置しても平気だろう。いつものように服を脱いで浴室に入る。

「はは……マジで女の体だ」

湯気でガラスが曇る前に全身を観察する。白い肌、丸みを帯びた体、平らで柔らかい胸、細い四肢、そのどれもが一般的に少女と形容できる体だ。当然下半身の構造もかつて空想の存在だった女性器に置換されている……都合よくそこだけ男が残ってくれば。少しの好奇心と数多の下心から少しだけ各所を触れると前より少々感覚に對して敏感になっている。

前の体より体格年齢も一回りも二回りも小さく華奢な体。未発達
の体は無駄一つなく美しい。無駄毛は無く慎ましい胸部には可愛らしい突起がある。全体的に幼い印象を受ける肢体に色香を感じ興奮する。鏡越しに見える顔つきは幼く、だが女性的な魅力の素質がある気がする。

「(こりゃあ……ちよつと試すか)」

自分の体を洗うついでに気になった箇所を触ってみる。

「ふうー……ひゃう!？」

前世では感じる事の無い痛み、未成熟の体故、刺激に慣れていないのか多少痛い。だけど痛みの中に確かに男の時に似た刺激も感じる。観察しているうちに何だ自分でも扱いつらく感じた。罪悪感と多少の高揚感を感じつつ体を洗った。

ああでもやっぱり小さい女の子なんだな。いつもなら余裕で届く筈のシャワーヘッドが全く届かないし狭い浴槽もちよつとだけ足を延ばせる。実は夕食で人参が堅くて切れなかったり干したまま放置した洗濯物が回収できなかつたりしている。利便性というのはやはり本来使うべき者に使うようにできているのだろう。社会的にも窮地なのに生活面でも辛いのは大変だ。お湯に肩まで浸かってそう考えた。

ガラツ

「おーい、レイトーここにいるの?」

「うわああああ!?!ちよ、せめてノックしろよ!」

突然ドアを開けられた事に驚いて声を上げてしまった。慌てて桶で下を隠す。

「え?あ、ごめん……」

俺の声に驚いたのか少しトーンを落としながら謝ってきた。そしてそのまま動かない。どうやらこちらの様子を窺っているようだ。

「あの、何してるの?」

「何って風呂だよ」

「何それ?」

……数秒思考を停止しようやく理解する。こいつに途中から読書止めたから色々抜けてるな。とりあえず参考文献のマンガの4巻最後を見てこいと説明する。緋刃はその場を去って行った。説明するより見た方がいい。というより今だけは自身の生死から目を遠ざけたいから一人にしてくれ。頭をお湯に沈めながら現実から逃げる。

タツタツタツ　　タツタツタツ　　ガラガラッ

「読んできたけど要は裸の男女が体の匂いと汚れを洗うと。つまりこれでもいいわね」

「ああもうこいつ全裸だああああ！この野郎なんも分かっちゃいねええええ！おかしいと思つたよ何で戻ってくる足音もすんのかなつて！」

タオル一枚すら身に着けず堂々と入ってきた。本当にこいつは何を考えてんだ。しかも恋愛物で学ばせたから変な風に知識が歪んでいる。

「だって一人で入るなんてずるいわよ」

「あの、羞恥心とかないんですか？」

「同種ならね、でも大丈夫よ私気にしないから。人の裸は趣味じゃないから」

そう言つて緋刃は慣れない手つきで髪を洗い始めた。ここまで来たら俺も腹を括ろう。もう俺は開き直つた。

数分後、何故か二人で向き合つて湯船に浸かっている。人なら横向きもできるけれど尻尾が壁に当たつて痛いからこの体勢以外だに入れない。二人だと窮屈だが何とかなっている。距離が近いせいとか緋刃の息遣いがよく聞こえる。横目で見ると彼女は恥ずかしげもなく裸体を晒していた。

白い肌には傷一つなく綺麗なものだ。しかし胸の大きさは中の下といったところだろうか。それでも美麗な顔立ちとのギャップが

あつて可愛らしく見える。視線を下げていくと腰回りは意外と肉付きが良いように見える。そこから更に下にいくとお尻が大きくなっていた。太腿は程よい柔らかさが伝わってくる。脚を閉じると隙間ができる程度には太いが決して太くはない。こんな美少女と一緒に入浴とか普通ありえない。

「(せめてこれで俺が男で自分の死のリスクさえなければ最高なのに)」

彼女の体に生える短い尻尾と巻いた角が現実に戻す。醜い竜から現れた美しい肉体、彼女の本性は一体どちらなのだろう。そんな事を考えている内に段々と体が温まってきた。

「なあ、そろそろいいだろ？俺は出るぞ」

「嫌よ。折角一緒に入ってるのに出て行く意味が分からないもの」

「……じゃあせめて前隠せよ」

「どうして？」

「どうしてもこうしてもないだろ。一応こっちは元男だぞ。意識しなくてもそういう事考えちゃうんだよ。分かれ馬鹿」

「ふーん、そうなんだ。私は別に構わないけど。むしろ嬉しいかな？」
「は？」

「ほら、私の体って結構良い線行ってると思わない？」

確かにそれは思った。

「小柄で瞬発力と精度に長けた体。力は弱いけど人数なら技術で返り討ち可能な範囲の小柄な体格。それに今はまだただ成長も見込める」

そう言いながら自分の体を見せつけるように両腕を広げる。そうじゃないだろ、頭の中はそういつつもその仕草に思わずドキツとし

てしまう。

「だからさ、レイト。貴方さえ良ければいつでも抱いても良いのよ?」
「!? お前つつ、まさか……」

その言葉に体が硬直し、心臓の鼓動が早くなるのを感じた。
「ははっ、冗談だよ。いくら何でもそこまでは許さないって」

そう言うと緋刃は湯船から出て浴室を出て行った。残された俺は暫く呆然としていたが我に返って風呂を出る。あの言葉、これまでの仕草、その全てが妙に印象に残って俺の鼓動を早める。もしかして、もしかすると、そう思って服を着て真っ先に部屋のクローゼットの中に隠しておいた秘蔵の薄い本を読みかえした。

「……涙が出そうだ」

あの野郎、俺のエロ本見てやがった。台詞回し完全再現じゃねえか。道理で聞いたことあると思った。嬉しいよ、正直興奮したよ、でもな最後のセリフだけ間違えて買ったNTRの導入なんだよ。めっちゃ複雑なんだよ。男心を何だと思ってる。バナラアイスを食べながらアニメの続きを見る緋刃を背中に嘆く。

「あ、その棚の本見たから。隠してたならごめん」

「いいよ、もう……好きにしてくれ……ただこの本はそつとしておいて」

「分かったわ」

素直に返事をする緋刃。せめてもの救いはコイツにはまだ人間の性癖について関心がない事だろう。無知でいてくれるならそう遠くない内にきつと忘れてくれるはずだ。気分を変えるのに俺も冷凍庫のアイスを食べる。安売りされたアイスは今日は歯磨き粉の味がする。これを食べたらもう寝よう。今日はもう疲れた。

「……………私もあの本みたいにお礼した方がいいかな」

「うん？なんか言ったか？」

「……………いや、何でも無い」

時計を見ると時刻は十時過ぎ。緋刃は迷うことなく俺のベッドに真つ先に潜り込んだ。その高慢さに逆に感心しながら俺は固い床に横になる。先客がいるなら仕方がない。すると緋刃はベッドから降りて床に寝る俺の隣で横になった。

「おい、お前の布団あるだろ。そこ使えよ」

「え？だって一人だと寒いじゃない。私体温高いから温かいわよ」

「いや、お前が良くてもこつちが良くないんだけど……………つーかお前まで床に来るならベッドで一緒に寝るか」

「ええ、そうしましょ」

結局二人でベッドで寝る事となった。緋刃の体は柔らかく温かった。何だか安心する香りもしてくる。何より密着している部分がとても心地いい。これはヤバいと思いつつも俺はどうか意識しないように無視する。

「じゃあお休み、いい夢を見れるといいわね」

「ああ、お休み……………」

目を瞑り、眠ろうとする。しかし眠れない。何故なら先程からずっと緋刃の匂いがして気になってしょうがないからだ。

とても落ち着けるようじゃない。なんなら今にも爆発しそう。男の象徴が無くなり立つことはない、代わりに同じだけ腹の奥底が酷く疼く。初めての種類の高ぶりに気抜くと腕が下腹部に伸びそうになる。しかし一度触れてしまったらもう抑えきれないと微かな理性が歯止めを掛ける。俺はどうすればいいのか分からず混乱していた。

出来ることなら彼女が寝た後に一人で処理したい。

「ねえ、レイト」

「ど、どうかしましたか緋刃さん!？」

声が裏返りそうになる。

「ちよつとだけ時間もらっていい?」

「へ?」

緋刃は体をこちらに向けていた。顔は赤く染まり瞳は潤んでいるように見える。その様子に思わず息を呑む。彼女の吐息が顔にかかる。そのまま唇を重ねられた。最初は触れるだけのキスだったが次第に舌が絡み合う濃厚なものへと変わっていく。頭がボーっとしてきた。思考回路がショート寸前だ。しかし彼女はそんな事は御構い無しと言わんばかりに口内を犯してくる。俺は抵抗する事なく受け入れた。

「ぶはあ……。ふう、やっぱり気持ち良いものなのね。デーブキスって」

「……はあ、はあ。いきなり何すんだよ。つーかお前、まさかそういう趣味あったのか。俺今女の体だぞ」

「いいじゃあい。だってあなたは年頃の男でしょ。どうせ自分の体にも発情したりしたんでしょ?」

否定するべきなのだが実際そうだからなにも言えない。だけど確かに今みたいな時にはそういう事をしたくはある。

「なのに手の届く所に女の子なんて貯まって仕方ないでしょ。だから発散の仕方を覚えた方がいいんじゃない?だから私で教えてあげる」
「で、でも「嫌いな奴らに奪われる前にしたくなっただけだもの。それ

に暫くはあなたの近くに居座るんだし……こんなのでいいならお礼として受け取って」

そう言ってまた顔を近づけてきた。今度は耳元で囁かれる。

「私のこと、あなたの好きにしてみない？」

その瞬間、俺の何かが弾けた。それは理性の鎖だったかもしれない。もしくは倫理観という鎖だったのだろう。だがそんなものは今の俺には通用しなかった。服を脱ぎ捨て裸になると彼女に覆い被さる。緋刃も察してくれたようで何も言わずに受け入れる体勢をとった。その表情はとても妖艶で美しく見えた。

そこから先は覚えていない。ただひたすら本能のまま彼女を求めた事だけは記憶にある。たった1日で俺は只でさえ常識外れの関係が更に拗れた仲の誰かを手に入れた。人外、殺害、性転換、それに体の関係……たった1日で文字通り人生が激変した。

――

朝起きて朝食前に布団類を洗濯してシャワーを浴びる。体液まみれの体だと人と会うのには不味い。緋刃も文句垂れながら無理やり風呂場に連れ込んだ。

「昨夜は激しかったわね」

「……頼むからそういう発言やめてくれない？」

「別にいいじゃない。事実なんだし」

「まあそうだけどさ……」

結局あの後何度も求めてしまった。お互い意識が飛んでいたが多分5回くらいやった気がする。初めは体の構造が互いによく分からずぎこちなかったものの途中からコツを掴み、そこからは激しかった

た。後悔は初めてで加減が分からず本能のままに流石にやり過ぎた事だ。流石にやばい思ったので次からは少し自重しようと思う。というか女になってから童貞捨てたことになったのか。体を拭きながら思った。

「一度でも出来ただけいいじゃない。私もまさか人のなってから初めてこんなことしたんだし」

「ふーん……は!?!」

「意外?」

緋刃はニヤリと笑みを浮かべた。

正直驚いた。自分から誘ってきたものだから経験豊富そうだと勝手に思っていたのだが。そういえばこいつの年齢って幾つなんだろうか。竜だし長命なのは明白だし失礼ながら聞いてみると答えてくれた。人間で言うところの16歳らしい。ただ目が不自然に泳いでいるしきつと鯖を読んだ上での年齢だろう。実年齢はギリギリ4桁らしい。

「まあちっさい個体だから竜体でも処女って奴だけど」

「お互い似た者同士だな。俺も男の時は異性とセ○○スは出来なかった」

「ふふ、確かに似てるわね。じゃあそろそろご飯にしましょうか」

緋刃が服を着替えている間に俺は朝食の準備をする。と言っても食パンをトースターに入れて目玉焼きを作るだけのだが。今日は色々頼んでた友人が来るんだ。早いとこ食べて打ち合わせをしなければ。

「ねえレイト」

「ん?どうした」

「……いや、別に。早く食べちゃいましょ」

――

先日の夜 某所同士の電話

「……てことで僕が先に行くから。君はいい仕事でもないか探してあげてくれないかな」

「分かりました。黎人さんとはお友達ですし是非とも最高の職場を提
供してあげたいです」

「随分とやる気だねーやっぱ写真見せてから本気出しちゃった？」

「ええ、あんなに愛おしい姿を見せられたら……高ぶってきました」

「！……おっとまさか、君もやっぱりそっち側なんだねーじゃあ宜しくー」

ピッ

「……僕ってなんて幸運な人間なんだろ。何だか楽しくなってきた
ちやっただ♪」

5 持つべきものは協力者、だが客にしては棘がある

今日は緋刃と今日は事前に頼んでおいた友人が家に尋ねて来る日だ。緋人には絶対に殺人を避けろと何度も忠告しながら過ぎ、約束の時刻が刻一刻と近づいている。

「ところで、今日来るあなたの友人はどんな人なの？」

「救いようなない変態」

「昨日のレイトより？」

「ああ、別ベクトルでやべえ」

「……脱皮でもするのかしら」

「極度の女好きで年上年下どちらも守備範囲、どちらかといえれば俺らみたいなのが好みなロリコン野郎。その上を言動が胡散臭いし怪しい噂もある。けれど女性の扱いには長けてるし何だかんだで頼み事は聞いてくれるからな」

「なら昨日貞操捨てておいて心底よかったね。なんならその、クソツタレ殺してやりましょうか」

「……やっぱり死なない程度には暴力も許可する。抜刀は抑えてくれ」

そして暫く待っていると部屋にインターホンが響く。念の為冬場に買って全く使わなかったニット帽をかぶり玄関のドアを開けた。

「おお、本当に女の子だ」

扉の前には黒髪で清楚な服を着た俺の友人、黒姫ナツメが待機していた。竜の少女になって初めてのの人と対峙して体感したのは自身が今物理的に小さな存在であることだ。数日前まで対等に近い視線だったのが見上げる形となっている。そしてナツメは俺を見た途端ドアを勢いよく開け俺の帽子を外して体を持ち上げた。

「ほう、写真で見た通りちっちゃい可愛くなったね」スリスリ

「友人の変わり果てた姿を見て一言目がそれかよ。あと頼ずりはマジでやめろ、お前にやられるとかなり気持ち悪い」

「まあまあ、これから僕と君は協力関係になるんだしこれはその見返りとして大目に見ておくれよ。それに君になら好き勝手にいいと約束したじゃないか。けれども、本気で君が嫌であればもう一人の彼女の方に頼むよ」スーハースーハー

「……勝手にしろ。だけど嗅ぐのはマジでやめてくれ。マジで風呂入ってねえから臭いんだよ」

「ほう、それは興奮する……いや君の忠告の通り止めておくれ。随分と熱心だったようだし」

俺はナツメに抱かれたまま室内へ戻った。そんな光景を見た緋刃を見ても緋刃は俺には言及せず彼に挨拶する。

「竜の女の子かあ。まるでファンタジーみたい。君とは仲良くしたいね」

「私もよろしく頼むわ」

「君の話は彼から聞いているよ。なんでも最近噂の殺人鬼らしいね。でも僕には関係ない話。可愛い女の子こそ至福、黎人君がどうにもならなかったらすぐに僕を頼っていいよ」

「随分と気前がいいじゃない」

「職業柄訳ありの子を飼うのは得意だからね」

緋刃とナツメの初対面は悪くはないといった感じだ。俺はその光景をナツメに抱かれながら見ているのだけが不満だ。まあそれは置いておいてナツメには今日俺達の服を探してもらうのに身体測定とどんな服がいいか考える為に資料を持ってきてもらった。

「で、君は竜なんだよね。しかも黎人君曰く子供のような姿だとも聞

いている。もしよければ竜の姿を見せてくれないかい」
「いいよ」

……え!?いきなり緋人が竜になる流れになったから驚く。だけどそれはやってはいけない。ナツメはアレを始めてみるから気楽でいられるのだ。実際一度見た俺からすればあれは恐ろしく人など簡単に殺せる化け物なのだ。それが目の前に現れるのはトラウマそのものを見せられるのである。俺は全力で止めにかかる。が、ナツメの拘束が思ったより強く緋人を止めるのは叶わなかった。

べきべきと骨が変形する音が響く。肌が裂け、骨が肉を貫いてピンク色の肌を包むように鱗と甲殻に変化する。顔があり得ないように歪み人の骨格が爬虫類に変化する。そして数多に流れ出した血が不明な原理で彼女だった化け物に吸収され目の前にはあの化物が、竜の形をしたあの化物が……

「うつわ……これは納得だよ。深夜にこんな見たら夢にも思いたくなるよね。つておい黎人君、あ、これ怖じ気でどうかしてる」

「あ、ああ、あああ!」

「ぎしゅうううううう? (なんかすつごい怯えてるわね)」

「おい緋刃ちゃん?聞こえてるなら元に戻つてー多分黎人君にビビっちゃってそれどころじゃないよーおい」

「きしやああああああ! (何でーこれ結構疲れるのよ!)」

「ここペット禁止とか黎人君言つてたから人型以外住んじや駄目なの。だから彼の為にも早く戻つてあげて」

「しゅうう…… (なら仕方ないか……)」

竜になった緋人は竜ながらも仕方なさそうなのが分かるような態度で一瞬で人に戻った。後に知ったがこの過程で床が全く血に汚れてないのだけは褒めるに値する。彼女が戻っても俺はまだ冷静から程遠い状態で顔が酷く青ざめている。彼らは情けない俺に今だ困惑している様子だ。

「おーい起きて、もう怖いのはいないから安心していいよ。ほーらないいいない」

ナツメはふざけて気がでない俺の目を覆い隠した。だが以外にもこれが効き、自身の置かれた状態を理解しすぐにナツメの手を振り払い同時に彼から離れた。

「っは！俺を赤ちゃん扱いするな！」

「よかったよかった、黎人君も正気に戻った。それで黎人君、一つ気になっただけでもいいかい？」

「何だ。角と尻尾ならお前には触らせないぞ」

「そつちもそうだけど彼女の『名前』はどうする？緋刃なんて呼ばずに女の子らしい可愛い呼び名があった方が人には紛れやすいと思うんだ」

そういえば彼女の名前は出会った時の呼び名のままだ。可愛い見た目をしていても殺人鬼には違いない。だから一定の距離を保つのにそのままの呼び名を意識していたのだ。

だが近日の彼女を見ると意外と人間的であり殺人癖もどうにかなりそうだ。ならばこれからは人前に出すのもいいと考えていた。ならば人間社会に溶け込むにも相応しい呼び名が必要なのは明白である。

「うーん、仮称『ニエ』なんてどうだ」

『贅竜』だけに『ニエ』、そのまんまだけど君らしい名づけだ。僕はいいと思うよ」

「私も語感いいしそれで」

自分で言っただけで何だか結構重要そうなことが一瞬で決まった。本人も同意しているし我ながらいい名前だからこれでいい。

「じゃあ二エちゃん、早速だけど黎人君からの依頼をしていくよ。じゃあ早速3サイズを「せい！」うごお!」

言い切る前にナツメの腹に拳を一発入れる。隙あらば誰彼構わずセクハラするのはコイツの昔からの悪癖だ。そしてそういう時は周りの誰かが無理やりにも止める。だが何も知らない緋刃改め二エは突然の凶行に驚いている。

「先に俺からにしろ。測り方さえ教えてくれれば二エは俺がするからな」

「ちよ、レイトあんた何してんの!？」

「二エは心配しなくていい。今から俺らの衣服について相談コレと話してくる。ほらナツメ、倒れてないで行くぞ」

「うう、お腹が、お腹があ……でも普段より数段よわよわなパンチも可愛いよ」

やっぱ二発目入れてやろうかな。俺達は二エを置いて一旦部屋から出る。

「うへへ……あれだけ筋肉質だった体もすっかり細くなっちゃったねえ」

「……人より肉がついてた分ちよつと悔しい」
「言えたじゃないか」

で、こいつと二人つきりで身体測定ついでにされるがままにされている。いやらしい手つきで胸やら尻やらを触られる。この上ない程不愉快だが計測自体はてきぱきと進んでいるから文句は言えない。ついでに世間話ついでに相談事をしよう。

「最近自炊してる?」

「あー、忙しくてあんまり。昨日はほぼインスタント」

「インスタントばかりじゃ駄目だよ。お肉は控えて野菜も食べないとね。ああでもその体じゃ買い物に行くにも表立って外に出れないよね」

「しかもバイトもまた探さないと収入が無い。何かいい仕事ないか？」

「僕の実家とかどう？観光地の神社だから巫女さんは募集してるよ」

「角と尻尾はどう隠すんだよ」

「これ角なの？触覚かと思ってた。となると駅前のコスプレ喫「却下に決まってるんだろ」あの店潰れてた。紹介しておいてゴメンネ」

「はあ……そんな都合よく仕事なんて見つからないよな。とりあえずメールで言った通りの退職の代理は頼んだ」

「はい」

身長や諸々の計測が終わり部屋に戻る。後でこれを参考にナツメが服を買いに行ってくれそう。俺が済んで測り方も教わった。それで次はニエの番か。部屋に戻るとニエはナツメの持って来た女性向けのファッション雑誌を読んでいた。が、彼女の姿には違和感がある。

「ふむふむ、機動性を重視するとこの形の服なのね。中々勉強になる」

「……あれ、ニエの雰囲気変わったな」

「あの雑誌で特集されてた服だよ。配色が違うけど間違いないよ。ほら」

ナツメが見せた今年度の雑誌のページには高身長的女性モデルがカジュアルな服を着こなしている。そして目の前の緋刃の姿は確かに同じ服装だ。色は全体的に濃淡の違う赤色になっていて、更に言えば服の雰囲気と彼女自身の身体とが一致していない。

「おまえニエ、お前その服どうしたんだ」

「便利そうだから着替えてみたの。実際動きやすいし露出も低いから血が飛び散っても汚れなくてよさそう」

「違う、そうじゃない。そんな服どっから持ってきた」

「鉄臭いのは当たり前じゃない。これ私から作ってるの。剣と同じよ」

あの剣って体から出来てるの!?彼女はじゃあ見ててと言っただけで服が体に溶けていく。そして沈んだ箇所からは元の彼女の服装が湧き出ていつもの姿に戻る。何だろう、女の子向けのアニメの変身シーンってこうなってるんだな、現実味の無い光景にふざけたことを考えた。

「うーん残念だなーこれじゃあ僕の苦労も無駄になっちゃうなー」

「しつかりお礼はするから落ち込むな。それにまだお前好みの女なら一人いるだろう」

「そうだった。じゃあ一応参考として君の値は協力者に送信しておくよ」

……というかオーダーメイドとかする訳ないんだし態々3サイズ測る必要はなかったのでは。俺は訝しんだ。気が付いて彼に視線を送ると勝ち誇った顔をしていた。野郎、やりやがったな。

ナツメはもう仕方ない。今は服装の問題について一先ず解決したのを喜ぼう。俺の服だけナツメらに頼もう。幸い貯金があるから服一式は買える。予算を彼に伝えると微妙な顔をしていた。お前に金を渡すところでもない物を買ってくるからこうするしかない。駅前コンビニに入れるくらい緩い服なら予算的にナツメも分かってくれるだろう。

「君も小さい男だな。そんなに嫌ならネットで買えばいいじゃないか」

「ネットで買った結果今まで累計金額万単位を溶かしたから怖いんだよ」

「ふーん、意外な弱点だね。君らしくない意外な側面だね」
「うるせえ」

「でも金銭感覚はしっかりしてる。この予算なら君の希望も叶いそう
だ。頑張ってみる。あと念の為漂白剤と中性洗剤もおまけしておく」
「ああ、いい服を駄目にしないよう気を付けるよ」

彼女はしばらく緋刃との会話をしたのちお昼ごろには帰っていつ
た。暫くすると連絡が来て早速服を買い込んだ服らしい報告が来る。
夕方には届けてくれるらしい。彼にしてはマトモな服だから逆に悪
い予感がするな。それと今回のお礼としてバイトの方はいい仕事があ
るらしく推薦をしてくれた。労働条件を確認すると……

「(接客とは書かれているけど内容があいまいで給料が不自然に高い
……絶対エロいのか裏の仕事だろ!?)」

この求人は無かったことにできないだろうか。どうにか断る文面
を考えていると続けて連絡が来る。

「今僕とは別に色々頼んでた人がそっちに行つたから色々しておい
てーきつと仲良くしてるから。P.S. 今その人家の前の曲がり角だ
よー」

仕事はつや!?いや早いことにはいいんだけどやる気ありすぎだろ
!しかももう家の近くだと!不味いな、ナツメの野郎は別に気にしな
くてよかったが赤の他人とはさすがにまだ抵抗がある。その様子を
知ってかはたまたまた別の事か緋刃が警戒した様子をしていた。

「……レイト、今誰か来てる?」

「ナツメの知り合いが家の近くにいららしい」

「……………その人、絶対に家に入れないで。多分、いやな予感がする
の」

本当に警戒か、今の彼女の様子は警戒にしては能動的だ。普段の彼女なら隠れるくらいなら殺していると思う。

「怯えてるのか？」

ピンポーン

インターホンが鳴る。それと同時に空気が一変した。二エが鋭い目でそれに応答するなど訴える。だが、人としてのマナーで一応は出なければ。俺が動こうとした瞬間二エが剣を出し消えるような声で音を立てるな、と殺気を持って睨みつける。

「な、なあ、あの先には何がいるんだ」

「私目当ての追手。あいつは手段を択ばない。居場所がばれたらあなたもろとも……………」

「あのー、黎人さん、ご在宅でしょうか。お体がよろしくないとナツメさんから聞きましたよ」ガチャ

あ、やべえナツメが帰ってから鍵開けっ放しだった。普段は帰ってすぐに閉めているのに来客のせいで忘れていた。二エはまさか家主のミスで侵入されるとは考えもしていなかったのでさつきまでの鋭い目つきから一転、青ざめ絶望的な表情になる。

「あれ、鍵が開いて…………平気ですか！」

客人もまた体がおかしい、開けっ放しの玄関から想起される光景に危機感を覚え急いで部屋に突入してきた。そこに現れたのはひいろ、俺の友人だ。

「ナツメ呼んだのつてがお前」「ああああああああああああ
!!」

抜刀、瞬間両刃の剣が壁と俺を巻き込んで回転する。自身の上半身と下半身が二分され白い液体ががが舞い散る。だが彼女は止まらず壁を切り裂きながらひいろへと距離を詰め……

「え、まっ」

切り裂き、血と共に肉片へと変えた。

――

「……………つはあはあ……………また死んだのか、俺」

窓を見ると夕方、時計と日付から眠っていたのは2時間だ。体を見ると傷もなく、体どころか切られた壁すらも元通りだった。

「夢、な訳ないよな」

だがまさか二回目なんて起こりうるのだろうか。状況を把握していると後ろから物音がした。

「おはようございます、黎人さん」

「ひいろ？いつの間に……」

彼女は天菜ひいろ、西洋顔で金髪の文句なしの美人であり女友達で大学内でも有名人だ。知り合えた経緯はナツメ関連の人脈で偶々講

義が被った時に知り合った。資産家の跡継ぎの生まれで万能、誰にでも優しい絵に描いたような完璧超人で出逢った時はまさかここまで親しくなるとは思わなかった。というか初めて知った時は何故金持ちがこの大学に……？純粹に疑問に思った。

「お昼頃にナツメさんから体体調が変だと教えてもらって急いでここに尋ねたんです。お仕事も辞めなければならぬくらいの重病とかナツメさんは仰っていました。それで家に来ても返事が無くて倒れてるんじゃないか心配で勝手に入ってきちゃいました。ごめんない」

「そりやお互い様だ。俺がこんな体になってなきや……………」

そこまで会話を進めて思い出す。いつもの癖で特に気にせず会話していたが彼女からしてみれば風邪だと聞いて看病に来たのに家主が人外となっていたのだ。自分を改めて客観視して血の気が引いた。

「そうですね、可愛らしい体なっちゃいましたね。何だか娘みたいですよ」

焦る俺とは対照的にひいろは余裕そうな態度だった。人でなくなった俺の事を恐れずいつもの様子と変わらない。いちおう体が変わ化しているからか細部をじっくりと見られているけれど警戒などはないらしい。まあ突然友人が子供になったらそりやいろいろ調べたくなるよな。

そういえばニエはどこ行った。俺の姿は今のひいろの反応なら問題ない。しかし本物の竜のニエは目を離したら何をするかさっぱり分からない。

「な、なあ。お前が来たとき俺の他に誰かいなかったか？」

「うーん？ナツメさんなら帰っていましたよ。お友達もいませんし人は誰も来ていません」

「……そうか」

誰もいないということは二エは去ったのか。短い間の関わりだったが……いやあんな野郎はどうでもいい。もう2回も殺されたんだ。人に戻るとかの前に死のリスクが付きまとうなんて御免だからならこれからは自分の体の心配だけしよう。

「そうだ、私はナツメさんからあなたへのバイトの斡旋を頼まれていたんです。早速ですがこれにお名前を書いてもらえませんか？」
「バイトってこれか？」

ナツメから送られてきた例の怪しい求人をつひいろに見せる。

「うーん、ナツメさんらしい書き方というかなんというか……安心して下さい。お家でもできる簡単なお仕事ですから」
「内容とか一覧で見せてくれ」

ひいろは彼女が持ってきた荷物からファイルの求人書類を渡した。俺はその内容をじっくりと眺める。だが、仕事の内容以前に内容が余りにも理解できず思わず書類を手から落とした。

「あ、落としちゃいましたよ」

「……あ、うん。ごめん。ちよつと業務内容と給与に目が眩んで」

「え、満足していただけませんか？」

『贄竜【緋刃】と天菜ひいろこと屍竜【苗床】の子供として家族生活をする』なんて、こんな馬鹿げた仕事あるか？それにこの会社ってお前の親の所……」

その時風呂場から急ぎ足で誰かが来た。扉を勢いよく蹴り開け現れたのは足が赤く汚れ鬼の形相をした二エだった。よく見ると両手が無くなっている。

「フーツ……フーツ……」

「二エ、お前まだいたのか!」

ひいろを睨んでいる。その目は彼女への殺意が強烈に伝わってくる。しかし剣を持つ両手は無く口をパクパクさせ呻いている。原因葉知りたくないが喋れないみたいだ。

「ああ、あなたを放つてごめんなさい。あなたもお可愛い姿ですよ」
「……っ!……っ!」

「(二エが怯えてたのってひいろなのか。そういえばコイツ誰かから逃げてきたらしいから、まさか!)」

「さて、もういいでしょう。黎人さんには状況が飲み込めていないようですよ。私について改めてお話しします。私は贊龍【緋刃】さんの妻『屍龍【苗床】』と申します。これから家族として末永くよろしくお願います」

ヤンデレってあるけどけど子持ち殺人鬼相手でも
ゴールインしちゃうんだなあ（白目）

「これから家族として末永くよろしくお願いします」
「……」

絶句、現状を受け入れられない俺は必死に都合のいい勘違いが無い
か探す。ひいろは竜で、ニエは両手を無くして殺気立って、切られた
壁は何ともなくて。俺は一体どうしてしまったんだ？

呆然としている間にニエはひいろの体を憎悪を隠さず鈍い音を立
てながら何度も何度も蹴っている。だがひいろはうっとおしくなっ
たのか次の蹴りの瞬間もう片方の支えの足を強く叩いて転ばせた。

「……うあああああ！」

「ふふふ、舌を切り取ったから呻くことしかできないなんて……ああ、
でも傷つくあなたは愛おいしいです」

舌を切り取った……!?

「黎人さんも気になりますか？でももう遅いです。早めの夕食として
ちっちゃい舌は私が食べちゃいましたから♡」

ひいろは無邪気そうに舌を出した。美人な顔つきから放たれる
ギャップのある行為も今は猟奇的で寒気がする。

「……でも不思議な味がしたんですね。明らかに緋刃さんの物でな
い体液の味が」

彼女は俺に近づき方を掴んだ。そして頭を掴みキスをし、そのまま
舌を入れられ口腔を弄られる。理解のできない様に動転し俺は彼女
を引き？がそうと抗うも細腕とは思えない怪力に死を覚えた。混乱
の中に彼女と視線が合う。彼女の緑の眼に光が灯り、だがその目はま

るで純粹な好奇心でしかないことに何とも言えない狂気を覚えた。見る目は昨日と違いまるで捕食とも思えるような激しく生きた心地のしないキスだった。

一分してから彼女の拘束が緩む。その時には俺は恐怖と恍惚で腑抜け崩れる。一方ひいろは俺と別に意味で恍惚になっている。

「唾液の中にちよっとだけ緋刃さんの味がします。これ所謂がNTRですかね。何だか……悔しい、殺したい、黎人さんが憎くて……私の緋刃さんが汚されて、何だか興奮しちゃいますねえ♡」

「こ、この……化け物が……」

「化け物だなんて言葉、私には相応しくありませんよ。私はそこまで出来た竜ではないので」

「うるさい……この家から出てけ……」

ガタツ！

冷蔵庫の方から大きな音がした。

「……ツ！……ツ！」

いつの間にかニエは立ち上がって必死に冷凍庫の扉を開けようとしていた。体をこすりつけるように必死に抗い、ついに扉が開いた。そしてその中には冷凍食品に交じり細い腕が2本凍らされていた。彼女はそれを口で噛んでひいろの前に持つていく。

「あら、腕が無いのは辛いですよね。反省しましたか？」

「……ツ!!」

「……した？」

「ツ……」

「したようですね。じゃあ治してあげます。これでもう私から逃げませんね。反省したのならくつつつけてあげますね」

するとひいろは二エに一度口づけしてから自身の腹を抉り、凍った腕の引き抜かれたような断面に塗りたくって二エの腕にくつつけた。直後二エはひいろの首を両刃剣で切り落とす。

「こんのサイコ野郎もう嗅ぎつけたの!?!もういい加減に死んでくれな
いかしらコイツ!」

彼女は文句を言いながらひいろの肉片を凍ったもう片方の腕を着ける。そしてその文句には覚えがある。彼女は何者から逃げて人の社会に訪れた。それに先ほどの腕の驚異的な再生にもかかってない既視感がある。

「二エを追ってる竜ってひいろだったのか?」

「そうよ!コイツは最大の竜『屍竜【苗床】』、出鱈目な再生で殺しても
生き返る女狂いのサイコ野郎よ!」

——
現在時刻は夜7時、二エは夕食を食べていた。

「うぎぎぎ……………頭蓋骨ってこんなに硬かったっけ。黎人、固い物ある?
それか竜体になっていい?」

「……………」

「何グロッキーになってんの」

「ひっ止めて……………お願いだから、それ、見せないでくれ……………」

彼女はひいろから取れた頭をスプーンとフォークを使って食べていた。さっきまで友人だった物が焼き魚のお頭みたいに崩れていくのは精神的にかなり応堪えるのだ。独り言を聞くに醤油と胡椒とマヨネーズが合うと。

あれから二エは全くと言ってひいろについて何も語らない。何も気にならなかった訳じゃない。聞こうとすると殺気を含んだ目で睨まれ不機嫌になるから話してくれないのだ。よほどひいろが憎くてたまらないのだろう。二エからしてみれば逃げてきた相手が家に来たのだ。どれだけ恨んでいるのか知らない。だけどきつとおぞましい物を見たのだろう。

一方俺は壁に飛び散った血の後始末だ。血が壁や床に付いてすぐに掃除を始められた方汚れはすぐに落ちた。ただ匂いまではまだ取れず生臭い匂いが充満する。換気扇を回してはいるが到底それだけで足りはしない。窓も開けられないから暫くはこの匂いの中で過ごすことになる。ナツメに消臭剤を頼まなかったのを後悔した。

「(これに加えて風呂場の遺体置き場の掃除もあるのか)」

ひいろの体は血が凄まじいので風呂場に安置している。輸送は二エにやってもらったから遺体は見えていない。だが曰く運んでいる最中も少しずつ再生しているからその内起き上がるだろうと言っていた。だけど……重い足取りで風呂場へと向かう。

「……友人として、一応は看取るべきだよな」

正体が化物だとはいえ彼女は俺の友人だ。大学生活では何度も世話になったから人として感謝している。しかも彼女は名家の生まれだ。そんな彼女が怪死をしたなら社会的にも影響は大きい。だからせめて俺だけでも……彼女の死を見届けてあげないと、そんな気がする。

俺は覚悟して廊下の扉を開ける。扉を開けた瞬間、食欲をそそる匂いが漂っていた。

「ごんばんは黎人さん。もうすぐ出来ますので待っていてください
ね」

そこにはエプロン姿のひろがいた。その手に持つフライパンからは美味しそうな匂いがする。彼女は料理をしていた。

「え、何で生きてんだお前」

人はあまりにも驚きすぎると逆に冷静になると聞いたことがある。今まさにその状況だ。あれだけグロテスクな死体を見た後だというのに目の前には生きているひろがいる。聞いてはいたが俺には理解ができない。

「私、竜ですし。それよりオムライスを作ったんです。夕食は食べていないようでしたし勝手に作らせてもらいました。楽しく三人で夕食にしましょう」

彼女の言う通りテーブルの上にはおいしそうなオムライスが2つあった。その内片方にはケチャップでハートマークが描かれている。彼女はオムライスをリビングに運ぶと直後ニエの絶叫、しかしすぐに静かになった。血が飛んでいないので多分飯を食べている。一応風呂場も見るといつも以上に綺麗に掃除されていた。後で聞いたら黒ずみと血が酷かったからひろがついでに掃除したらしい。

リビングに戻るとニエは複雑な表情でハートのケチャップのオムライスを食べていた。本当は机をひっくり返したいけど文句の付けようの無い位うまいから文句言えない、そんな空気が見て取れる。とりあえず席に座って俺も食事を始めることにする。まず一口食べる。と卵のふわつとした食感、次にケチャップとチキンライスの味が口に広がっていく。うん……普通においしい。というかかなりうまい。正直店で出せるレベルだ。

隣を見るとひろはニコニコしながらニエを見ている。どうやら感想を聞きたいようだ。

「妻の手料理のお味はどうでしょうか」

「……死ぬほど不味い」

「おいしかったのですね。良かった、作った甲斐がありました!」

ひろは心底嬉しそうに微笑む。その顔はまるで恋する乙女のようだった。ニエはひろが話すのを心底嫌そうな顔をしている。二人の間とはいえ空気が悪くなるのは嫌だから俺は彼女らの会話に割り込んで話題を変えた。

「あのさひろ。聞きにくいんだけど……なんで生きてんの?」

「……え?ああそれはですね、私が竜だからですよ。私は竜なので中々死なないのです。竜は人類と比べて不死身の存在、竜は世界を支える存在であり、そして私は更に世界の理から外れた存在。だから特に私は滅多に死ぬことはありません」

「じゃあさっきのは?首切られたじゃん」

「先ほどは妻の緋刃さんに殺されてしまいました。でもご安心ください。私は再生能力には自身があります仮に本当に死んだとしても問題はありません。あなたの体だって私の体の肉片から治してあげたんですよ。ね、緋刃さん」

「え、ニエ嘘だよな」

「……チツマジよ。多分あなたが竜になったのもそのせい」

人一人を肉片から生き返らせる驚異的な再生能力、彼女の名前は「屍龍【苗床】」といった。苗床の名前は伊達じゃないらしい。彼女曰く真の姿は緑色の毛と鱗のある巨大な竜らしい。

「因みに巨大ってどれくらいなんだ?」

「15000km、ユーラシア大陸程度と言えはいいでしょうか」

大陸並み……今一現実味の無い話だ。冗談かと聞き返すと割り込むようにニエが本当の事だと言った。

「あとそいつの本体は触れた生物を吸収する。吸収された生物はそのまま栄養になるかクソガキとして生まれ変わるの。再生能力目当て、生まれ変わりたい物好き、単なる戦闘狂がソレに挑んで色んな奴が死ぬ。私も挑んだけど最後にはぶくぶくに太った竜に追われる様よ」

口調は重い、というより呆れている。ひいろはそれを聞いて何故か照れていた。話は本当らしい。しかしだとすると疑問もある。何故殺し合う程の仲なのに何で二エの妻と名乗るのだろうか。

「それは……あなたも見たでしょう。血を纏い、小さな四肢で剣を振る、脳を焼かれるあの美しさ。私も何度も子の死に様を体感して恋に落ちてしまいました。出来る事なら一生涯を彼女に焼かれない、そう願って婚姻を結びに来たんです」

「きつも！寒気立つセリフ吐くんじやないよこの腐れ竜！」

「おいまで二エ！ケチャップ汚れの皿を投げようとするな！また掃除しなきゃなんないだろ！」

オムライスの載った皿を投げようとする彼女を必死に止める。だけれどこれで彼女のバイトの内容の理解できた。彼女は常軌を逸する程に二エを愛すが故、婚姻生活をする、なんて馬鹿げた求人を出したのだろう。俺が子供なのか、知らないし脳が理解を拒んだ以外は。

「それは……私の体を好きな人に好き勝手に使われて出来た『子供』があなたです」

「使ったって肉片でしょヤリ○○トカゲ」

「……俺はこの仕事はいいと思う」

「はあ?!正気?」

掃除中に彼女が持ってきた求人の詳細を見た。業務内容は話の内容容道理彼女らと一緒に生活するだけ。家事洗濯料理が彼女が担当し、

俺らはヒモとして生活する。それだけの業務で給料はどの求人よりぶつちぎりが高いのだ。勿論小さく注意書きがあるのかも無い。自分には法律には特別強い訳ではないがこれは不気味な程に正当な契約だ。何より契約内容に含まれる保証に人に戻った際の全面的な社会地位の保証までしてくれる。それは今の俺達には喉から手が出るほど欲しく、真面目な話乗ってもいいと考えてる。

「ふざけんじゃないわ!」

二エは勢いよく立ち上がる。彼女からしたら勝手にストーカーの妻にされるのだ。断られるのは当然だ。反対されるのも想定している。

「分かっているなら断り「無理だ」はあ!」

「俺達は竜、だけどあくまで『竜でもあるだけ』この社会では人の体でしか生きていけないんだ。だから今俺はこのチャンス逃したら人の戻った時、俺が死ぬんだ。ひいろ、履歴書は必要ないんだよな。面接はいつだ?」

「面接は必要ありません。愛する妻の結婚する、それが出来れば採用です」

最後にして最大の壁、彼女には苦渋の決断になる。祈るように納得視線を送る。彼女は心底悔しそうな顔をして拳を強く握りしめる。そして拳を振り上げ、暫くぶつける先を探るように震わせた。だがぶつける先が無いのを知るとゆっくりとそれを降ろして剣を取り出し自身の腹に突き刺した。

「おまつ、二「あああああああうっさいわねえ!ホントはあんたの家なんて一時拠点のつもりだったけど……あんたには地獄の果てまで来てもらうわよ!おいクソツタレ、さっさと案内しなさい!」

ひいろは腹の出血に全く動じず、それどころか顔を赤らめながら喜んでこう言った。

「はい、ありがとうございます！緋刃さん、黎人さん、末永く宜しくお願ひします！」

さて、こうして目の前で新たなカップルが成立し、俺自身も同級生夫婦の子供としてニエと共に新たな家庭の一員となることになった。というわけで一方的なイチャラブを後ろにニエの出血を処理しながらナツメに電話をする。

P r r r r P r r r r

「もしもし、ナツメ？」

「おお、黎人君……いや後ろからひいろ君の声がするね。ということ
はバイトの面接は通ったようだね」

「ああ、お陰でさっきカップルが一つ成立した」

「へえ、つまりこれで君は学生ながら所帯持ちというわけか。おめで
とう」

「ああいや結婚したのは俺じゃない。ニエとひいろだ」

「……君にしてはジョークセンスがあるね」

「それで俺は子供だ。なあ、マジでどうしてくれる」

「……………ごめん」

「いや、俺もあいつをそっちと見抜けなかった俺にも非はある……か
もしれない。せめてお前とひいろだったら幾らか理解できるんだけ
ど」

「いや、それならむしろ僕は選ばれないよ」

「ああそ……お前それぞれいう事だ」

ツー
ツー

流石金持ち、やることが派手だねえ

二工とひいろとの結婚から次の日の午後、俺たちはひいろの家に引越す事になった。俺の家は3人で暮らすには手狭だ。その上二工の凶行が生活上問題になるからバイトの話が無くとも近い内にもうにかして引越したいとも考えていた。だから時間も地位も無い俺は彼女に頼ることが一番と考えたのだ。既に荷物の大半は送りあとは俺達が行くだけ。送迎の車に乗る時、二工の最後のささやかな抵抗にドアの前で立ち止まった。

「おい、乗れないんだけど」

「くっ……何で態々嫌いな奴と一緒にならなきゃならないのよ」

「文句言うな。逃げた所でどうなるのか知ってるんだろ。大人しく諦めな」

悔しそう彼女は車に乗り俺もそれに続けて俺も乗った。黒塗りの高級車に乗って距離にして数駅、街の光景に段々と緑が混じる。二工は窓の外に見える景色が変容する様を眺めそれを見てひいろは微笑む。一方で俺は人生で一生乗ることのない筈だった高級車にがちがちに緊張していた。乗ってから気が付いたけど普通の車とはまるで雰囲気がるで違う。少し現実から逃れるために大きくなったスマホに逃げた。天菜家については旧自宅のアパート少しでも調べたけど如何せん調べれば調べる程謎は深まるのだ。

「……ふーん、つまらない街ね。前の家の近くの方が人がいて賑やかだったわ」

「でもこの近くは人気のない森に囲まれていて緋刃さんには魅力的だと思えますよ。黎人さんは鳴葉に訪れた事はありますか?」

「……え!? あ、ああうん。年始にお参りに来たりするぞ」

突然話を振られ変な声になってしまい二人に笑われた。

そうしている内に神社前の大通りを通過し次第に景色に緑が増え
ていく。大通りを外れ山の見える方向の道に逸れると更に緑が増え
森の中に入った。そこから更に十数分もすると高い塀と金属の大き
な門が見え始めた。遂に来た、いよいよ後戻りが出来ないと覚悟す
る。

「さて、そろそろ建物が見えてくるはずですよ。ここが今から一生家族
仲良く生活する我が家ですよ」

「そう、どんな貧相な家か隠者の家かは知らないけど私を満足させら
れなかったら殺すわよ」

「いや、門から建物が見えない時点で現代日本としてはヤバイ。この
塀の中全部が私有地ならマジでヤバイぞ」

「ふふふ、黎人さん。敷地自体にはちよつと前から入っていましたよ。
具体的に大通りから外れた道の先からです」

「二エ、訂正する。もう逃げられないぞ」

門の前まで着いて車を降りる。重厚な門が開き、木々に囲まれた広
大な家の中にいよいよ足を踏み入れた。

「ようこそ、我が屋敷へ」

目の前に広がるのはまるでヨーロッパのような庭園。石畳の道に
噴水があり色とりどりの花が咲き誇っている。庭だけでこれなのだ
から奥にある建物はどれだけ大きいのか想像すらつかない。さらに
歩くと今度は巨大な洋館が現れた。洋館は白を基調とした造りに
なっており正面玄関まで続く階段の手すりには細かい彫刻が施され
ている。

そして扉を開くとその先に広間が広がっていた。天井からはシャ
ンデリアが吊るされ床一面には真っ赤な絨毯が敷かれている。まさ
に絵に描いたような豪邸という感じだ。

そして扉を開けた先に一人のメイドがいた。青い髪に白い力

チューシヤをつけた少女は凛々しい美形の顔で大人びた雰囲気を持つている。だが身長は高くなく160センチ程度だろう。しかし胸は大きくエプロンドレス越しにもはつきりとわかるくらいである。そして彼女はメイドはこちらを見ると開口一番

「苗床、君は随分と厄介なのを連れて来たのだな」

明らかにメイドとは思えない失礼な発言をしてきた。

「蕾、言葉を慎みなさい。それとあなたも客人の対応に応じるように」

いつもの笑顔のままひいろはメイドに注意した。しかし笑顔の裏に怒気を感じ取れ、しかしメイドは表情を一切変えずめんどくさそうに呆れている。

「態々私が直々に来たんだ。君用か部下のメイドならともかく私まで行動を決められる筋合いはないと何度も言っているだろう。ああ客人、準備は出来ているから応接間に来てくれ。苗床、部下が客に冷えた茶を出す前に早く連れてこい」

彼女はそれだけ伝えると本当に屋敷の奥に歩いて行った。俺は想定した非現実の更に斜め上の光景にあっけにとられて動けずにいる。

「……家のメイドが失礼しました。でも元から蕾の紹介の為に応接間には通す予定でしたし着いて来て下さい」

気まずそうにひいろは謝罪した。正直出会い頭であんなことを言うメイドという概念がそもそも希薄だったから結構ショックを受けている。あの容赦ない言葉遣いを主人だけでなく客人にまでするかと……まあ、童貞臭い妄想は崩れた。まあ気にしてもしょうがない。蕾という彼女以外にもメイドはいるようだし単に彼女と話さな

ければいいだけだろう。

俺たちは長い廊下を歩く。いくつもの部屋に続く扉があり、多くの人が住んでいそうな屋敷だ。だけど家に来る途中にもこの家に入ってから誰一人としてすれ違わない。疑問に思いひいろに聞くと今は家族とメイドしか住んでいない、詳細は後で話すそう。そうしている内に廊下の中ほどにある応接間についた。ひいろが部屋に入り、俺も入ろうとすると突然二エが袖を引く。

「二エ、どうし……」
「蕾は竜。怪しければ動く」

小さく呟くと二エは俺を押しつけ部屋に入る。彼女の忠告に不安感を覚えつつ、覚悟の上で応接間に入った。部屋の中は上等なソファやテーブル、調度品などが置かれており高級感がある。そんな部屋にいたのは青髪のメイド。彼女はティーカップを傾けながらこちらを見つめていた。

「やあ新入り、きつと緑でもない騒動に巻き込まれてここに来たんだろう。同情はしない、あくまでも新入りとして私は歓迎する」

「あの蕾……さん？何で飲んでいるんすか？」

「単なる好奇心。ああ、毒見という見方もある。緋刃には余計なお世話だったかね？」

「ええ、殺したいのはすぐ隣にいるからね」

蕾と二エはお互い皮肉めいた言い回しで会話している。早速お互い共通の話題を見つけて幸先がいい。最もそれが俺の友人の悪口じやなきや俺もよかったが。蕾はカップの紅茶を飲み干すと俺たちの分の紅茶を入れた。その横でひいろがソファに座り引きつった笑みで彼女を睨む。

「ごめんなさい黎人さん、この子昔からこんな感じなのです……」

申し訳なきげに謝るひいろ。別に気にしていないことを告げて座るように促され俺達は座る。

「本題から話したかったです……彼女h「私は桐生 蕾(きりゆう つぼみ)、メイド長だ。この屋敷の管理と人事をしている。雑用は専門ではないから面倒事は他のメイドに当たってくれ」

ひいろが話を始めようとする前に蕾は自己紹介をした。

「緋刃の話は聞いているよ。曰く背徳の犬、血に飢えた殺戮者、物騒な話ばかりだがね。私としては君みたいな野蠻人などと関係を持つなごめんだが友の夫であるならば話は別だ。共に仲良くしよう」

「ふーん、舐めた口きく嫌な奴ね。自分勝手にめんどくさそう。でも安心なさい。面白みの無い奴はどうでもいいわ、でも仲良くしましょ」

「社交辞令も知らぬとは噂道理の畜生だ」

先程と打って変わってバチバチと火花を散らして睨む二人。相性が良いのか悪いのか分からないなこいつら。だが険悪な雰囲気の中、蕾は俺の方を見る。そしてまるで新しい玩具を見つけた子供のようになりと微笑んだ。そして蕾は「後は3人で話してくれ」と言い席を立つ。

「蕾、後で自室に来るように」

「断る。下らないままごとと巻き込まないでくれ。嫁だ婿だはどうでもいい。茶と名乗りは済んだのだ、早く仕事に戻る。ああそうだ。君たち、私はいつも使用人室にいる。備品が破損したら先に誰でもいいからメイドに一声かけてくれ。こっちも準備が何かと忙しいからな」

その言葉を最後に退出した。嵐のような少女だった。数日前の二

エよりはかは数倍マシだがそれでもキツイ人だった。

「ごめんなさい。彼女は少し気難しい子で、ちょっとした事でもすぐに機嫌が悪くなるんです……」

「そう？あんたより話を通じそうでいいと思うけど」

みんななどだけお互いにいがみ合うんだ。もしかして竜同士って結構仲悪かったりするのかな。今後の生活を進める上で人間関係は良好に保っておきたいがこの家に話せそうな人はいるのかな。

話すといえればひろの家族の誰かに顔を合わせておかなければならない。今日から世話になるんだし俺自身が問題を抱えているのだ。だからお礼と謝罪を兼ねて挨拶に伺いたい。しかし相手は現役の資産家の家系だ、車のスマホでの下調べの時点で関係者は皆一流、親族も多いだろうし、何より日々忙しそうで顔を合わせる機会がないかもしれない。だが、それは意外な解決法で片付いた。

「それは必要ありません。この家には家族とメイドしかいないので」

「どういう事だ」「ねえ、まさかこの家の中には『私達とあのメイド以外の人物がいない』って言いたいのか？冗談じゃないわー！」

ニエが強く机を叩く。机が割れそうな勢いで叩かれ、衝撃で空のティーカップが音を立てて落ちる。幸い地面に落ちる前に俺がキャッチしてことなきことを得た。

「ニエ、それは？」

「コイツの体から作った子供がコイツの親のフリしてるかもってことよ」

「はい。緋刃さんのおっしやる通り私の一族全員は私の子です。私には公的には6人の兄弟姉妹、それと数多の血筋の者が世界各国に散っ

ています。彼らは無意識化の制御の下、私の子というのを忘れ人として生活しています。だから彼らには竜の特性は無いし意識も同一ではありません」

そしてその基本から外れた例外が本体との意識を共有し驚異的な再生能力を誇る苗床の竜のひいろ、という事らしい。彼女本体の操作がされていない親族は遠くに引越してもらって、家族も長期の仕事や引越して遠くにいるそう。それから二エは更に質問を投げかけた。

「蕾は？あいつだけ暴走しているのかしら」

「彼女は協力関係にある竜の仲間です。一応屋敷の管理を頼んでいます。詳しいことは直接聞いて下さい」

それから今後の事について話し合った。暫くは新たな環境に慣れる為来客は減らすそう。大学も裏工作が終わり気にしなくてもいい時間は出来ているから自由に過ごす事にした。そして肝心の元の体に戻る事に関してはというところ。

「分かりません」

「お前の体で再生したのにか」

「あなたの体に関しては再生の過程が通常とは異なっていて私の知識では手の打ちようがないのです。なので少しだけ待っていて下さい」「そうか……二エ、解決策が見つかったら勿論協力してもらおうからな」「う、分かっているわよ。ゴメンってば」

というわけで体は元に戻らないらしい。

俺も自分の体に関わるから竜体に関して知識を身に着けたい。参考文献は一応用意してくれてメイドさんに持って来てもらい新たな自室の一人ベッドでそれを読む。それは分厚く重い古い書籍であった。幾何学的な装飾と竜の絵が描かれ、内容は知らない言語で書かれ

ている。図やグラフも使われているものの何を現すか分からない。すぐに俺には理解できないと一目でわかった。ため息をついて本棚にしまっておく。

今いる自室も中々に豪華だ。部屋の広さは10畳ほど。壁紙は白で統一され家具はアンティーク調で統一されている。本棚には俺が所持していた本と教科書、エロ本に加え様々な種類の本が追加され、並べられていた。

クローゼットの中には俺の為の新しい服が用意されていた。男女どちらが着ても違和感のない服から女の子らしい可愛い服、さらに黒姫が選んだような下着の数々までそろっている。思えば今まではずっと男の時の大きすぎる服で過ごしてきた。試しに着やすそうな服に着替えてみた。フードの付いた黒いパーカーとジーンズ。精神的に着やすく女体でも動きやすい。それと外出用の帽子もあった。どれもサイズがピッタリで角と尻尾を出す穴も開いている。ケモ耳ジャンルでよく見る奴だこれ。

「(下着には意外と興奮しなかった。あ、そうか。今着てる服の形状がタンクトップに似てるからだ)」

自分で適当に選んだから男性的な方向になっているかと思っただけか。思いのほか結構可愛く出来た。今後の参考に一枚写真を撮っておくかな。スマホを出しカメラを起動しようとしたらいつの間にか一通のメールが届いた通知が来ている。送り主は蕾さんだった。どうやらメイドに直接会わなくても要件をここに送信してもいいという趣旨とインターネット回線のパスワード、それと以下の文が書かれていた。

『貴様は一時とてあの駄犬の飼い主だった。この私の尊い命が狩られぬように首輪をつけておけ。首輪持ちがあの方ではこちらの気が狂ってしまう』

つまり要約すると二エは俺が管理してくれと頼まれている。俺は思わず頭を抱えてしまった。正直彼女はひろに丸投げしてしまえば楽だ。ひろのあの狂气的な愛であれば拘束は容易いと頭では知っている。しかし同時にストレスが爆発した時殺人癖が再発する危険性があるのだ。

「……仕方ない。一度一線を越えた仲でもあるし俺だけでもマトモな話し相手でいよう」

何だかんだで時刻は夕方、会議や家の設備説明で歩き回っていたらいつの間にか日が傾いて来ていた。あと1時間もすれば夕食だと思う。時間はあるから一度二エの部屋に行こう。ベッドから起きて外に出る。だがその前に窓の方から物音がした。振り返ると丁度今会いたかった二エが開いた窓の前にいた。

「せめて扉から入ってくれ。窓が入口だと思ってるのか？」

「あなた持つてるマンガじゃよくある事よ。じゃなくて！」

二エは俺の近くまで走り俺の手を引き窓へと引張る。力は凄まじく咄嗟に踏ん張った俺の反射神経を一蹴しずると窓へと連れて行く。

「ちよ、何するの！」

「逃げる、アイツから逃げる為にここに来たのにそいつの世話になるなんてゴメンよ！……ここから森でも街でもさっさと出ていくわよ！」

「え、今から外出するの!?ならせめてバッグ持ってかせて！財布と帽子が無いと俺が死ぬ！」

彼女の腕を叩き必死に懇願する。彼女の身体能力では手を放されて逃れられるとは考えていない。だけど外へ出るなら最低限竜であることを隠してから外へ出たい。それに逃げるのであれば資金は絶

対的に必要だ。唯でさえ考えなしに出ていくのに何も持たないのは危ない。

「だからさ、頼むうお!」

ニエは腕を引くベクトルを180度回転させ俺は体勢を崩して床に転んだ。

「30秒!荷物纏めて!」

「は、はひい!」

急いで立ち上がり引っ手繰るように愛用のバッグを背負う。今の背丈では大きすぎる鞆だが今はそんなこと気にしてられない。中には財布と気休めの身分証、更に机に置いた充電器とスマホを放り込んで彼女の手を握る。すると彼女は俺の体を担いで

「飛ぶから口閉じて!」

「飛ぶ!?」応ここ2階だよ!」

日が落ち月の登る暗い夜に屋敷を飛び出した。

フアミレスで喜ぶ竜

現在位置 鳴葉市街

二エに担がれ十数秒、彼女は俺を担いで森の木々の間を飛び街へ向かう。曲がりくねった道を走る車だと時間がかかる道のりを横切つて一直線に彼女は走っていた。一方俺は今までにないスピード感への恐怖に怯え涙目で叫んでいた。情けないことこの上ないがジェットコースターより数段凄まじいスリルは俺には厳しかった。

「のおおおおちよ、早えええええええ!？」

「うるさい！ホントに舌噛むよ！」

だが更に数秒すれば少女の叫びの響く暗い森から街の明かりが見えてくる。卓越した身体能力により一瞬で街まで着いたらしい。森と人里の境界で一度木を降りる。彼女が担ぐ手の力を緩めると彼女の体から俺はずり落ち、そして地面に座って立てない。

「どうした？もう疲れたの？」

「純粹に怖かったあ……」

「ふーん、一応男の癖に情けないわねえ。ほら、立って」

二エは俺に手を差し出し有難くその手を取って立ち上がる。大体行動が物騒でわがままな彼女が優しくしてくれるとは。殺人鬼でも興奮してなければ人間性はあるんだなと感心した。

「何だか姉みたいだな」

「背はレイトが高いのにね。ま、私の手下にならしてあげなくもないけど」

そんなすぐ死にそうな誘いは勿論遠慮する。スマホを取り出し現

在の位置を確認すると神社の近くだった。草の陰から遠くを見ると確かに赤い鳥居が見える。施設をネットと見比べた結果ここは本殿の裏らしい。幸いここの地理は大まかに覚えていりし歩きでも大体の場所には行ける。

さて、どうしようか。二工はひいろからの逃走を望んでいる。だから家から脱走をしたまではない。何故か俺と一緒に連れて来たのだ。彼女からしてみればひ弱で実力行使が得意な彼女には邪魔に違いない。訳を聞くと曰く「脱走するなら地理に詳しい人は連れて損はない」らしい。ふぎけんな、こっちは元に戻るのに必死だし犯罪者と一緒にはいたくないんだ。だが逃げた所でまた捕まるか今度こそ殺されるかだ。今は素直に一緒にいてやろう。

「うんうん、殺されたくなければ素直に従いなさい。で、どこかにいい逃亡先はあるかしら」

「道順調べるからちよつと待ってろ」

俺は逃亡先を調べる振りをして蕾さんにメールを送る。緋刃が俺を連れて逃走しました。逆らえば殺されるので数日経って満足したら家に送り返そうと思えます、これだけ書けば彼女経由でひいろも知ってくれるだろう。

「ねえまだ？まさかあの脳腐れに連絡なんてしてないわよね」

「大丈夫だ。そうだな……6時なら派手に動く前にちよつと飯でも食べるか。何か食べたい物ある？」

「肉」

「肉って。男みたいな選択の仕方だな」

「だってそもそも何が食べられるか知らないもの。そういえば今まで私が食べてたのって何なの？」

……失敗した。一人暮らしの癖が抜けないせいで炒め物かインスタントで適当に作っていたから知識が全くないままだ。つまり決定権を与えた所でそもそも選ぶ選択肢が存在しないのだ。ならばここ

は俺が入る場所を決めよう。財布の中には十数万円……十数万!?!もう一度枚数を数えるとお札の間に一枚のメモを見つけた。曰くひろからの小遣いだそう。でもこれならさらに何処へでも行けそうだ。

スマホのマップで飲食店を探す。近場とは言えないが歩いて行ける場所にちょうどいい店を見つけた。今度は俺が道案内をする番だと思つてニエの手を引き神社の石段を下る。

現在位置 ファミリーレストラン

神社周りの観光地を離れコンビニでATMに小遣いを預けた後ファミリーレストランに入店した。安く、メニューもそこそこあつて、何よりうまい。時間帯的に家族連れや学生が多く席に座っている。店員に案内され俺達は窓際の席に座った。俺は早速メニューを取り適当に量を決める。

「(ドリンクバーと海鮮スパゲッティでいいか。ニエにもドリンクバーを付けるとして何食べるんだろう)」

メニューを下げたチラツとニエを見ると開いたまま静止している。メニューが決まったようでもないし何故だろう。と、思ったがそうか、初めてなんだし無茶な事させた。俺は彼女の隣に移動した。

「……(予想の数倍料理の種類が多い!?!しかも知らない料理ばかり)」

「ニエ、どれ頼むか決めたか?」

「っ!ええ、レイトこそどれを食べるのかしら?」

「……二エと同じのを頼もうかな」

面白そうなので敢えて言ってみる。すると彼女は俺から目線を逸らした。ははーん、俺と同じ物にしようとしたな。焦っているのが目に見えて分かる。虐めるのはここまでにして彼女からメニュー表を借り大まかに料理の説明をする。

「これはパスタ類」

「ばすた？」

「分類的には麺類、カップラーメンで食べてたろ」

「あの細いのね。あ、次のページのピザは美味しそう」

「じゃあそれも頼むか。あとその次のページは肉類」

「早くそれを言いなさいよ」

彼女はメニューを捲る。数多の未知の料理に目を輝かせ様は何だか小さい子みたいだ。数分の質問と応答を繰り返して彼女はハンバーグに決めた。俺は彼女の隣を離れ席に戻り呼び出しボタンを押して店員を待つ。だが彼女が料理が決まったが後もメニューを読んでいる。最後のページ、デザートのページをじっと見ていた。

俺も再びメニューを出しデザートを確認する。いつもは興味がなく滅多に見ない。久々に見てみると季節の果物を使った鮮やかなパフェやパンケーキが載っていた。そういえば彼女に見せたアニメでこれと似たものを美味しそうに食べる場面があった気がする。二エも俺に気が付いてメニューから目を離し彼女を見ると期待の目線をこっちに送っていた。

「デザートは一つまでだぞ」

「！そ、そう！別にいらないけどあなたがそういうなら遠慮なく」

店員が来て俺達は各々メニューを頼む。その間俺達はドリンクバーに飲み物を取りに席を立つ。ドリンクバーの機械に向かう道中、

他のお客さんの頭と尻をチラチラに視線が痛かったが敢えて気にしないことにする。コップにコーラとオレンジジュースを注いでそそくさと席に戻る。

……？

席へと戻る道中、視線が向くのは変わりない。だけど他とは違う視線を感じる。視線は店の入口、偶然誰一人待っていない待機席から向けられていた。そう、誰一人いないのだ。

「……！」ゾッ

もしかしたら今帰った誰かの気配をまだ感じているだけかもしれない。普通なら俺もそう思う。けれど今も確かに目が合っているのだ。姿は見えない、気配だけがそこにいて俺を見ている。ただ気配もまた俺に気が付いたのかすぐに気配は無くなった。

「レイト？」

「あ、いや……今竜は近くにいるか？」

「絶対ない。というかちゃんと安全確認したのよね」

……心当たりがあるとしたら蕾さんが連絡を受けて動いたか。金持ちの情報網は凄まじい、創作界隈ではよくある話だ。一応姿は見えないし食事中に突撃してこないだけ空気は読めるらしい。席に戻りニエが俺から奪ったコーラに悪戦苦闘していると料理が運ばれてきた。

「わー…凄い……匂いから今までと全然違う」

「(ゴメン、料理得意じゃないから俺の雑な飯だしてゴメン)」

この点で言えばひろの家に引っ越してよかったと思う。俺より遥かにうまい物を毎日食べられるのだ。まあそれは置いておいて今は食事だ。いつも道理のお値段よりもお徳のおいしさ。安い割には

量が結構多い。

その傍ら俺は彼女が肉を丸々一個口に入れようとするのを止めナイフを渡す。だが小さいなまくらの刃物が不満なのかナイフを自作しようとするのを食い止め俺が代わりに肉を切った。

「あれ、意外と柔らかいお肉なのね。てつきりもつと弾力があるんじゃないかって思ってた」

彼女はハンバーグを一口サイズに切り口に運ぶ。そして咀嚼した後、目を見開き驚いた様子を見せた後一気に食べ始めた。どうやら気に入ってくれたようだ。

「おいしいー！こんな食べ物初めて！何これ、今まで食べた中で一番おいしいー！」

彼女の表情が一瞬で笑顔になる。何だか見ているこつちが幸せになってきた。俺が微笑んでいるのに気づいたのか彼女は恥ずかしくなったのか顔を赤らめて黙々と食べ始める。そしてまた店員が来てピザが運ばれてきた。うん、美味しい。トマトソースの酸味とバジルの香りが鼻を通り抜ける。彼女も気に入ったのか先ほどとは打って変わって上品な手つきでゆっくりと味わうように食べている。しかし余りのおいしさに震えてるのは見えて分かるぞ。

こうして俺は二エの反応を見ながらコーラ片手にスパゲッティを食べる。だが俺はある重要な事を忘れていた。現在俺が頼んだ料理はLサイズに加えて二エとシェアするピザ。加えてドリンクバーで無限に供給される炭酸飲料。いつもの男子大学生の体基準で考えれば単品なら二つ目も入る。だが今はその影もない小さな体。つまり

「レイト、苦しそうね」

「やべえ、もう食べられない」

ニエがハンバーグを食べ終わったのと対照的に俺はスパゲッティは8割で手が止まりピザは1/4だけしか食べていない。なのにもう腹は十分に満たされ、それどころか苦しくなってきた。原因は体の変化を考慮せず大学基準で料理を頼んだせいだ。俺は仕方なくフォークを置いた。

「食べられないなら私が食べようか？」

「え、食えんの？」

「え、うん」

彼女は平然とピザを平らげていく。本当に大丈夫か心配になったが彼女を信じてみる。するとピザはあっという間に無くなった。ハンバーグを一皿とドリンクを数杯を食べた上で衰えないペースに驚く。俺より小柄なのによくそんな量がお腹に入るものだ。このままの勢いで残りのスパゲッティも食べてくれる、そう思った。しかし彼女は手を止めてフォークを俺に握らせてきた。

「え？ニエ、これどうすれば」

「あー、お腹は平気だけど手が疲れちゃったわー誰か私の代わりに食べさせてくれないかしらー」

わざとらしく棒読み口調でそう言う俺の手を掴んで動かしてくる。俺が残した物の処理の代わりに食べさせろというわけか。一体どこでこんなことを学んだのだろう。普通は恋人同士で……既に数段既に飛ばしているのには目を瞑って、まあ余程親しくなければ他人に食べさせるなんてさせない。しかしプライドの高いニエだからただ支配欲を満たしたいだけかもしれない。俺は手を放してもらい彼女の口にスパゲッティを運んだ。

「はむっつ。うん、空気が読める手下で助かった」

「(小鳥かよ)」

「……むう、変な事考えたでしょ」

彼女は満足そうに笑みを浮かべる。何だか餌付けしてるような気分だ。実際俺も厄介なペット扱いしているし間違っではないのだが。その後もデザートが来るまで俺は彼女に食べさせ続けた。丁度スパゲッティが終わると同時に彼女のデザートのパフェが運ばれる。イチゴの載った赤く高くそびえるパフェは見てるだけでも胃が重たい。頼んだ本人はそんな甘味の暴力を前にして更に目を輝かせ、スプーンに乗せたアイスを口に運ぶと満面の笑顔を見せた。さて、料理は食べたし俺の手も疲れた。デザートはニエ本人に食べてもらおう。彼女は

「じゃあ次はレイトも食べる番、口開けて」

「何言ってるんだこいつ（お腹いっぱいだから遠慮する）」

ニエはスプーンでクリームを掬い俺の口元に差し出す。いや待て、確かに腹は落ち着いてきたけど今それを口に突っ込まれたら流石に不味い。俺は首を横に振って拒否するが、それでも彼女は無理矢理口に突っ込んでくる。口の中に甘さが広がっていく。生クリームのくどい甘さは満腹の腹に重くのしかかる。

あ、これは不味い。

「ちよ、待つ、マジで止めろ！」

「ふん、邪な事考えない事ね」

彼女はクリームの乗ったスプーンを俺に差し向けるのを止め、俺に握らせてきた。はあ、また腕を酷使するのか。これ以上食べさせられなくても大惨事になるし今だけは彼女の奴隷に徹しよう。

「さっさと食べ切ってくれよ」

「(なんかこんなシチュエーション知ってる気がするけど……関節キスだっけ。大体ヒロインは恥ずかしがってたけどコイツといると楽しいしま、いっか)」

因みに俺達の周りの客と店員は入店からずっと「やけに仲のいい姉妹がイチャついてるなー」とうっとおしさとほのぼのが半々で混じった目で見えて来たのを知らない。全てを食べ終えて俺達が出た後ドリンクバーのコーヒーの前に行列が出来ていたらしい。

——
会計を済ませて外に出ると辺りは既に真つ暗になっていた。現在時刻は午後7時、この後はどこかに泊まるだけだ。夜を明かすだけなら適当なビジネスホテルか覚悟してラブホで宿泊が一番だ。しかし現在はよりにもよって俺はともかくニエは中学生くらい、これでは最悪補導されるだろう。それに加えネットカフェもここから徒歩だとかなり距離がある。

「うう、食べ過ぎて気持ち悪い」

「ちよつとしつかりして！」

「誰のせいだと思ってるんだ……」

それでも過剰な満腹感による気持ち悪さを抱えふらふらと夜道を歩く。幸いな事に行く当てがあるのだ。神社前の通りからかなり近い場所にあった筈。街灯に照らされ、記憶を頼りに明るいう住宅街の中に向かう。そして見慣れた苗字の表札を確認してから一軒家のインターホンを押した。

ピンポン

「はーい……って黎人君!？」

「急に済まねえナツメ、ニエに拉致られた」
「ナツメ、コイツの事また好きにしていから一晩泊めて頂戴」

ドキツ★コスプレだらけのファッションショー

―黒姫家

ナツメは玄関前で話すのもなんだしと俺達を家の中に入れた。彼は実家の一軒家で暮らしている。両親がいるから断られるかとも覚悟していたのにリビングには誰もいなかった。曰く今は観光業方面で親が忙しく泊まり仕事とのこと。ソファア―に腰掛け、彼の出したお茶を飲む。

「でもまさか駆け落ちとはね。ある意味初心というか過程を逆行しているというか、お似合いだよ君たち」

「ブウーーーーー！」

「ちよ、レイト汚ったな！」

俺は飲んでいたお茶を吹き出す。俺は別に二エに恋愛感情なんて抱いていない。寧ろ普通に暮らしていたのに殺された被害者なのだ。今だってコイツに拉致されてなければ蕾さんやひいろと生活して体を戻す手立てを調べていた筈だったのだ。

「げほっげほ、んなわきやねえよ。だって一歩間違えたら死ぬんだぞ俺」

「ふーん、二エちゃんは殺したいの？」

ナツメは怪しく微笑み二エに問う。

「うーん、今はまだ平気。でもムカつくから私好みに調教してみようかしら」

「だってさ、よかったね。君はまだ死にそうに無いね」

裏を返せば彼女に気に入られたせいで俺は逃げる事が出来ずいい

ようにされるだけの奴隷扱いだ。命の保証こそあれど今度は自由意志と決定権を失った。竜だから「人」権が無いと冗談でもいえないのが少し悔しい。だからそろそろ話題を変えて本題に入ろう。

「つーかこんなのしてる場合じゃねえ。ナツメ、いきなりですまないが今日泊つていいか？急用だから無理は承知だ。だから……」

「いいよ。今日は誰もいないし部屋も空いている」

「ああそうだよな、無理に決まって……え、いいの？」

断られると覚悟していたのにまさかの即答で拍子抜けだ。だけどもあからさまに裏のある飄々とした態度にすぐに警戒態勢に入る。

「あら、随分と気前いいのね。でもきつとタダでは言わないのでしょうね」

ニエは挑発するように彼に真意を問う。

「ははっ勿論。でもいざ見透かされると悲しいね」

「それで私達は何すればいいの？」

「何、簡単な話だよ。体で払ってもらおう」

「(か、体?! ナツメまじか!?)」ドキッ 「体?..」

「そう、だから先にお風呂に入っつてね♪」

彼の言葉と同時に風呂が沸いたことを伝える電子音が響いた。

――

風呂の後、俺達はナツメの部屋に連れ込まれる。ナツメの部屋は綺麗に整頓され物の少ない部屋だった。ナツメはそこに衣服を見せつけるように並べられていた。それらは男性が着るのを憚るような衣類、具体的にはゴスロリ、痴女服、コスプレ衣装でサイズは自分の体

をにピツタリでタグにはひいろの家で見た服のブランドのロゴが描かれていた。しかもご丁寧には服は色違いの2着が揃えている。

まじまじと観察する俺達の横で彼はスマホのカメラ片手にこちらを温かい目で見てくる。つまり、これを俺達が着ると？

「実は君のお洋服を選んだのは僕なんだ。洋服のセンスは彼女より僕が上手だから頼まれて二人でお金を出し合って買ってあげたんだ。だからその分も含めて君たちにはお人形さんになってもらいまーす♪」

「身体って、そっちかよ！」ドツドツドツドツ

クソっ、紛らわしい言い方でいやらしい意味と勘違いしていた。前の電話からナツメに男性疑惑が自分の中に出てしまっていたから処女を奪われる覚悟もしていたのに。恥ずかしさの余り俺は顔を赤くして俯いた。

「あれあれ〜黎人君、君は何を期待していたのかなー」

「男女ならセッ○スでしょ」

「二エえええええ！余計な事言うんじゃないやねえええええ！」

二エは風呂でも顔が赤いとか余計な事をいちいち言ってきた。やはりコイツは羞恥心という物があまり無いらしい。今も平然とナツメから渡された服に着替えている。俺は恥ずかしいことこの上ないが借りを作ると悪化するの明白なので着替える。数分も経たないうちに地雷系と量産型の姉妹が出来上がった。

「ううう………恥ずかしい」

ベージュと白で統一されたフリルの多い服、俺には屈辱的この上ない恰好である。一方二エはピンクと黒の地雷系だ。配色的に赤髪とは少し合わないと思ふ。だけどそれとは別に可愛いと思

う。彼女自身も初めて着る服に嬉しそうに尻尾を揺らしていた。

「な、なあニエ正気か。マジでこの先続けんの？正直これめっちゃ恥ずかしいんだけど」

慣れないワンピースとふわふわした着心地にもじもじして小さい声でニエに同情を求める。だが勿論彼女は乗り気な方でありその場で一回転してみたりと無邪気だ。

「え、こんなの序の口だよ。もしかして乗り気じゃないのかー。あ、そうだ。ねえねえニエちゃん。もし二人でここにある服を着て写真を撮ったら僕が次のハネムーン先を決めてあげようか？」

「！ 気が利くじゃない。丁度明日の宿も決まっていなかったのよ。写真くらいならお安い御用、どんと来なさい。さあレイト、次の服に着替えるわよ！」

「ええ……」

すると彼女は一瞬で服を脱いで別の服を渡してきた。おいおいおいマジでこんなのと付き合うのかよ俺。こうして俺はニエが選んだ服を着てナツメに言われた通りポーズを取り続けるのである。

「はいはいこっち向いて」

「(でも大切なのを忘れてるような)」

しかし始めの時はまだ女性であれば着れる服だったから羞恥心以外はマシだった。途中から普通の衣服では飽きた二人はコスプレに手を出し始めた。そうだ、本当の地獄はここからだっただけだ。利害の一致したナツメとニエにより発言権の無い俺は抗う術無く振り回されたのだ。

その一部を抜粋すると……。

「はい、もつと脚開いて。そうそう。次は胸元をアピールするように。うん、いい感じだね」パシヤパシヤ

「これ以上又開くとパンツ見えるんですけど。というか服逆だろ！」
↑チアリーダー衣装

「駄目。ほら、次はコレを着てね。もう、男の癖にグチグチ文句ばっかり言つて。そんなだといつまで経つても終わらないよ」↑執事服

とか、

「次はこの服ね。つてこれ小さいわね。似合ってる？」↑巫女服

「うん、バツチリ。じゃあ今度はこれで」

「へー、今着る。これ結構露出度高いのね。でも、こういう服ってちよつと興奮しない？」↑バニーガール

「ああ、分かるよ。僕も着たからね」

「(な、なんか二人が意気投合してる)」↑魔法使いコス

とか、挙句

「女王様とお呼び！………こう？」↑ボンテージ＋鞭＋蠟燭

「うんうん！最っ高だよ！」

「ん〃——ん〃——(ナツメのバカ、どこでこんな物仕入れてきた！)」
↑手錠＋ボールギャグ＋目隠し

等々エトセトラエトセトラ。とにかくされるがままに様々な衣装を着せられ続けた。時計を見れば時刻は午後九時、体力は限界を迎え精神力も摩耗しきっている。

「ナツメ、これ重くて動きづらいからもう脱いでいい？」↑ゴスロリ
「まだ待ってねー♪あ、そうだ。そのままスカートをたくし上げ……」
パシヤパシヤ

「おいナツメ……」

長時間のセクハラと自分勝手に振り回されたストレスに俺の怒りは遂に限界を迎えた。遂に堪忍袋の緒が切れた。

「何かな黎人く、「いい加減にしろ！」

ナツメが言い切る前に俺はナツメの股を蹴り上げる。丁度真ん中にクリーンヒットした俺の足に「ある」感触が確かにした。その瞬間、俺はナツメとのある会話が頭をよぎる。

いや、俺もあいつをそつちと見抜けなかった俺にも非はある……かもしれない。せめてお前とひいろだったら幾らか理解できるんだけど

いや、それならむしろ僕は選ばれないよ

数日前のナツメとの電話の内容と今の状況が線で繋がる。と同時に服での怒りと一緒に別の怒りも沸いて出た。俺は金的に悶絶する彼女もとい彼をもう一発殴り胸ぐらを掴んで罵声を浴びせる。

「お前やつぱり男じゃねえか！しかも何年も俺に隠して二エにもセクハラ放題かよこのド変態！しかも俺が女になってからベタベタ触ってきたよなあ、お前ホモかよお!？」

「ふう金的は、金的は駄目だよ……あと僕は男の子でも大丈夫だから……今の君も十分魅力的だよ」ニコツ

追加で更に腹に一発拳を入れた。彼は家主だがあまり心は痛まない。続けて蹲るナツメを引きずって玄関先に放置し鍵を閉める。これで一晩野外で過ごす事になるが反省してくれるだろう。今は5月、凍死は無いだらう。

それにしても道理でコイツが男女どちらにも人脈がある訳だ。元からボディタッチは多い方だとは定評だったけど自分の中で一つの

原因が分かった。というかさつきニエが「男女」って言ってたけどいい見抜いたんだろう。それを聞くと棒弱無人な性欲とだけ返ってきた。至極ごもつともである。

「レイト、私が言うのもなんだけど彼、私達の逃亡先を探してくれるんじゃないの?」

「金ならあるし適当に探せば探せると思うぞ」

最もこの辺りの宿泊先はもっぱら観光用だ。旅館ばかりでネカフェも車で行くような立地にばかりある。だから俺は電車で駅前の街へと向かおうと考えている。彼女は困惑しながら納得した。

「(ナツメとレイトは親しいし、実際嫌々ながら楽しそうにしてたけど……なんだか人間の相互関係が心配になるわね)」

「……ニエ、どうした?」

「いいえ、なんでも(ま、問題が起きたら私が解決してあげればいいか)」

一先ず今日はもう寝よう。明日の宿を探さないといけないしニエにバレないようにひいろへの救難要請を出さないといけない。部屋に散らばる衣服を着用済みと未着用を仕分けて部屋の端に置かれた段ボール箱に詰める。と、その過程で服と福の間から一枚のメモとガムテープを見つけた。「黎人くんの ひいろ宅に送る用」と書かれ、彼の部屋を更に探すとベッド下から一回り小さい「ニエちゃん用」と書かれた箱を見つけた。中身は空で、きつと服はこれから出したのだろう。

それから二人でナツメの床で寝る。彼とは元男同士だしコイツの布団で寝れないかと試行すると女性特有の匂いがして、これが堪らなく悍ましく固い床で寝る事を即決した。

時間が経ち深夜になりニエの寝息が響き始めた頃、俺はスマホを見る。するとひいろからの数百件もの着信と蕾さんからの事務連絡が

来ていた。ひいろのメールはどれも二エの早急な帰宅を促すメンヘラじみた文面の数々で仕方ないのでゴミ箱にぶち込んだ。蕾さんはひいろの暴走が凄まじいので早急な俺達の帰宅をさせる為に現在対策を立てているそう。もし遠征をするようなら事前に伝えて欲しいそう。

俺は早速明日駅前に行く予定だとメールを送る。すると深夜にも拘らず10秒も経たない内に返信が返ってきた。何と鳴葉駅前周辺から離れずに三日間滞在できれば居場所を特定して迎えに来てくれるらしい。良かった、俺はあと数日で助かるのか。安心するとなんだか眠くなってきた。

「……zzz」

こうして俺は明日を迎える。

だからだろうか。彼は何も知らず、きつといつまでも無知なのだ。

更に夜が更けた深夜。緋刃は一人夜中に起きる。

そして彼の部屋のクローゼットを開け、中身を漁る。黎人と服を片付ける時、彼女は多くのコスプレ衣装をそこに仕舞った。だが単にそれだけの意味では無い。彼は気づく事なかったけれどコスプレの中の巫女服に不審な点を見つけたからだ。

彼女は自身が着た巫女服に白い髪の毛が付いているのに気が付いた。白い髪の毛の人物なら今の黎人が該当する。しかし服の質感が他のコスプレとは一線を画し、布についた折り目の癖から綺麗であるが明らかに誰かが常用した本物の巫女の服だ。その上この服だけ若干サイズが小さい。

暗い部屋のクローゼットの中、夜目を効かせて不確かな何かを探

す。以外にもそれは簡単に見つかった。クローゼットの服の中に彼女が着た服と同型の奇妙な巫女服が数着掛けてあった。奇妙というのはサイズが2つあり、どちらも臀部に尻尾用の穴が開いているのだ。通常であればこの位置に穴など開ける筈ない。つまりこの服は初めから自分以外の人外の物である。

だがそれより目を引く物も同時に見つけた。

両足分の義足だ。彼女よりも小さい肉体に合う金属質な足である。

ガチャ

「人の私物を漁るのはよくないよ。可愛い竜ちゃん」

ドアが開き外へ出した筈のナツメが部屋に入る。緋刃は無表情のまままだ。

「……ナツメ、あなたは何を飼ってるの？」

「君みたいかわいい子だよ」

「そう、多分鍵を開けたのもそいつなのね」

「まあね。でも人の者を漁るのはよくないね。もしかして巫女服のサイズを間違えたの怒ってる？ 似たような服だからミスしてた」

「ううん、気になっただけ。もう用は無いしあなたもベッドで寝たら？」

「一緒というのはどうか？」

「……遠慮するわ。今日は疲れた」

彼女はクローゼットを閉じ、再び床に眠りにつく。ナツメもまた自身のベッドに横になり就寝する。

「ああそうだ、君の気の向いた時で良いから『鳴葉大社』に行ってみて。稲荷からすぐに行ける」

「……観光はせめて、遠くに着いてから楽しみたいわ」

「平気だよ、あそこならきつと面白い物が見れるから」

10 街に潜伏（お出かけ）する竜

朝九時、通勤通学が落ち着く時刻にて。俺とニエは電車に乗って街へと向かっている。平日の上りの社内は混んでいて、二人が隣同士で座れたのは幸運だった。俺は窓の外を眺めながら今日をどう乗り越えるかを考え、ニエはそんな心配をよそに俺のスマホでゲームに興じている。

「ふーん、結構簡単にクリアできるシステムなんだね」

「誤操作で課金しないようにな」

電車には驚かないのか、と俺は疑問に考える。聞くと逃亡中に何度も見ていて今更見ても何も思わないらしい。しかし実際に乗車は初だそう。

ひろの家のある地帯は鳴葉でも田舎の観光地に近い位置である。電車から見える景色には乗車から暫くは木々の緑が混じる。その背景に段々と背の高い建物が混じり始め、比例して乗車する人々も少しずつ増えていく。ニエも変わる雰囲気を感じしゲームを止めてそわそわし始めた。

ついでにケータイを返してもらいメールを確認する。予想通りナツメに予約してもらったホテルからの連絡とひろからの怒涛の催促だった。そうだ、救出の時の為に今夜のホテルの場所を蕾さんに送っておこう。よしこれだけあれば安心だ。丁度目的の駅に到着した。

席を立ち、ニエ連れて電車を降りる。そして人ごみに揉まれて遂に街に辿り着いた。

― 鳴葉駅前

高層の建物が乱立するこの街でもかなり発展した一帯。この街で

何かをするなら最後には大体ここに来る。勿論娯楽施設も充実して
いて遊びには困らない。俺も何度も訪れたなじみの街だ。

「おお……昼間の街ってこんなに大きかったのね」

「夜には来たのか。逆に凄いな」

「まあね、騒がしいと昂ってきちやうし動くなら夜が肌に合ってたの。
それに光って目立つし流れを辿ってたらここにいた。歩いたのは路
地裏ばっかだけだね」

なるほど。流石は竜といふべきか、本能的に危険を回避する能力が
高い。けれど一度来たのがあるなら話は早い。

「で、今日はどこまで逃げるの?」

「うーん、実は数日はここで情報を集めたいんだよ。ほら、ひいろに隠
れて動くなら逃亡先はしつかり吟味したいだろ」

詭弁だ。実際はただこの辺りが都合が良いだけだ。

「確かにそれは重要よね。私も協力する。じゃあ今日はこの街を探検
ね!」

彼女も納得してくれた。話しぶりからして俺の話信じ切ってい
る。こいつ絶対騙されやすいタイプだぞ。彼女が騙されないよう俺
が気をつけないと。さて、まずは何しようか。この時間帯だと遊べる
場所は大体色々は開店している。

「行く先は決めてないの?ならこの辺りで気になるお店があるの」
「そうなのか?」

街を知らない彼女が?疑問を抱くが彼女が妙に自慢げだったから
面白そうなので案内してもらう。曰く目的地は以前街に訪れた際に

見かけ、同年代の若者が激しい音と光を放つ場所に入ったらしく訪れてみたかったそう。更に数分大通りを進みニエは足を止めた。

「着いた。一応聞くけど危くないよね？」

「ああ、寧ろ丁度行こうとしてたところだ」

中に入ると喧騒とした音が耳に入る。奥の方ではアーケードゲームや音楽ゲームの筐体が並び、入り口付近にはクレーンゲームが置いてある。つまり、よくあるゲームセンターである。俺は映画同様たまたまに友人達に誘われる程度なのでそこまで詳しくない。ニエは物珍しげに辺りを見回して色々見ているが実は俺も密かに期待していた。

「筐体の配置また変わってるな。バージョンも上がってるし俺も事が済んだら通ってみるかな」

最新のゲーム機を見ていたら俺も1つ遊びたくなってきた。折角来たのだし、金もあるなら遊ぶしかない。興味津々とばかりにあちこち歩き回るニエを引き留めて適当なゲームをプレイする。

「おすすめはあるの？」

「うーん、定番はクレーンゲームと音ゲーだな。後は……いや、それで全部だ」

「じゃあ全部で遊びましょう。近いしまずはクレーンゲームをするわ！」

「逃亡の為に手元に残らないお菓子類だけにしてくれよ……って無視かよ」

彼女は乗り気なようで早速クレーンゲームに足を向けた。そしてニエは小銭を入れてボタンを押してアームを操作する。小さなぬいぐるみが景品として置かれたケースに狙いを定め、ボタンを離すとアームがゆっくりと降りていく。そして見事獲物を捉えた。しかし

アームの位置が悪く持ち上がる途中でぬいぐるみが落下した。

「むう〜！取れないわ！もう少し右に動かしたら……」

「でもいい筋だな。数回もすれば取れそうだ」

2人がかりだが中々取ることが出来ない。俺もやってみたが結果は惨敗。元々こういうものは苦手だ。ニエは諦めず何度も挑戦し、500円使い切る頃にやっと取ることができた。

「やった！取れた！これで私の勝ちね!!」

「おお、結構短時間で取れる物なんだな」

「ふふん！この子は私の親友の代わりだからね。特別製なのだ！大切にしないとね！……えへへ、ありがとね。ユウト君のお陰で親友と会えた気がするの。あの子の分まで大事にするね」

「そっか。良かったな」

笑顔で抱きしめる彼女に少し照れくさくなりながらも頭を撫でた。すると彼女は嬉しさのあまり更に強く抱きついてくる。ちよつと苦しいけど、でも我慢しよう。そしてニエは手に入れた子を大切に抱えながら次の音ゲーに向かった。

音ゲーはゲームセンターのゲームでは俺もよくやるけどニエは初見で難なくこなした。音感が良いようだ。その後もダンスゲームもやって、ニエは俺より上手かった。これは腕前の上手い下手というよりニエと自身との体力差であるだろう。冗談じゃなく俺が1曲踊る労力で3曲全部を踊り切るような華麗な舞である。

「はあ……はあ……ゴホツ。ニエ、お前凄いよ」

「はあ……はあ……ありがと。でも、私……このゲーム、向いてない……」

流石に疲れたのか肩で息をしながら俺にもたれかかっていた。俺

も正直かなりキツイ。普段使わない筋肉が悲鳴を上げているようだ。今日はこれで最後だから少し休んでから外に出よう。

「さて、次はどうする？もう見るものは無いだろ？」

そう言うとニエは黙って考え込む。そして何か思いついたのか口を開いた。

「ねえ、あの角にある箱に行きたい」

彼女が指さした方向には若い女性が数多く集まるゲーセンの区画、即ちプリクラのコーナーであった。

「入ってから時々アレに女の子のグループが入ってるから私達も平気なんじゃない」

……ああ、遂に気が付いてしまったか。

「あれか……。分かった行こう」

プリクラコーナーには当然女性客だらけの空間が広がっていた。特に若い女子が多い。恐らく中高生くらいだろうか。皆スマホ片手に楽しそうにはしゃいでいる。だから元男の俺はこの雰囲気はあまり好きでない。居心地の悪さを感じそそくさと移動して目的の機械に小銭を入れ適当に操作をしてから中に入る。ニエはキョロキョロと見回して不思議そうな顔をしている。俺も内部に入るのは初だがニエの前だから玄人ぶってみる。

『はい、ポーズを取ってね！』

お決まりの声と共に撮影が開始される。最初は戸惑っていたニエ

だったが、やがて慣れてきたようで自然な表情で撮影を楽しんでいた。その光景を後ろから見ていて、その無邪気さに思わず笑みが零れる。

それから数枚撮り終わると今度は落書きタイムだ。二工はペンを持つと何を書くか真剣に悩み始めた。……うーん、俺は写真なんて撮らないし文字も書かないんだよなあ。とりあえず二工に任せてみるかな。

「ふーん、じゃあ自由にさせてもらおうわ」

彼女は筐体の画面の案内を見つつ画像の加工をする。数分経って加工が済み完成したプリを2人で見てみるとぎこちない笑顔の「手下」と書かれた少女とその少女の腕にくっつくように可愛い顔の「二工」と書かれた少女がピースサインをしていた。

「うわ、俺の顔すげえ引き攣ってるな。こんな風に写るもんなのか」

「私は……うん、上手く出来たと思う」

2人の距離が近い。それに二工も俺も初めて撮ったにしては良い出来だと思う。そして出来上がった写真を眺めていると二工は満足気に微笑んでいた。

街に潜伏（お出かけ）する竜 その2

ゲームセンターでひとしきり遊び、昼食の後俺達は別の場所で遊ぶことにした。

「ここは……」

「映画館だよ」

上映中の映画の看板を見上げる彼女に俺は答える。ここならば学生でも入れるだろうと事前に候補に入れていた場所だ。中に入ると既に沢山人がいて賑やかにしていた。映画は定期的に友人に誘われるからまあまあ見ている。今上映している映画はいくつかある。どれにするかな……

「ねえ、これ見てみたいんだけどいいかしら？」

そうやって指差したのは『セイクリッドガール』というタイトルの映画だった。聞いた事の無いタイトルだが、何となく面白そうだなと感じた俺は了承しチケットを買う。

「えへへ、ありがとう！楽しみにしてるわね！」

彼女は嬉しそうに微笑んだ。

――

館内に入り、指定された座席に着く。そして暫くすると照明が落ち、スクリーンに映像が流れ始めた。

内容はよくあるファンタジー物。主人公の少女が悪と戦う話。隣では二エが目を輝かせながら食い入るように見つめている。

間にか映画は終わっていたらしい。腕は……無事だ。特に異常はない。そろそろと退席する中二工は腕を掴んで一向に立つ気配は無い。まだ余韻に浸っているのか、それとも他に何か理由があるのだろうか。

「おい、終わったけど。大丈夫か？」

肩を揺すって声を掛けるとようやく意識が戻ってきた。

「ええ、うん。……ってあつ！」

我に返って自分が何をしているかを自覚したようだ。そして恥ずかしかったようで顔を真っ赤にしている。けれど離そうとせずそのまま立ち上がり、映画館を出て少し離れた所にあるベンチに座り飲み物を飲みつつ休んでいた。話題は勿論先程の映画についてだ。あれだけ楽しそうな彼女を見たのは初めてだった。

そして今は落ち着いているが、映画が終わる前はまだ腕を離してくれない。平日昼間の公園だから人こそ少ないから俺もそのままにしているが道中では周りの微笑ましい視線が痛かった。けれど彼女は気にする様子も無く、むしろ嬉しそうにはしゃいでいた。

「……なあ、何でさっきから俺にくっついてるんだ。映画館では恥ずかしくさうだったのにどうしたんだ」

「別にいいじゃない。減るもんじゃやないでしょ。それにこうしていた方が安心できるのよ」

確かにその通りだけども……。俺は溜息を吐いて考える事を止めた。もう慣れてるし好きにさせておけばいいかな。諦観しながらコーヒーを飲むと、口の中に苦味と酸味が広がった。

さて、気が付けば予約した潜伏先のホテルへのチェックインにもちようどいい頃だ。ニエは名残惜しそうだがまだ時間はあるしまた今度遊ぼう。

夕食の後に駅から歩いて十数分、俺たちはその建物の前で立ち止まった。外観は普通のビジネスホテルだ。ナツメの事だしラブホでも予約したのかと不安視してたが、これはこれであいつらしくない。フロントで鍵を受けとり、エレベーターに乗って部屋へと向かう。中に入つて見るとそこはごく普通な造りの部屋だった。内装や家具の類は綺麗で、落ち着ける雰囲気だ。

「お、ベッドが広いな」

ダブルサイズの大きなベッドが部屋の真ん中に置かれている。これなら2人で寝ても大丈夫だろう。

うん、2人で寝ることができれば肝心のベッドが1つしかないからそうするしかないのだ。

「ねえ、ちよつとシャワー浴びたいんだけど使ってもいいかしら？」

「ああ、構わないよ」

「分かったわ。じゃあ……」

ニエは荷物を置くと風呂場の方へと向かっていった。そして一人になったホテルの一室でベッドに腰掛け頭を抱える。あの野郎、やりやがった。ラブホにぶち込めないなら普通のホテルでラブホ紛いな事が出来る部屋にぶち込みやがった。いやまあ俺もそういう展開を期待していいわけでもないから文句は言えないのだが、しかしだなあ……月を眺めながら思い悩む。

そんな風に悶々と考えていると扉が開きバスローブ姿の彼女が現れた。自分で生成した衣服らしく彼女らしい真っ赤な血に濡れたような色だ。

「お待たせ、次貴方の番よ」

「……おう、サンキュー」

バスルームに向かい、鍵を閉める。蛇口を捻り、頭から熱い湯を浴びる。

「(……ふう)」

ベッドの件は一先ず置いておこう。彼女とはもう一度寝た仲だ。今更気にする事態でもない。これでもう解決にしよう。問題はこれから2日後までだ。死なず、彼女を鳴葉駅前留めて救助を待つ。今日の反応を見る限り彼女は現代の生活に適応は可能だ。殺人癖を起こす兆候もない。このまま生活できれば……きっと俺は生き残れる。

「(……希望を抱いていいんだよな。あいつと離れば、助かる。二度と会わずに元の体へ戻るのに専念できる)」

蛇口を閉めシャワーを止める。頭の整理は着いた。後は体を拭いて……と、バスタオルがビショビショになっていた。別のタオルも全部濡れている。早速希望を抱いた途端不幸な目にあった。ついでのトイレトペーパーまで濡れている。仕方なくタオルを絞って使った……けど、そこで更にタオルの違和感に気が付いてしまった。

「このタオル、一枚だけ皺だらけ。……まさか、ニエ？」

……いや、考えすぎか。恐らく誰かが悪戯目的で置いたのだろう。俺は服を着て部屋に戻る。すると既に彼女はベッドに潜り込んで眠っていた。

「早えなお前。まあいいか、疲れたもんな。俺もそろそろ寝るか……」

電気を消して俺も布団に入る。ベッドは広く、隣には彼女がいる。彼女の体温が感じられる距離で横になっている。眠るまで少し話そう。

「おい、起きてるんだろう」

「レイトこそまだ寝ないの」

「俺はお前と違って寝付きが悪いんだよ。だからもう少し起きている」

「ふーん、そう」

「あの映画面白かったよな。特に主人公がヒロインを助けるところとか」

「……ああ、そう。あのラストシーンの……」

ここで彼女は言葉を止め部屋には静寂が戻る。しかし次第に荒い息遣いが俺のすぐ隣で聞こえる。

「どうしたんだ？ 具合でも悪いのか」

暗闇の中で目を凝らすと、ニエは顔を紅潮させながら自分の手を股間に持っていく、動かしていた。その様子は自慰行為そのもの。

「なっ!? お、おまえ何を……」

慌てて飛び起きた俺は彼女を止めようとするが、それより先に彼女の方から俺に抱きついてきた。そしてそのまま唇を奪われてしまう。

「んぐっ、うう！」

突然の出来事に頭が混乱する。必死になって引き剥がそうとする

が、力では敵わない。舌を入れられ口内を蹂躪される。

「ぷはあっ！いきなり何すんだ!!」

やっと解放されて怒鳴る。だが彼女は止まらない。今度は胸元に顔を埋めてくる。

「ごめん、実は昼間からずっと我慢してて……」

そう言ってニエは自分のバスローブを脱ぎ捨て裸になった。そして俺の上に跨がり馬乗りになる。

「ねえ、お願い……抱いて。これ以上はもう抑えられないの」

潤んだ瞳が俺を見つめる。彼女は暗闇でも分かるくらいに頬を赤く染め、興奮しているようだ。

「ちよ、待ってってーそんな急に言われても困るっていうか……それにここは普通のホテルだし、そういう事はやっぱり家に帰った方がいいんじゃないかなあと」

焦った俺は何とか言い訳をしてその場を逃れようと試みるが、無駄だった。彼女は俺の首筋に噛み付く。鋭い痛みが走り、血が流れる。傷口を舐められ、そこから全身に快樂が広がる。

「ふ、ふふふ、あはは、ヤバい、もう犯していい?」

今の彼女は完全に理性を失っている。犯される、本能的に悟った。

「……………いぞ、好きにしてくれ」

諦めた俺はそう言うのと両手を広げ彼女に身を委ねた。

「ありがとう、じゃあ遠慮なく使うわね」

彼女は嬉しそうな表情を浮かべると俺の服に手をかけ脱がしていく。抵抗しないでされるがままにされていると、いつの間にか全裸になっていた。続いて彼女もバスローブを取り去り生まれたままの姿になる。月明かりに照らされた彼女の体は美しく、艶めかしくて思わず見惚れてしまった。

そんな俺の視線に気付いたのか彼女は微笑む。ああ、今日は眠れないな。

それから彼女は本能のままに俺を犯す。止まぬ嬌声と水音、肌のぶつかり合う音が暗闇の中に部屋中に響き渡る。気付けば俺達は互いの体液に塗れ、汗と愛液の匂いが充満していた。何度も絶頂を迎え、意識を失いそうになるがその都度激しい快感によって無理矢理覚醒させられる。しかし限界を迎えた彼女は俺の上で果て、同時に絞りカスとなった俺も汚れた布団の上で気絶した。

――

彼らは部屋の外について気が付かなかった。この階には全員で6人は居る。逆に言えばその6人以外の何人も存在しない。この階層は俺達の部屋を除きある1人によって買収されている。

ある1人が動く。俺達の部屋の扉を開けた途端に余りに濃い体液の臭いに咳込んだ。

「うっ、けほっけほっ……ああ、くっさい匂い♡こんなに乱れちゃって

……全く愛おしいですね」

その人物はスマホを取り出し緋刃の寝顔を何枚も角度を変えて何枚か写真を撮る。黎人の写真も少し撮ってはいたが緋刃と比べれば遥かに少ない。

「ふふふ、これでよしっと。黎人さんも女の子同時で盛っちゃうなんて。まだ男の子なんですね」

そう呟いた後、彼女は静かに立ち去った。

「メイド、そろそろ帰りますよ」

「承知しました。ひいろ様、蕾から連絡です。『勝手な行動は止めてくれ。作戦が失敗したら君も辛い筈だ』だそうです」

ある者はひいろと連れれのメイド、このホテルの部屋を予約した本人だ。

そして要件を済ませたひいろはホテルを去る。この階層の者が2人減った。

そして残りの二名はというと……

「人と竜の混種とは彼のことか。巫女の言った通りだ。彼らは我らに似た人外だな……ってお主何赤くなっておる」

「だ、だだだだって目の前で、しかも女の子同士ですよ！」

「性交ごときで騒ぎ立てるな。見えぬとて大声だと肝が冷える。さ、顔も見たし帰るぞ」

彼らはそう言うのとホテルの外壁から手を放す。そして高層のホテル

ルから身一つで飛び降りた。

実家に帰省

朝日と同時に起床する。目覚めて一番窓を開き空気を入れ替える。昨日の一連で空気が臭いに最悪だ。新鮮な空気を肺いっぱい吸い込んで深呼吸する。街の汚れた空気でも少しスッキリする。

ベッドではまだ二工は寝ている。彼女との夜の持久戦は勢いだけは向こうに軍配が上がった。だが余程発情していたのか絶頂の回数は彼女が多い気がする。その代わりこっちは何度も気絶して、その度に無理やりまた犯され続けたのだが。というか2回目まで果てるまでしていたのか俺達。いい加減学習しないと。

さて、彼女が起きる前にメールチェック。蕾さんから今俺達が泊まるホテルをまた予約してくれたらしい。今夜は極上の部屋を用意してくれたそう。今日こそはやつと2人別のベッドで寝れるぞ。本当に蕾さん様々だな。ひいろからは夜の俺達の写真が送られてきた。写り方から考えるにこれは部屋の中からだそうだが……不法侵入すら気づかないなんてどれだけ疲れてたのだろう。

「……………でもこの写真、何かおかしいような……………気のせいかな」

「……………ふう、ふああ。レイト、おあよう」

写真を見ていると彼女が起きた。

俺達はシャワーを浴びた後にホテルの朝食を二人で食べる。今朝の蕾さんのメール曰く俺達の泊ったホテルは偶然ひいろの会社「水竜コーポレーション」の傘下らしく施設はビジネスホテルにしては豪華だ。朝食は和洋折衷のバイキングであり多種の料理の二工は目を輝かせていた。余程おいしかったのか全部を皿に盛り、速攻で食べてまた並ぶを繰り返していた。相変わらずおいしそうに物を食べる少女だ。

「レイト、今日の予定だけど私に考えがあるの」

「へー今日も一任かと思つてたけどちやんと考えてたんだな」

「う、一応考えてるわよ。あとレイトに任せると遊んでばかりでずつとここに居そうだから私がやらないと」

実際そのつもりだった。逃亡から目を逸らすのに必死で逆に逃亡を意識させてしまったのか。だが見抜かれてしまった以上今日の行動は彼女に任せよう。

「そうね、まずは逃亡先を調べる。次に移動手段ね。どこかい場所ある？」

この質問は慎重に答えなければならぬ。今日出発されると救出が更に長期化する。だが下手に出て鳴葉にとどまる正当性を示せず俺達は鳴葉を立つことになってしまう。しかも彼女はその気になれば徒歩での長距離移動もできるのだ。2日以上鳴葉駅周辺から彼女を出さず、尚且つ逃亡を求める彼女を納得させる理由がどこかにあるだろうか。

「すまん、ちよつとトイレ行つてくる」

俺は席を立ち、スマホを取り出し蕾さんにメールを送る。そして彼女に相談を求め、意外な答えが返ってきた。席に戻りまたおかわりに行ってきたらしい彼女も前で俺はスマホを見せた。

「街を去る前にここに行きたいんだけど、どうかな」

――

電車に乗りひいろの屋敷の近くを更に進んで終点駅へ。それからバスに乗り数十分揺られ更に徒歩で数分歩くとそこは山の中の住宅街だ。遥か昔の再開発に乗り遅れ、周囲から孤立したこの団地こそ俺

が大学以前に住んでいた実家の団地だ。無論不便この上ないが愛着があり風景だけなら気に入っている。

現在時刻は午前11時、田舎の昼間特有の人気の無い住宅街を少女2人で歩む。歩いている途中ニエは坂が歩きづらいと軽装に服を変えていた。普段のフリフリした恰好から多少機動性を重視したホットパンツと汗ばんだ丈の短いTシャツは煽情的よりもランドセルが似合いそうだ。勿論黙っておく。

「こんな所に家ねえ。生きていて不便そうね」

「実際不便だ。小さなスーパーとコンビニ以外この辺り無いからり大
学一番だったな。それも今日で最後だけど。さて、着いたぞ。ここが
俺の家だ」

俺の家は本来は特筆すべき所は無い一般的な一軒家だ。だから田舎のここだと周囲より新しく見た目が少し浮いている。ここには共働きの両親が暮らしていて昼間のこの時間帯なら留守にしているだろう。家の合鍵を取り玄関の鍵穴に差し込み捻るとカチャリ、扉は開いた。部屋の中には気配は無く両親の靴もしっかり無くなっている。

「よし、誰もいないな。入るか」

「うん」

靴を脱ぎ廊下にかかる。電気をつけリビングに入るとそこには生活感溢れる家具が置いてあり懐かしさを感じた。全体的に生活感のある部屋は俺が去る前とあまり変わらなない。ただ部屋の隅に置いてある見慣れない段ボール箱が気になった。中身が何か確認しようと開けてみると仕送りの筈の食品だった。有難いけどきつとこの住所に送られる事は無いのだろう。

時間的にはもうお昼が近い。キッチンの方には母さんが使ったと思われる調理器具が置かれ洗い物が乾かされている。冷蔵庫を開けると料理や十分な食材も入っている。両親には悪いけど書置きだけ

して頂くことにした。

冷蔵庫に残された余り物を温め大きなテーブルで二人で食べる。味は自分の何倍も美味しい。懐かしさの補正もきつとある、だが体が治るまではもう食べられないと考えると少し寂しさを感じる。まあ、またきつと解決するだろう。

「お昼の後はどうするの？ここで何か物資補給をするか」

「んー、そうだな。やることも無いし明日からの逃亡先を探しながら昼寝だな」

そう言うとな彼女は不満げそうに頬を膨らませる。

「そんな呑気で大丈夫なの？レイトが逃亡の前に最後に行きたいからって態々電車までに使ってここに来たのよ。次のバスで駅に戻らないと日が暮れちゃうわ」

「知ってる。でもな、その次のバスが17時、3時間後だ」

「……え？」

「だから時間だけはあー」それをもつと早く言いなさいよおおおおおおお！」

俺の実家は交通の便がかなり悪い場所にある。電車の終点の山際から更にバスが必要な場所だ。熊や鹿は当たり前、徒歩の範囲で廃墟もあるレベルのド田舎だ。

しかもここから最寄り駅まで向かうバスのルートは巡回の都合上行きの2倍近くの時間を必要とする。つまり最低最寄り駅だけでも1時間はかかる。加えて乗り換えの電車も終点まで来るのは1時間に1本だ。走るのも不可能に近い。つまり、どうあがいても鳴葉駅に着くころには夜7時までかかる。

「だったら走ればいいでしょ！ひろの家の森だって一瞬だったじゃないの！」

「じゃあ街の方角を指差して」

「やってやろうじゃないの！えっと、あつちがバス停で駅は……あれ？どつち？」

計算通りだ。山道の複雑な道で彼女の方向感覚は失われている。しかもひいろの家の森とは違い1本道でもないから土地勘のない彼女に駅前まで走破するのは難しいだろう。

「あああああ！これじゃあ電車に乗ったらもう夜じゃない！どうしてくれるのこのバカア！」

「すまん。俺もここまでとは思わなかったんだ。とりあえず親は絶対に来ないから時間までは落ちついて過ごそう」

それから食事を終え、俺はニエにバシバシと背中を叩かれながら食器を洗った。

時間は流れ午後1時、俺達は個人的に気になっていた自分の部屋でのんびりと過ごしていた。

俺の部屋は2階に位置し最後の記憶では空になっていた。部屋に入ると布団の敷いていない俺のベッドが置かれていた。使われてはいるらしくクローゼットとダンスには季節外れの服が詰められて、窓際には洗濯物が干されている。それにガラクタが増える所から総合的に判断するに部屋として使えるように物置として使われている。

それでも俺にとつては落ち着く場所であり、彼女もまた一緒にいてくれた。彼女もあれだけ騒いでおいてリラックスしているように空のベッドに寝っ転がって俺が実家に残してきた漫画を読む。布団が無いから痛そうだ。

「ここにレイトがいたのね。まだ匂いがする」

ニエはクンクンと犬のように俺の使っていたベッドの匂いを嗅ぐ。

そんなに匂うのか？俺には使い慣れたベッドの木の匂いしかしない。そう簡単に俺の匂いに移り、残る物だろうか。だけど俺にはいつものベッドだが彼女が言うのならきつとそうなのだろう。

「俺の部屋だし当たり前だろ」

すると彼女は本を置き横向きに丸くなった。そして動かずぼーつと窓の外を見ている。顔が見えないから本当にぼーつとしているのか、またなにか試行しているのだろうか。

「ねえレイト、何でこの家に来たの？」

今度は転がって仰向けになりながら聞いてきた。何故、と言われても始めの目的にこれ以上となく一致していた以外は特に理由はない。他の理由を言うならば実家だからだろうか。

「実家。生まれた場所がそんなに大切なの？」

「そりゃあ大切だよ。親父やお袋もいるし、思い出もある。それに俺が育った家だ。大切に決まってる」

まるで理解できないと不思議そうにそう聞く。逆に竜に望郷の念は無いのか、彼女に問う。

「無いよ。だってそんな物に縋っても明日に死ぬならどうでもいいでしょう？」

口調こそいつもの調子だが言葉は冷淡だ。明日死ぬのであればその瞬間まで自分の好きなことをしたいと思うのは自然で俺も理解できる。それに彼女はついこの間までは竜として自然の中で生きた身だ。人の社会で暮らすことに慣れず、ましてや人間とは価値観が違う。それは仕方のないことだ。ただ俺はそれが少し寂しく感じられ

た。

「でもきつと安心できる所なんでしようね」

「……え？」

不意の言葉だった。彼女の声色は先ほどと違い優しく温かいもので普段とのギャップに対応が遅れた。

「レイトって心が落ち着くと角と尻尾の色が濃くなるの知らなかった？」

「マジで？」

初めて知った事実である。自分の角は位置的に見にくいので知らなかった。俺の反応を見たニエはクスツと笑い、「ほらやっぱり知らないんだ」と言う。

「本当だよ。今も少しだけ白い」

彼女はベッドから降り俺の角をツンツンと突つつく。白い髪と一緒にプルプル揺れる角は確かに白濁している。普段よりも色味が増している気がした。透明な袋に無限に似て非なる白の絵の具を混ぜたようで、僅かな粘性が屈折を生みどこか神秘的だ。

「レイトって普段ここでどんな生活してたの？」

彼女は興味津々といった様子で聞いてくる。

「普通に学校行って、友達と遊んで、飯食ったり勉強したり、寝たりかな」

「ふうん。楽しかった？」

「まあそれなりに」

実際そこまで楽しい日々ではなかったけど、彼女には言わなかった。

それから質問攻めが続き、俺も答えられる範囲で答える。俺の日常について聞かれるのは初めての経験なので新鮮で、なんだか照れ臭かった。

「でも俺も今は竜の体だ。もうあの頃には戻れない」

そこまで言って俺は言葉を詰まらせる。

「……ふーん」

ニエは何とも言えない表情を浮かべていた。分かっていた事とはいえ実際に口に出すのは難しいものだ。俺達は今、互いに違う種族なのだから。

しばらく沈黙が続いた。

唐突にニエはベッドから起き上がり俺の頭を撫でた。そして優しい声でこう言ったのだ。

「大丈夫だよ。私がいるじゃない」

その言葉で俺の心の中の何か溶けていくような感覚を覚えた。彼女の手から伝わる温もりが心地よい。

「じゃあさ、これからいっぱい思い出作ろうよ。私は人の戻るまでずっといるし、それまで二人で色んなことしよう」

彼女は嬉しそうに笑いながら再びベッドに寝転ぶ。俺は苦しくも会話を絶やさない為に肯定した。そのまましばらく二人で会話をする。だが次第にウトウトとしてきて会話も途切れ途切れになり遂に寝落ちした。

「すう……すう……」

安心して眠る彼女はいつ見ても可愛らしい。凜々しさも欠片もない、幼いだけの彼女を見ると本当に人など殺すのかと時々疑う。だけど、これだけは言える。彼女はきつといつかから心は幼いままなのだろう。生まれに執着せず、望郷すらも知らず、ただ彷徨い殺し生きていく。どうして健全でまともな精神が育つだろうか。

……いや、彼女はまともなのだろう。理屈ではない。俺がそう思わなければ彼女は狂った化け物なのだ。

さて、もういいだろう。今の内に二エを連れて家から出ていこう。彼女を背負い俺は家を去る。バス停まで歩きバスに乗り、さらに電車に乗り換えて鳴葉駅にあと数駅までになって二エは起きた。現在時刻午後7時、当然夜だ。

「ふあゝ、おはようレイト。よく眠れた？」

「ああ、おかげさまで。そろそろ着くぞ」

「え？どこに行くの？」

「鳴葉駅前、今日はまたホテルだ」

「え？なんで？私達まだ何もやって無いよね?！」

「もう夜だ、諦めろ」

「むー」

俺達は駅で降り鳴葉駅に着いた。夜の街、というには早すぎるが日が暮れてなお賑やかだ。今日のホテル今朝の段階で昨日と同じ場所で蕾さんに頼んで予約してもらった。黒姫ではないから今日は安心して眠れる。

今夜を越せばあと1日、それを耐え切れれば俺は生き残れる。頭の中で希望を描きながら俺は駅前の道路で信号が変わるのを待つ。けど何故だろう……妙な胸騒ぎがする。調子のいいときに限って惨事

が起きるといふのはよくある話だ。

「レイト、信号変わったわよ」

「お、うん」

横断歩道を渡り終える頃には嫌な予感が消えていた。気のせいだったのか……それとも……

瞬間、後方で破壊音。振り返るとそこには巨大なトラックが乗用車に衝突しており、その衝撃で折れ曲がっている車体からは火花が散り、辺りは騒然としていた。俺も体に響く凄まじい爆発に思わず本能的にかがみ込む。

「レイト！危ない!!」

声に反応し、咄嗟に身体を横に逸らすと、目の前に鉄塊が飛んできた。

「うおっ!?!」

間一髪で避けたが、もし反応が遅れていれば確実に死んでいただろう。しかし、これはどういう事だ。いや事故に原因もクソもありはしない、何故こんな時に事故が起こるんだ。幸運なのは最低限自分の命は助かったことだ。

「つぶねえな。本当にここ最近よく死ぬな俺」

「……」

しかし気づいていなかった。俺の予感していた嫌な予感とは寧ろ今から起こる事なのだ。見失ったホテルへの道を探す俺の視界の端で動く影があつたのだ。二エだ。

「二エ……？..」

「……………」

「二エ！」

俺は彼女の手を掴み引き止めようとする。だが顔もむけずに手を振り払われて叶わなかった。

彼女はふらふらと大破し動かない車に近づき、中を覗き込む。すると人前にも関わらず両刃剣を出しエンジン部に剣を差し込んだ。轟音が鳴り響き爆発が起きると車は炎上しながら横転した。周囲の人々は悲鳴を上げながら逃げ惑う。

その禍中の中、ただ一人場違いな絶叫が炎の中から響いた。それは悲鳴ではなく、間違いなく二エの歓喜の声であつた。

そして、俺は炎の中に彼女の名前を全力で叫ぶ。今すぐ彼女を引き留めなければ……………

「二エ！」

瞬間、駅前は一面赤に包まれた。

餐龍の緋の刃

惚けた目で餐龍は剣を抜く。そして帰宅ラツシユの駅前の人だかりに突入し、目に見える全てを無数の肉塊に変えていく。人知を超えた身体能力による接近は誰の目にも止まらず、ただ成すすべもなく血だまりが広がる。

「うわああああ！と、通り魔だああ！」

「キヤー！殺される！」

駅前は阿鼻叫喚の地獄絵図と化した。絶叫を聞いた無関係な群衆は蜘蛛の子を散らすようにあたりに逃げていく。当然だ、誰も無関係な物から殺されたいとは思わない。しかし情けない逃亡がかえって彼女に存在を知らせ、逃げる彼らにも目を付けた。

餐龍は自身の腹に剣を突き刺す。そして多量の出血と共に剣を振りぬいた。剣は血を帯び、固まって刀身を大きく伸ばし周囲のビルを一掃する。小爆発と共にビルは真ん中から斜めに切断された。そして崩れたビルの残骸は逃げようとした人々を巻き込んで道を塞いだ。

「ああ……ふふっ久しぶりね。この感覚……ふひっ」

彼女は傷口を抑えながら笑みを浮かべる。ああ、心地がいい。血を浴びせ、自身も血に汚れる様に自らの力ではどうにもならない高ぶりを感し、遂に決壊した。情けない声を上げて全身を震わせる。

「んう……はあ、はあ……はあ……いひっ、そうそう、この感覚が欲しかったのよ」

彼女の股間からはとめどなく体液が流れ出ていた。それは止まる

ことを知らず、勢いを増しながら太腿を伝い地面に血に混じって水たまりを広げていく。

「……でもまだ足りない……」

目の前の惨劇を眺めながら考え込む。そうしている間にも次の電車から降りた人々が駅からどんどん集まってくる。

「ああ、丁度いいタイミングね。あははははは！」

彼女は舌なめずりをしながら次の標的に検討をつける。そして折れた駅ビルの壁に突っ込んで衝突の直前に壁を切り裂き中に入る。休日ということもあり家族連れやカップルが多くいる。彼らは突然現れた血濡れの殺人鬼を見て悲鳴を上げるがすぐに切り刻まれた。

「さっきよりずっと多いじゃない！ひやはははは!!」

彼女は狂った笑いを上げながら人々を惨殺していく。あるのは熱い下半身を鎮めるといふ本能のみ。彼女は自身の欲を満たすためだけに殺戮を続ける。その姿はもはや人間ではなく獣だった。

「はあっ……はあっ……もう我慢できないっ!!犯したい!殺りたい!血が足りない!!」

彼女にとって一般人などいくら殺しても足りないほど価値のないゴミだった。しかしそれでも彼女は満足していた。彼女にとっては殺しの貴賤こそ、それ以上にゴミ以下だ。しかし、今の彼女には全く自覚は無い。ただ、心の赴くままに血に乾いた体を潤すのだ。

P r r r r r p r r r r r

「はあ……はあ……早く、早く、返信してくれ……」

俺は殺人の現場から逃げなかった。否、逃げられなかった。恐怖で足がすくんできてしまっていて動かなかったのだ。俺だってこんなことしたくない。でも体が動かないのだ。

血の海と化した駅前の方こうでは絶望と怨嗟の混じる声がある。時々する逃げ道を案内する声はおそらく警察だろう。だが、そんなこととは関係ない。今は一刻も早くこの状況から抜け出したいという気持ちしかなかった。

俺は震える手でスマホを操作し蕾さんにhelpのメールを惨状を映した写真を添付して送る。普段の彼女の返信速度ですら今は永遠にも感じる。

「お願いだから……誰か助けてくれ……」

今更何を願っても無駄だと分かっているでも願わずにはいられない。俺は膝を抱えて目を閉じていた。

俺が絶望したと同時に場違いな明るい電子音が鳴る。蕾さんからメールだ。俺は急いでメールを開いた。

『了解、緊急で待機させておいた水竜の特殊部隊を派遣する』

ただそれだけ書かれていた。しかしその一言だけで十分だった。

「ありがとうございます……」

俺は思わず涙ぐむ。これで助かるんだ……しかし、メールの続きで俺は更なる絶望に落ちた。

『ただし、到着まで1時間かかる。一応私と恐らく狐共が出るからそれまで持ちこたえろ』

「嘘だろ……」

つまりあと1時間はこの地獄を見続けなければならないということだ。

俺の心は既に折れかけていた。二エは何故暴走したんだ。原因は間違いなくあの車両事故だ。車が壊れたあの瞬間に彼女はおかしくなった。もしかして運転手が死んだから？そんなふざけた理由なのだろうか。仮にそうだとしても何も知らない無関係な人間を殺すなんて間違ってる。そう思ったかった。だが現実是非情である。彼女は突如豹変していきなり殺戮を始めたとしか考えられない。

「ああ……なんでこうなるんだよ……」

俺は何も悪くないはずだ。なのにどうして俺だけが苦しまないといけないんだ。理不尽すぎる運命を呪っていると再びメールが来た。

『追伸・もしお前が大怪我しても私は責任を取らないし、取るつもりもない。ただし死体は原型は保つてくれ。以上』

「……ふざっけんじゃねええ!!!」

俺は怒りに任せてスマホを投げ捨てようとスマホを持つ手を掲げる。しかし今は彼女の連絡こそが希望であり、逃したらそれこそおしまいなのだ。理不尽に怒れる心情を深呼吸で沈めて改めて冷静さを取り戻した。しかし今度は忘れていた絶望が更に勢いを増して重くのしかかる。

「もう嫌だ……全部夢なら覚めてくれ……」

「あの」

「ひっ!?!」

背後で声が出たので振り向くとそこには黒髪の少女がいた。彼女は18歳程度の若い女性で巫女服を着た変わった少女で血の海でも場違いな姿をしている。だがそれ以上に彼女には目を引く箇所がある。

「…………狐耳?」

そう、彼女の頭頂部からは狐のようなふさふさとした毛に覆われた獸耳が生えており、腰の下あたりからも尻尾が見える。彼女はまるで本物の狐を擬人化させたような見た目をしていた。

「私に着いて来て下さい」

「あ、待ってください!」

彼女は有無を言わず俺の手を引いて走り出す。

「ニエが、あそこに行っただんだ!」

「お知り合いですか!?!どこです?」

「駅の向こう側のビルだよ!ニエが見境なく人を殺してる!」

「!?! あなたのお知り合いが犯人ですか。そういえば先日…………」

彼女は一瞬驚いた表情を見せるがすぐに冷静さを取り戻す。そして少し考える素ぶりを見せてから口を開く。

「あなたの名前は?」

「黎人、洋野黎人です」

「では黎人さんに尋ねます。あなたも竜として彼女の討伐にご協力お願いします」

!?! 何で俺が竜だと知っているんだ。それに討伐とはどういう意味だ。嫌な予感が頭によぎり俺は協力の意図を問う。

「鳴葉の神として、この地の為に彼女を殺します」

彼女が次に狙う獲物を決めるべく辺りを見回すとちようどいいターゲットがいた。血を求め殺し回る内にかくの間にか建物を出てまだ人の残るオフィス街まで来ていたようだ。

彼女はそこにいたOL風の女性に目をつける。

女性はまだ事態を把握していないのか呆然と立ち尽くしていた。しかし彼女の姿を見て我に返ると必死になって逃げ出すが無論遅い。一瞬にして女性の背後へと回り込み首を掴む。

「ぐう!?は、離して「やだ」

言葉も待たず首を握り潰して殺した。そして全身に吹き出る血を浴びて快楽を得る。そして勢いが弱まると死体を投げ捨て再び歩き出す。その時、彼女は気付いた。先程から自分に向けられている視線があることを。

「誰?」

彼女は振り返るがそこには人影はない。だが確実にこちらを見る何かがある気配を感じる。その正体を探るため周囲に意識を向けると、それはあっさり見つかった。

「あら?あなたも遊びたいの?」

「お主の悪趣味に付き合うつもりはない。我は人を殺すなら一気にぶち壊したいからな」

彼女が目にしたのは1人の白髪の少女だ。年齢はおそらく12、3歳くらいだろう。それだけであれば特に気にする価値もないが彼女には只ならぬ気配を彼女から感じていた。それは見た目も例外でなく両足義足で狐の耳と尻尾が生えた全裸の、一糸纏わぬ姿だった。しかしその少女にはどこか人間離れた雰囲気があり、まるで神話に出てくるような神々しささえ感じる。

「ふーん。じゃあ遊んであげる」

彼女はそう言うのと両刃剣を出し斬りかかる。少女はそれを軽くかわすと右手を突き出してきた。すると少女の手から紫炎が出現し、彼女を包み込んだ。

「あっつー！」

「ふん、他愛ない」

彼女はその炎から逃れようと身を振らせるが、強力でなかなか消えず仕方なく彼女は竜の体に姿を変えた。

「ほう、それが本性というわけか」

「(……ええ、これで少しは楽しめるでしょう? 『神様』)」

「如何にも! 我は鳴葉の……」

餐龍は少女に飛びかかった。そして鋭い爪を振り下ろす。

「ふんっ」

少女は鼻を鳴らすとその攻撃を難なく受け止めた。そして拳を振り上げると餐龍の腹を殴る。しかし餐龍は拳を見切り回避する。

「ほう、流石は竜と言ったところか」

「ふふっ褒めてくれてありがとう。でもね、私はそんなじや倒せないよ)」

彼女は再び飛びかかり、今度は剣を振り回す。少女はそれらを捌きながら隙を見て反撃する。突き、弾き、掴み、殴り、だが一度も当たらない。互いに実力は均衡し激しい攻防が繰り広げられた。そしてしばらく打ち合いが続き、遂に謎の狐は体勢を崩した。

「なっ！」

「(今度こそ終わりね)」

餐龍はその好機を逃すまいと両手の武器を振り下ろす。刃は容赦なくその小さな体を引き裂き、血飛沫が上がる。胸を大きく斜めに一線、そしてのけ反る前に素早く肩を掴み心臓に剣を刺した。刃は狐の体を貫き、地面にまで達していた。

明らかに致命的な切り傷は相応に激しく出血し、バケツの水をかぶるが如く竜の体を温かく濡らす。と同時に餐龍が人の体に戻り下半身からも洪水のように水が噴出する。その液体は倒れた狐の彼女の顔面に全てかかり、加えて黄金色の液体も彼女の口に向かって綺麗に注がれた。

「んっ……ああ、漏らしちゃった。はあ、厄介なのと会っちゃった。けど神様の散り様ってのも案外人と変わらないのね」

彼女はそう呟いてその場を離れようとする。が、またもや背後から声が聞こえてきた。

「いやあ、中々面白いものを見せてもらったよ」

「!? あ、あんたは……」

振り向くとそこには2日前にひいろの家で顔を合わせたメイド、蕾の姿があった。街には場違いなメイド服であり化け物2人の前なのに目に見える武装は無い。彼女は餐龍を軽蔑の視線を向けていた。

嗚呼鮮血を振りまいて

振り向くとそこには2日前にひいろの家で顔を合わせたメイド、蕾の姿があった。街には場違いなメイド服であり化け物2人の前なのに目に見える武装は無い。彼女は餐龍を軽蔑の視線を向けていた。

「随分と派手に散らかしているみたいだ。短時間でのこの殺戮と君の性癖は賞賛に値する」

「……ふーん、ありがとう（武器も無しに私の前に現れた。やっぱり実力者だったわね）」

「で、今君に負けた狐を逃がしてはくれないか。色々と刺激のある匂いが刃に移るのは嫌だろう？」

餐龍は剣を振り刺さった狐を雑に振り飛ばした。狐は血だらけの地面に転がり蕾の目の前に転がる。蕾はその狐のボロボロの体を一瞥した。

「酷い有様だな。しかしその様子だとまだ動けそうだ。信仰が足りているなら友人を連れ帰ってくれ。彼女は獣ごときに殺されるのなら困るのだよ」

声をかけてしばらくは死体のように動くことはない。だがピクツと指先が動いてゆっくりと狐は立ち上がった。餐龍はあれだけの出血でまだ生きているのかと生命力に戦慄し後ずさる。

「う……ああ……濟まぬな。お主がここに居るのならば相当に重要なのだろう。いいぞ、あ奴にはお主がカタをつけると伝えておく……にしても口の中が酷い味だ。赤いの、何か飲ましたか？」

「さあ？」「知るか。早く去れ」

「そうか」

そう言い残し狐の彼女は去って行く。

「全く、どうしてもして私の知り合いは血潮が盛んな下賤連中ばかりなのだ。皆蛮行など止め私のように知性という物を理解してほしいものだ」

蕾は不機嫌そうな表情で愚痴をこぼす。一方、餐龍は警戒を解かずに彼女の出方を伺っていた。そもそも何故彼女がこんな場所にいる？ 狐はどうでもいい、蕾は絶対にあの体に何を隠しているのは確定だ。疑問は尽きないが今は戦闘に集中しなければならない。

「まあ良い。とりあえず君の相手をしようじゃないか。どうせ、まだ疼いて仕方がないのだろう？」

彼女はそう言って一歩近づく。それを合図に餐龍は剣を抜き一気に蕾との距離を詰めた。そして袈裟斬りを放ち胴体に当たった。しかし固い感覚を剣を通して伝わり、想定外の事態に距離を離す。

餐龍は驚きつつも冷静になり剣を構え直す。彼女の刃が弾かれるということは相当な装甲を体の内に仕込んでいる。しかし蕾の剣が当たった部分の服の破れた部分から見える肌は傷一つ付いていない。切った感覚はまるで鋼鉄のような硬さだったのに。それを見た餐龍は理解した。

「あんた、まさか竜でもないの!?!」

「竜だ、正し水竜コーポレーション特殊機動部隊技術担当のな」

その問いに対して彼女は不敵に笑みを浮かべるだけで何も答えなかった。それからしばらく睨み合いが続いた。互いに隙を探り合い相手の攻撃を見極めようとしている。

そして先に動いたのは餐龍の方であった。彼女は再び距離詰める。と今度は剣を横薙ぎにする。だがそれも避けられてしまう。それでも彼女は止まらない。立ち上がりまた攻撃を仕掛ける。何度も、何度

も、二つの刃が複雑に入り混じる連撃を繰り返す。そして遂に彼女の剣が蕾を捉え始めた。一撃、二撃、三撃、四撃と当たる回数が増えていく。

「ふっー！」

だが五発目の直前に逆に蕾の反撃を受ける。拳が腹部に当たり、蹴り飛ばされ、肘打ちを食らう。その度に口から胃液と血液が混ざったものを吐き出し、全身に痛みが走る。

「ぐっ……っ！」

このままではまずいと思い一旦間を取る。だが蕾は追撃を仕掛けてこなかった。ならばこのまま痛みを耐えながら最後に一撃、強打を叩き込んでやる。彼女はそう思い最後の力を込めて間合いを詰めた。

「はあ……愚直だな」

だがそれは悪手だった。彼女はため息をつくと左手を前に突き出して構えた。すると腕全体が幾つかに割れるように開き、その中から無数の弾丸が飛び出した。とっさに餐龍は両刃剣を回して弾き全てを防ぐ。

しかし防いだのも束の間

「捉えた」

変形し終えた右手が彼女を襲う。接近の間合いのせいで避けようとするも間に合わず、刃が肩口に突き刺さった。無数の小さな刃に刺さり回転しながら肉と骨を削る。血肉全てが汚く入り混じりさつきまで体だった物が飛散して、そしてそのまま振り抜かれた。餐龍は地面に倒れ込み、川一つで繋がった自分の体が壊れる音を聞きながらも

意識を保っていた。

「こんな低俗な竜に使うつもりではなかったのだが……まあ、成果は良しとしよう」

「(何、あの体……)」

今の蕾の体には明らかに人の物ではない異物が両手についている。左には散弾銃、右腕にはチェーンソー。黎人の家で見た物の中で見た気がする。

しかもどちらか人を殺す用途の為に仕込まれた物である。そんな物を体の内部に仕込んでいた。初めから只者ではないと知っていたが、それでもまさかこんな物を仕込んでいるとは思いつかなかった。

「さて、そろそろ発散できたであろう。君を待つ者が家にいる。私も汚れ仕事には長く就きたくないのだよ」

そう言うと彼女は倒れた餐龍を担ぎ上げた。薄れゆく意識の中、餐龍は未だ絶えずに煮えたぎる欲望に今だ苦しんでいた。

「しかし君は変態的な趣味を持つのだな。分かるよ、異様な物に欲情してしまうのは辛い物だよな」

「……………」

「……遂に喋れなくなつたか。まあ、そちらの方が都合がいい」

「……いいや、寧ろ滾ってきた」

「え?」

「もっと、酷く、痛めつけて……」

そう言った瞬間、彼女の顔つきが変わった。そして次の瞬間、彼女は餐龍を思いつきり投げ飛ばした。

「何を言っているんだこの馬鹿者は。既に満身創痍なのに未だ果てな

いのか」

「(お願い……………あと少し……………)」

蕾は両腕を構えると、そこから大量の銃弾を撃ち出した。それらは地面に当たると同時に爆発を起こし、爆風と共に土煙を巻き上げる。

「(ああ……………美しい……………)」

「……………全く面倒臭い奴だ」

蕾は再び攻撃を開始する。今度は先程よりも更に強力な攻撃を。爆炎の中から現れた彼女の右足から鋭い刃物が現れ、それが彼女の体を貫いた。

「(散る様が……………潰える様が……………)」

彼女は口元を歪ませ、そしてその刃を振り抜いた。すると彼女の体は大きく吹き飛ばされ、近くの木に衝突した。

「(……………ありがとう……………これで私は……………)」

「ふん、本当に気持ち悪い女だ。前言撤回、やはり君というのは理解に苦しむ生き物だ」

「別に、それでいいじゃない」

彼女がゆつくりと起き上がる。その表情からは苦痛を感じられない。それどころか笑みすら浮かべている。しかしその笑みはあまりに穏やかで蕾に嵐の前の静けさのような物を予感させる。一体何を隠している、警戒する彼女を尻目に餐龍は突如全身から大きく出血した。

「……………！」

彼女の体を見て蕾は思わず息を呑む。何故ならそこには今まで見てきたどんな生物にも当て嵌まらないような異形の姿があったからだ。自らに幾度も剣を刺し、さつきとは打って変わって無表情で自傷する様は別の意味でのおぞましさを感じる。その姿はまるで祀り上げられた贄である。

数分の自傷の後、段々と出血の勢いが落ちる。ついに全身の血液が尽きてきたのだ。顔色も悪く、よく見ると手も震えている。だがそれでもなお彼女は笑っていた。

そして遂にその時が来た。餐龍は剣を持つ力も力も無くなり倒れ込んだ。

「あ……………うあ……………つ……………」

「……………」

「……………死んだのか？」

蕾は倒れた竜に近づきそつと手を伸ばし脈を測る。すると触るまでもなく彼女の腕には温もりが無かった。どうやら完全に事切れてしまったらしい。蕾は竜の死体を見つめ、何故か不思議とこの状況に笑いがこみ上げてくる。

「は、ははは、まさかあの餐龍という者の最後が自殺だなんて。あつはつは！傑作じゃないか！自分の排泄の後処理もできぬ愚か者には相応しい末路だよ全く！」

しかし彼女は笑ってはいたが内心では動揺していた。何故なら彼女にとってこの結末は予想外だったからである。確かに彼女は自身に拷問紛いの事を行い、最終的に死に追いやった。それは紛れもない事実であり、今更覆すことは出来ない。

だが意味もなく死んだのだろうか。もしそうだとしたら、彼女はた

だ無意味な命を奪った事になるのではないか？そんな考えが頭を過ると、途端に不安になってくる。

「……………まだだ」

すると彼女の予感の通り餐龍の指がぴくつと動く。

「まだ、これからよ……………これで、私は至れるんだ……………」

そう言っただけで彼女はふらふらと再び立ち上がる。

「チツまだ起き上がるか。これではひいろへの土産にならないな。済まないがもう一度倒れてくれないか」

彼女は左腕の銃を構えて攻撃しようとする。しかし…………

「はっ?」

「こ、殺すって……………」

目の前の狐の少女は今確かに二エを殺すと言った。

「鳴葉に仇名す者は居てはいけません。だから何としてでも彼女は止めるべきなのです」

「で、でも、殺すのはやり過ぎじゃないか!?!」

「私も交渉が可能であればそうします。ですが私には今の彼女に話が通じるとは思えません」

「ッ……………!」

彼女の意見はごもつともだ。第一俺が止めようとした時点で二エは既に冷静さを欠いていた。そして殺人衝動のままに彼女は理性を失った。だから俺だってたまたま生き残っていただけで本来は無残に殺された彼らと同じように死ぬ筈だったのだ。

「……分かった。誰だか知らないけど一応俺だから協力はする。ただ戦えないから戦力にはならないぞ」

すると狐の彼女は意外そうに眼を見開いて驚き、残念そうにそうですか、と呟く。

「戦えないのを知らずに無理強いしてごめんなさい」

「俺も先に伝えられなくてごめん」

「あなたに責任はありません。だから私が安全な場所まで案内します。死んでいった彼らに代わりにあなただけでも生き延びて下さい」

彼女は俺の手を引き二エが去った方と真逆に連れて行く。彼女は武器も持たず、俺よりも小さな少女である。なのに不思議と身を任せとてもいいような女神のような安心感がする。きっと彼女に着いていけばここから逃れられるのだ。ならばお礼を言わないと……

「俺を二エの場所まで案内してくれ！」

口を衝いて出た言葉は自身にとってもおかしな言葉であった。

「二エが暴れだしたのは元はと言えば俺のせいでもある。こんな時間に連れ出して、いや脱走を無理矢理にでも止めなかった時点で俺は有罪だ」

自分でも理解できない。彼女には無理矢理連れ出されたし、この時間ここに来なければ明日に来るはずだった救助に影響が出ると考

えていたのだ。

「だから、俺が二エの面倒を最後まで見るべきだなんだ。ここで逃げ出したら死んでいった人も救われないし、やったことの責任は身勝手だけれどもとらないと絶対に後悔する」

狐の彼女に着いていけばきつと生き残れる。だからこの場に留まる必要もない。第一二エは偶然の交通事故後のせいで暴走したのだから責任を感じる必要もない。

「それに、俺も何で二エがああなったのかこの目で確かめたいんだ！ たった5日、一週間にもならない短い時間だけど、俺は二エを知らないといけないんだよ！お願いだ！」

俺は彼女の手を振り払い、頭を下げる。狐の彼女は困惑ししばらく黙ってこちらを見ていた。

「頭を上げてください」

「……っは!? な、なーんちゃって。早く安全な場所へ逃げましょう」

「……………黎人さん」

「な、何ですか？」

「無惨に死ぬ覚悟はお有りですか？」

狐の彼女の空気が一変した。それはまるで俺の死期を告げる死神の声のように感じた。

しかし、

「おう焔火、無関係な者は殺すべきでないぞ」

突如現れたもう一人の狐の少女が現れ、彼女の様子も元に戻る。

「鳴葉さん!?!もしかしてもう終わったんですか?」

今までの狐の彼女は燐火、そして突然現れた白い狐の彼女は鳴葉というらしく会話的に知り合いみたいだ。鳴葉は狐耳に巫女服と燐火と似ているが髪色が白く、足が義足である。戦闘後のようで酷い怪我で全身が血に濡れている。

「いいや、死にかけてたから逃げてきた。代わりにアレと蕾の奴が知り合いだったから任せてきた」

……蕾さんがここに来ているのか!?!メールの内容には確かに此処に来ると書かれていた。そして、狐もここに来るとも。もしかして彼女は蕾さんの知り合いなのか。

「そうだ。してこちらからも忠告する。お主、あの竜の知り合いと申したか。ならば相応の覚悟をしておけ。アレはもう理性の欠片もなただの猛獣ぞ。燐火の言葉の通り無惨に死ぬ覚悟で迎えに行け」
「うむ、では我らは行くぞ」

そう言つて二人は俺に背を向ける。

「我らに会いたくば鳴葉の社へと参れ。じゃ、達者でな」

彼女らはそれを最後に夜の闇に姿を消した。

「……誰だったんだ、あいつら」

だけど、これで二エの下に向かう覚悟が出来た。一度深呼吸し二エ

がいる場所へと走り出す。

「ニエ……待ってるよー！」

既に何人もの人が殺され、ビル街の道の真ん中には死体は山積みになっていく。えづくような鉄臭さの街を駆け抜け、ニエが居るのである方へ一心不乱に走り抜ける。途中何度も吐きそうになるが必死に耐え、ニエを探し続けた。

「ニエエエ!!」

声を上げて叫ぶが返事はない。だがその変わりに聞こえたのは何かが壊れる音と悲鳴。間違いなくニエが人を襲っている証拠だ。

「ニエエ!!どこだアア！」

ニエの姿を探して街を走り回るが、どこにもいない。ニエは一体何処にいるんだ？その時だった。横から凄まじい爆発音が鳴る。咄嗟に伏せると爆風が吹き荒れ、瓦礫の破片が飛んできた。

「クソッ！なんなん……だ……」

奇跡とはある、そう思った。俺は見てしまったのだ。音速を超え、飛来する物体を。それは人の頭ほどの大きさがあり、弾丸のような速度で飛ぶ。だけど何故だろう、俺は彼女と目が合った。

「……………あ」

つい数日前に出会い、ひいろにも上から目線で誰にでも高慢だった、蕾さんの生首と目線が合ってしまった。

「……ああああああ!?!」

あまりの恐怖に腰が抜けた俺は地面に座り込む。そして、蕾さんの首が俺の目の前に転がり落ちた。

「いやあああああ!?!」

俺は絶叫し、その場から離れようと走る。しかし、一步踏み出した瞬間、背後から小さく俺を呼ぶ声がした。

「レイト」

振り返った先にいたのは、俺が知っている姿より少し成長した二エがいた。年齢は18歳程度だろうか。出る所は出て細い所はすらりと細い。赤髪は白に変色し服も白のドレスとなっている。全体から醸し出す雰囲気も年齢以上に妖艶で見る者の心を奪うだろう。しかしそれ以上に目を引くのは血に交じり全身から流れ出る白濁した液体だ。

「二エ、お前どうして」

言い切る前に彼女は俺を地面に叩きつける。背中を強く打ち付け息が出来なくなる。

「グフウウウツ!!!」

俺の上に馬乗りになった彼女の表情は、とても嬉々として笑みを浮かべていた。

「やっと会えたね。会いたかったよ」

俺の頬に手を当てて顔を近づける。

「ねえレイト、やっぱりあなたじゃないと駄目みたい」

耳元で囁くように喋りかける。

「あなたには死んでもらわ」

15 白濁に溺れ彼は死す

「なっ!？」

死んでもらうだつて？俺は耳を疑った。彼女といる限りいつかは殺されるのではないかとずっと考えていたがいざ宣言されると困惑する。それも馬乗りで一方的になる状況でだ。どうあがいても死刑宣告である。

「やめ、やめて、くれ」

「だーめ、かぶっ」

ニエは俺の首を歯を立てて噛みついた。歯が肌を千切り流血し、溢れ出た血が俺の首元を赤く染める。彼女は愛おしく血を吸い、血が止まるとまた噛んでは吸つてを繰り返す。

「痛ッー!」

俺がニエを引き剥がそうと叩き、殴りつけ、罵倒するがびくともしない。それどころか更に強くなっていく。腰に滴り落ちる粘液も激しく噴出する。俺はその痛みに耐えられず叫ぶしかなかった。

「んもーあんまり痛いと私もやり返しちゃうわよ」

すると彼女は口を大きく開き肩に思い切り齧りつき、肉を食いちぎった。

「グアアアッ!!イダイイイツ!!」

痛い、肩の肉を千切られて人が平気な訳がない。余りの激痛に泣き叫び暴れるが彼女を振り払えない。俺はただ涙を流して痛みに叫ぶ。

一方で彼女は俺の肉を幸せそうに長時間咀嚼し飲み込む。そして優しい顔でお腹を撫でた。まるで、俺の肉が愛おしいかのようだ。

「……ふーっ、ぐちそうさま」

「お願いだ！もう止めてええ！」

俺は彼女の凶行に怯え恐怖で体が震える。二工はそんな俺を見てクスリと笑い口を離してくれた。かと思うと彼女は剣を出した。俺はそれを目にして戦慄する。あの武器で俺は何度も殺されたのだ。

「な、何をする気なんだ？」

嫌な予感しかせず、恐る恐る聞くと二工は笑顔のまま答えた。

「あなたの四肢を切り落とすの」

「……は!？」

二工が剣を振り上げる。手足を切るだど？冗談じゃない。こんな化け物に体を弄ばれるなんて御免だ。俺は必死に抵抗するが、二工の力が強く振り払う事が出来ない。その間にも彼女は剣を振り上げる。

「や、やめ」

「さよなら」

腕に走る激痛。神経を直接触られるような鋭い感覚。骨が砕ける音が響き、意識が飛びかけるが不思議と気絶できなかった。太い血管が切れ、血液が噴き出し、地面が朱に染まっていく。

「ぎいやあああ!!!」

余りの激痛に意識を失いたかったが許容量を遥かに超えた激痛は

俺の抵抗など気にせず唾液を流し込み、歯茎を舐め、俺の血を味わうように吸いつく。それから数分後、ようやく彼女は満足したようで口を離す。口周りが俺の液と彼女の血に塗れて酷い有様だ。

「ぶはあ、レイトの味がするね。もつと奥まで味わえばこの見えない何かもよく分かるのかな？」

「や、やめてくれ」

「ダメ。だってまだ全然足りないもん。だから次は趣向を変えて内側を楽しませてもらうわ」

二エは俺の耳元へ近づき囁く。その言葉を聞いた俺は全身を強張らせた。彼女はそんな俺の反応を楽しむように笑い俺の腹部に剣を突き刺した。そして、ゆっくりと傷口を広げていく。痛みが全身を駆け巡り、口から泡を吹き出す。

そして、内蔵を露出させるまでに広げてから、腹の中に手を突っ込んだ。腹の内側を掻き回され、内臓が引きずり出される感覚に悶絶し絶叫を上げる。その度に臓器が零れ落ち、辺り一面に飛び散った。

「ひゅー、凄いわねえ。これならまだまだ壊せそうね」

彼女はそう言って今度は俺の心臓目掛けて突き刺し、引き抜いた。

「あつ……あがつ……やべでぐれえええ！」

「あははっ楽しい！ねえ、私達相性抜群だよね！今宵は頭が壊れそうだよー」

やがて彼女は剣を捨て、両手で俺の腹を引き裂いた。ぶちつと音を立てて、大量の臓物が飛び出し地面に散らばる。俺は激痛に泣き叫び、失禁する。だが彼女はそんなのお構いなしに俺の身体を弄ぶ。

そして、俺はついに限界を迎えた。痛みと出血に視界が点滅し、意

識が遠のく。薄れゆく意識の中、彼女は笑いながら言った。

じゃあ最後に一番の私を見せてあげるから最後まで精一杯に散らせ

意識が途切れる直前、俺は死を悟つ――

……そして、俺の意識は途切れた。結局の所、俺は大口を叩いたのにも何も知らず、何もできずに死んだのだ。可憐な何も知らない少女の姿に一抹の希望を見出して哀れにも死ぬ。

俺は竜である前に人である。だがしかしニエは生まれながらにして竜なのだ。人程度が幾ら同情しても真意は分からない。

……でも、そんな彼女でも俺はまだ希望を抱くべきだったのだろうか。

ニエは望んでいた。突如として殺人衝動に目覚めた贗竜と俺が殺される前のあの竜、そして初めてであったニエはどれも彼女であって全て違う彼女な気がした。だって、俺ははつきり見たのだから。血を纏い、小さな四肢で剣を振る、脳を焼かれるあの美しさを。

……あはは！やっぱり赤は綺麗ね！

白い肌に白い服、美しく儂き彼女とその美を根底から覆す数多の返り血に染まる彼女。月夜に舞い、殺戮を繰り返すその姿はまるで天使のようだった。

満月を背に高く高くに飛び上がり、双刃の剣の翼を羽ばたかせて宙

に舞う。そして次の瞬間には、地上の全てを焼き尽くす業火に包まれる。片方は刃から尾を引く神秘的な白い炎、もう片方は彼女そのものを現す緋色の血飛沫で出来た大剣。どちらもが禍々しく彼女の魅力を極限まで高めている。

そう思うのはきつと俺自身が死に近づいてるからなのか。それとも既に狂っているせいで感じていないのか。恐らく後者だろう。この美しい世界を目にしてなお恐怖を感じないんだから。炎の渦の中にいるはずの彼女があまりにも美しく見えてしまうのは何故だろう。

俺はただ呆然と立ち尽くしていた。あれほどまでに美しいと思っただ彼女が今はより恐ろしく美しく見える。ああクソ、してやられた。俺が見惚れていたのは彼女の姿ではなく、この姿こそが真に見出すべきだったのだ。

血塗れで狂乱する彼女の瞳は輝いていて邪念の一つ感情を感じない。だが、今の彼女には血を欲する衝動が確かに感じ取れた。つまり彼女の中で何かが壊れ始めている証拠だ。それが何なのか俺には分からない。俺すらもしや手遅れなのかもしれない。だけでもういい、俺は十分幸せだ。これ以上は望まない。

だって目の前に居る彼女は俺の理想の美しさなんだから。もう既に俺は手遅れなんだ。今更どうこうできない。彼女は剣を向けてくる。その表情はいつものように笑ってはいなかった。

彼女の笑顔は好きだ。だがこんな笑みは見たことが無い。もういいや、考えるだけ無駄だ。

ならいつそ……

———
現在位置

ひいろ自宅 玄関

「緋刃さん、何時になったら帰ってくるのですか？あなたが戻るまで私はいつまでも待ち続けますよ」

タツタツタ……

「あれ、蕾？出かけたのではないのですか？」

「違う、今子機が行動不能になったついでにスペアに移った。ついさっさつき他人の色恋沙汰に手を出したら性交に巻き込まれたのだよ」

「っそれでは緋刃さんが見つかったのですか!？」

「その通りだ。今駅前で落ちてる頭かのらカメラ映像だと彼女は力尽きて倒れている」

「そうですか！緋刃さんはまだ遠くへ逃げていなかったとは。やはり運命とは愛が実現するのですね！」

「ああ。で、人の男には興味なしか。流石に彼に同情するよ」

「それより蕾は早く緋刃さんを連れてきなさい」

「初めからそのつもりだ。だが去る前に一つ聞かせてくれ。君は何時の間玄関の前で彼女を待ち続けたんだ？臭いはまだしも……その、服と床のそれは君の糞と屎尿だろう？それに最後に眠ったのは何時だ。酷い限だ」

「あなたに留まるようお願いされてからずっと立ったままだったのてつい我慢できず粗相をしてしまいました。眠気も酷いですが愛の前にはこの位は当然です♡」

「……愛とは竜すら狂わせるのだな」

ガチャ

俺、死す？いいえ今回もいつものです

駅前的大量殺戮から夜が明けた。先日の騒ぎは鳴葉の第二の悲劇として全国的に報道されその日から連日世間を騒がせた。生存者は存在せず、一夜にして鳴葉の駅前から人の消えたあの夜は事件というよりも都市伝説的な扱いをされた。そのせいもあつて警察の調査を終え、いつもの景色に戻った駅前にダークツーリズム的な需要が発生していつもより賑やかである。半ばから節電されたビルや地面を求めて一部の物好きが訪れるらしい。噂によれば鳴葉稲荷神社の観光収入も大きく上がったそう。

だが事件の数日後「事件の犯人とされる犯罪組織の発覚、摘発され連続殺人犯の逮捕」がテレビより放送され世間の賑わいは衰退を迎えた。犯人の目的は色々と言われているが不思議な事に有志の行った調査によるとどの理由も頓珍漢な到底信じられないものばかりだろう。しかし所詮は無縁の地での話だ。結局暫くしないうちに話は忘れ去られた。

しかし、そんな俗世の話はここでは関係ない。木漏れ日の差し込む森の洋館、水竜コーポレーションの一族の所有する豪邸では今日も一族の新婚家族が過ごしている。

その屋敷のとある一室、夫婦の子供の寝室にて死んだように眠る少女の「彼」がいた。

「すう……すう……」

白い髪、白い服、そして白濁とした柔らかな角を持つ竜の少女。そんな彼女のベッドに腰を掛けるもう一人の少女がいた。彼女は彼と瓜二つである。

彼女は彼の頭に顔を寄せ、耳元で囁く。

黎明の名を冠し竜と神を求めなさい。白痴が狂い、目覚めぬままに消え去る前に。

こう言葉を残し彼女はそっと立ち上がる。そして誰にも存在を悟られることなくそっと虚空に消え去った。まるで、彼の夢のように。

「……………んう……………っは!？」

俺はさつき二工に殺されて、いつの間にかベッドで寝ていた。ここはひろの家の自室だ。起き上がり机に置かれたバッグからスマホを出して時刻を確認すると死亡から丁度2日経っていた。そのままメールも確認すると蕾さんから一通のメールが来ていた。俺はそのメールを開こうと通知に触れようとしたが直前で静止する。

「(何で送信時刻が昨日なんだ!?)」

俺の死の直前に彼女の首が転がってきたのを俺は確かに見たはずだ。なのに何故彼女からのアドレスからのメールが届いているんだ。不安に考えても仕方がない。きっと誰かに代理を頼んでおいたのだろう。そう心に言い聞かせ勇気を出してメールを開いた。

『多忙につき簡易的な文章で済まない。もし私が起床に気が付く前にこのメールを見たのならすぐに返信してくれ』

俺はすぐに起床した旨の内容を記載して返信する。すると画面を閉じるのよりも早く『今行く』と返信が返ってきた。程なくして扉が開き蕾さんが訪ねてきた。多忙と言いつつ意外と暇なのではないか、

ふと疑問に考えた。

「ふむ、ようやく起床したか。あれ程の怪我でもまだ生きているとは感心するな」

「あの……俺には一体なにがあったんですか？」

「そうだな。治療そのものはいつもの苗床の肉体からだ」

いつもの、つまりひろの体で再生したのか。彼女の便利な体には何度も助けられている。後で直接会ってお礼を言わなければ。

「しかし実のところ今の君の体には色々興味深い現象が起きているのだよ。詳細は追って話すから私は君の食事を運んでくる」

蕾さんはそのまま退室しようとしたから焦って引き留める。体に興味深い現象という明らかに怪しい言い回しは大抵ろくでもないことが起きている場合が多い。俺の体に何かあるのなら今すぐにでも知りたい。

突然引き留められて蕾さんはめんどくさそうに振り返る。申し訳ない気持ちに目を瞑りつつ俺は遅る遅る彼女に体についての疑問をぶつけてみた。

「あ、あの、今すぐ話せる物がありますか？体に変調があるなら知らないままなのは怖いんですけど」

「それもそうか。身体の変換は竜として恐ろしい物だ。だが、さて、無学なこの私に君の分かるような単純な話があるだろうか」

皮肉めいた言い方をしながら彼女は一応考える素振りをする。10秒考えてから彼女は素っ頓狂な事を口走った。

「簡潔に言えば体が私達竜の側に近づいた。その余波で君の背中に翼が生えてきている」

「竜に近づいた？」

「私が戻る間自身の体をよく観察すると良い。もしくは二度寝というのでもいいかもしれない。背中の違和感を確かめるのに寝てみるのはいい手段だ。何より、君は容認だったのだろう。じゃあ」

彼女が部屋を出て俺は服を脱いで背中をタイマーで撮影する。撮影した写真には俺の背中に小さな2つの突起があり、きつとこれが翼の生え始めなのだろうと予感させる。人に戻るつもりで考えていたのに真反対の方向に進んでるのは不味い。少しずつ人としての自己が消えつつあるのに恐怖と危機感を感じた。

「……寒いな」

現実逃避だとしても今はこんなものからは早く目を逸らしていたい。寒いというのも服を切る口実だ。俺はベッドに置いた服を手に取り、だがその前に服は触れた部分から手に溶解して消える。すぐに手を離し穴の開いた服を観察する。白くボディラインの目立つ露出の多い服、というより水着に似た構造を基に局部以外の布面積を削いだような感じだ。うっかり空けた所より元から空いている所が多い。

「何でこんなの着てたんだ……ひいろか？」

別に替えの服はある。クローゼットを開き手頃な服を選ぶ。ついでに俺は嫌な仮説をここで思いつきすべての服を確かめた。

「……やっぱり」

俺はこの部屋のクローゼットの服を一度見ている。様々な種類の服があった中には俺が来ていた服は存在しない。詰まる所ひいろの所持品ではないかもしれない。ナツメもあるかもしれないけれど……数日前の彼の家にもこの服は無かった。

突然現れる服で思い当たる節といえば……

「……………」

コンコン

扉を叩く音が響き、蕾さんが朝食を持って入る。洋風の朝食でパンにソーセージにサラダとコーヒーが二つだ。蕾さんはそれらを机に置く。俺をまじまじと見つめる。

「……おい、私を気にするよりも先にするべきことがあるだろう」

彼女はため息を吐き、呆れた表情で一言呟く。続けて空いたままのクローゼットを漁り衣服を見繕って俺に渡す。服を着ずに考えていたから上裸のままだった。俺は急いで服を着て彼女に謝る。

「すみませんでしたア！」

「分かってくれたらそれでいい。だから早く朝食を済ませてくれ」

蕾さんは怒ってはいないようだけど少し気まずそうに食事を進める。彼女は二エが言うに竜だと言っていたが、二エの例から竜そのものに恐怖と不信感を感じている。だから食べながら横目で彼女を見つつ彼女の言葉の意味を考えていた。

『君に分かるような単純な話があるだろうか』

皮肉であれど今の俺が分かる簡単な話は多分無い。だから彼女はこの話題を避ける為にあんな言い回しをしたのだ。俺が理解できるようにもつと分かりやすい例えを出すか、もしくは質問をする時間を欲したのでろう。なら後者を選んだほうが無難だ。彼女はノートパソコンを起動しつつ何かの資料の準備をしていた。

「あの、蕾さん」

「なんだ、言っておくが質問は受け付けないぞ」

「いえ、ただ確認したいだけなんですけど」

「なら何をすれば良い」

「俺の背中にあるのって本当に翼ですか？」

「ああ、そうだ。生えはじめの竜の翼の芽だが」

「……じゃあ、俺の服が溶けたのも竜に近づいたせいですか？」

「それを語るには君の知識ではまだ早すぎる」

やっぱり駄目だったか。まあ、彼女の性格ならこうなることは予想できていたけど。俺は諦めて食事を済ませる。

「今朝のニュースは見たかね」

「いいえ、まだそれどころじゃなくて」

「なら丁度いい。テレビをつけてみたまえ」

リモコンを手渡され言われた通りにつける。画面の左上に6時43分の文字が表示されたあと天気予報が始まる。

『今日は晴れのち曇り、所により雷雨になるでしょう。夜は冷え込むので外出の際は暖かくしてお出かけください』

予報が終わると次は女性キャスターが事件の概要を語り始める。

『おはようございます。今日のトピックスをお伝えします。昨日鳴葉市の駅前にて大規模犯罪組織によるテロが……』

画面が切り替わり鳴葉の駅前の惨状が映し出された。俺が見た通り駅前が酷い有様で1年前の大崩落を想起させた。

『……これは酷いですね。犯人の人数は現在調査中ですが目撃者の証言から恐らく300人は超えるかと』

テロ？あれは彼女の突然の暴走の筈だ。なのに……まさか

「勘が鋭いじゃないか。まあ、早い話いろいろが丸め込んだのだ。自分の尻は自分で尻を拭いてもらわないと……いや、面倒事の後始末は私の領分ではない」

彼女はため息を吐きコーヒーを飲む。俺の背の翼を見て少し複雑そうな顔をしていた。

「しかしこちらの方はどうにも手を焼いているのだよ」

彼女はそう言うとう意していたパソコンを見せる。そこには件の駅前のライブカメラのアーカイブが映っていた。再生回数は1000万回を超え、とてつもない注目を浴びている。内容は勿論あの殺戮だった。

「これは緋刃の暴走からの映像だ。公的な防犯カメラの手配はしていたけれどまさか一般人が24時間駅前を監視しているのは計算外だ。しかも既に拡散され削除は困難を極める」

彼女はまた大きくため息をつく。確かにこれでは動画を消しても意味が無い。けれどここまでの事態を引き起こしてしまったことに少し罪悪感を覚える。それから暫く映像を眺めていると映像が傾き轟音と共に映像が途切れた。

改めて惨状を見た俺は現実味の無さに映画のワンシーンを見ているようにしか思えない。映像の中で逃げ惑う人々や生き残り、一人生き残り逃げる俺でさえどこか距離があるように思える。それは罪悪感を感じたくない心理が故か、単に映像になり客観視のできる環境故か。否、そのどちらでもない。

「……」

「君はこれを見てどう思う。ただの凄惨な殺戮の光景か？それとも……別の何かが見えてこないか？」

「……狐が、見えました」

殺戮の少し前、金髪で巫女服の少女がカメラの端に場違いな閃光と共に人々に矢を射る。彼らは明らかに一心に矢を受けているにも関わらず平然として彼女自身にも気づいている様子もない。一方、もう一人の銀髪の彼女はトラックは車の行きかう駅前の大通りの真ん中に立つ。そして突如として紫炎に包まれたかと思うと悍ましい化け物と化し通りかかった一台のトラックに紫炎を包み込んだ。そして、そのトラックが事故を起こして全てが始まった

「彼女らはこの地に根づく神、その仕事風景だ。確かにこれは人の目には見えない光景ではあるだろう。だが今は緋刃についてを考えてく欲しい」

「二工は、ただ暴れているとしか思えません」

「成程。それなら聞き方を更に変えよう。普段の彼女と比べてあの時の彼女はどうか映った？」

俺はコーヒーを置き無言で思考してから慎重に答える。

「昂っていた、でしよつか。」

「うむ、正にそれを聞きたかった」

蕾さんはノートパソコンを操作し今度は別の資料を映した。何かの調査資料のようで資料の中の写真はこの前泊ったホテルのシャワールームや映画館である。内容の多くは化学的な説明が多くさ理解は難しい。それでもルミノール反応、という単語が俺にある事を想起させ、次のページにはプラネタリウムのように散り散りに光を発する写真の数々が並んでいた。

「これは君たちの遊び回った場所を極秘調査した資料だ。君も感づいていつようにこの光は血痕だ。調査は細かく書いているが要約するとシャワールームには血をタオルで拭いた跡がべつとり、映画館にも僅かに血痕が残っている」

そうか、だからあんなにタオルが濡れていたのか。二エはシャワーを浴びる振りをして……

そこで俺は一度思考を止めた。俺はもしかしてとんでもない思い違いをしていたんじゃないか。でも、あそこに俺達以外の誰かを連れ込めるような隙は無かったし、でもそれじゃあ二エはシャワールームの中で誰の血を片付けていたんだ。

「君、どうかしたのか。急に動かなくなるとは」

「あの、ここで誰かが死んだんですか？」

「いいや。この資料の写真の血は全部緋刃の血だ」

完結に語られたその言葉は真実だろう。しかしいざ自身が導き出した結論が正しいと肯定された途端、俺は頭が真っ白になる。

二エは殺人鬼だ。自身の食料に何人もの人を殺し、殺人衝動に駆られて殺戮を繰り返す。だが俺の描いた二エの像はたった一言で根底から音を立てて崩れた。そういえば彼女がひいろと結婚を迫られて精神的に追い込まれた時にも……

「受け入れられないか？ 認めたまえ。彼女は血に狂い、血の為には自傷までもを厭わない真正の気狂いだ」

「！ そんな言い方しなくてもいいじゃないですか！」

大声で否定する。突然の大声に暫くはふたりで黙ってにらみ合い部屋に残響する。そして頭の整理が追い付いた俺は彼女に慌てて謝った。

「あ、あの、ごめんなさい」

「私からは多くは言わない。しかし相応の覚悟を持って挑むよう私からは忠告しておこう。しかしきつと君にも緋人の理解は出来るはずだ」

……口では協力するとは言うが彼女を信用していいのだろうか。しかし時刻はまだ朝だ。知るための時間は十分ある。俺は早急に朝食を食べ終え蕾さんに片づけを頼む。

「で、君はまず何をするつもりだい？」

「二エのお見舞いに行こうと思います。あの夜の二エを止めるには相応な労力が必要だっただろうし、殺人癖がどうであれ純粹に彼女と話したいんです。それに二エには俺が人に戻る為に協力してくれる約束をしていますから」

「君は人に戻りたいのかい」

「はい。俺は人間ですから」

それから蕾さんが食事の片づけに部屋を出るとの一緒に俺も部屋を出て二エは部屋に向かう。二エを知らなければならぬという無責任な責任感に駆られて。

健全な精神は健全な肉体に宿ればいいな

朝食後、俺は二エの部屋に向かう。彼女の部屋はひいろの部屋のすぐ隣にある。俺が知っているのはこれだけで中までは見ていなかった。だか彼女の部屋に何があるのか実は密かな楽しみだった。

「(でも二エには私物も無いしどんな部屋か全然想像つかないな)」

普通の部屋なのか、はたまた悍ましい部屋なのか。裏をかいて女の子らしい部屋なのか。廊下を歩きながら色々な例を考えてみるも全く想像もつかないまま部屋の前に着いた。ノックをして暫く待つと中から物音がする。きっと片付けをしているのかと思いつく扉の前で佇む。5分程経過して物音が止んだ。

「二エ、入っていいか？」

ドア越しに声をかけるも返事はない。代わりにまた物音がし始めた。諦めてドアノブに手をかけると鍵がかかっていた。何回か試行錯誤してドアノブを回しても扉が開くことはない。うーむ、蕾さん経由で開けてもらうのはひいろに失礼だよな。スマホ片手にどうするか考えていたらドアが開きひいろが出てきた。

「黎人さん、おはようございます。私達に何か御用でしょうか？」

「この前の事について二エと話がしたくて」

「少し聞いてみます」

ひいろは部屋の奥に戻る。空いた扉から中を覗くと整理された綺麗な部屋である。自分の部屋より一回り大きく、ダブルベッドとその他私物から二エとひいろと同室で生活しているらしい。流石夫婦だ。

ひいろは部屋に戻った後、横の扉から更に隣の部屋に入る。その部屋は暗く角度的にも見えづらい、加えて現在位置から考えるに廊下からは入れる扉はない。扉は開けたままだったから耳を澄ませて中の会話を盗み聞く。

「緋刃さん、黎人さんがお見舞いに来ましたよ。話せそうですか？」

「……………」

「……………はい、分かりました。メイド、暫くお世話は頼みます」

そして、ひいろが戻り部屋の中に招かれる。俺とひいろは部屋に入り椅子に腰掛けニエについての話を始めた。

「緋人は先日の騒動で出来た傷と心理的なストレスのせいでまだ体調が優れないそうです。彼女も今は誰とも会いたくないそうなので面会は明日以降にして下さい」

「ああ、そうか。体調はどうだ？」

「鎮庄に動いた機動部隊と現地の民兵の狐さん達からの攻撃で満身創痍、体も傷だらけで今も辛うじて首が動かせる程度です。それに私製の特性的にご飯もお皿ごと投げ捨てて食べてくれないのです。精神的にも相当なようです」

精神的、というのは単にひいろ相手だからだろう。それでも誰にも会いたくないのはあんなことの後だから顔を合わせずらいのかもしれない。怪我についても俺自身が傷ついた体を見るのは得意ではない。覚悟はしているけれど2日経っても治らないならもう少し待つべきだ。というかニエに殺された身として彼女を殺す為には相当な労力化け物じみた兵器が必要だろうに機動部隊は一体誰で何をして怪我させたんだ。

「体の怪我はひいろでも難しいのか？」

「最低限の臓器の治療は終わりました。残りも怪我こそ大きいですが完治は時間の問題です」

「俺みたいに一気に全身一気にで良いじゃないか。俺も今回もひいろの体で再生したんだろ？」

彼女の体には何度も復活にお世話になっている。今回の死亡も確認して聞くと今回の再生も彼女の体を移植して再生したと確認が取れている。ニエも一度腕を再生しているから腕の一本や最悪半身程度であればもう治っていきそうだ。ひいろは俺の疑問に申し訳なさそ

うに答えてくれた。

「それも悪くはない提案ですが……彼女にはあまり勧めたくはありません」

「どうして？」

「実は私の竜体は破片でも一度に多くと接触すると私の子供になってしまうのです。それこそ全身を短期間でとなると今の彼女では逆に私の体に飲まれてしまうでしょう」

……それは初耳だ。彼女が言うにそもそも自分の体でない物で体の大部分を再構築するのは危険であり、俺に関しては更に種族もが違い再生は困難を極める。しかし始めて俺が再生した時の条件が良かったから偶々助かったそう。

「その条件というのは？」

「話すと長くなります。ですから今は彼女の現在についてだけお話ししましょう。とは言っても、実はもうあなたも気が付いているでしょう」

彼女に笑みに怪しさが混じる。

「黎人さん、もし多くの竜が知る餐龍の姿があの夜の彼女だとしたらあなたは どう思いますか」

「っ!？」

彼女と初めて出会った時に聞いた竜としての生活からも快樂と何かの為に殺戮を繰り返していた像は簡単に浮かぶ。同族を殺し、皆殺しまで侵し尽くす。ならば彼女は恐ろしい化け物、これ以上の言葉は存在しない。同族や知人すらも殺しを厭わないのであれば中合う力追い出されても当然だ。だからニエは俺の中で化け物ではなくあの生意気で自分勝手な姿こそ彼女なのだ。

「美しく、誰もが心奪われる。あの状態の彼女こそ私が真に好いた餐

龍の姿です。だからあなたの家で二工と話した時、内心とても驚いていました。あそこまで人間性の残る彼女は美しいよりも愛らしいと言ったところでしょう。彼女は彼女で可愛らしいくこれはこれで好みの姿ではあります」

ひいろの笑顔がどんどん黒く染まっていく。やはりこの女はただ者じゃない。俺の知らない二工を知っていてそれが彼女にとって魅力的に映っている。俺には全く理解できない世界だ。いや、理解したくない。

「あなたならきつと分かる筈です。殺されたのなら尚更。今も頭から離れないでしょう。脳を焼く美しきとはそれほど強烈に映るのです。あなたも愛した人はいつだって美しくあるのを願うでしょう」

そんなの当たり前だ。例え醜悪であろうと美を求め、その点だけは同意する。だからもう何も言わないでくれ。今は二工は二工のままでいいのだ。

「……ひいろは二工をどうしたいんだ？」

この話を断ち切るのに最後にこれだけ聞いて最後にする。

「どうする、と聞かれましても家族のように一緒に暮らしたいと初めから言ってるじゃないですか。幸い実現する財力は水竜コーポレーションがある限りほぼ無尽蔵に供給できます」

ひいろからすれば二工がどんな存在であれ彼女の言葉通り家族として迎え入れたいらしい。理由は分からないけれど二面性を知った上で喜々として受け入れて二工の拒絶を振り切ってまで自分の家に住ませるのは並大抵のことではない。二工が人を殺したと聞いても変わらない様子から二工に対するひいろの想いは相当深いものだ。ひいろは二工の事をどこまで知っているのか、そもそも何故二工のことをここまで想っているのか。

ひいろは俺の質問にいつもと変わらない誰にでも向ける外向けの笑顔を向けて答える。語る言葉は優しく、隠された真意はきつといたなく真剣だ。

「分かった。ひいろは本当に二工を愛してるんだな」

「ええ、そうです」

「なら俺からのお願いだ。彼女を少し一人にしてあげてくれ。ずっと傍にいたんだろ」

二エのいる部屋のドアの周辺だけ他よりも際立って整理されている。床にはホコリ一つなく水拭きした跡がある。ゴミ箱にも赤い血の付いた使用済みの包帯と箱が捨てられていた。ついさつきまで熱心に治療していた証拠だ。

加えてひいろ自身とこの部屋から僅かな血の匂いがする。ここ数日で血の香りに慣れたせいかわのしみ込んだ手は特有の悪臭を放つ。恐らく長時間血に触れたのだろう。更に彼女自身の顔も化粧で隠しているが目の下に隈があり、最悪の事態を考えると彼女が出て行つてから心配で何日も寝ていないみたいだ。

「精神的に苦しいのは二エもお前もだろう。だから少しでもいいから休んでくれ」

「ご忠告を頂けるのは有難いですね。ですが私は夫婦として、彼女とはいつでも一緒に寄り添っていたいものですからそれは出来ません。たった数日寝ていなくとも私は彼女が大切なのです」

彼女はあくまで俺の提案を断る姿勢を取る。だがこれは予想できていたこと。ひいろが無理をしないのなら俺の方で勝手にさせて貰う。俺は席を立ってひいろに近づき無理やり彼女を立たせる。

「え？え？ど、どうされたのです？」

「どうしても言うことを聞かないのなら家族らしく息子権限だ。母さん、いい加減に寝てくれ」

強引に手を掴んでベッドに彼女を連れる。ひいろは数日の徹夜で判断力が衰え抵抗する判断が追いつかず、俺にされるがままベッドに連れてこられた。そのまま彼女を押し倒し布団をかけてやりひいろが横にした。これでやつと静かになる。

「ちよつとー黎人さん!何をするのです!」

突然の状況で動揺しているひいろを無視して今度は俺の方に向き直す。彼女の肩に腕を置いて逃げられないようにする。

「まあまあ。こうでもしないとお前寝ないつもりだっただろ」

「ち、違いますから離してください。私が餐龍を……」

「はいはい、でも今のお前の顔見たら二工も同じこと言うぞ。あと蕾さんも」

彼女の表情を見ていればすぐに分かった。ひいろは二工の為ならどんな事でもする気だったのだ。だから俺はそれを利用する。ひいろは俺の言葉を聞いて渋々納得したらしく抵抗を止めて目を閉じた。「……あなたは意外に強引でしたね。でも嫌いではありませんよ。それにあなたの手は温かいですからこのままおやすみします。それと……」

彼女は一息ついて、

「彼女を知るにはまず竜が何たるかを知るべきです。本来はこの家に付いてすぐにお話する予定でしたが些か予定が狂ってしまいました。一度頭を整理してあなたにとって本当に必要な物を考えてみてはいかがでしょうか」

そう言い残して眠りについた。きっと彼女の言っていることは本当だと思う。だからこれ以上は何も言わず、彼女が望むままにすることにした。

「分かった。今はとりあえずゆっくりしてくれ」

俺はそう言って部屋を後にした。

『あなたにとつて本当に必要な物』ひいろの言葉を思い出す。

本当に俺に必要なもの。人として生きる手段か、その他の俺の知らない何かか。今はまだ何も分からない。ただ分かることと言えばいろいろの二工に対する気持ちは本物だ。

「はあ……」

俺も人に戻る手段を本気で考えないとな……

「(……………黎人さん)」

無理やり連れ込まれたベッドで一人寝ながら考える。あの人の言う通り、きつと私には餐龍が分からないと駄目なんだと思う。

私の愛しい妻、餐龍。こんな私にも愛を向けてくれる。それがどれだけ嬉しかったか。

ああ、でも、とても幸せだ。壁を隔てて彼女が眠っていると考えると心が暖かくてずっと愛に包まれていたくなる。

私はこの愛を信じたい。だから彼女に愛想を尽かされないようにもっと強くならなければ。

「私はこれからも彼女を愛し続ける」

愛とは見返りを求めないものだ。と人は言うけれどそんな事は嘘だ。人間は欲深い生き物だから、相手からの愛情を当然だと思えばきつとその感情はすぐに消えてしまう。

だから私はこの気持ちを一いつまでも持ち続ける。彼女から与えられる愛情以上のものを彼女に与えてあげたい。

でも、どうしてだろう。

「……ああ、駄目ですね。先ほどから眠れる状態ではありませんね」
娘の彼、黎人さんが触れた部分はどうにも熱くて仕方がない。全身も火照ったみたい顔まで真っ赤になっている。でも不思議と嫌な気分ではない。寧ろ心地よい感覚だ。

この正体はきつと愛だ。彼の事を考えるだけで愛しくなって自然と口元が緩んでしまう。でも彼女には勝てませんよ。だって、彼は弱いからです。

彼に触れられた部分をそつと撫でる。彼の手の温もりが残っている。胸が苦しい。頭がボーッとする。この苦しきの正体は分からなけれど不快じゃない。むしろこの感覚はずつと味わっていたい。

こうして彼の余韻に浸りながら考え事をした私はいつの間にか眠りに落ちた。

「お見舞い。この前駅にいるのは知ってたね。あの騒ぎで君の体が心配になったんだよ」

それにしても連絡も無しにこんな朝早くに来るのは常識外れだ。こっちにも心の準備つてものがあるだろうに。まあ今はそんな事を言ってる場合ではない。とにかく現状の確認だ。

「とりあえず聞きたいんだけど、どうやってここに入った？」

「鍵空いてたよ」

「アポは？」

「取ってないけど、君のメイドさんが入れてくれたよ」

成程、メイドが入れたなら仕方ないな。俺は納得して自分のベッドに座った。するとナツメが隣に座ってきた。そしてそのまま肩を寄せてくる。

「もー、あんまり疑い深いと僕意外だれもいなくなっちゃうよ」

そう言いながらナツメは俺の腕を抱き寄せてきた。

「あはは、すまん。ちよつと今色々あつて気が立ってるんだ。許してくれ」

俺はなるべく平静を保ちつつ腕を引き抜こうとするが、なかなか離そうとしない。それどころか更に強く抱きしめられる始末だ。柔らかない感触とかそういう問題じゃなくて単純に痛い。

「いやもういい加減離れてくれよ」

「ふふ、嫌だよ。友人が死にかけたんだしこれくらいいいじゃないか。君がいなくなったら僕も寂しいのさ」クンカクンカスーハースーハー「じゃあこれを説明してくれるか？」

俺は抱きつかれていない方の手でスマホを操作しメールをナツメに見せた。そこには『たった今、あるメイドが不審な人物を敷地内で見かけた。彼は私達で処理するから君は接触は出来るだけ留めてくれ』とだけ書いてある。実はこのメールは部屋に入る直前に蕾さんから届いた物だ。ナツメ画面を見るなり硬直し俺から目線を逸らす。

「で、本当は？」

「……裏口の窓から」

やっぱりか。まあ、予想通りではあった。メールで友人の悪戯だと

伝えておく。

「でもホントに君を心配してここまで来たんだよ。だから今日一日君と一緒に居させてくれないかな？この前の貸し借りは帳消しでいいし僕なんでもするからさ」

俺の胸板に顔を擦り付けながら上目遣いで見つめてくるナツメ。コイツ分かってやってんのか？男同士で俺の方が小さいから傍から見たらヤバい奴だぞ。しかし素直に帰ってくれるとも思えない。ナツメに何かしてもらうのは良いが一体何をさせるべきか。下手に頼んで変なことされても困るしなあ。

「そうだな、ならちよつと手伝って欲しいことがあるんだ」

俺は本棚から前に借りた厚い書物を取り出す。これは以前竜を知る為にメイドさんから渡された物だ。俺はもう一度読もうと思う。

「でも問題はこれがそもそも読めたもんじゃないんだよ。せめて言語が特定できれば解決もしそうなんだが」

彼女に本を手渡しペラペラとページを捲ってもらおう。彼女はページの膨大な文字数に若干困惑しながらも読んでくれた。が、しかしすぐに本を閉じてしまった。

「これは、うん。僕も力になれるか微妙だ」

申し訳なさそうな顔で謝ってくる彼女を見て少し罪悪感を覚える。しかし不可能は見越しての事だ。

「隣で一緒に読んでくれるだけでいいよ。頼むよナツメ」

ナツメの手を取り頭を下げると彼女は頬を赤めらせながら「分かったよ」と呟き再び読み始めた。

――
2人で机に向かい読み始めて30分が経過

以前と同じく未知の言語で内容は理解できそうにない。それでも二人で1ページずつ丁寧に読み込めば何か分かるかもしれない。無意味な期待を寄せつつ暫く本を読み進めて気が付く。

前にパラパラと読んだ時にもこの本には数式とグラフ等の図が使われていた。折れ線、縁、数表、どこにでもありふれた統計を現す図である。目を付けたのはそこに書かれた単位と数値と式だった。こ

ここに書かれた数字と単位のみ何故か一般的な単位である。

「(ま、単位が分かってもグラフの内容は読めないから意味が無いんだけどな)」

一方ナツメは真剣な表情で俺の隣で黙々と未知の言語を目で追っている。俺とナツメは今同じものを見ている。しかし今の彼の様子はまるで別人の様だった。彼はその読めない文字列を見入っている。

その瞳は俺の知らない世界を捉えているようであった。俺がページをめくるより先に、俺が内容を理解できないうちにも彼女はどんな先のページへと進んでいく。もしかして、ナツメはこの本について知ってる？

「ナツメ、この本について知ってるのか？」

「いや、本は僕も初めて見た。けれど……」

ナツメはスマホを操作し自身のカメラの映像からの古い文献の画像を表示した。いつに書かれた物か分からないそれは今にも崩れそうで文字は断片的にしか判断できない。何とか拡大して一文字だけを解読すると確かにどこか見たことのある形状だ。書物と比べると見つけた字は確かに同じ字であった。

「古代鳴葉の字だよ。神社の資料で見た」

「……おい、マジかよ」

なんと、言語を特定できてしまった。説明曰く古代日本のローカルでドマイナーな古代の言語だそう。いや、この本書いたの誰だよ。そして何でこんな物があるんだこの家。あまりにも字形が違い過ぎてなのと雰囲気洋書かと思っただけこれ。

ナツメにどうしてこんな資料があるのか問うとやはり彼の実家の神社関係だった。彼の家は鳴葉で一番の観光地、鳴葉稲荷神社及び鳴葉大社関連らしい。稲荷は江戸、大社の方は建造物自体は最近再建されたが信仰の本流は古代から続いている有所正しき神社だ。

「知り合いがちょっとこの手の研究してて……うん、これが50音の対応表。ただ字の形が変わっただけだから読み替えすれば読める」

しかも解読まで進んでいるそう。試しにタイトルと序文だけ少し

解読してみた。

タイトルは「神殺しと竜因果の覚書」、著者は「月輪皐月」、序文にて大きく書かれたのは『竜とは因果である。神とは概念であり竜はその進化、あるいは亜種である』と書かれていた。少し飛ばして本論の部分では数表の通りの良く分からない内容ばかりである。成程、解読したところで理解までの道のりは遠そうだ。

少なくとも竜についておとぎ話や伝説ではなく生体として詳細に研究を進める誰かが存在した、という事だ。

にしても……まさか日本にこんな古代文字が存在してたとは。他に古代文字といえば胡散臭い物ばかりが検索欄に出てきて心配になったけど本当に使っている人物がいるとはな。それに古代文字まで使いこの分厚い本を書き上げた月輪という著者は一体……

「ゴメン、ちょっとこれは僕の方が読みたい」

再び読み進めようと次のページに手をかける。が、そこでナツメが本を奪い取り自分の方へ引き寄せた。

「済まないけどここから先は僕が研究してもいいかな」

「え、どういうことだよ。ここまで来て読むなとか」

「簡単な話だよ。単にこの本に興味があるからと10話も使って今だ茶番しかできてない大問題があるから。タイトル詐欺もしてるし」

ナツメは清々しい笑顔でそう言った。当然俺は彼に抗議する。しかし、ナツメは頑なに譲ろうとしない。俺だってこの本は興味ある。竜について書いてあるなら俺も喉から手が出る程欲しい。というかそれは俺が借りた物だから又貸は不味いのだ。

「違う。僕はこの本の内容が知りたいんじゃないんで、どうしてこんな物が存在するのかわだよ」

彼は机を離れ窓を開けて腰掛ける。窓からは森の優しく涼しい風が流れ込んできて心地よい。風に靡く髪をかき上げる横顔は女性的で、神秘的だった。

ナツメは本を開き、指でなぞりながら語り始める。

「おかしいとは思わない？鳴葉の言語で書かれた本が何の管理も無し

に価値も分からない君に簡単に預けるだなんて」

言われてみれば確かにその通りである。そもそもこの古ぼけた本が何故ここに存在しているのかすら疑問なのだ。

「古ぼけた……はははー」

ナツメは突然笑い出した。彼はスマホを俺に投げ、画面には先ほど見せられた古い資料を突き付けた。

「この字が使われたのは鳴葉の文明の黎明期、信仰すら存在するか危ういような時代の文字を使用して現代の文体で書かれた書物がただ古草いだけの無意味な本の訳がないだろう」

その本は確かに先程の本と同じ文字で書かれている。更に言えば写真のボロボロの資料と比べればこの本は状態がいい。余程丁寧に保存されていたか時代が経ってから書かれたのだろう。つまりこの本は酔狂な意図的に作られたものだ。

「翻訳は僕が、研究は君が、WINWINな関係ってそれでいいんじゃない？」

「WINWINかどうかは知らないが……（貴重な資料であるなら専門分野の方に任せてみた方がいいかもな）悪用禁止かつ1週間までなら、お互いにバレない様にならな」

「OK、交渉成立だ。話の分かるLadyだね♪」

ナツメは俺の手を取り握手する。俺も彼の手を強く握り返し約束を交わした。それからナツメは投げたスマホを回収して再び窓に向かう。ナツメはスマホを操作して何かを操作し始めた。

今度は何をするつもりなのか尋ねると彼は少し笑って答えてくれた。曰く、今やつと来客の連絡が送信されたそう。遅すぎるアポイントメントだと自傷気味に彼は笑う。

「じゃ、僕は帰ってゆっくり翻訳するから。さよならねー」

ナツメはそう言って空いた窓に足をかけ飛び降りる。慌てて下を見ると既に姿は無くなっていった。前から偶に知らないところから現れたり失踪したりするし今回も一体どうやって消えたんだ。まさかこいつも人外か？

……ま、気にしても仕方がないか。解説はナツメがしてくれるな

ら俺は俺で情報を知ろう。とは言っても、もっぱら彼女に頼る事になるには変わらない。スマホのメールから蕾さんに竜について教えて欲しいと伝える。すぐに彼女から専門講師を呼ぶと連絡が来た。午後には来るそうで今から事前資料を持っていくとのこと。本当にあの人万能だな。

コンコンコン

「黎人君、頼みの物だ」

いや早すぎるだろう！

困惑しながらも扉を開けると蕾さんがいた。彼女は手にした資料の束を抱えていてそれをこちらに差し出す。受け取ったそれはかなり分厚く、かなりの重量があった。タイトルだけを見える範囲で読むとどれも科学的な資料ばかりである。彼女から受け取って読んでみてもぱっと見では大学の知識では太刀打ちできない。

「もう読み始めているのか」

「い、いえ。何とか予想外にちゃんとした資料で驚いています」

「そうか。まあ書面だけでは無理はない。講師と共にゆっくり学ぶべきだ」

「専門講師ってどんな方ですか」

「私の関係者の学者だ。君の意識が戻ったのを伝えたら早速来てくれた」

「一応聞きますけど種族は……」

「人だ」

よかった。流石にまた人間の皮を被った竜は勘弁して欲しい。そんな俺の考えを見透かした蕾さんは一言付け加える。

「顔を合わせもせず安心するにはまだ早いんじゃないか」

「えっと、どういう意味でしょうか」

「竜に関わる者に正気なんてある筈がない。最悪の場合、おぞましい物を見るかの知れない、という事だ」

そう言うと彼女は部屋から出て行った。

月輪式完全神学教室

約束の午後となる。結局あの資料には時間的にも難易度的にも手も足も出ず俺は頭を痛めていた。現在の大学で履修した知識では不可能で、理論を除いたとしても知らない用語が多すぎるしネットでも全く記事が無いものばかりである。当然半日で簡単に知識を掴める筈もなく、午前中はほぼ何もせずに過ごす。

途中眠りから目覚めたひろが俺の部屋に尋ねてきた。曰く俺の言いつけ通り休憩ついでに雑務をする蕾さんが珍しく俺に聞きにここに来たと。あの人マジで何でメイドやってんの。

「勉強だよ。竜について知ろうと思って」

「勉強熱心ですね。これも緋刃さんの為ですか」

「いいや、いつまでもこの体で居続けるのも嫌だからな。お前にも頼んだけどお前に言われてやる気になった」

彼女は机に積まれた資料の山を見つめる。そして俺の手にある一枚の書類を覗いてから見比べた。そして憐れんだ目で俺を見る。

「……進捗、どうです?」

「見ての通り散々だ」

「でしょうね。彼女の資料は大学の履修範囲を大きく超えています。それにそもそもこれは独自理論に基づいて構築されていますから理解には長い時間が必要です。ですが概要だけであれば単純ですよ」

じゃあそんな物俺に理解できる筈も無いか。諦めて机に置いてふて寝する。が、さらつと流されそうになったひろの言葉に飛び起きる。

「ひろ、その中身が分かるのか」

「はい、私も竜体に関しては一通り学びました。しかし大変興味深いですね。いつの間にかかなり研究が進んでいるから私も驚きです」

彼女がペラペラ書類をめくりながら読み応える。ええ……前々から多才だとは知っていたけれど人外の知恵まで精通しているとはたまげたなあ。これでは竜そのものを理解する知識を習得するだけでも年単位はかかりそうだ。

「年単位まではかかりませんよ。黎人さんも大学での成績は悪くはないと自身でおっしゃっていましたが先生様も付いてくれるのですから」

「ああ、お前に言われると何だか自身が沸いてくるよ。でも、もし行き詰まったら頼ってもいいか？」

「はい、喜んで！」

そして扉がノックされ蕾さんが俺を呼び出す。とうとう講師が来たみたいだ。彼女から書類を返してもらい蕾さんに案内されてついて行く……ひいろも一緒に連れて。

真っ先に反応したのは蕾さん、苦虫を噛み潰したような顔をしている。

「おい、君はもう講師など必要としないだろう」

「いいえ、黎人さんの資料、テキストにはまだ私には未知の知識がありました」

「チツ黎人、余計な事をしたな」

そして嫌悪の視線は俺に移り変わる。え、あれそんなに見られちゃいけない資料だったのか。てつきり俺に渡したのだから見てもいい物だと思っていたのだが。見かねたひいろは俺に小さくご安心ください、と耳打ちする。

「はあ……まあいい、今更何を使用が困るような事態にはならない。苗床、今回だけだ」

結局蕾さんは諦めたように彼女を連れて広間に向かう。途中、すれ違った使用人達が皆一様に頭を下げているのを見て少し緊張してきた。来客があるから皆仕事が丁寧になっているのかいつもよりメイドを見かける気がする。

そして、俺達は客人のいる広間にやってきた。

屋敷の一番奥の広い部屋。豪華な洋館らしく、大きな暖炉にシャンデリア、赤い絨毯に絵画と上等な調度品が並ぶ。そして壁には巨大なステンドグラス、中央には大きなテーブルが置かれており、そこでパソコンを操作する一人の奇妙な人物。

「ここも何時振りでしょうか。彼女が実務ばかりで私も多忙でした

し、1か月程ですか」

扉を開く音と2人の足音に気づくと客人は立ち上がり振り返る。白いローブに身を包んだ女、年齢は10代後半くらいだろうか。学者というにはあまりにも幼い。髪は白に近い銀で腰まで伸び、瞳は深い海のような光の無い蒼色、肌の色は雪のように白く、唇だけが血の様に紅い。顔立ちは整っていて、神性な雰囲気纏っている。

「ああ、あなたが洋野さんと苗床ですね」

俺達に気付くことにこりと微笑む少女。

「はじめまして。月輪 皐月（つきのお さつき）、神学者です」

この人が俺達の講師。見た目だけは完全にコスプレのようで俺の考えていた講師とは像が大きくずれる。年齢も俺と同じくらいで本当にこの人で良いのかと疑問思う。だが月輪、その名前を思い出した。

「神殺しと竜因果の覚書」、その著者が「月輪」だった。鳴葉の言語を用いて本を書いた張本人である。

「月輪、彼にはまず本業を教えるからだ。貴様の知名度は寧ろそちらだろう。彼女の本業は新鳴葉駅前歴史記念館館長だ」

歴史記念館は俺も小中学生で授業の一環で入った事がある。確か去年の大災害で駅前が崩壊して、つい半年前再建された最新の歴史館である。そんな施設の館長が俺と同年代だった少女とは感心する。きっと実力も相当だろう。

蕾さんは俺達の挨拶を済ませると講師に何か話して去っていく。それと入れ替わるようにメイドがホワイトボードを運び俺達の前に配置するその様子を見届けてから彼女は俺達に座るように促す。

「それでは私は黎人さんのお隣で。よろしく願います、先生、黎人さん」

「ああ、お願いします」

「では二人共、早速講義を始めましょうか」

月輪さんはパタンとノートパソコンを閉じるとホワイトボードの

前に立つ。そしてホワイトボードに『竜』と文字を書くと言明を始めた。

「竜とは一体何なのか？簡潔に表すのなら因果、ですが竜自身も自覚している事ではないのでここは飛ばします。苗床、洋野さんのペースに合わせてますね」

「(早速飛ばすのか)」

「彼らは通常、人とは異なる次元に存在します。だから通常彼らと人は絶対に出会うことも無くただ架空の存在でしかありません」

だが彼女の言葉は隣存在と矛盾する。彼女にこれを指摘すると以外にもすんなりと、だがあり得ない答えが返る。

「簡単な話です。それはこの世界の因果は諸事情で崩壊かかっているだけです」

信じられずにひろに聞いても事実だそう。

「さて、話を戻しましょう。彼らの生態ははつきり言って様々です。同族同士での簡単なコミュニケーションで生活したり群れずただ孤独に彷徨ったり、あるいは自分の良くを満たすために心のままに戦いに興じたり。共通する点は多くの竜は未発達の文明であるのみです」

「文明が未発達な竜は一個人とするより単に竜としての側面が強い為その分の多様性は発達しています。個人的には発達は区別でき生態系に適した進化と進化の過程で特異的な特性を持った種に区別できます」

「(……なるほど)」

難しいと警戒したものの今はまだ理解できる内容だ。しかし、同時に似た内容を以前二エから聞いたことがある。その時は確か講師の月輪先生が示した2種意外に技量特化と分類していた。しかしその先を暫く聞いてもそこに触れることはない。

「さて、ここで洋野さんの為餐龍について少し備考をしておきます。緋刃は竜の中でもかなり特異です」

「……？」

「とはいえ発生の原理は私の例の範疇でこの方向に進化した生物も人の住むこの世界にも存在します。最もその種も同じく現在ではもう

片手未満の種類しか残存していません」

月輪先生はデフォルメされた竜の真ん中に「竜秘宝」と文字を大きく書き込む。

「竜が生物とはまた異なる存在として最も特異的な物が竜に存在する『竜秘宝』と言われる存在です。竜秘宝とは全ての竜に存在し生命の危機に陥った際の回避手段として使用するものです」

竜と宝、どこかで聞いたことがあるような響きだが、どこの漫画で聞いたんだろう。

「竜秘宝の使用条件は今も尚研究中です。使用方法、原理など全て解明できてはいません。そもそも竜自身が殆どの場合1回目の消費の前に死亡します。しかしそれでもその効力は絶大。その力は使用者の願いに応じてあらゆる現象を引き起こします」

「(願い……)」

竜は竜秘宝を用いれば何でも願いが叶う。つまり、俺がその竜秘宝を使えば簡単に人に戻れるのではないのだろうか。元人間のせいでは生粋の竜の感覚は分からないが幸いここには竜が3匹、いや3人いる。自力での使用に協力してもらおうのも、彼女らに頼み込んで願いを叶えてもらおう手も考えられる。一つ問題解決を見つけて俺は少しだけ希望を抱く。

「しかし竜秘宝はこれ以上誰の手であっても使用されるべきではありません」

しかし俺の考えとは裏腹に月輪先生の口調には明らかな拒絶の意志が感じられる。

「……そう、ですよね。やはり今でもどうにもならないのですね」

「(ひいろ?)」

残念そうにひいろが呟く。言葉は短く、だが彼女の悲しげな雰囲気は伝わってくる。彼女の様子の変化は気になるが月輪さんはどうするのか。月輪先生が返した言葉は淡々としたものでひいろの間から少し間を開けてから

「あなたは洋野さんとは別です。あなたにあなたの生き方がありません」

とホワイトボードの文字を消しながら答えた。月輪先生の言葉の意味を考えると俺とひいろとは何か明確な線引き、あるいは区別をしているようだった。その答え方はあまりにも冷たく突き放すものだった。ひいろは俺達の視線に気づくといつもものように微笑む。

「竜秘宝、夢がありますよね。何でも願いが叶うなんて使い道は慎重に考えませんか」とね」

目をにハートを浮かべた彼女は今も頭の中は二エの事でいっぱいなのだろう。もし許可されたのなら真つ先に彼女は竜秘宝で二エを思うがままにするだろう。しかし俺も使いたい物だから何故使つてはいけない理由は知りたい。

「先生、俺もこんな体から早く人に戻りたいから今すぐにでも使いたいですすがどのような欠点があるんですか」

「竜秘宝は改変の原理に因果律操作が働いたため小さな改変でも法則が乱れます。書き換を繰り返し因果の乱れが限界を超えてしまえば結果何が起こるかは不明です」

竜秘宝で世界を壊せる、そんなスケールの話に思わず身震いした。納得した、道理で二エやひいろですらも使用を躊躇したわけだ。気軽に使つて世界が終わりを迎えてしまうような物体はたとえ自身の為でも使うわけにはいかない。同時に最初の説明で既に壊れている、の意味はつまりこの秘宝を既に誰かが使用してしまったのか。

「(少し……理解して後悔したな)」

もしかしたら竜の知識は俺が思っている以上に危険な内容なのかもしれない。この後の1時間程続いた講義で月輪先生に教えてもらっている内容は説明で今後絶対に必要になることも分かっている。だが同時に俺はこの知識を得ずに今まで通り生きていける気がしなかった。

「それではこれにて講義を終わりにしたいと思います。」

「ご清聴ありがとうございます」

「ありがとうございます」

一礼すると椅子に座る。竜秘宝の話から脱線していたが竜の生態に関する話はどれも面白く、それ以上に恐ろしかった。だがそれと同

時に疑問点も多く残った。特に『因果』とか『因果律』と言う用語については聞き覚えがなかった。月輪さん曰く研究性の高いの元で定義されたからか理解しづらいのは承知だそう。

月輪先生はホワイトボードを消してからメイドを呼んで運ばせる。ひいろは

先ほどからずっと頭を抱えているが、月輪さんの講義は難解で分りにくい部分が多かったらしい。神妙な顔つきで自室に戻った。一方俺は俺で月輪さんには聞きたいことがある。

「あの、月輪先生」

「はー？」

『神殺しと竜因果の覚書』は先生が書いたんですか？」

俺の質問に月輪さんの顔が一瞬強張った。そして、月輪さんは俺の問いにしばらく黙り込んだ後、小さく首を横に振って否定しその表情のまま数秒の間を置いて口を開く。

「いいえ、私はその本の著者ではありません」

その返答は予想外であり俺はすぐに聞き返す。

「本当にですか？」

「はい。寧ろ竜に関しての著書があるのなら私も拝見したいですね。今その本はどこにありますか？」

「それがまさか先生が来るとは思わず神職の友人に解説を依頼してしまいました」

「そうでしたか……」

残念そうに月輪先生は呟いた。どうやら月輪さんの書いたものではないようだ。しかしそうなる则该本の作者は一体誰なのか。そもそもこれはどこから来たものなのだろうか。

俺と月輪さんの間に沈黙が流れる。どうしたものかと考えているうちに月輪先生の方から話を切り出した。

「そのご友人は何方でしょう。もしよければご紹介していただけませんか」

「はい。黒姫ナツメっていう鳴葉大社でバイトしてるやつです」

「鳴葉稲荷の黒姫……」

月輪先生の目が少しだけ細くなる。何かまずかったかな、と不安になる。

「だが月輪先生はすぐに元の優しい笑顔に戻る。

「彼女のぐい友人でしたか……大変な思いをされましたね」

「彼を知ってるんですか!?!」

「彼には色々とお世話になっております。ええ、本当に色々とおしりを触られるのは当たり前前、盗撮や盗難未遂も際限ない淫奔極まりない方です」

具体的な彼を語る言葉には怒りと俺と同類の苦労がにじみ出ている。見た目では冷静を装うも目は笑っておらず激しい憤りを感じる。事実彼女のスタイルはスレンダーの美人で彼からしたら恰好の餌食だろう。

「ですが悩ましい事に彼女は非常に優秀な協力者です」

月輪先生は俺に向き直る。副業として鳴葉の歴史館を運営しているから鳴葉稲荷として彼とは浅からぬ縁があるのだろう。彼は月輪家にとってどういう存在だったのか、気になった俺は尋ねてみることにする。すると月輪さんはまた困ったような顔をする。

「話せなくはないのですがこの後桐生さんとの用事がありますので……申し訳ありませんが日を改めていただいてもよろしいでしょうか」

それは仕方がないなと思いつつ俺は素直に諦めた。しかし月輪さんは何やら言い辛そうにしている様子だ。もしかしたらあまり人に知られたくない内容なのかもしれない。これ以上聞くべきではないと判断した俺が謝ろうとすると先に後ろから声がかかる。

「月輪、彼も連れてこい」

振り返ればそこにはいつの間にか蕾さんがいた。

相変わらずの無愛想で不機嫌そうだ。

「彼の同行を私が許可する。それに貴様について話さねばならない事もある」

「わかりました、少々お待ちください」

「いや、まだ待て。先に本当に彼に聞く意思があるか確認しておこう」

蕾さんは月輪先生の方に歩み寄り、唐突に彼女のローブをめくる。月輪先生は抵抗する事もなくされるがまだ。そして露わになったのは月輪さんの下着だった。月輪先生は白のレースのついた可愛らしいデザインのショーツを履いている。俺は思わず目を逸らす。逸らす前にそれ以上に異常な物が見えてしまった。

「えっ……っ？」

彼女の最も特徴的な部分は足だった。彼女の両足は膝から先が獣の物となっていたのだ。爪は長く鋭く金属質の光沢を持ち、白と黒の毛に覆われている。構造は犬科の動物の脚に似ていた。

「黎人、君はこれを見ても「きゃあああああああ?!?!」」

俺が驚くより早く月輪先生が悲鳴を上げる。そして蕾さんに詰め寄り頬を思い切りビンタした。

「パンン!」といういい音が広間に響き渡った。

「あ、ああ、あああああ!!」

恥ずかしさと驚きで顔を真っ赤にした月輪さんはまましまがみ込む。そして涙目になりながら自分の足を必死に隠す。

「大丈夫ですか?」

「はい……すみません……」

俺は慌てて駆け寄るが月輪先生の反応を見る限りどうやらかなり動揺しているようだ。蕾さんの方はと言うと特に気にした風もなく平然とした顔で月輪さんを見下ろしている。

「別に肌着一枚くらい見られてもどうってことないだろうに。何をそんなに騒ぐ必要がある」

「貴方はデリカシーというものが無いんですか!?!」

「私にだって一般常識はある。ただ効率を少し優先した」

「そういう問題ではありません!」

「はあ……」

この二人の間には何か深い溝があるようだなと感じる。

「まあいい、とにかくこれで良いだろう。お前もいつまでも泣いてないで立ち上がれ。それと黎人君も私の私室へ来てくれ」

蕾さんはそう言って月輪先生を引きずるように部屋から出て行っ

た。

20 深淵がこちらをなんとやら

蕾さんたちの後を追いかける。広間から離れるように普段向かわない方に向かう彼らはどこか不気味に思えた。まるでこの洋館には相応しくない人物をこの屋敷に招いているように。そして二人はある扉の前で立ち止まる。月輪先生は一人入室し蕾さんは俺を待つてくれた。

「ここは……」

「私の私室だ。表向きにはな。実際は私の仕事場を兼ねている。講師は先に中に招いている。早く入れ」

「ひいろとニエは連れてこないんですか？」

「緋刃には竜の知識など要らないし現在も危険な状態だから言語道断。苗床はそもそもここには近づけない」

そして彼女は「ああ、それから」と付け加えてこう言った。

「ここから先は機密事項だ」

そう言い残して彼女は鍵を開き中へ消えていった。

取り残された俺はしばらくその場で固まった後、覚悟を決めて扉を開いた。彼女の部屋は最低限の物が置かれた簡素な殺風景な部屋だ。使用感も殆どなく家具には埃が被っている。たった一つ、壁に埋め込まれた謎のICカードリーダーを除いては。

彼女が素手でカードリーダーに触れると、ピピツという音と共に壁が開き、そこには鉄扉が隠されていた。

「こっちだ」

鉄扉の先は長い階段が続き、先は暗く見えない。明かりという明かりは壁に埋め込まれた心もとない青白い非常灯のみ。彼女は躊躇なくその暗闇へと進んでいき俺もそれに続いて降りていく。

地下深くまで降りると今度は大きな両開きの鋼鉄製のドアが待ち構えていた。壁に埋め込まれたICカードリーダーと今度はキーパッドにパスワードを打ち込んで扉を開ける。空いた隙間から冷気が漏れ出して来る。その奥に見えた光景に俺は言葉を失った。

「本来これらにはもっと別の場所が適すのは承知だ。しかし地下はい

ざとなれば廃棄がしやすいし丁重に隠すならば山中の地下以上に好ましい場所はない」

「これは一体……!」

「ただの女型アンドロイド機体の残機だ」

広い空間には所せましと人の入れる大きさのカプセルが安置され、その中には人の形をしたものが入っていた。カプセルの中の人は概ね女性が多く、その女性の多くはどこかで見たような覚えがある顔な気がした。でも一体どこで……?

「こつちだ」

「えつちよ……!」

「百聞は一見に如かず、今は話が優先だ」

彼女はスタスタと歩き始め、俺も慌ててそれについていく。カプセルの間を縫う様に歩く。カプセル以外に部屋にあるものは「工務室」「サーバールーム」「倉庫」と書かれた扉3つと何も書かれていない扉が一つあった。

「あの部屋は私の私室だ。基本入れない様になってるからメールをお願いする」

鉄扉の中は見えず、彼女の自室はどういう物か全く分からないまま俺達は工務室に入る。そこは無機質な材質の巨大なパソコンと大量の工具が棚に並べられ、多くの作業台と一つの手術台が設置されている。奥には更に部屋が分岐し「倉庫」「精密作業室」「実験室」に続いている。

「手術台……血の臭いはしないけど物騒な部屋だな」

そこから更に「実験室」に入る。地上の洋館の広間並の広さに匹敵し、内装も広間に似た豪勢な雰囲気のある部屋である。

「ここが実験場ですか?」

「そうだ」

「実験室にしてはちよつと豪華ですね」

「当たり前だろう。本番を想定すればこうなる事は必然だ。それよりも席に座れ」

蕾さんの指差す方向に目をやると月輪先生が椅子に座り微笑みな

がらこちらを見ていた。俺達も適当な椅子に腰かける。すると月輪さんが俺に向かつて口を開く。

「あなたはここまでこの豪華な洋館には似つかない存在見たはずです。」

「それは……」

「まあ、大体想像がつくでしょうね。この洋館は水竜の研究施設も兼ねています。」

月輪さんの言葉に蕾さんは少し眉間にシワを寄せたが特に言及する事もなく話を続けた。

「私もただ歴史館の館長をしているわけではありません。あの資料館も水竜コーポレーションの施設です。私もまた竜に関わる研究をしています」

「何をしてるんですか？この洋館を使って……」

「黎人君、先に私の話を聞きたまえ」

蕾さんは俺の質問を遮り語り始める。

「君はその体から本当に人に戻る気なのかい」

「はい、世間体もありますし早く社会復帰して大学に戻りたいです」

「それは君の本心ではない。あくまで『世間』の為の答えだ。私は君がどうでありたいのか知りたいのだよ」

被せ気味に否定された俺の願望は否定された。でも俺のこの願いは思えば彼女の指摘する通りなのだ。よく考えなくても俺は二エとひいろの仲を取り持ち続ければ何不自由なく生活できる。

そして改めて考えるとこのまま現状を維持すれば生活にも困らないのだ。先日の逃避行で街へと出歩いてでも大した問題とはならず年齢以外は特に問題は無い。つまり竜でいることに欠点は存在しないのだ。

「……………」

それも、少なくとも先程の月輪先生の足を見るまでは。彼女の足は明らかに人外であり異形である。それを蕾さんが態々見せた。加えてこの部屋までの道中からも考えるに俺は良くて警告、悪くて脅されているのだろうか。黙り込んで答えを考えると痺れを切らした

蕾さんが再び話す。

「沈黙、と。ならば聞き方を変えよう。君は人に戻って何がしたい。家族に会いたい、友人に会いたい、恋人が欲しい。君にそんな願いはあるかね」

「！それは……」

それは決して無いとは言いつれない当たり前の願いだ。しかし本当に親しい仲の友人には打ち明けているし、家族にも特に執着は無い。俺には竜から戻る理由だけでなく人である理由もあいまいな物であったと自覚してしまった。俺の中で最後の人間の尊厳が崩れなかったその時、

「だから私は君に願いを与えよう」

蕾さんが机に瑠璃色の水晶を置いた。深海のような透明な暗色は只美しいだけでなく普通ではない感覚を感じる。そして俺は本能的にそれが何なのかを理解できた。

「これは私の竜秘宝だ。只鑑賞するためだけの意味の無い物では決してない」

「桐生さん!いくら何でも代価として差し出す物ではありません!」

月輪先生は慌てて止めに入るが、蕾さんは竜秘宝をしまいながら首を横に振って止めるように促す。そして確信めいた応答に月輪さんは押し黙った。

「君は竜に興味があるかね。もし君が利用法を説明してくれるのならば私はこれを喜んで君に差し出そう」

「……本当にですか」

「君が竜の叡智をどう使うのかかはつきり言っただうでもいい。しかし君が竜を望むのであればお互いに仲間として協力してもらおう」

俺はその提案に思わず唾を飲み込む。この人が味方になってくれるのは正直ありがたかった。何せ今までメールで何度もお世話になって正体を知った上で協力してくれるという事は信用していいと思う。だけど一応はこれを聞いておく。

「断ったらどうなりますか」

「騙して悪いが……とは苗床がうるさいからな。単純に何もなかった

体で過ごしてもらおう」

蕾さんは表情一つ変えずに答える。物騒な冗談以外は嘘をついてのような様子はない。しかしもう後戻りはできないと悟り俺は覚悟を決める。

「分かりました。竜秘宝を俺にください。人に戻る必要が無くたって俺は俺の意思で人に戻ることを願います」

俺の言葉に蕾さんは微かに微笑むとポケットからIDカードを取り出して俺に手渡してきた。「水竜」のロゴと俺の名前が書かれている。

「では契約成立だ。それはこの部屋へのIDカード、私の部屋以外はどこにでも入れるようになってきている。これで君も私達の仲間入りだ」
こうして俺は本格的に人に戻る為の活路を見出した。竜秘宝の謎を解き俺は人の体を再び取り戻す。それがどれほど難解でこれから先どうなるかは分からないけど、それでも前を向いて生きていこうと思った。

で、第一歩は踏み出せたとして彼女らからはまだ話があるらしい。というより仲間になって初め話せることを今から教えるそうだ。俺は少し緊張しながら彼女達の話を待った。彼女らは俺の事をじっと見つめる。さつきまでの雰囲気とはまた違い真面目な雰囲気だった。蕾さんはしばらく俺を見ていた後に視線を外し、そして一呼吸おいてから口を開く。

「さて、まずは私の正体について少し話す。月輪が水竜の者であるように私もただ苗床の世話をしている訳でない」

「まあ、ですよね」

寧ろ道中であれだけの怪しい物を見せられてただのメイドだと信じる気は揺らいでいる。工房とサーバールーム、そしてメイドの「予備」が置いてある地下室を見ればそれは明らかだ。

彼女は席を立ち俺達から少し離れると服の袖をめくる。一見すると多少筋肉のついた普通の腕だが彼女が腕を勢いよく振るとまるで液体のように形を変えて、そして一瞬にして機械の腕になった。左腕には銃、右手には細く長いチェーンソーが腕の代わりに生えている。

蕾さんの体は全身が義手、義足、そして機械のパーツで構成されていた。その姿を見た俺は思わず息を呑んだ。

「改めて紹介しよう。私は水竜コーポレーション特殊機動部隊所属対神戦闘部隊技術部担当『機龍【激雷】』だ」

彼女は水竜コーポレーションが極秘で所有する特殊部隊のリーダーで技術開発と人外との戦闘を担当する。普段はメイドの義体の開発を進める一方で今回の駅前のニエの鎮圧も彼らのお陰であった。

彼女の自己紹介を聞き、驚きつつも内心どこか納得している。あの時ニエが彼女が竜だと指摘したのは本当だったのだ。それでも人外のベクトルがこうであるとは思っていなかったのだが。

「でも、どうして今まで正体を隠していたんですか？ 別に隠す必要もないじゃないですか？」

「竜に二回殺された人間が初対面の竜を前に何をするかまでは私にも分からなかった、それだけだ」

彼女は腕を仕舞いながら答える。確かに、状況が状況であれば俺なら絶対に逃げ出してる。それを思えば彼女達が俺の前にこの姿を現さなかった理由は理解できた。

彼女の紹介が終わりお次は月輪先生の番だ。

「私は新鳴葉駅前歴史記念館館長兼水竜コーポレーション特殊部隊神学研究部神学部門に所属しています」

彼女は主に竜と竜の住む次元について研究しているらしい。彼女曰く獣の足もその過程で手に入れたものであり特徴的な服装も色々あったらしい。

「そういえば、あの足って本物の動物の足なんですか？ 蕾さんみたいな義足とかじゃなくて」

俺はふとした疑問を口にする。

「ええ、本物ですよ。もしよかったら触っていますか？」

彼女は自分の足を指差して言う。正直、少し興味があったのでお願いした。彼女は椅子に座りながらスカートを少したくし上げる。下からちらりと見える足先は毛皮に包まれた獣の物で、毛並みはとても良く、手に触れる感触はふかふかしていた。

「これは何の動物ですか」

「狐の仲間です」

「狐、こんな触り心地なんですね」

俺はその手触りの良さに感動しつつこの感覚を堪能し続けていると時折くすぐったそうな声を上げる。感覚はあるらしいからやはり本物らしい。

――

「さて、新たな仲間が我々に加わったことでやっと本題に入れるな」

蕾さんは真面目な雰囲気です話し始める。

「まずは月輪にいい報告がある。黎人は神の可視領域だった。しかも2柱どちらの姿も見えている。戦闘能力には乏しいが即戦力の人材だ」

蕾さんの言葉を聞いた月輪先生の顔がぱっと明るくなる。どうやら俺の存在は嬉しいようだ。

「ありがとうございます。これで私の研究も捗るでしょう」

「次に、ニエの件だが治療ついでに奴の血液サンプルを採取することに成功した。これにより我々は苗床に対しての有効だがまた一つ増えるかもしれない」

蕾さんの表情からは自信が伺える。だがどこか言葉に違和感がある。まるで何かひいろが敵みたいな言い方だ。嫌な予感が頭をよぎる。

「あ、あのー！」

俺の声に皆がこちらを見る。

「有効打って、ひいろは俺達の敵なんですか」

「いいえ、彼女は敵ではありません。ですが……」
「彼女は敵でもなく見方でもない。ただ厄介で処理に困るだけだ」

「そんな言い方しなくても！俺はひいろを大学で見ってきたから知っている。アイツは悪い奴じゃない！ニエの事になるとかなり性格が荒れるけれど、根っこの部分はかなり優しいはずだ！」

俺が熱くなっている横で月輪先生はとても悲しげな顔をしていた。
「黎人君、ここまで手の内を見せたのなら遅かれ早かれ知ることになるだろうが君には伝えておく」

蕾さんは相変わらざるの無表情で彼女は口を開く。それは、簡潔で分かりやすく、あまりに衝撃的な内容であった。

「私達の任務は『苗床の処分』と『竜秘宝の利用』だ」

殺人鬼もたまには甘えたい？

苗床の抹殺、覚悟して踏み込んだ俺の覚悟を踏みにじるような無慈悲な現実。人に戻るといふ目的を改めて決めた俺を地獄の底に叩き落した蕾さんの無慈悲な言葉は少し堪えた。あの後も二人からの説明があつた筈だが先日的心労からストレスが限界を迎えて放心状態で全く頭に入つてこなかった。結局俺だけ先に部屋から追い出されて話し合いは終わった。

月輪先生から復習にと退室時に渡されたテキストを机に雑に放り投げて俺は自分の部屋に帰りベッドに倒れる。ふて寝をして現実逃避を試みる。しかし自身に降りかかる昼間の日の光が日陰になるまで経つても眠りに落ちる事はなく、寧ろ胸のわだかまりはより悪化していた。

「……どうして、俺がアイツを殺さなくちゃいけないんだ」

そう呟いてみても答えてくれる者はいない。虚しさだけが募っていく。そもそも何故殺す必要があるのか？彼女は竜とは気づかないほどに人として生きた。俺も彼女に何度もお世話になった。周りの奴も彼女を頼つて信頼されていた。なのに、何が悪くてアイツを殺さないといけないのかが納得できなかった。

俺は考える事を止めたくて、寝返りを打つ。すると、視界の端に雑に置いたせいで崩れた資料が目に入る。それを寝ながら拾い上げてページを捲ると、無性に怒りが沸いて紙を破る。ビリビリに破り捨ててもなお腹立たしく思い、紙屑を投げ飛ばす。

こんなことをしても意味はない。だがやり場のない怒りをぶつける先はどうでもよかった。紙屑がごみ箱から外れたのを見届けた後で俺はもう一度ふて寝する。

だがやはり目を閉じて眠ろうとするが一向に睡魔が訪れず苛立ちが募つてゆく。そして、暫く時間が経つた後、部屋の扉をノックされる音が聞こえてきた。

「……今は、構わないでくれますか」

俺はぶつきらばうに答える。すると相手は何も言わずに去って

行ったように静寂が訪れる。俺は今度こそ眠れるかと思った矢先に再び扉をノックされた。

「……誰です？」

不機嫌さを隠さずに尋ねると今度は返事が来た。

「レイト、入るよ」

ニエの声!?!慌てて起き上がると同時に扉が開かれ、彼女が入ってくる。

「なっ……」

動揺している間にニエは部屋に入ってきた。彼女は数日前の戦闘での大怪我で療養中だった。包帯やギプスなどを付けていて痛々しい姿だった。急成長もある程度元に戻り体格は俺とほぼ同じくらいで髪色も赤く染まり白いメッシュの様になっている。

「ど、どういうことだ。お前、その怪我じゃまだ動ける状態じゃないだろ」

「そうね。まだ治った訳じゃ無いけど、どうしても話したかった」

彼女はベッドの上に座る俺の隣に座ってきた。彼女の甘い香りと血の生臭い臭いが混ざっていて鼻腔を刺激する。思わず顔を背けてしまう。

「そんな顔しないで。今は殺そうとなんて考えてないわ」

「いや、そういうことではなくてだな……」

言い淀んでいるとニエは突然俺の手を握ってくる。その手はとても温かくて柔らかくて滑らかで心地よい感触だったが、俺はそれに反応できないほどに混乱していた。

「ねえ、私の事嫌いになったの？」

上目遣いに聞いてくる彼女に対して首を横に振る。

「いや、別に嫌いになったとかではないけど……ただ、なんというか……」

煮え切らない態度に業を煮やしたのか、彼女は掴んでいた手を離すとそのまま抱き着いてくる。俺は抵抗できずにされるがままになるしかなかった。

「怖かったでしょ、私。あなたをまた殺して」

耳元で囁かれる言葉は優しく慈愛に満ち、どこか悲しげだった。

「本当にごめんなさい。許して貰えないのは分かっている。だけど、謝らせて。ごめんなさい」

抱きしめられているため表情は見えないが声は震えていているように思えた。

「……分かったから。もういいから、離れてくれ」

そう言うと、二工はゆっくりと離れた。

「ありがとう。でも、私が怖いなら無理しなくて良いから」

微笑みながらまた隣で横になつて寄り添ってくる。抱き着いてはいないけれど先程よりも密着して来ていて距離感は左程変わらない。視線を合わせずらいから視線を体に移すと痛々しい怪我の治療の痕が見えた。特に腹は余程怪我が酷いのか体を曲げる動作がかなり緩慢だ。

「でも何で今回だけ謝ろうと思ったんだ。初めて会った時だって、その次もお前は何も言っていないじゃないか」

ふと気になつた疑問を彼女にぶつける。今までの死亡では彼女がここまで反省して謝るようなことはなかったのに。彼女はしばらく答えずらそうに沈黙し、やがてぽつりと呟いた。

「それは、その……私にも分からないわ。ただ、すごく不安なの」

普段と違いしおらし気に俯く彼女を見ると、つい頭を撫でてしまった。それを見て彼女は驚いたような表情をした。

「なっ、何をするの!？」

「お前らしくないな。いつもみたいに勝手に押しかけてきて好き勝手にやってくれないと俺も調子が狂う」

そう言うと彼女は少し不満げな顔でこちらを見つめてきた。

「しようがないじゃない! 私も何でこんなに黎人が心配なのか分からないのよ!」

「少なくとも今みたいな弱々しさはないと思うぞ」

「ふん! 馬鹿にして!」

頬を膨らませそっぽを向いてしまった。でもどうやら元気を取り戻したようだ。やっぱり二工にはこうやって騒いでいる方が似合っ

ている。

「それで、今日は何の用なんだ？まさかそれだけって訳じゃ無いだろう？」

「もちろん。ちゃんとした理由があるわ。しかも割と朗報よ」

彼女は得意げな笑みを浮かべる。

「でも！今スグには教えられないわね」

俺の反応を楽しむかのように悪戯っぽい笑顔を見せる。

おそらく何かしらの条件を提示して俺に協力を求めようとしている。二工は俺の手を取り頭に俺の手を載せた。そして俺の手を自分の頭の上で動かした。

「……もう少し、私を撫でなさい。もし少しでも手をと止めたら教えてあげないから」

なるほど、そういうことか。俺は彼女の要望通りに優しく、丁寧に始めた。すると二工は気持ち良さそうな顔をした。

「ねえ、もっと強くしても大丈夫だから」

言われた通りに力を入れると二工は目を細めて嬉しそうだ。まるで猫のような反応をする。

「んうー、きもちいい……」

普段はあまり感情を見せないが、今は心底幸せそうに見える。そんな姿を見るとこちらも悪い気がしない。しばらくで続けていると二工はまだ満足しないのか俺の手を頬擦りする。

「ねえ、まだ駄目なお？」

甘えるように上目遣いで見てくる。勿論断れるはずもなく要求に応えると二工は蕩けたような声を出した。

「ああっ、いい、気持ちいいね」

なでなでというよりマッサージに近い動きだが、それでも二工にとっては心地よいらしい。

「あつ、そこは駄目、あんまりされると、癖になりそうなの……」

「変になってもいいんじゃないか」

なでなでを続けながら冗談半分で言う。しかし二工はそれを聞い

ても特に嫌がったりせず、素直に受け入れていた。指先で軽く角と耳に触れてみると、ぴくんと体が跳ねる。

「ひゃうんっ、そこは、敏感なところだから……!」

「へえ、(こ)弱いんだな」今度は両手を使って左右の耳に同時に触れる。

「ふわああ……!」

二エの顔が真っ赤に染まり呂律も回っていない。普段の姿からは想像できない乱れっぷりだ。

「ほら、もう止めちゃうか?」

「う、ううっ、うう〜!」

意地になっているのか俺の問いかけに対して首を横に振っている。どうやら止める気は無いみたいだ。それならこつちにも考えがある。俺は二エを抱き寄せて膝の上に座らせた。

「きゃ!?!ちよ、ちよっど何するのよ!」

抗議の声を上げる二エを無視して頭をまたなで始める。先程よりも少し強めに。すると二エは体を震わせている。どうやらかなり感じやすいようだ。

そのまま続けると二エの呼吸が激しくなり体の震えも大きくなっていく。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

息づかいは荒く顔も紅潮している。その様子はとても色っぽく、思わずドキツとする。

「お、おい?..だいじょうぶか?」

流石に心配になって声を掛ける。すると二エは潤んだ瞳でこちらを見つめてきた。

「早く、お願い」

切なそうな声で懇願してくる。俺は二エの願いに応えようと再び手を動かし始めた。すると彼女はビクンツと大きく痙攣して背中を大きく反らす。

もうそろそろ十分だろう。そう思い手を止めようとする二エは俺の手首を掴み、俺の指を口に含んだ。

「えへ、黎人のゆびおいしい」

ちゅぱっ、じゅぷっ、ぺちやつ、れろっ

「ちよ、おまそれは……!?!」

慌てて手を引つ込めようとしたが、その前に彼女は俺の人差し指と中指をまとめて口に含み、舐め回し始めたのだ。舌が生き物のように這い回り唾液まみれになったところで今度は口の中で吸い付くようにしてしゃぶってきた。

「ふむうっ、んく、ちゅうっ」

「二エ……?」

何とか引き剥がそうとするも、意外にも力が強すぎて全く離れる気配がない。それどころか逆に腕を掴まれてしまい、さらに奥までくわえ込まれてしまった。くすぐったさと愉悦が入り混じった感覚に思わず身震いしそうになる。

「二エ、ちよつとそれ以上は……」

「やら、まだたりない」

曰く完全に駄々っ子モードに入ってしまったようだ。こうなったら何を言っても聞かないことはこれまでの経験でよく知っている。止めさせたとしても実力行使されるだろうし放置する。仕方なくされるがままにしていると、彼女はついに俺の指を根元近くまで飲み込んでしまい、喉の奥に当たる感触があった。

「ぐ、げほっ……ほー!」

どうやら苦しかったらしく咳き込み始める。流石に見ていられなくなり、すぐに口から指を引き抜いた。

「けほっ、こほっ」

「満足したか?」

「……………ええ、もういいわ。ありがとう」

ようやく落ち着いてくれたようで、先程までの様子が嘘だったかのよういつもの彼女に戻っていた。

「まったく何考えてるんだよお前は……」

そう言いつつ俺は彼女の頭を軽く小突いてやる。すると彼女は少しだけ頬を膨らませて抗議してきた。

「むう……下僕の癖に。でも満足したし約束通り教えてあげるわ」

ニエはベッドから降りて椅子に座り直す。そしてそのまま脚を組むとスカートが捲れて下着が見えそうになったが、本人は気にしていないようだったので黙っておくことにした。俺もいつになく真剣な彼女に釣られて姿勢を改め、ニエの話を聞く体勢に入る。

「ここ2日、私の大怪我を治すのに結構派手に手術してたの。メイドが体をいじったり苗床が肉を擦り込んだり色んな人が出入りしてた。それで偶然私はある事に気が付いた。何だと思う？」

ニエの質問に対して俺は首を傾げる。そんな俺の様子を見た彼女は呆れた様子を見せた。

「実はお医者さん？だっけ。人間の体の専門家みたいなのは一人もいなかった。半分くらい意識が無かったから目覚めてからになるけどね」

「そうなのか」

「ええ、人間の医者がどういうのか知らないけど少なくとも話で聞いたような白いのは見てはない。あなたにこの意味が分かるかしら？」

「意味……あ！もしかして……」

彼女の言葉を聞いてハツとする。この家の地下には蕾さんの作成した用途不明のアンドロイドが保管されていた。ニエの話から察するに恐らくあれらが医療行為を行ったのではないだろうか。恐らく彼女の技術であればアンドロイドの高度な外科医療は可能だろう。

「そう、メイドは恐らく人間じゃないの」

「（……道理で態々連絡はメールと指定する訳だ。メイドを地下のサーバー管理してるなら直接会わない方が効率的だよな。メールの返信が早いのも納得だ）」

「それで私は考えたー」

ニエは大きく息を吸い込むと、それを吐き出しながら言った。その表情はとても晴れやかなもので、まるで自分の考えが正しいと確信している。ニエは自信満々と言わんばかりに大きく胸を張りながら、こう続けたのであった。

「ずばり、メイドの正体とは苗床の子供よー」

「……はい？」

あまりに予想外の答え過ぎて思わず素が出てしまった。だがそれも仕方ないだろう。何故ならば目の前の少女は、さも当たり前のように想定と別のベクトルとんでもない事を言つてのけたのだ。俺の反応を見てニエは不機嫌そうな顔をする。

「ちよつと、反応薄いわよ。もつと驚くところでしょうが」

「いやだつてなあ、実s……」「うるさい！とにかくメイドは人間じゃなくて子供なの。きつと凄く重要な事に違いないんだから！」

ニエは俺の言葉を遮ると、また駄々をこねだした。だが危うく機密を彼女に漏らしかけたから間一髪で止められた。危ないところだった……。ニエをなだめる為にどうしてそう思うのか優しく聞き出す。するとまた彼女は得意げに語り始めた。

「いい？ 個体差の大きい竜の生態を熟知して、それに合わせて治療を施すなんて普通の人間には出来ない芸当なの。それにあの子達、私を治す時なんか特に丁寧で傷跡一つ残さないように慎重にやってたわ」「あー、俺も前に気になって一人に聞いてみたら人つて言つてたぞ」「……ええーうそお!？」

俺は蕾さんとの約束の為に彼女に嘘をついた。本当は彼女の知らないまた別の秘密があるのだが今は置いておこう。

ニエは自分の予想が外れた事にショックを受けていた。そんなはず無いと小さく燦りながら涙目になっている。やがて諦めがついたようで肩を落としてため息をつく。そして再び椅子に座った。

「でも……そうなる普通と普通に竜に詳しい人間がいたのかしらね」「どうなんだろうな」

ニエは少し考える仕草を見せるが、すぐに首を振って否定を示した。

「いいや、詳しいどころではないわね」「どうして？」

ニエは再び口を開くと、今度は確信に満ちた声で話し始めた。「あいつら、昔の私を知つてた」

追憶

「二エの過去？」

「ええ、私って結構適当にあっちでは過ごしてたの。まさか後をつけるようなのがいる事自事結構の衝撃だったわね」

「過去……」

俺が彼女についていくつか知っている事がある。彼女が自ら触れた殺戮の末竜の仲間内から追い出された事と、つい数時間前のひいろから言及された情報だ。

黎人さん、もし多くの竜が知る餐龍の姿があの夜の彼女だとしたらあなたはどう思いますか

「……」

「私も苗床から伝え聞いたのかなってはじめは考えてたけど……そもそも苗床とは比較的最近出会ったばかりなの。あ、最近と言っても人間からしたら相当長い期間よ」

「じゃあ、苗床は出会う前なのに二エを知ってたのか？」

「概ね、そういう認識でいいわね」

二エは腕を組んでうんうんと相槌を打つ。だがその表情はすぐに曇ってしまった。

「だから不思議だったのよねまさか……」

彼女はそこで言葉を切ると黙り込んでしまった。何か考え込んでいる様子だ。しかし俺にはそれが何なのか分からなかった。

「……いいや、ここから先は一旦私が自力で調べてくる。」

二エはそう言うなり俺の部屋から出て行った。去り際に扉を閉める音が妙に大きく響いた。

「結局どういうことなんだろ」

俺は一人残された部屋で呟く。

バンツ！

「レイト！ゴメン！」

直後、勢いよくドアが開くとニエは息も絶え絶えに入ってきた。額に汗を滲ませて息が荒い。どうやら全力疾走してきたようだ。ニエが呼吸を整えていると扉の向こうからひいろの声が聞こえてくる。

「緋刃さーん♡勝手に病室から逃げ出すだなんて余程飽き飽きしていたのですね。なら私がお相手いたしますよ♡」

ガチャリと音を立てて扉が開かれる。満面の笑みを浮かべるひいろがいた。そしてそのままニエの元へ駆け寄るとその首根っこを掴み引きずって行く。

「ちよっ!?!離してよ!!」

「外出は傷が塞がってからですよ♡」

抵抗するニエだったが、ひよりの力の前になすすべなく連れ去られていくのであった。そして廊下からニエの悲痛な叫び声だけが虚しく響き渡っていた。

「あれがヤンデレって奴なのか?」

俺の問いに答える者は誰もいなかった。

あれから数時間、ニエは俺に泣きついてくることはなく日が暮れた。それから一人で夕食を取り

風呂に入る。

脱衣所で服を脱ぎ広い浴室に入ると湯気が身体を覆う。少し熱めのお湯に浸かると全身の疲れが取れて行くような感覚を覚えた。しばらく浸かると、心理的にも落ち着いたのでか蕾さんと月輪先生との事を思い出す余裕ができた。

「苗床、ひいろの『処分』。水竜特殊部隊が抱える長年の課題……」

彼女らとの会話を反すうしながら天井を見上げる。そして目を閉じて思考を巡らせる。確か彼女はこう言っていた。

『え?どうい事ですか?苗床の、処分?ひいろを殺すって意味です

か!?!』

蕾さんに詰め寄り真意を問う。俺は間違いであってほしかった。いくら不死とはいえ友人のひいろが物のような扱いをされるのに心底腹が立つ。だが煮えくり返る腹の内を本当に言葉の通りなのかするるように彼女に真実を求めてしまう。それでも彼女から返ってきた答えはあまりにも残酷だった。

『そうだ。君からすれば友人を殺すと同義だが私達水竜にとっては彼女は忌むべき者でしかない』

淡々と事実を述べるように告げられるその言葉を聞いて俺の中で怒りが爆発した。

『ふざけんな!!何だよそれ!!!』

感情のままに怒鳴り散らす。今この場で殴りかかってもおかしくないくらい頭に血が上っている。それほどまでに彼女の発言は俺にとって許せないものだった。

『落ち着いて下さい、洋野さん。お気持ちは良く分かります。ですがこれは必要な手順なのです。それに、ひいろ自身も了承していますよ』

咄嗟に立ち上がり俺の肩に手を置き宥める月輪先生。だが俺の心はまだ収まらない。

『納得できるかよ!!!』

そう言って手を振り払い、蕾さんに掴みかかろうとしたその時、俺の手が届く前に蕾さんの拳が眼前に迫っていた。鈍く重い音が響き、目の前で火花が散る。そのまま壁に叩きつけられ背中を強く打った。一瞬息が出来なくなり、呼吸困難に陥る。

『実験プロトコルの完遂には私達が必要だ。仕事の邪魔をするのであれば私も君に容赦しない』

『洋野くん、落ち着いてください!今のあなたでは勝てません!』

月輪先生の声を聞き冷静さを取り戻す。確かに今の状態で戦っても勝ち目はない。俺は深呼吸をして心を落ち着かせると蕾さんに向かって頭を下げた。

『す、すみませんでした』

謝罪の言葉を口にする、『早く座れ』と遮られた。そのあまりに淡々と話す彼女の口調がより一層真実味を増していた。俺には彼女がそこまで冷酷になれる理由がわからず、事実を受け入れられなかった。

『屍龍【苗床】は先代の水竜の研究者が生み出した竜だ。彼は生物学と神学の分野で多大な功績を挙げ、だが今の苗床という竜を作り部隊を退いた』

一拍置くと、ひいろ月輪先生の顔を見て話を続ける。

『しかし、彼の研究には不可解な点が多くある。とりわけ彼は生物学的な死を超越する事に重点を置き、遺伝子操作から竜の体の移植、禁忌とされているものに出すのもいとわれない。そして何より何故彼がそのような事をしたかは不明だ。ただ最後に私達に彼を預け、処分できずに彼女をここに閉じ込めている』

そこまで言うのと再び口を閉ざしてしまう。その顔は相変わらずの無表情で詳しく何を考えているか読み取ることが出来ない。彼女の言葉が止まったら続けて月輪先生が語りだす。

『神学の方面でも彼は原初にして異端でした。竜の研究と並行して、彼は何かに取り憑かれたように研究に取り組んでいたそうです。結果彼女は竜秘宝の外部への影響の大ききを見抜き、その欠陥を研究しました』

そこで言葉を区切ると苦笑いを浮かべる。

『ですが彼がいたからこそ、私のような新たな神学者が誕生しました……っつて』

『おい、黎人君、さつきから呆然としているみたいだが大丈夫かい？』突然話しかけられハツとする。どうやら考え込んでいたらしい。

『えっと、はい、なんとか理解できています。ただ、少し混乱してまして』

そう言つて曖昧に笑うことしかできない。正直なところ俺はまだ完全に納得出来ていない。それどころか、未だに受け入れられない部分もある。そんな事を考えながら視線を落とす。

そこには先程までなかったはずのものがあつた。それは俺の手の

中で強く握り締められている拳だった。爪が深く食い込み血が流れ出ている。

こんなにも痛むならいつそ夢であつて欲しいと思う。けどこれは紛れもない現実なのだ。

『君、今日はもう帰りなさい』

唐突に言われた一言に思わず顔を上げる。すると、目の前にいる蕾さんは無表情のままこちらを見ていた。

『君は今冷静じゃない。それにこれ以上ここにいても時間の無駄だろう。今日の所は帰って頭を冷やせ』

『え、で、でも!』

『洋野さん、私からもお願いします。あなたには休息が必要です』

俺の言葉に続くようにしてひいろ月輪先生の声が聞こえてくる。俺は何も言えず黙り込むしかなかった。確かに二人の言っていることは正しい。俺だって本当はわかってるんだ。今はどんなことをしても意味がないということくらい、だからといってこのまま引き下がるわけにはいかない。

『分かり……ました』

しかし、俺はそれだけ言うのが精一杯だった。それ以上何も言わず立ち上がると扉に向かって歩き出す。

――

「あの時俺は何をすれば良かったんだろう」

俺は自分の無力さを改めて実感した。俺には戦う術がない。だから俺には何もできないのだ。

「せめて俺にできることは」

俺はふと、彼女の角に触れる。

「この角さえなければ俺は普通の人間として生きられたかもしれない」

そう思うと俺は急に恐ろしくなった。

「こんな化け物になるくらいだったら俺は」

俺は角を握りしめるとそれをへし折ろうと力を込める。力を入れて角を握ると水風船のように形を変えて弾け飛んだ。角から白い液

状のものが飛び散り床一面に広がる。

……あ、やっべ。衝動的にやっただけどこれ掃除しないとヤバイよな。でも今から拭いたらまだ平気だろう。俺は慌ててモップでそれを拭く。幸い誰もいないからいいものの誰かに見られたらどうなるか分からない。

そんな事を考えながら作業をしていると何故だか気分が少し晴れた。

「これでよしっ」と

それから何事もなく俺は部屋に戻る。そして月輪先生からのテキストをまた読み返すと2回目だからか以外にも簡単に読むことが出来た。まるで俺の頭から悪い門のがスーッと抜けたような感覚だ。だからか読み終えた後そのまま寝ようと思ったのだが、なんだか落ち着かない。俺は仕方なく布団に入ったがまだ眠くないのでスマホで動画を見ることにした。

「うーん、やっぱリアニメって面白いなあ。深夜枠も侮れないぞ」

俺が見たのは異世界ファンタジーもので勇者が魔王を倒すというありきたりな内容だったがそれが逆に面白かった。こういうのを見ると自分がいかに狭い世界で生きているのかがよく分かる。

そして次の動画に進もうとした瞬間広告が流れてくる。それは鳴葉稲荷の観光案内であった。

「……………鳴葉稲荷、狐のあの人達にお礼に行かないとな」

その動画を見た途端、俺は自然とその言葉を口にしていった。あの駅前で出会った彼女らは俺に救いの手を伸ばし、その後も二エの鎮圧に協力した。俺は黒髪の子が逃げろと言ったのに俺は態々断つて挙句死んでしまった。もし出会えるのならそれだけは伝えておくべきだろう。確か白髪の子が我らに会いたくば鳴葉の社へと参れ、最後にこう言って去って行ったと俺は覚えている。

「週末に行くか、神社」

「鳴葉稻荷」 狐誘う因果の神域

週末、天気は雨。ザーザーと降る雨の中大通りで車を降りて傘を差す。厚い雲に覆われた空が光の多くを遮り暗くする。

今日は隣には誰もいない。二工はベッドで療養中、ひいろは珍しく水竜の本社に用事があるらしく外出、蕾さんは家で仕事をしている。ここへは俺だけで来ている。

久しぶりの鳴葉稻荷は試しに少し離れたところから歩いて向かうことにした。古い建物と新しい建物が入り混じり鈍色の空もこれまた趣深い雰囲気だ。人も普段より少ないからか静かな街に雨音だけが響く。何だかいつもとは違う所に来たみたいだ。

……本当に、違うところみたいだ。よくわからないけれど神聖さ、というのが普段とは違う。物の解釈というか発見力に関してより聡明になってきている。竜となってからも不思議な事は無数にあるもこれは前回の死亡から起きた現象だ。

「……」

「……」

だから今日が雨で心底良かったと思う。霧がかつているお陰で視界が悪い。角を傘で隠しながら神社前的大通りを上る。人が少ないとはいったものの少なからず人が訪れているらしい。お土産を買う人や雨が止むまでカフェで待つ人が見て取れる。その店の明かりが薄暗い通りを照らす。

途中、通行人とすれ違った。何てことはない、観光の日と雨天の被った観光客らだ。ビニールの傘とスマートフォンを持つ。稲荷で買ったお守りも付けていた。天気と反して騒ぐ彼らを避ける。

「……」

誰にも気づかれないう彼らを目で追う。勿論彼らに何かがあるわけではない。ただ不思議と目で追っていた。どうしてだろうか、敵

意を向けられたり何か異常な存在でもないのに今は彼らにえも言われぬ感覚を感じていた。

認知した現象を強いて言うのであれば、鼓動が少し早まった位だ。

「……………」

いけない、服が濡れてしまう。雨が強くなる前に神社に向かおう。大通りの突き当り、鳥居をくぐり川のように水が流れ落ちる石段を登る。凍えるような寒さに手が震える。濡れた尻尾も湿度が高いせいか膨らみ重い。対照的に頭の角は軽い。あまり意味は無いが。

階段を登り切り境内に着く。ここには今は人がいない。今朝の観光客が最後だったらしい。まだ昼間なのに、不思議な事もある物だ。しかし唯一明るい授与所には俺の見知った顔がいた。

「やっほー」

「ナツメ、久しぶりだな」

巫女服の彼は俺に向かつて手を振る。

「ようこそ鳴葉稲荷へ。どんな用？」

「あー……知り合いとここで待ち合わせだ」

「へー、雨の日なのにぐっ苦労様」

知り合い、嘘はついていない。命の恩人の神様というのが実際の真実である。自身が竜であると知っているなら言ってもいいかしれないもが……まあ、余計な事は言わない方がいいだろう。

彼には以前神殺しと竜因果の覚書を貸していた。今の件とはあまり関係はしないけれど少し気になって聞いてみた。それに月輪先生にも研究を頼まなければいけない。

「あーあれね。結構面白い事書いてあったよ」

「例えば？」

「竜の生態とか竜の住む次元について。だけどあまりあてにしない方がいいかもね。だってあの本は文字通り『覚書』でしかないからね」
「覚書……つまり意味通りただのメモなのか？あんな分厚い本がか？」

「うん、内容的に別の研究資料を書き写した物みたい。書き出しから数ページの部分だけは本を丸写しだから固い文章だったけど30ページくらい先からは大分文体が変化してる」

つまりあの本は粗製の二次的な資料だということのか？そう思うと急にあの本の重要性が俺の中で薄れてくる。が、すぐにナツメの言葉の真意に気が付き思い直す。あの本は書き写した物、つまり何か元なる文書が存在するという事だ。

「Yes♪ だからまだまだ希望はあるね。ああ、少し話しすぎた。今は待つてる人がいるんだっけ、彼らが何か知ってればいいね」

「……ああ、だな（情報を持つとすれば水竜、あるいは今から出会うであろう狐の神様だ。知っている確率は無くはない）」

俺は振り返り社を見る。雨は更に強く、雷も鳴り響く。彼女らは会いたければここに来いとは言っていたが果たして今日は来るのだろうか。神様ならこの悪天候すら跳ね除けて颯爽とやってくる、その幻想は現実になるだろうか……いや、夢は夢であるべきだ。竜ですら徒歩で来たのだ。神だつて現実の存在だろう。

「ナツメ、やっぱり今日は帰……」

また振り返ると彼はいつの間にか居なくなっていた。電気も消え、授与所も閉まっている。声をかけても何も返ってこない。そもそも開店時間は今から1時間後だ。まさにそこには初めからそこには誰もいない状態であった。

「……ナツメ？」

まさかと思い携帯に手を伸ばす。するといつの間にかナツメからの着信が2件あった。1つは「もしかしたらこつちの方が御利益があるかも」と添えられた鳴葉大社までの地図、そしてもう1つは丁度今日やっている女兒向けのアニメを見ながらそのアニメのキャラクターのコスプレをしながらセルフ緊縛をする彼の姿であった。因みに後に知ることになったが放送時間的に絶対にありえない写真である。

もう何が何だか分からない。彼はギャグ時空の住人なのだろう。

困惑しながら俺は授与所を離れるそして神社の敷地内を適当に

回る。年末年始以外に神社など来ないから改めて観察すると中々趣深い物がある。意外な事に稲荷という名が付いているのに狐の姿が一向にない所は今日初めての発見だ。あといつの間にか萌え絵の絵馬が導入されている。

「狐の絵馬だなんて、あの子達そっくりだな」

「ああ、悪趣味な偶像だ。こんな低俗な絵になど描かれとうなかつた」ふと、上から声がした。そこを見ると狐耳と白い髪の義足の少女、鳴葉だ。彼女は神社の建物の上に座り、僅かな屋根で雨をしのいでいる。

「お主あの時の竜であるか。我ら神に何を頼りに訪れた」

彼女は俺を見下ろして高圧的に問う。

「あなたにお礼をしに来ました」

「礼？はっはっは！供物も無しに礼か！流石竜だ、身の程知らずは変わりないな」

彼女は笑いながら俺を貶す。だが別に悪意のある感じではない、寧ろ冗談のようであり彼女なりのコミュニケーションなのだと思う。

「まあいい、今は物乞いに堕ちる程我は困つとらん。人並に『信仰』はあるそうだし今は許そう」

そして彼女は一人納得して俺は許された。しかし神社に来て一つやっていないこともあるしお礼と言える物はもっているから少し彼女に献上しよう。雨の当たらないお賽銭箱に移動する。財布を出し適当にお小遣いを抜いて、箱に入れず鳴葉を呼ぶ。

「んお？どうした、我など呼んで」

「お賽銭として渡すより直接手渡ししたほうがいいと思ひまして。はい、5万円です。少ないですけどお礼としてお納めください」

常識としては高額だがひろからのお小遣いはまだかなり残っている。命のお礼として燐火という黒い狐と分合って使って欲しい、彼女に伝えて手渡しした。鳴葉は手渡されたそのお札を見ると何度かお札の枚数を一枚一枚丁寧に数え、頭での理解が追いつくと興奮で手を震わせていた。

「な、なんて愚かな真似をしよる！こんな大金、いっっちゃ悪いがこんな

ところで浪費せず考えて使うべきであろうに！」

「いいえ、命の対価としては安すぎるくらいですよ」

「そ、そうか。ならありがたく受け取っておこう」

彼女はニヤけながらお金を懐にしまう。その間ずっと信者からの供物なら仕方がない、とブツブツ呟いていた。もしかして神様って意外と俗っぽいのだろうか。見た目は本当に小さな少女なのに大金でだらしない顔になるなんてちよつと引く。

「む、何故そのように我を見る」

彼女は俺に詰め寄って頬を膨らませる。身長が足りていないせいで微妙に上目遣いでプンプンという効果音が似合う。雰囲気的に少しニエと似ている。

「あ、いえ。ちよつと……思ってた神様より「強そうか！宜しい、中々嬉しいことを言う奴だな」

「(前言撤回、ニエよりチョロい！絶対こいつ扱いがニエよりチョロくて扱いやすい！)」

他人かつ自分より遥かに強いと知ってもこの子の将来が心配だ。多分こういう純粹そうな子が黒姫みたいなのが真っ先に食いついきそうだ、確信に近い予想をした。

――

「ふーむ、お主はあの後赤き竜に殺された、と。大口叩いた割に呆気ないのだな」

「はい、そうなんです……お恥ずかしながら」

雨の神社を歩きながらを二人で歩きながらを話す。時間的にちらほらと人が増えてきた中雨音が俺達を隔離する。異質な二人だが、まるでそこに存在しないかのように見向きされぬ。

俺もそれに気がつくと思議に思う。彼女と話しながら一人不自然な光景にあたりを見渡した。

「人、先から我らは見えておらぬ」

彼女にはお見通しのようだ。もしかして神様特有の特別な力があるのだろうか。

「左様。まさか気づいていなかったのか？お主は人は元より、竜より

も我ら、それ以上に神に近き存在だ。気配くらいなら簡単に消せよう」

「はあ……えっ？」

神に近い、竜ではないまた別の上位存在だろう。しかし……謎が謎を呼ぶ、竜ですらやつと触れたばかりなのに。

「俺は……俺は誰で何なんだ……？」

自然と本音が漏れた。

「なら彼らを紹介しておこう。あれは冒瀆的な奴等で神の扱いには滅法強い」

すると彼女は俺の手を掴み突如雑木林に突っ込む。流石に想定外であり何度も泥濘んだ地面に足を取られた。豪雨に視界を遮られ……

「……あれ？」

現在位置 XXXXXX LADY

足元の石と草に気を付けながら目の前の木々を掻き分けて進む。すぐに川が見えた。木の壁を挟んだスペースにしては広い空間、その中に一本の川が流れている。

光景こそどこにでもある山の中の川だ。しかしこの辺りには川など無く、先程の雨が嘘のように森の開けた所から青空が広がる。先程とは全く別の場所に来たかのようだ。

神社の雰囲気とはまるで違う神聖な空気感に俺は呆然とする。美しい、ただ概念的に美しい。どこかで見覚えがあるような知らない光景。この感覚は今までの何からも感じられない……いや、何故だろう。あの夜の二エの狂乱に似た美しさを想起した。

「……は？」

「神域。神と竜が生まれる空間、その入口だ。ここであれば概念には昇華しない。たまに人が訪れることもあるだろう」

彼女は俺をそこに連れたいのを見届けるとすぐにさつき入ってきた道に戻る。帰り道はあるみたいだ。俺は河原を歩み川を覗く。綺麗な水が深くの水底の闇を写す。

静かな川を少し下る。水音と木々の揺れる音が響くここは心地がいい。いつまでもここで座っていたくなる。しかしつい先程誰か来たのか所々が濡れていて赤い液体も散っている。怪我か、或いは……

そして遂に誰かを見つけた。遠くの岩場に誰かがいる。自然の中にぽつんと一人、今の自分と一人なのは同じようだが彼女には存在感がある。

「……………もしかして新人の職員さんですか」

「ひいろ!? どうして体から血が……………!」

「ああ、黎人さんでしたか。遂にここに辿り着いたのですね。少々助けていただけませんか。またしくじってしまいました」

Dragon bed?

座りながら彼女の血をハンカチで拭く。彼女は全身を水で濡らしていた。入り口が同じだとして、通り道には俺以外通った跡は存在しないから川の水で濡れたことが分かる。天気予報は早朝と夜は晴れ、だから彼女は傘を持っていなかった。

彼女の傷は全身に広く分布する。複雑な傷口で何が原因でこうなったのか想像がつかない。不自然な箇所で四肢が曲がり少し体を動かすだけでも痛みで顔を歪ませていた。

「モバイルバッテリーはありますか……電池がまだ残ってるの……」
不意に彼女が聞いてきた。持つてはいるが今そんなものが必要なのかわからない。しかし、ひいろなるの考えがあつてのことだろう。迷うことなく彼女に手渡す。

「ありがとうございます……じゃあ、少し離れていてください……」
「わ、分かった！」

「もつと、10mくらい……はい、そこ……」

走りながら後ろを見るとパキツと碎ける音とともに俺のモバイルバッテリーが発火した。彼女はその火を使い無理やり傷を塞ぎ出血を止める。

「はあ……はあ……」

「ひいろ！何してんだお前！」

「内蔵を……治したいので……ゲホツゴホツ……止血しました……」

「全身燃やして何が止血だ！消火しないと死ぬぞ！」

俺は炎を顧みずバッテリーを腕ごと木材で川に飛ばした。そしてすぐに彼女を持ち上げて川に体を沈める。鼻と口は浸からないように気をつけて消火した。

「うう……ぐっ！」

バッテリーを持つ手は爛れたが彼女は腕ごと折って再生をした。それを最後に彼女は黒焦げのママ動きを止めた。俺は彼女を水から離して再び岩場で寝かせる。息は微かにあるから一応は生きているようだ。しかしそれ以外の兆候がないまま彼女は全く動かさず気の休

まらない時間となる。

「頼む……………生きててくれよ……………」

再生能力を持つ彼女に誰がここまで傷を負わせたのだろう。首を飛ばされても尚再生した彼女がここまでになるなんて。彼女は不死亡率を持ち並の事では復活する。

それから10分後、彼女の指先が僅かに動いた。関節の曲がる度黒焦げた肌が割れ落ち傷のない肌が顕になる。彼女は体に付着する炭を払い、ゆつくりと時間をかけて立ち上がった。服が焼け殆ど全裸だがそれより今は彼女が無事に生きていた事に安堵する。

「ひいろ！大丈夫か、その体！」

「ええ、心配させてごめんなさい。止血と外傷は治りましたし後は内蔵をほんの20分治療するだけです」

「そ、そうか……………」

――

彼女の傷が完全に完治する20分間、俺は今抱いている謎について少し話すことにした。

「私がここに来た理由ですか？実は水竜の本社で身体検査に呼ばれまして」

今日は彼女の定期健診らしく本社に訪れていた。とは言っても彼女の身体についての文字道理の調査、即ち不死性の測定としての側面が強い。今日はたまたま内臓を多く調べられ帰り道に貧血気味になり休んでいたらしい。

「一人でここまで歩いてきたのか？歩ける体じゃないだろ」

「ええ、しかも無麻酔手術だったから今もくらくなります。麻酔があっても結構痛いですけどね」

いつものように笑ってはいるが作り笑顔なのは明白だ。彼女には無理をして欲しくはない、けれど……………受け入れた所で、体が持つとは限らない。

曰く自身の身体に関しては幾度にも類似した実験が行われたらしい。しかし成功例は未だなく重なる予算を抑える為に実験に不必要な作業以外は最低限の処理までに抑えられている。全ては竜と自身

の処分の為だ。度し難い、字いくら何でも外道である。

ここがどこなのか彼女に問うと神域の玄関口らしい。人の住む世界と竜と神の世界、まだ尋常な法則の働く空間である。水竜の本社はこちらから更に別の空間に位置する。

神域はこの先の川を登れば登程より深部に向かい、下れば混沌が広がり何が起こるか分からない。混沌とはつまり異世界でありあらゆる法則の挙動が異なる世界があるらしい。だが少なくともこの近辺から迎える場所は本社の場所だけらしい。

「(竜は色々奥が深いとは感じていたが……何なんだコレ)」

「ところであなたは何をしているんです？」

不意に質問された。俺は二エの騒動の時のお礼参りと伝える。彼女はしばらく遠くを見ていた。ふと俺は彼女はこの先どうするつもりなのだろうと疑問を抱く。

「私はここで待っています。私にはまだ最後の実験がありますから」

彼女は自嘲気味に笑った。確かに彼女にとってここは居心地の良い場所では無いかもしれない。しかし、彼女はここに残る事を選んだのだ。俺にはそれが理解できなかった。

「なんでだよ……お前ならどこでもやっていけそうだろ……こんな所にいる必要ないじゃないか……」

彼女は少し考え込むような仕草をして俺の方を見る。

「いいえ、実験は辛く危険な物です。それでも、私は彼らには逆らう理由は無いです」

彼女は俺の目を真剣に見つめて言う。説明はせずとも強い覚悟の上で自分から修羅を選んだのは明白だった。どうして彼女は態々命を賭してまで実験をするのだろう。俺の中にはそれに繋がる情報が1つある。

『処分』されてもいいってことなのか？二エを置いて、お前は一人で拷問されて……あんなに二エにぞっこんで友達も多いのにお前が本気で言ってるとは思えない」

少し発言にハツタリを込めた。むしろ俺が間違えであってほしいという願望を込めあえて含んだ。しかし彼女は悲しそうな顔をする

ただだ。ふと、彼女は立ち上がる。そして足首までが沈むまで川の水に歩を進めた。

彼女はそのまま俺の顔を合わせずに明るいついで意外な事を言った。「私は死にません。だから今なお処分の方法が実験により検討されています」

沈黙、空気感を無視した場違いに優しい水の音だけが辺りを包む。彼女の表情を伺うことはできないが声音からは悲しみしか伝わってこない。

彼女は不死性の実験の為に何度も死んでいると言う。首を切られ、心臓を潰され、腹を裂かれ、全身を焼かれ、四肢を切断され、薬剤投与、これらの苦痛を味わっても尚彼女は生きているらしい。不死性とは文字通りの意味で、彼女の不死性は彼女の生命活動が停止しても尚生き続ける。肉体の万能さはあるものの本人からしたら生き地獄そのものだろう。

「お前は、本当に死にたいのか？」

「ええ、私の死を望む彼らとは理由は違いますけれど同じ目的の為に協力しています。私は生まれついて死を望まれました。自分でもあんな汚物があるとするならば当然だと納得しています」

汚物、意味は分からないが普段の彼女からはかけ離れた発言。日常の裏で彼女は何かを抱え続けていたのだろう。

「でも最近水竜の会社経営のお手伝いは良い暇つぶしにはなっています。お小遣いも増ええられる事も増えたので少し有意義ではありませんたけれどね」

「(会社経営が暇つぶしなのも色々おかしいけどな)」

「しかし辛い物ですね。自身の死亡を実現する、生きる意味が死とは……」

再び俺達は沈黙した。

「黎人さん、少しこちらへ。できれば手を取ってもらえませんか」

彼女は後ろに手を少し向ける。俺は彼女の手を握り隣に立った。川は真冬の湖の様に酷く冷え切っている。対照的に彼女の腕は優しく暖かだった。そして彼女が少し強く手を握った。

「いつ、私は終わるのでしょうか」

囁くように彼女は呟く。声は不気味な位落ち着いていた。

「ひいろ、お前は……」

「私の事は気にしないで下さい」

彼女はそう言いながら俺の手を引いて川から上がる。俺は彼女に何か言わなければと思ったが何も思い浮かばなかった。ただ、彼女の手を握る力が強まるばかりだった。まるで俺を逃がすまいとするかのように。

しかしそんな感触はすぐに消えた。彼女は唐突に腕を離れた。俺はバランスを崩しその場に尻餅をつく。すると彼女の姿は消えていた。俺は慌てて立ち上がり周囲を見渡す。

が、次の瞬間森の中から物音がした。2人の足音で明らかにひいろではない雰囲気だ。そして防護服に身を包んだ者と爬虫類と人の女性を混ぜたような存在、竜が現れた。どちらも顔は確認できない。

彼らは俺を見ると顔を合わせて何かを話して近づいてきた。声は籠って聞こえづらいがかろうじて聞き取れた。

「!? おい、どういうことだこれ……姉さん、分かるか?」

「さあ、私にもわかりかねます。神が同席していたかと思えば竜だとは。報告も受けていませんし彼女が備考に書かれた緋刃でしょうか」
「写真資料では赤い竜か女性だったから誰なんだあの子。まあ彼女には帰ってもらって処分方法を試そうか……実験とはいえ、辛いな」

「ええ、ですね」

そして彼らは俺に接近する。俺は十分警戒して身構えて同じだけ近づいた分を距離を離して彼らに聞く。

「お前らが水竜の奴らか?」

すると彼らは静止しお互いに視線を向け口を開いた。

「そうだ。水竜コーポレーション特殊機動部隊所属特殊戦闘兵『凍竜
【水弩】』俺はその補佐だ」

特殊機動部隊、蕾さんと月輪先生の所属と同じだ。防護服の男は気配は人間で背丈は170cm程。口調やもう一人との会話から何故か

かつての俺と似た雰囲気がある。竜の女性の方は水色と白のゴスロリ風の鎧であり顔は兜で隠れている。スカートの下からは長く氷に覆われた尻尾が生え、手足は一見防具のようだが正体は自身の甲殻と爪であった。

「……………」

「お前はどこから迷い込んだ。水竜が目的なら俺らは相手しない。さっさと帰れ」

男が冷淡に俺に言う。俺が無関係そうだと察すると俺を無視して去っていく。向かう先は川の上流方面だ。既に女の方はいない。もしかして彼女は上流に……

だが、それがいけなかった。

まず感じた以上は凍り付くような冷氣。生物が到底生存できる領域から遥かに低い極寒。川は凍り付き河原の石には霜が下りて、幾多の氷の柱が生えていた。空気すら氷白く染まる世界の暖色は赤い血で氷の柱の僅かな合間から漏れ出し凍り付いていた。

氷の柱には血以外にも凍り付き剥がれた肌と擦り潰されたどこかの肉がべったりと付いている。視線を更に上に向けると柱の合間から指の欠けた腕が生えていた。そこから人体構造を予測し近くを見回すと……ひいろと目が合った。全身が幾多の氷の柱に貫かれ辛うじて残る頭は確かにひいろであった。

「ひいッ……ひいろー！」

息が白くなるような低温と残酷な光景に本能的な恐怖を覚える。

怯えながら彼女の名前を叫ぶも返事はない。代わりに空気以上に冷淡に氷の竜の女、氷弩が一言

「第一工程、終了しました」

たったそれだけを男に伝えた。

「……………よくやった。実験開始だな」

25 Dragon lady

「第二段階、苗床の拘束及び輸送を開始します」

青い竜は氷の柱から刃物を使って器用にひいろを切り取る。氷の柱に巻き込まれなかった比較的大きな塊を切り出すと金属製の容器に入れた。彼女は男に容器を渡す。

「全く、脱走なんてするから余計な事させるんだぞ」

彼は容器の中のひいろに愚痴を言う。口調からは明らかに苛立ちと呆れが感じられた。竜と男は俺には目もくれずどこかに去ろうとする。

ドッ！

「うおっ！」

脚は自然と動いていた。足元が悪い中で精一杯加速し後ろから男に突進する。女の肉体だとパワーが足りないのは承知、しかし不意打ちが出来たのなら上出来だ。そのまま彼から容器を奪い取り中身を出す。既にひいろの体の再生は始まっていて血の付いた腕の付け根の肉がうねうねとうごめいている。

「逃げるぞー！」

聞こえもしない叫びをし、彼女の腕を持って一目散に彼らから逃げる。せめて河原の入口に走り知っている場所へ、蕾さんにも頼る時間が無い以上今は俺の自力で解決しないと。後ろを振り返ると相手はまだ追いかけてきていない。再び前に向きなおし木々をかき分け前へ進む。

「あのガキ、私達をコケにして逃げやがって……早く追いかけてしましよ
う」

「いいけど苗床以外の殺害許可は出てないから癩癩おこして殺すなよ。姉さん」

「はあ……はあ……どこだここは」

木々をかき分け出た先は鳴葉稲荷とは全く似ても似つかない廃墟の裏であつた。一応倒れた鳥居と社であるとは示しているも何十年と放置されたような荒れ具合だ。

どうやら戻る場所を間違えていたらしく見知らぬ場所に来てしまったらしい。ここは鳴葉稲荷の位置から物理的に存在しえない場所であり少し不気味に感じた。

それより今はどこかに逃げないと苔むした石段を駆け足で下る。木々で見えなかつた街の部分が露になっていく。ここはどうやら田舎街らしい。緑豊かな里山と田畑が広がる。家もここから見ても数件がポツポツ点在するだけであり俺の実家より状況は酷い。

しかし遠くには高いビルが無数に立っているのが見えた。田舎の街には少々場違いに思えるも今はどうでもいい。一先ずあそこまで逃げれば電車でも何でも逃亡や船腹には困らない。ひいろの再生が済んだら一度あそこに逃げる事も考えないと。

知らない場所の知らない道を走る。重い片腕を抱え未舗装の道路を走るのは中々に疲れる。しかし彼女があれだけ恐怖しているのなら俺だって命張って何かしないといけない、前に殺されたのに相変わらず俺も学習しないな、自傷気味に思った。

それから10分程走り続けて足を止める。人の気配の無い森の中、まだ距離的には安心はできないが俺も疲れた。少女の体で足場も悪いならこれでもいい方だろう。

茸の生えた切り株に座る。彼女の腕を観察すると肩までは再生していた。体力が尽きたのは段々と再生と共に重量が上がるというものもあるだろう。前回の全身再生も考えるとこのまま逃げ続けるのは不可能だ。どこかで数時間匿ってもらいひいろの再生を待たないといけない。

だが頭を抱える暇も相手は与えてくれないようだ。俺の後方から只ならぬ冷気がし、振り返ると青い竜が立っていた。

「早く苗床を返しなさい」

彼女は冷酷に彼女を求める。誰がお前らに渡す物か。俺はひいろの腕を強く握りしめながら彼女を睨みつけた。

「そうですね、では力づくで返してもらおうまでです」

竜は氷柱を作りだしこちらに向けて発射する。慌てて立ち上がり避けようとするも右腕の重さのせいでバランスを崩し転んでしまった。それでも何とか横に転がる事で回避に成功する。

竜は更に氷の槍を作り出し今度は俺に向かって投げつけてくる。流石にこれは避けられないのでやむを得ず左腕を犠牲にする。グサツ！ 鈍い音が響くと同時に激痛と熱さが襲ってくる。

左腕を見ると肘から先が氷によって貫かれていた。痛みには耐えながら必死に手を引き抜くと腕が地面に落ちる。断面からは血が流れ落ち、その光景に吐き気を覚える。

「ぎあゝあゝっ！」

ただもう一度体験した事だ。ひいろを救えなければどちらにせよ死ぬしかないだから俺は何でもしなければ。どうにか正気を保ちつつ再び立ち上がると彼女の腕を拾い上げ急いでその場から離れる。

待て！と言う声が聞こえるも無視する。

向かった先は森のより奥深く。ここなら多少は安全だと信じたい。が、しかしそんな希望的観測はすぐに打ち碎かれる事になる。突然背後から衝撃を受け吹っ飛ばされる。

「うわあー！」

背中から木に衝突し肺の中の空気が全て吐き出される。そのまま地面を転がり仰向けになる。何が起こったのか分からない。混乱しながらも起き上がろうとすると腹部に強い圧迫感を覚えた。

「ぐふう……おえ……」

胃液が逆流し口から出てくる。苦しさから視線を下にやると青い竜が俺の腹を踏みつけていた。

「逃がしませんよ」

彼女は冷たい目をしながら足に力を入れる。ミシミシと骨が軋む音を立て、内臓が潰れていく感覚が分かる。

「苗床を渡せば楽に殺し……見なかつた事にしてあげます」

「嫌だ……絶対に」

「ならば仕方ありませんね」

竜は足に力を込めより強く踏みつける。あまりの苦痛に悲鳴を上げた。視界がチカチカと点滅し意識が飛びそうになる。ただここで気絶すれば待っているのは死のみだ。歯を食い縛り耐える。

しかしこのままではジリ貧だ。何か手は……

「渡したく無いのであれば大人しくして下さい。抵抗するだけ無駄ですよ?」

竜は足をどけると俺の髪を掴んで無理やり顔を上げさせてきた。

「(きたっ!今だッ!)」

彼女が俺の顔を覗きこんだ瞬間俺は片手で自身の角を潰す。白い液体がまき散らされ竜の顔にかかる。角の液体は相当な量だ、のぞき穴のような小さな隙間でもかなりの液体が目にもふりかかる。そして計算通り不意打ちに成功し彼女は急に手を離れたので手を横に引つ張り彼女を転がす。

「目つぶしなんて搦め手っ!こんのくそがア!!」

彼女は怒り狂いながら立ち上がってくる。しかし俺は既に行動に移っていた。すぐに起き上がり俺はまたどこかに逃げる。後ろを振り返る余裕は無い。今はとにかく逃げろ、そう思いながらひたすら走り続ける。

しばらく走り続け、もう追ってこないと思えば足を止める。

どうなった? 恐る恐る振り返り確認するとそこには誰もいなかった。

「(は、ははは。やった、やったぞ)」

しかしまだ安心はできない。ひいろの再生は終わっていないし俺自身もかなり消耗している。あたりを見回して現在位置を確かめるとどうやらここはあの神社の廃墟の近くだった。森を無我夢中ではしっている内に綺麗に一周してしまったようだ。遠くに逃げていたつもりなのにコレでは森の中を隠れて進むのは現実的ではない。

かといって道に沿って進むのも困難だ。片腕は無く血だらけ、かつ

ひいろの腕を持っている現在の状況は第三者から見れば通報されかねない。つい最近も似たことをしてはいるけれど難易度は段違いだ。それでも俺は前に進む。とにかくここから離れなければ二人まとめて捕まる。ならばせめて彼女だけでもどうにかしないと。ひいろの腕は再生してきているがまだ時間がかかるだろう。それまではなんとか隠さなければならぬ。

ところで携帯の電波は……無い。ならば神社の廃墟に向かう事にする。敵がこちらを狙って神社から離れた以上竜はいない。元の世界に戻り蕾さんに救難を……いや彼女も水竜だ、仕方がないがナツメに救難信号を送ろう。

貧血と痛覚で何度も意識を墮としかけながら道を進み石段を上がる。

しかし数段登ってから流石に俺の体力は限界でついに足が止まる。息を整えていると視界がグラついてきた。ああ、これは不味い。初めてのタイプの死の感覚だ。続けて足の力が抜ける。

「クソツ……こんな所で……こんな所で死ぬのかよ……！」
必死に腕を伸ばすが石段に届かない。そして俺は意識を手放す。

しかしその時奇跡が起きたのだ。

「……………いー……な所で……………」

誰かの声が聞こえる。

「しつかりしろ！おい！」

頬に衝撃を感じ目が開く。目の前には……誰だろう。どこか男の俺に似た雰囲気の中年の男がそこにいた。

「大丈夫か!？」

その男は俺を抱き上げると肩を貸してくれた。

「……………」

俺は男に支えられつつ立ち上がる。どうやらこの人は助けてくれようとしているらしい。それから彼はしきりに俺について聞いてきたけれど今の俺にそれに応えるだけの力はない。そして俺が相当な

重症だと判断したのか彼は俺を背負うと歩き始めた。

しかし何故だろう。この光景が妙に懐かしい。小さい時の立った回数だけ確かにこんな道を誰かと歩いた気がする。同じ田舎だから実家と混同しているのだろうか。そんな事を考えながら俺は彼に身を任せるのであった。

「……………ん……………」

次に目覚めた時最初に見えたのは見知らぬ天井だった。起き上がろうとすると身体中が痛む。よく見ると左腕はちゃんと再生していた。

隣にはひろが寝ている。見た目だけは全身再生しているようだ。時計を確認するとあれから1時間程度、恐らく内臓はまだ再生していないだろう。

そしてここはどこだろうか。見回すとここは普通の家の一部屋だ。窓から外を見るとどうやら神社の近くらしい。内装的にはこの部屋は普段はあまり使っていない様に物が無い。探索の過程で置手紙を見つけ、読んでみると『起きたら一階に来てくれ』との事が書かれていた。

俺はひとまずひろを起こすことにする。しかし揺すっても叩いても全く起きる気配がない。仕方なく俺は一人で下に降りる事にした。階段を降りて玄関に行くと部屋の中から誰かの話声が聞こえた。俺は耳を澄まして中の様子を探る。

「で、竜の女の子を連れて来たんだ」

「ああ。もしかして怒ってるのか」

「そんなわけないよ。拓海が困ってる人を助けたいなら私も協力するよ」

「良かった。一応子供らも呼ぶか？今ならあいつらの方が扱いは詳しいだろう」

「そうだね。私も賛成する」

「じゃあ様子見てくる。多分すぐ来ると思うけどお前らはここで待つ

「ていてくれ」

「わかったよ。気をつけてね。その子かなり衰弱してるみたいだし何かあったらすぐに知らせてね?」

「わかってるよ。んじや行つてくる」

……どうやらあ二人は若い夫婦の様だ。会話の内容的にあの人が俺を助けてくれたのかもしれない。そして会話の通り男の方が出てきた。

「お、やっと起きたか。具合はどうだい? まああんまり良くはなさそうだけどな。とりあえず中で座つてろ。飲み物持ってきてやるから」

「ありがとうございます。えつと……貴方は一体……」

「そうだな。俺は滝沢拓海だ。君は?」

「洋野黎人、大学生です」

俺の答えを聞くと男は目を見開いた。

「……洋野、黎人? 彼女、あの見ためで彼なのか?」

男は独り言の様に呟く。内容は何がなんだかさっぱりわからない。そして彼は俺をリビングの中に通しソファーに座らせる。俺と彼ら夫婦と対面する形になった。

「もう一度確認だが君は洋野黎人、大学生でいいのか? それと名前的に君は男性だよな」

それは合っている。だが彼らは妻と思わしき水色の髪の女性と顔を合わせる。

「ふーん、ナルホドナルホド。確かに大学生にしては小柄でしかも女の子みたいだね」

彼女はこちらをジロジロと見てくる。

「? どうしたの黎人君? ちゃん?」

「あ、出来れば『さん』で。あとできれば敬語とか無しにしてもらえますか。なんか違和感があつて……」

俺は少し恥ずかしくなりながら答える。すると女性はクスリと笑った後

「うん、わかった。私は滝沢ドラコ。よろしくね」

と元気に言った。

……なんか変な名前の人だ。

Dragon impact

滝沢夫妻に俺の発見経緯と経過を聞く。

曰く散歩の最中に神社前で血だらけで倒れる俺を見かけたそうだ。救急にも連絡しようかと考えたものの俺の只ならぬ容姿と恐らく自身の物ではない腕を抱えた様子から自宅で匿う事にしたらしい。身体的には体を拭いて止血と消毒をして、一応の救援として医学に強い知り合いに連絡したりしていた。

ひいろに關しては目を離している時に物音がした際いつの間にかいたそう。同時に俺の腕も再生していたらしい。

彼らは「不思議な事もある」と、特に気にしないでいてくれたけれど……

「ありがとうございます」

「いえいえ、気にしないで」「体が休まるまでここでゆっくりしていいぞ」

今は人のご厚意に甘えておこう。

それから暫くは滝沢夫妻から俺についての事と経緯を質問された。どうやってここまで来たのか、何故重症で倒れていたのか、そして俺の人外の混じる容姿に關して。俺はそのすべてを明確な言及をせず、多くを分からない、話せないで通した。

正直俺が短い間で経験した行為の全てがあまりにも非現実過ぎて信じてもらえらるとは考えていないからだ。それにここに来た経緯の中で水竜が関わっている為あまり多くを言ってしまうと何が起るか分からないのだ。責任が持てない以上、危険な行為には走るべきではない。

結果彼らには非常に頭を抱える事になった。本当に、本当に申し訳ない。

「ごめんなさい。自分でも何が起きてこうなってしまったのか良く分からなくて」

「う、うーん。話せないなら仕方がないよね。でも無理はしなくていいから」

「はい……」

俺は心の底からの謝罪をする。こんな得体の知れない奴を家に匿ってくれるなんて優しい人達だ。そして彼らの話から察するにどうやらここは俺が居た世界とは違う世界の様だった。

壁掛けのカレンダーは数年前の同じ月で掛けられている。置き型の電波時計の日付表記と同月で、かつ俺の知っている今日の日付でありここが改めてここが異空間だと認識する。

念の為此こらの地図をスマホで見せてもらったら全国地図からの相対位置から考えるに稲荷の近くである。あの廃墟の神社は「鳴葉神社」、管理者が放置したままかなりの年数が経過している。勿論人もあまり寄り付かない。観光地の鳴葉稲荷とはまるで対極だ。

彼らにもこの違いが分かるようにスマホのから数年前の稲荷の画像を見せる。あのボロボロの社とは似ても似つかない荘厳なお社。フィルターも何も掛けてない素のままでもこれなら伝わるだろう。

「おお、これは観光し甲斐のある神社だ。今度の休みに旅行に行きたいな」

「良いね！私も行きたいなー！」

夫婦は楽しげに話す。仲睦まじい様だ。これが異次元に存在する観光地でなければ観光雑誌でも紹介してあげられるのだが。

「まあそれはさておき、君はこれから行く当てはあるのか？」

「えっ？あー……無いですね……。とりあえず家に帰ろうと思いません」

「家はどこにあるんだ？ここから遠いのか？一人で大丈夫なのか？というより君は学生だよな。学校はいいのか？親御さんとか……」

「っ親には！親には絶対に連絡しないで下さい！」

思わず声を荒げてしまう。しまった、と思った時にはもう遅い。二人は驚きこちらを見る。

「す、すみません。大きな声で。ただ、お願いします。両親にだけは知られたくないんです」

それだけは、それだけは絶対に嫌だ。携帯の電波が繋がらず、連絡など取れないのに。額をテーブルにつけるまで体を倒し懇願した。

竜となつて性別も、年齢も、種族も何もかも別人となつた俺を家族には知られたくない。今の姿を家族に見せて一体誰が信じてくれるだろうか。今の俺はバイトも辞め、学校にも行かず、社会的から半部乖離している。資格も証明も今は意味を為さないかあつても信頼からは程遠い結果となる。

そんな俺を両親はどう思うのだろう。俺の事を心配してくれていた母さんに、俺の帰りを待つ父さんに、俺の変わり果てた姿を見られるのは何よりも辛い。

更に今の俺は追われる身だ。俺のせいで家族がどんな扱いを受けるか分からない。最悪俺のせいで迷惑をかけてしまうかもしれない。だから、どうか……

「分かった。親には内緒ね。拓海もそれでいい?」「ああ、俺も同じ意見だ」

俺の必死さが伝わったのか夫妻は顔を見合わせると優しく微笑みかけてくれた。

「人間誰しも秘密の2, 3個ある生き物だ。だから君の事はご家族には秘密にしておく」

「ありがとうございます」

……この人達は どうしてここまでしてくれるのだろう。俺は感謝と共に疑問を抱く。

「君が腕を無くした経緯は聞かないよ。でも、これだけは教えてくれ」

拓海さんは俺を真っ直ぐ見据えて言った。

「君は竜か、それとも神かを信じた事があるか」

!?

「つまさか! 「はいストップ」

俺が咄嗟に立ち上がろうとした所をドラコさんが抑える。おかしい、俺と彼女は机を挟んで対面して座っていた筈だ。なのに彼女は今の後方で肩に手をかけて俺を押さえつけている。焦り判断力が一瞬鈍った事を考慮した上で目にも止まらない驚異的なスピードと反射速度に戦慄した。嫌な汗が額から流れ落ちる。

「その反応、凶星？」

俺は答えを返さない。肯定も否定もせずただただ沈黙する。

「種までは特定できないまでもその角と尻尾、気配は間違いなく同族の雰囲気だよ。黙ってても私の目は誤魔化せない」

そう言っただけで彼女は自身の目を指差す。彼女の目に迷いはなく俺が人外だ確信している。だが同族とは？ 蕾さんと同様に体に加工を施しているのだろうか。見た所角も何も見えない。

「ドラコ、止めろ」

拓海さんの制止で彼女が手を離す。そして彼は立ち上がり俺の隣に立った。

俺はようやく落ち着きを取り戻して席に着いた。同時に確信する。彼らは敵でも味方でもない、竜だ。

俺は彼女から解放されると扉の前まで距離を取る。警戒し、半ば怯えるように彼女を見る。しかし彼は何故か俺に憐れむような目線を向けている。

「プツぷ。やっぱり隠し事はよくないや」

緊張を破ったのは彼女だった。突然に笑ったと思ったら吹っ切れたように明るい声で語り掛ける。今までも親しげだったが一層にこちらに気を許したような態度だ。

「ねえ、そろそろ探り合うのは疲れたんじゃない？ここは一度落ち着いてお茶でも飲もうよ」

彼女は新しくコーヒを2杯淹れ片方を俺の席の前に置いた。そしてソファに足を組んで座った。彼女は一口飲んで顔をしかめた後砂糖とミルクを新たに入れた。

……俺も一口飲む。インスタント特有の何とも言えない風味がある。

「私達は初めから君が人じゃないって予感してたよ。洋野君」

「（動揺するな、警戒し続けろ。相手の出方を疑え）」

「君が恐らく人間だったでしょ。実は私も人間のフリをした竜、『水竜

【水槍】」

彼女は元竜。俺はそれを聞くと一度深呼吸してから一度冷静に話

を聞く事にした。竜にはあまりいい印象を抱かない。「水竜」の名に嫌な悪寒を感じる。だから俺は真つ先にそこを尋ねた。

『『水竜』の関係者か?』

「お、何かを察したようだね。関係するも何も私こそ水竜コーポレーションの元CEO、現特殊部隊司令官兼会長だよ」

「じゃあひいろ、俺が持ってきた苗床を知っているのか?」

「苗床? うんうん、知ってる。あの子私よりお金の扱い上手だしお世話になってるよ……ってああ成程。アレのお友達なら激雷も知り合いだね」

因みにやはり彼女は事実上のひいろの上司だそう。

「緋刃という竜は?」

「それはちよつと覚えてない。多分激雷の管理記録に備考で書かれてたのを少し知ってるくらい」

? 水竜の課題とか言われていたのに意外と知らないのか。考えてみれば彼女の日常で水竜に関わる人物は蕾さんと最近では月輪先生だけだ。加えて彼女は結構動く時は動くタイプだ。プライベートは知らないのだろう。

そして最後にこれ。

「俺については?」

竜を最も知る組織、そのトップだ。殆ど水竜と無関係な二工ですら多少の情報を残す組織だ。俺についても何かを知っているかもしれない。

彼女は席を立ち、棚の中で充電されたタブレットの一つを取り出し操作する。彼女が何かをしている間、俺はいつの間にか拓海さんが部屋から居なくなっているのに気がついた。そして彼女は少しの時間で再び席に戻り机にタブレットを置いた。

「君の事はよく知ってるよ。でも安心して。君だけは今は水竜とは関係ない」

「知ってるって……」

タブレットには年代別に分けられた20個のフォルダが表示されている。名前は西暦と括弧つきの土の数字で統一される。最後の年

はカレンダーに書かれた年代、問題は最初の年だ。そのフォルダの年代から土の数字を加算するとなんと俺の生まれた年になる。

振るえる指で俺はフォルダに手を伸ばす。不気味だ、この上なく気味の悪い感覚である。20という数字に生まれた年、だから俺には分かるのだ。遂に画面に触れ、瞬間画面に数々の写真が広がる。でかかとはつきり表示されたそれは家族の写真だった。父と母、そして子の3人が笑顔で映る写真。場所は様々で家族団欒や旅先の写真、行事等、総合して一般的な家族写真である。

だが俺はかえって戦慄した。何故なら……

「何で俺の家族の写真を持ってるんですか」

「君の家族から貰った。成長する孫の姿は楽しみだから頼んだの。でも君と実際に合ったのは初めてだね」

脳が理解を拒んでいる。写真はどれも確かに俺が映る写真だ。成長の過程を記したデータの数々。不気味所ではない。スーツと血の気が引いていく感覚がする。因みに鳴葉神社での写真もある。

何が隠し事だ、これじゃ初めから何もかもおかしいじゃないか。水竜は初めから全部知っていたのか。

タブレットを虚ろに見つめる。その後方で二人の足音と3人目の気配がした。一人は拓海さん、彼は別に今は重要ではない。問題は残りの二人だ。

「海月」

「分かってる。俺が全部説明する」

海月、俺の父の名だ。彼の言葉に反射的に後ろに振り返る。

小さな頃から何度も見てきた俺の親父。顔は俺に似ていて、俺と違って優しい性格だった。俺が物心ついた時から既に俺よりずっと大人びていて、でも俺が困った時には助けてくれた。俺の憧れであり自慢の父親だった。

「何で」

それがどうしてだろう。

「……なんて事してくれたんだ親父」

「……」

「何で、何で！何で教えてくれなかつた!?!」

彼は見覚えのある防護服に頭以外を身を包み、青い竜を抱きかかえていた。竜は防具はそのままに頭だけを彼と同じく外し顔が顕になつていた。寝ているように静かに動いていて、だが目を開けたまま何をするでもなく父に抱かれていた。夢ならば覚めてほしい。

「母さん、どうして……」

仮面の下の顔は虚ろな目をした母であった。

秘匿

人外、異空間、久々に俺は家族と再開した。

俺の直ぐ側には俺を育てた父と母。見られてしまった。男から変質し、人ですら無い俺。家族は何を思うかずっと、ずっと恐れていた。

「父さん」

「……」

「どうして俺にだけ隠してたんだ」

それがいぎ蓋を開けてみればどうだ。俺の家族を知る者が水竜のCEO、父さんも母さんも水竜の社員、母さんは竜で俺に襲いかかってきた。おまけに父は母を姉さんと呼んでいた。拓海さんとドラコさんの顔を見て確信した。俺の両親の顔には彼ら2人の面影がある。まるで彼らの「子供」のように。つまり彼らは皆何かしらの血のつながりがある。

「何か言えよ。どういうことだ。俺がこうなる事も知ってたのか？」

「それは知らない。教えられなかったのもお前だけは竜だけには関わらない様にしていたからだ」

今までは竜や神についてこの身の事以外の関係は無いと考えていた。水竜や神域だったまたそこに投げ込まれただけの環境だとあくまで捉えていた。しかしこうもなると事情は違う。今の俺には一度全てを知る必要がある。

ガチャ

「職員さん、今起床……あつ、お、おはようございます」

タイミングよく修羅場のリビングにひいろが顔を出した。どうにも心地悪そうにしていたものの彼女の事もここで全てを話してもらうつもりだ。

水竜【水槍】、彼女は元竜の人間だ。俺の血縁で俺の祖母に当たる。

祖父の拓海と出会い紆余曲折を経て結ばれた。その過程で彼女は起業、後の水竜コーポレーションを起業した。

滝沢の二人は結婚して数年2人の子を産んだ。辰巳と海月、俺の両親だ。彼らは双子で母は竜、父は普通の人間である。

家族は鳴葉と呼ばれるその田舎で暮らしていた。この世界の中の鳴葉にて休息に発展する街の唯一未開のままである緑の一角。都市化から逃れるようにひっそりと残る祖父の生まれた土地でひっそりと楽しく笑い合っていた。

会社の経営も順調だ。この時の経営者は祖母であった。彼女は生まれつき何をするにも才能あふれた人物である。たった数年で日本有数の巨大規模にまで発達、世的にも影響力のある企業にもなった。当然資金力は随一。しかし彼ら家族はあくまでも普通の生活を求めている。

慢心せず、あくまで質素に。幸せな生活を送る彼らはきつと周りからも幸せだと思われただろう。しかし問題が無いのは外聞だけだ。この家族にはとある巨大な爆弾を抱えていたのだ。

結論を言えば彼らの愛は重いのだ。

そもそも家の家族はどこか常識がずれているのだ。祖母は本人曰く拉致監禁拷問殺害、母は兄である俺の父に恋し祖母と同様の行為を未遂だが遂行した。聞き出している途中でも彼らは懐かしむように語りだした。惚気だろうが正直悍ましい。

しかし問題は彼女らは愛の為に会社の資金を使った事だ。

彼らもこの話を切り出す前には惚気の甘い空気が一変、男性陣といろいろからは重い空気が漂う。対して祖母はあまり気にしていない。母は布団に寝かせてから倒れたままだ。

「会社のお金を使ったっていうよりも初めから拓海のために使うつもりだったしね」

祖母はまるで友人に話すようだった。空のコーヒーカップに今度は紅茶と大量の砂糖を入れる。

「私は不老不死を目指したの。竜秘宝ってあるでしょ。あれを私は拓海に出会う為に全部使い切ったから君のお母さんに手伝ってもらって色々やってた」

竜秘宝、月輪先生から教えられた願いを叶え次元を壊す宝。それを研究していた。しかも初めから竜の関連情報を調べる為に会社を作ったのか。

まず彼女は竜に関しての身体から研究した。彼女は曰く非合法な手術により内臓の構造が加工されていた。娘も竜だが実験台に使うには祖父が悲しむだろうし使えなかつたそう。

……祖父が悲しむから、だ。俺は言葉の意図に気づく。つまり、彼女はそういう事なのだろう。まあ言いたい事は惜しい研究にはあまりにも非検体とデータが足りなかつたのだ。

「だから私が『作られました』」

黙ったままのひいろが遂に喋りだす。

「あれ？あなたが説明してくれるの？」

「はい、私の事は私に説明させてください」

祖母が変わってひいろが自身の身について語る。被検体が足りない、ならば増やせばいい。そのために祖父は自身と娘を利用しクローンを作った。水竜の技術であれば人一人くらいの作成は容易く竜に対する初期研究は直ぐに終わった。

素朴な疑問として何故竜秘宝は使わなかつたのか気になった。曰く便利だけど念の為生誕の段階で抜いたらしい。実験体として作成したのに反逆でもあれば大変だからだ。

話を戻して苗床を利用した研究は人類にとって上位的な叡智を与えた。後に母が研究に加わりこれから竜秘宝や竜に関しての知識が増えるだろうと皆がそう考えていた。

しかしある日、空間に歪みを見つけてしまった。たった3回の現実改変ですら空間は壊れていたのだ。それにより竜の知識は秘匿された。

神社の裏の河原、そこに行けてしまう事そのものが何か空間が壊れていた証拠であった。研究が進むにつれ段々と竜秘宝の意味が分

かったのだ。竜秘宝は因果を再構築することで整合性を無視して使用者の願いを叶える。それが意味と因果で構築される世界を崩壊させたのだ。

しかも運の悪いことに苗床に問題が発生したのだ。

「当時の私はあの時点で数多の破壊と再生を繰り返して超回復での膨張を繰り返していました。そんな時に研究者の皆さまは私の本体の竜体に新理論での実験を開始したんです。しかし結果は散々です。肉体の再生能力が過剰に働き膨張、大陸程度にまで退席が膨れ上がりました……名無しの実験体に『苗床』の名前が与えられた瞬間でもありません」

「まあ今は私が止めたからこれ以上は膨らまないけどね。あのまま放置してたら多分この世界は埋め尽くされてたから何とかできてよかった。でもおぶつちやけ邪魔だし失敗作だから何とかしないといけないのは課題だね」

ひいろと祖母の話はこれで終わり、ここからは母の話だ。

俺の父曰く、母は小さなころから父を溺愛し同じ血が流れていながら結ばれた。彼は俺がどう出るか不安そうにこちらを伺っていた。気持ち悪いので俺はさっさと話の続きを求めた。

母は祖母の悍ましい研究に参加した。彼女は母と違い学問的な分野以外の戦闘分野にて活躍した。彼女を中心に水竜の私兵の特殊部隊が発足し現在も全線で戦っている。

これが今までの俺の家族の話だ。はっきり言って狂っている。全く持って信じられない話だ。壮大過ぎて何かの小説の様だ、馬鹿馬鹿しい。

だがあり得ない話ではない。今までも何度も信じられない事を見してきた。だからこの話も話半分程度に今は納得しておこう。

しかし確実に分かった事が一つだけある。俺には竜の血が流れていた。元から俺は竜と縁があったのだ。

全てを話し終わり空気はお通夜だ。家族全員がうつむき誰一人喋らない。俺が勇気を出して次の一言を発するまでその沈黙は続いた。

「母さんはまだ寝ているんですね」

誰に向けてでもなく敬語で小さく呟いた。とにかく今は空気を換えたかったのだ。すると父はより一層位霧囲気となる。

「実は母さんが倒れる前にお前に攻撃を受けた見たいに言ってたんだ。お前一体何をした？」

俺が攻撃をした。思い当たる節は一つだけある。俺が目つぶしに噴出した頭の液体だ。頭の角はもう再生しているし少しでも彼らに教える。

「目つぶしに角を潰したんだ。ほら、この角って柔らかくそれで潰すと液体が出るんだよ」

指で角を弾くとプルプルと揺れる。水風船のような独特な角を彼らは珍しそうに見ていた。ついでに彼らには俺がこうなった過程を説明する。俺が二エと出会い殺されて、色々あつて今の体だになった。体の事を知られたくないから隠れて途中で実家にも帰った事を話すと何か納得していた。やはりバレていたらしい。

父は俺に一度実家に帰るか提案した。体についてあそこまで知られた以上、もうひろの家にいる必要はない。しかも実家が水竜との関連がある為本当にひろの家にいる必要はない。親族が見守る中で俺は決断した。

「俺は……もうしばらく彼女の家にいるよ。少まだあそこでやらないといけない事があるんだ」

……やるべきことなど何も思いついていない。ただ、今は逃げ出したかった。最も信用していた家族が一番の爆弾を孕んでいた衝撃に頭が追いつきそうにない。あれだけ大切だった家族が今は化け物の集団にしか見えてこないのだ。

ふらふらと俺はソファから立ち上がりひろの手を強引に引いて家から出る。一刻も早くここから立ち去りたい気持ちを抑えたまま扉の前で立ち止まる。

「……さようなら」

俺は扉を開け家から出た。彼女は家族に一礼し、お邪魔しましたと残してからついてきた。

神社の裏に向かい元の世界に帰還する。道中は二人共終始無言であり重苦しい空気が流れる。川のせせらぎを横に再び木々をくぐる。空は暗かった。スマホの時計はあれからそれほどの時間経過を示しておらず、この空間が異常を孕む物だと改めて感じさせた。

空は雨、夏に片足を踏み入れているが少々冷える。慌てて飛び出した傘を置いて来て持っていない。帰りたくもないから雨降りの中をこのまま突っ切る事にする。彼女は躊躇して木の下から止めに入るも濡れた俺を見て諦めた。

「れ、黎人さん……その、帰ったらお風呂でも沸かしますか？」

どうでもいい。しかし気を使っているのは重々承知だ。彼女だって実験でボロボロにされ俺に知られたのに俺の事を気にしてくれている。そういうえば大学では彼女には悪い噂は無い。実験台という生い立ちを除けば独占欲を除けば正気な方である。愛される人間性には理由があるのだ。

「ああ、飛び切り熱く入れてくれ」

神社の境内を濡れたままで二人歩く。僅かな屋根に隠れるように雨音が響く場所を濡れないように手を繋いだ。石段を下る途中誰かとすれ違う。白い、だが足元は少し泥が跳ねた服を着た何度か見た姿だ。

「洋野さん、神社に訪れるなんて信仰深いですね」

傘を傾けて顔が露になると現れたのは望月先生だった。彼女は濡れた俺らを心配したのか折り畳み傘を渡された。

「今度の講習の時に返してもらえば構いませんよ。私もあなたに要件がありますし」

帰りの道に先生が加わる。

「激雷が緋刃の血の解析が終わったそうです。私は既に拝見しましたので結果をあなたにも見てほしいそうです。更に今後の研究の為にあなたの白濁液との関連性を確かめておきたいと彼女は望んでいます。ご協力お願いできますか？」

帰ったところで研究だ。実験台としての扱いは水竜と関わるのな

ら避けられない運命なのかもしれない。

「……どうして竜なんて知らなきゃならないんですかね」

口から自然と疑問の言葉が漏れる。雨音にかき消されるような嘆きは荒んだ俺の心から漏れた弱音だった。

「旧鳴葉駅前の崩落を覚えていますか。私はあの時に母と妹を失いました」

……聞こえないと考えていたのに先生には聞こえてしまったらしい。突然の衝撃的な過去と共に俺の疑問に答えた。

「しかし私だけは神様に助けられ、たった一人で生き延びました。崩れた建物の中を連れられて私は世界を知ったのです」

「あれ、じゃあ足は」

すると彼女はふと立ち止まる。

「……ああ、そうでした。足も治してもらったんです。この足はその神様から譲り受けた物です」

語りながら彼女はまた歩き出した。傘が顔を隠して顔は見えない、しかしいつもより雰囲気違った。悲しむような、何かを恨むような、しかしどちらか俺が踏み込むべきではないと感じた。知りすぎるのは、無知よりも罪になり得る。

「だから私はまた彼女らに会いたいです。その為に私は幾度の次元を超える術を知る手段として竜の研究をしています。神を垣間見る為には私はまだ啓蒙される必要があるのですよ」

石段がもうすぐ終わる。すぐ下には駐車されたひいろの高級車が停車し俺達を待っている。彼女はその隣に止まる白い車に乗り込んだ。彼女は扉を閉める前に俺に最後に言った。

「あなたも見つかるといいですね。迷うあなたを導く導きの月光がきつとすぐそばにありますように。私は願っています」

そう言い残して彼女は扉を閉じた。俺達も早く帰ろう。二人で車に乗り込んでひいろの家に帰還する。

対物性愛の秘密

帰宅してから俺は道中に蓄さんから送信されたメールから地下の実験室に向かっていた。カードキーで扉を開けて階段を一人で下る。実験意外でも意外とここが便利なのは知っている。回線は爆速だし自由に使ってもいいパソコンは数百万円クラスの超スペック、おまけに静かで多少騒いでも問題が無い。実際竜の勉強の為に頻繁に訪れている。

だが今日の地下へと赴く足取りは重い。ただでさえ自身が恐ろしき竜の血を引いていることをついさつき知ったのだ。時間にして2時間くらいしか経っていないままの治りかけの心には癒しよりまだ苦痛が勝る。もう、段々と何かを知るのが恐ろしくて仕方がないのだ。

しかし頼まれたのなら俺も彼女には恩がある。一応の参考資料として竜の本を持参し地下の扉を開けた。地下は相変わらずメイドロボの倉庫となっていて何だか不気味だ。

待ち合わせの場所は地下、部屋は何処を訪ればいいのかだろうか。少なくともこの場にはいない。工務室とサーバールーム、倉庫にも同様に此処にはいない。どうした事だろうと考えを巡らす。

何度かメールを送っても彼女からメールも返ってこない。地上で数回、地下に訪れてからも2, 3回は送っている。今までこんな事は無かったのにどうして今に限ってこうなのだろう。しつこいからブロックでもされたのか、そんな疑問も抱くもそれはないだろうと考え直した。

どうしたものか。いないと分かりつつももう一度探しに回るか。アンドロイドの容器に腰を掛けながら考える。あと彼女がいそうな所と言えば彼女の私室か。しかしあの女は入れないと言っていたし果たして……

扉の前に立つ。いざ目の前に立つと良く分かる。この部屋の扉は他の扉の嚴重さから更に固く閉ざされている。扉の厚さは数倍で重苦しい雰囲気は彼女の孤高さを示しているのだろうか。

カードキーをかざしロックの外れる音がした。そして重厚な扉をゆつくりと開いた。

……こうも意外にあつけないと逆に緊張する。

しかし俺は臆せず部屋に入る。彼女の部屋は思ったよりもずっと散らかっていた。整理された工務室とは逆にどこにでも何かしらの道具が広がり狭い部屋を埋め尽くす。家具は殆どなく部屋の一角にまとめられたメイド服が唯一の日常にある物である。

対極に奥の机の周辺だけはある程度の整理はされているようだ。一台の大きなパソコンと明らかに場違いなモルモットの飼育ケージのような物がそこにはあった。

しかい、部屋の中で一番に目を引くものはまた別にはある。部屋のあちこちに散らばる腕や足、胴体、頭、それと数多の武器の数々。彼女の体のパーツである。これらは組まれた物が数セットがメイドと同じ容器に用意されていた。

解体されたパーツは組み合わせることで丁度1つの人間となる。だがどう考えても一つだけ不自然なパーツがあるのだ。10cm程度の小さな蓋、端子や何かを入れる様子でも無い。

ぴい……

突然に鳴き声が出た。小鳥に似た細く小さい声は机のケージからしている。

「ぴい……ぴい……」

その声はどこか切ない。鳴いているとも泣いているとも感じられる。物をかき分けて音の主はケージの中。音は段々と間隔が狭くなる。よく耳を澄ますと水音も小さく混じる。

もしかして彼女ペットか？あるいはモルモットの類か。疑問を抱きつつそのいるケージの中を見てみた。

「ぴい……ぴい……」

「(……トカゲ、じゃない。竜?)」

ケージの中はスポンジ状のマットが敷かれ、その上に空のエサ入れと水場が置かれていた。その中で青い翼を持った小さな何か切な

そうに鳴いていた。手乗り程の大きさと丁度彼女の義体に入る大きさだ。見た目は鳥に近く、だが鱗と甲殻の質感は爬虫類に近い。総合するとまさに竜だった。小さく蠢き、体の下に何かを隠している。横から角度を変えてそれを観察する。

「ぴい…ぴい…」

角度を変えて気が付いた。家形に形作られた木箱からはみ出るまでにネジやICチップ、基盤の破片などが収集されていた。明らかにこの場にはそぐわない物であり誰かが人為的に持ち込んだと分かる。

「ぴい…ぴつー！ぴゃー……！」

小さな竜は俺の存在に気が付いたようでその場で体を振るわせながら俺の方に首が向く。しかしその時に見えてしまった。

その竜はUSBメモリの端子に股の間を擦り付け、体液で水たまりを作っていた。

「(……あれ、これ)」

あつこれあれだ。意味は分からないけれどとなく見ちやいけない物だこれ。

「蕾さん……ごめんなさい」

「ぴい…ぴい…！」

あまりの気まずさから自然と謝る。しかし彼女の叫びと同時に後ろから大きな物音、本能的に振り返る前に頬に強い衝撃が走る。そしてその威力のままに俺は狭い部屋の壁まで殴り飛ばされた。

「君イ！勝手に人の部屋に入るだなんて人としての常識はどうした！君はそんなことはしないだろうと信じていたのに！」

汚い部屋の一角で俺は正座させられ彼女が目の前で顔を真っ赤にして叱る。殴られてから彼女はバラバラの義体を組み立てて小さな穴に小さな竜を入れた。すると明るい電子音がした後にはバツと彼女は起き上がった。後で知ったがあそこはコックピットのような物らしい。

「本当にすいません……」

「私が義体の電源を入れて無ければずっと見ていたつもりだろう！ 全く、失望したぞ！……いやらしい」

最後の言葉だけ少しトーンダウンして呟く。

「あの……それでですね。これは一体何なんですか？」

恐る恐る先程の光景について聞いてみる。すると彼女は俺を鋭く睨に付けた。

「何って、態々それを私がか！ 私が答えろというのか!？」

そしてまた一層激しく怒り出す。だが顔の赤さはなんとというか、怒りからではなくあからさまな動揺からきている。よくできた機械だ。

「え、あの逆に何してたんですか？」

宥めるように言うと彼女は黙ったまま俯いた。暫くの沈黙の後、彼女は意を決した様に口を開いた。

「……その、私の……その、なんだ。えつと……ううん」

歯切れが悪い。やはり言えない事なのだろうか。

「あの、別に無理ならいいので……はい」

「待ってくれ！」

急に声を張り上げる。思わず肩が跳ね上がる。彼女の方を改めて見ると顔は相変わらず赤いままだったが、覚悟を決めた様子だった。

「笑わない、誰にも言わない、約束できるか？」

「勿論です、言いふらしたりなんか絶対しませんよ」

すると彼女は目を閉じ大きく息を吸った。そして吐いて目を開き小さく呟く。

「……二ーだ」

「はい？」

聞き返す。今なんて言った？

「オ○二ー……」

「……はい？」

……もう一度言ってくれたが今度は理解できなかった。

「だから！ オ○二ーだ！ 悪いか！ 電子パーツに発情する奇妙な趣味と私を罵倒するののか!？」

「……え、アレオ○二ー何ですか!？」

大声で怒鳴られる。しかしそれよりも驚愕の方が勝っていた。首を縦に振る。すると彼女は呆れたような表情になった。

「君、それはいくらなんでもどうかと思うぞ。性教育の授業は受けたろう？それに君の年齢でもネットを漁れば……」

「いえ……竜の処理の仕方は流石に範囲外です」

俺の言葉を聞くと彼女は驚いた様子だった。まるで俺の方が常識知らずかの様に理解できないように見ている。

「まさかとは思うが、知らなかった？」

「はい、人外には興味無かったんで」

彼女の顔が引きつった。まさに信じられないと言った様子で、同時に彼女は体を震わせていた。

「え、じゃあ私は今、え、待ってくれ、信じたいが何も言わなきゃ良かった……？」

彼女は頭を両手で抱えながら混乱している。その様子を見ているとだんだん罪悪感が出てきた。

「すみません、こんなことになって……」

余りに不憫な彼女に申し訳なきに頭を下げる。

「いや、君が謝ることではない。こちらこそ取り乱してしまったようだ。すまなかった」

そして彼女は落ち着いた様子でそう言うのと立ち上がった。

「ところで何で一人で処理を？」

「……解析機器を眺めてたらその気になってしまっただね、君が来る前に少ししておこうかと」

彼女はデータはこっちだと実験室に移動した。

彼女の後を追い中に入ると一台のノートパソコンが置かれていた。

「まあそこに座ってくれ」

彼女は机の前に設置された見慣れない一人がけのソファアームに座るように促した。周りの状況とはまるで違う普通のものであり、でも少し大きいサイズで違和感がある。

「精密作業室で餐龍の血を解析した結果、通常の竜とは明らかに異なる

る物が含まれていた」

パソコンを操作しながら彼女は説明をする。

「このデータを見てくれ」

彼女が指差す画面には様々な数値が羅列されている。

「これは彼女血液の成分と既知の竜との関連性を示したデータだ」

並べられたデータは俺には理解できない情報の数々だった。生物学と神学の様々な要素がいくつもの資料によって整理されている。その中で彼女は数多の名簿と数字が書かれていた。ニエやひいろの名前もある。しかし唯一の空欄の続く行には俺の名前が書かれていた。

彼女が数回何かのコマンドを動かすとニエのデータがソートされた。そしてその中で色付された備考欄には「以下資料参照」とある。それをクリックすると整理された文書の文書が出てきた。

タイトルは「賛竜の遺伝子情報について」、出だしに簡潔に纏められた簡条書きに特に重要な項目が強調されて書かれている。内容は要約すると彼女の遺伝子情報を解析した結果「彼女の両親の候補となる個体は既知の竜のあらゆるデータと一致せず」「神性を持っている竜である」というのだ。

「彼女の父親に至っては記録したデータでも見たことが無い。もしかしたら竜ですならい可能性もある」

「じゃあ神性って事はつまり……」

「いいや、狐共と同類ではない。しかし原因は父ではなく彼女の親から遺伝した痕跡だと現時点では考えている」

遺伝？親の遺伝子が原因を決定できる理由があるだろうか。

「はつきり言っただけ」

疑問を口にする前に答えられてしまった。

「だがこれはあくまで仮説だ。それを裏付ける証拠も無いし妄想に近い」

彼女は自嘲気味に笑う。

「一つ、あれを踏まえて考えると面白い事実が見えてくる」
そこで言葉を切る。

「智龍【黎明】、因果により生じた竜の祖の一人」

初めて聞く知らない名前だ。しかし「因果」と聞いて少し話を真剣な方向に認識を変えた。

「竜と因果については望月からもう学んだか？」

勿論、つい最近の講義で学んだところだ。望月先生のテキストにも因果について細かく記載されていた。

対象と対象の意味を繋ぐ関係性、それが因果律である。つまり因果の改変とは意味同士の繋がりを換え、例えば赤と液体から血を想起するように、改変された因果では緑の液体や全く歓迎しない事象から血やありえないものを想起するようになる。竜はこの因果から受肉することで安定した肉体を得るらしい。

参考書には続けて「その中で意味そのものは不安定極まりない神であり、竜は存在を意味に委ねた墮落した亜種である」ともあった。これの意味はよくわからない。

だから、知った当時はより竜秘宝の恐ろしさを改めて認識した訳だけど今はその話ではない。

「その反応、理解できたようだ。アレは曰く因果の龍、即ち存在そのものが竜秘宝と同一だ。竜自身が因果の改変性を持ち、ありとあらゆる事象に手を伸ばす。自身の肉体さえ改変し続ける」

それは……なんとというか、冒瀆的な竜だ。竜の一匹であるのに竜全体を担う、しかも神性を持つ神でもある。そんな奴がもしいるとしたら、想像するだけで寒気がする。世界の意思がその辺を歩き回っている。あるいはいた、だなんて。

蕾さんもそれを分かっているようで、俺の反応を見て苦笑いを浮かべていた。

「うん、君の思う通りアレはかなり厄介な性質を持つ。あれは竜の次元でも名前だけが不自然に点在するだけの未知の竜だ」

彼女は再び画面を見る。そこには先程とは違うリストが表示されていた。これらは何かの座標の一覧表のようだった。

「これは智龍の痕跡の位置を示すデータだ。主に文書や創作物ばかりで生物学的な痕跡は全て抹消されている。その上、この写真を見てく

れ」

彼女は画像ファイルを開くと何枚かの写真を見せてきた。それは原始的な様々な地形の写真とそこに置かれた物品だ。地形は森や洞窟、火山や砂漠など様々で創作物と思わしき物品は木彫りのモアイ像から黒曜石に刻まれたハードロックのTAB譜まで一貫性の無い物ばかりである。

「(自由過ぎる……黒姫を思い出すな……)」

「あいつは生きてはいるらしいのだ。が、こんな風にやる事成す事自由過ぎる。しかしこうにも事情が重なると私達も本腰を入れて動くべきだろう」

写真を次々に変えながら彼女は最後の一枚を表示した。そこで写された写真は俺には信じられない物だった。

「いいかい、これからの私達の目標は彼女の残した遺物のコレを見つける事だ」

確かにこれは竜について様々な叡智が書かれているのは確かである。それは一見解読不能な楔に似た文字が石に彫られ書かれた。しかしその形状にはつい最近に見覚えがあり、番号が下に振ってあった。

「これは我々が知る中で黎明が最初に作り出し、同時に我々もまた最初にそれ名の知った碑石だ。解読は今だ多く不明で二枚目以降は未だに行方不明。一応竜と因果についての真理を……って聞いているのかね?」

「……え、いや、これ望月先輩の写しがこの家にありませんでした?」
「君のジョークが言えるんだな。物があるのなら私が嚴重に管理している」

「いいや、俺は微かだが確かにこれを読んでいた。なんなら解読のできる人物さえ知っている。数日までの記憶を頼りにこの碑のタイトルを解読する。」

「そうですね。何かの冗談かと思えますよね」

これは「神殺しと竜因果」あの本の序文が書かれた石碑、いわゆる本の原盤だった。

「……一応貸した友人に連絡入れときます」

「存在自体は確認されてるんだ。あれの叡智を拝領するは遅かれ早かれ実行するつもりだった。調査隊を編成するからもしかしたら私も仕事で家に入れなくなるかもな」

最後にそう言うとき彼女はタブを一つづつ閉じていく。相変わらず数多のデータをどのように纏めたのか。感心しながら彼女のデータを眺める。するとその中の一つに目が留まる。それは偶然かニエの欄にであり神性というカテゴリに纏められた成分だった。

『備考 風呂場の床から高濃度の同成分が検出』

「えっと、この風呂場のって何ですか？」

彼女に聞くと消去する手を止めた。

「ああ、この前何故か苗床が風呂場に呼び出されたときのデータだ。関係すると思ってここに一応残しておいた。私も良く分からないがメイドの記録が残ってる」

タブを整理してからファイルをいくつか開き、彼女は音声ファイルを再生した。

『ああ、これです！これが、脳が、ああ！じゃあ彼も彼女も……何故気が付が付かなかったのでしょうか！なら納得できますよ！どこまでも正気で、体すらも保っている。本当に、運命というのは残酷です！メイド、いや激雷さん、コレを調べ上げてください！これであれば私はや』ピツ

「とまあ、煩いから仕方なく調べたのはいいのだ何故かあそこから血中の成分が検出された。あと、というか実を言うと今からが本題なんだ」

彼女はまたパソコンを操作します。また別のデータがあるのかな、としばらくソファァーで待機している。するとカシユツという音と共に手足が拘束された。

「……っ!?ちよ、え、蕾さん!?!」

「さて、ところで君は見ていたか？あの表には君の欄も用意してあるのだよ」

どうやらソファァーに偽装していたらしく仕組みが作動するまで

待ったく気が付かなかった。手足は金属製の嚴重な拘束で解けそうにない。激しく抗うもガシヤガシヤとなるだけだ。

「あれは色々と万能に作られたデータで遺伝子情報以外にも身体の成分やなんなら排泄物の成分まで事細かに整理している」

「ちよつと待つてください、まさか……」

「さっきの仕返しだ。実験として君の体液、絞れるだけ全部絞りだしてもらおう」

普段無愛想な蕾さんの笑顔はまるで悪魔のように見えた。話し始めて怒っている様子が無かったけど内心は今だ激しい怒りを抱えていたようだ。それを見越したかのように実験室の外から数人のメイドが道具を持ってやってきた。

「君も元男だろう？据え膳食わぬは男の恥とあるじゃないか」

「そんな言葉で納得で着ませんし、こんな状況で言われても嬉しくありません！」

「黙れ。メイド、早速実験を始めよう」

「ええええええええ!?!」

薔薇で出来た百合の造花共によるデート

現在位置 鳴葉駅前神社

現在時刻 鳴葉稻荷神社から3日後

つい数年前に出来た小さな規模の神社。以前に起きた大陥没の慰霊も含め建てられたこの神社は中心地の駅からのアクセスが良く、待ち合わせ場所として有名だ。自身もその例に習い赤い鳥居の前で人を待つ。

「……遅い」

スマートフォンで検索すると電車が人身事故で遅延中だ。とはいえあと10分程度でその電車も到着する。ならばどこかの喫茶店でも入って時間を潰そうか。と、遅延情報を消し近くの店を調べようとした時、

「待たせたね、黎人君」

駅の方からナツメの呼ぶ声が聞こえ振り返る。当然、黒姫がそこにいた。いつもより気合の入った可愛らしい服で、メイクまで決まっている。

「……お前、その、男って知られてもその恰好なんだな」

「もっちゃん♪それはそれ、これはこれ。黎人君もせっかくなら女の子の方が良いでしょ。それに君こそ女の子だってやっと思わなくてくれたらしいしね」

「(改めてきつしよいな、この変態)」

しかし恰好については人の事は言えない。今の自身の服装も黒姫と同じく女性らしい服装であるからだ。

黎人は今朝方、起床した直後に自分の部屋にあった服を引っ張り出して着ていたのだ。昨日の帰り際にこの変態がプレゼントしてくれた物だが、まさか今日使う事になるとは思わなかった。

因みに下着だけは男物を履いている。流石にそこまで女装するのは無理だった。

「それで、せっかくだから遊ばない？久しぶりの二人つきりでの『デート』なんだから遊ばなきや損だよね！」

遊ぶ気しかないのでかコイツ。やっぱりこんな場所に呼び出さず用だけ済ませたらナツメは置いて行こうか。

「おお、ジト目もそそるけどそろそろ真面目にならないと……」

ナツメはこちらの不満に気が付いたのか急に態度を改める。だが冷静になれば要件もあるが彼と話したくて来たのだ。以前に頼んだ「神殺しと竜因果の覚書」の翻訳データと原本の引き渡しを今日行う。

だがデータだけなら態々街に訪れる必要はない。だが予想以上に自身を取り巻く状態があまりにも危険だと判断し彼には口封じも含め事前にかしらの返礼を相談していた。が……しかし彼の指定した肝心のお礼という物が何故か「デート」なのだ。代金こちら持ちで。

……ここ数日での精神状態で遊ぶ余裕があるのか、とは自分でも思う。母親は今だ正気を取り戻さずニエもまだ治療中だ。しかし、だからこそ正常に逃げなければやっていけない。

「(ナツメが単に遊びに付き合えって言わないあたり裏がありそうだな)」

「デートプラン的にそろそろ出発しないと。遅れちゃった分早歩きで行くからね、ついてくれる?」

彼はまるで握れとばかりに手を伸ばす。彼は挑戦的な笑顔で

「なめんな。これでも一応元男の竜だぞ」

仕方がないと伸ばした手を取ると二人で街に繰り出した。

——
現在位置 ボーリング場

神社から少し歩いた場所にあるボーリング場。休日の昼間、若者から大人まで様々な人が集まるこの場所に二人え訪れた。

「ボーリングは久々だー。最後に彼氏と来てから振り。黎人君とは初めてどね」

「……原本」

「どうした? 受付ならちゃんと子供料金で通したけど……子ども扱いは嫌だった?」

「……少々不本意。でも支払いは私だから別に」

いや、まあ、うん。あくまでデートだからね。こういう遊ぶ場所は

想定していたよ。だけどまさか思ったよりしつかり用意しているあたり遊ぶ気しかねえなって。受付を済ませレーンを前にして振り返り、少し呆れただけだ。

だがせっかくここまで来たのなら楽しまないと損である。空気が悪くなくても悪いし先に玉だけもって来る事にした。一列に並べられたボーリングの球の穴に指を入れて重さを確かめる。小さくなった自身の手には普通には会わない、というか球自体が相対的に重く感じる。仕方なく子供用の球の中から選ぶ事にした。

ふと声につられ横を向くと隣で年下の女の子が当然のように大人用を持っていた。つまり、今の力関係は一般人よりも無力ということか。一応だけど本当に自身が竜であるのか疑わしい。

はあ……非力だ。前までは普通の体で普通の重さの球を扱えたのに。段々と、段々と自身が竜、いや一人の女性と変容する様を段々と感じさせられる。今も、ついこの間も。日常に潜む人間性が感性から男を削いでいく。

一步で人でなしの道もすぐ隣にあるのだ。神とか竜とか未知の領域が自身を取り囲んでいるのは嫌でも知っている。だから私も段々と竜になっていくのだろうか。そうなれば僕にはどんな人外へと変容するのだろうか。

選ぶ球を一つ小さく、狭く暗い穴をそつと覗く。正三角形に配置された穴はまるで悟った顔の様。そつと触れ、滑らかに面をなぞる。うん、手に馴染む。ボーリング弾を両手で抱えレーンに戻る。

ってナツメが向こうで誰かと話してる？

「女の子だけで遊んでるの？せつかくだし僕らと一緒にやりませんか？」

「僕だけならありがたいけれど今日は生憎一緒に来てる人がいるから。お断りしまーす」

ナツメは数人のチャラそうな男に囲まれている。多分ナンパだ。男と分かる前なら俺が適当に声をかければ退散するのだがこちらは少女の体だ。というかアイツも男だから普通にすれば簡単に蹴散らせるだろうに。

「ナツメ、待たせた。こいつらはナンパ？」

「うん。先投げてていいよ。アレは……そう、妹ちゃん。今中一で……つまり、まだ君達と遊ばせるのは僕が怖いかな」

「ナツメ！お前の妹になった覚え無いからな変態！」

危うく勝手に妹にされかけた。男女の問題についてこのまま黒姫を放置するとやっぱり碌な事が起きない気がする。申し訳ないがこちらから彼らに断りを入れよう。

「あのなーお前ら、マジでコイツだけは止めておけ。コイツはおと……うぐつ」

喋り出しかけた途端ナツメに口をふさがれた。悪い笑みを浮かべ、結構な期間アイツと関わっているがあんな黒姫は中々見ない。きつと何かるくでもない事を考えてるな……と警戒していると。

「ワンゲームだけ。もし君たちの中で一人でも僕達2人の合計より点が高かった方が午後の予定を決める。それでいい？」

すると彼らは納得してしまつたらしくノリノリで自身の玉を取りに行つてしまつた。口をふさがれたまま黒姫の顔をキツと睨みつける。

「何だか面白くなつてきたね。もしかから僕ら……キヤー♪」

「んん〃ーん〃ー！」

わざとらしい悲鳴を挙げている当たりマジでやりやがったよ。口の封が解かれたと同時に鳩尾に一発入れてやった。だが涼しい顔で止められてこの上なく腹が立つ。

「お前！ふつぎけんな!?約束は約束だけど俺との最初の約束あつただろ！本、アレをさつさと返せ！」

「まーまー、ステイ。僕だつて小さなレディーを危険に晒す訳ないじゃん。僕、自分から仕掛けた勝負じゃ負けた事ないんだよね♪」

「ふざけてやがる……このクソつたれ！」

思わずその場で地団太を踏むもコイツの愉悦と変態的な笑顔の前では無意味だ。彼は数人の足音が背後に聞こえると自身の分のボーリング球を持ちレーンを前にする。

「ふふふっ♪君もそろそろ昂つてきたんじゃない？絶体絶命の状況っ

て、案外普段使わない感性が刺激されるんだ」

「つつつても……私も負けたら駄目になったじゃねか……」

でも何だろう。確かに恐怖とはまた違った類の不思議と心地のよい湧き上がる高ぶりを感じてはいる。

そしてゲームは始まった。高校か大学生くらいの3人組の間に挟まるように座るのは少し不快だ。

ゲームはまず初投、男らの一人が投げた。そこそこの経験者なのかレーンを綺麗に直進する。球は一番手前のピンに衝突し何本か巻き込み倒し突き抜け、初手から8本を倒した。だがあくまでそれだけで2回目は幸運にも軌道が逸れて本数は増えない。

画面に「れいちゃん」と自身の名前が表示され自身の番に。ボーリング玉を片手に数人に見守られながらレーンの前に立つ。後方から黒姫を口説こうと必死な男とそれをいなす黒姫の談笑、それと男2人がこちらに何をするか会議をする声が聞こえる。私はそれらを含め全ての音を集中力でシャットアウトした。

集中、集中、集中

真つすぐにピンの中心を見据え重心を動かす。

物理学に任せ腕を振り、だが一切のブレを起こさずに指から離れる。複雑に回転する玉はレーンを駆けて進み吸い込まれるように……

「G」

「なんでだよおおおおおおお！」

2回もガーターを作り出した。投げた勢いに任せそのまま膝から崩れ落ちた。

「あっはっはっはっはっは！」

「ナツメエ！笑うな！こっただって必死だったんだぞ！」

「いっっひっひ……う、動きだけは一級品だよ。コントロールド最悪で真っ先にガーターになったけどね」

「コントロールが……少女の体のコントロールが出来ない！」

あああああ今まで日常動作が慣れてきて油断してた、精密動作って殆ど練習してないんだ。ここにきて全ての余波がやってくると思わない。力仕事アドレナリンさえ出れば火事場でどうにかなるとはここ最近体感したけれど。

「がんばれー、れいちゃんの活躍で二人のお尻の穴が賭かってるんだぞー」

「気楽だなお前！あと次れいちゃん呼びしたら今すぐ帰るからな！」

男らの番となり2人が投げる。彼らも中々の手練れらしくどちらも7本と8本を倒しピンチとなる。そしていよいよ問題のナツメの番に。お気楽でいた分期待していいのか不安だ。

ナツメは腕を捲りボーリング球を持つ。

「ガーターは出すなよ」

「はいはい、どこかの誰かの為にもストライク出さないと負けちゃうし頑張るよ！えい！」

掛け声と共にボールを投げる多少曲がった軌道を描きながら転がり宣言通りのストライクを出した。彼はスキップしながら席に戻る。そして買ったドリンクを飲みながら余裕の笑みを見せてきた。

「ね、言ったでしょ？」

そして彼の無双が始まった。彼の投げる球は全てがピンの群の中心を貫きストライクとスペアを量産する。男達も彼女に驚きつつも数多のピンを倒すがナツメと自身のスコアの合計には決して届く事はないまま10投目を迎えた。

「ふふーん。よかったね、れいちゃん。もう勝ち確定のスコアだよー」

「(ま、マジか。本当にほぼストライク出しやがった)」

「驚きすぎて声も出ない？じゃ、投げてくるから感想は勝った後で聞くからね」

そう言いつつ彼はまた投げる。ストライク、ダブル、ターキー、最早自身とかけ離れた神業に目がくらみ感動を覚えた。勿論結果は明白、ほとんどがナツメのスコアだけで3人の誰よりも圧勝した。

「やりやがった……」

「じゃあ、午後の予定はれいちゃんに決めてもらうよ」

現在位置 鳴葉歴史資料館

ここは望月さんが館長をしている街の歴史館だ。鳴葉神社を中心に発展した街の歴史について記されている。また神社に関連した展示物も多く公開されている。自身も何度か訪れているもののプライベートではあまり訪れた事はない。しかし運動で温まった心身を落ち着けるのには適している。

自動ドアが開き二人で中に入る。一定の気温と湿度に保たれた少し肌寒い空気が僕らを出迎えた。オフシーズンで他の客はおらず、半ば貸し切りのような状態なのは幸運である。

「うーん、ここはあの時から変わらないね」

「ナツメ、お前来た事あるのか？」

「定期的に。この職員さんに僕の彼女がいるから」

「彼女もいたのかお前」

「うん、去年知り合って累計3人目、彼氏も合わせたら8人目？」

「随分と人気で……」

ボーリング場で選んだのは男と別れナツメとのデートを続行する事。真の目的すらまだ終わっていないのに他の男を連れてくる暇はない。

だがしかし驚いた。ボーリング場から一体どこに行くか不安だったのに態々ここに案内された。彼の選択としては意外な渋いセンスじゃないか？ いや、彼に限ってただここに案内した訳ではないだろう。多分彼からあの本が鳴葉に関係する物品だとは聞いている。恐怖と期待が半々だ。

大人1枚、子供1枚のチケットを買い中に入る。ガラスの向こうに展示された数々の古い物品の数々はどれも歴史を感じさせる。しかしどれも修学旅行先で見るとなただ古ぼけた品々の数に過ぎない。つまらない、きつとそれが普通の感想だ。

しかし、それがただ物品だけを見ればの話だ。神学と竜について学

んだ後で何か知らない物が分かるかもしれない。古びた、だが多くの説明がされている一枚の小さな展示物の説明を読む。

鳴葉の禍護符

円に下へ1本、上に放射状の5本線が伸びる記号が描かれた鳴葉大社の古い護符。葉脈を形どった模様の護符は持つ者から害を持つものから遠ざける。

鳴葉はいわゆる吹き溜まりであり、追放された罪人は古今東西の災いに打ちひしがれ最後にこの地の中心にたどり着く。そこは木が揺れ葉が擦れる音の響く静寂に満ちそこで生き延びた。まともな者ならば禍の中へと出向くことはない。だから多くの者は二度と出て来ぬ罪人を指しこう笑ったそうだ。

森へと入れば狐に包まれる

『提供 黒姫 解説 月輪』

……読んで少し後悔している。何でこうも中二臭い言い回しで解説がされているのだろうか。つて、解説先生なの!?あの物静かで知的なあの人がこんな中学生みたいなのを大真面目に書いてるの!?

他の説明は流石に抑えられているものの、解説に先生の名前があるはどこか癖のある文体となっている。ええ……あの人つて意外にはつちやけるタイプなんだ。鳴葉と竜の関係者つてどうしてこうも変な人しかいないのだろうか。

歴史館を先に進むと古代から時間が経過し江戸時代、鳴葉稻荷神社が建設された時の資料が並び始める。ここからは竜や神という神学みが薄れ真つ当な歴史資料が展示され、解説は癖のない普通の文である。先生の解説も少なく当たり障りのない解説だ。

「この辺りの神社の資料はないんだな」

「うん。神社的にもこの辺りは再建のせいで宗教色が薄れて商業特化になったらしい。僕も実物を見たことあるけど……ま、あの子の末期近くだから面白いと言えば面白いんだけど……」

「? 何か知ってるのか」

「うーん、あの子と竜はあんまり関係ないからなー。公的記録は大体

偽史だし丁度いい資料が無い」

言葉は物騒だがどうやら竜とは関係のない話らしい。現実問題竜と鳴葉はあまり関係のない話だと考えてもいいかもしれない。竜と神の関係性の調査は館長の月輪先生がしていた筈。しかしその効果自体は趣味か副産物と考えると不思議と納得できる。原理的に同じでも、やはり常識的に竜とは空想上の生物に過ぎないのか。

故も知らない古い資料を眺めつつ考察をするも有益な情報はない。すると背後から誰かが近づく足音がした。

「洋野さん、いらしていたんですね。ご来館誠にありがとうございます」

優しく落ち着いたら声に振り向くと月輪先生がいた。いつもと違いスーツで現れていたところから勤務中らしい。もしかしたらオフシーズンは暇なのかな。

「先生、こんにちは」

「こんにちは。今はお一人ですか。私に用事があるのであれば連絡をしていただければ伺いますよ」

「いえ、実は友人と来ています……」

「臯月ちゃん僕もいるよー」

展示物の影からナツメも反応した。博物館の中で大声出すなよ。

「とまあ、私の友人を連れられて遊びに来たんです。ですので今日は竜とかのお話を……」

「黒姫さんがここに？」

先生がナツメに興味を示している？もしかして彼らは知り合いだったのだろうか。だがそれにしても様子がおかしい。

「今朝のニュースは見えていらしていないでしょうか……でもあの声は確かに……」

仕方がない、ちよつと本人呼ぶか。展示物の向こうまでナツメを呼びに向かう。

「ナツメ、先生困ってるし顔出……せ？」

展示物の影、誰からも映ることのない死角。そしてあとから知った、数少ない人の目とあらゆる監視システムの中で僅かにできた奇跡

の穴がまさに声の音源だった。

たった今までナツメがいたであろう物陰には誰もいなかった。それどころかそこは展示品が置かれ、声どころか立ち入ることすらできないのだ。

唯一彼がいた事を証明するのは展示品の下に置かれた今日の日付の書かれたチケットのみ。

「な、ナツメ!?!どこ行ったあの野郎!?!」

「……洋野さん。これを」

先生にスマホを手渡される。表示されるのはニュースサイトで出しに大きく今朝の電車の人身事故について書かれていた。

同時に見てその場で座り込む。だってそんな、まさかそんな話がありえるのか?!

「黒姫さんは今朝、踏切で……」

「……どうして」

黒姫ナツメは今朝に合流するまでの踏切で事故死していた。

身勝手な彼女は何処へ

「物理的な痕跡はない。特殊な動作も見られない。あくまでその場で消え去った……不思議です。超常現象にはもう驚かないと考えておりましたが……彼は、一体……」

月輪先生と私の二人は消えたナツメの不在を確かめるために簡単に調査をする。だが先生の漏らした言葉の通りなのに証拠もないのだ。消失マジックなら仕掛けがどこかにあるが展示品や壁に囲まれたどこにも細工は見られない。

ナツメは過去何度もふらつとどこかに行つては突然いなくなった。しかしその度に謎の技術としてこれはこれで困惑していた。しかし今ならはつきり言える、彼は消えるように、ではない。正に魔法のよう消えていたのだ。

「(それよりも『原本』を返してもらってない……)」

竜因果と神殺しの覚書には確かに多くの竜についての情報が描かれている。しかしそれはあくまでまだ神学や竜についてのを求める物が酷く渴望するのであってどちらにも関係のない自身には必要のないものだった。返せなくなったのは仕方がないが元から管理していなかったからもしかしたら許されるかもしれない。

一方ナツメに関しては不気味さを酷く感じている。今朝に出会い遊んでいた人物がまさか死人だった、とは不気味で仕方がない。先生にも一応朝からの流れをざっくりと教える。

「ナツメに翻訳を任せていたんです。それを返してもらうのに朝から彼と一緒に行動していました」

返事はない。先生はナツメのいた場所を真剣な目で眺めている。それだけ集中しているかまだ考えるのに情報が足りないのだろう。もう少し何か彼女にも関心の得られる情報は……

「えっと……実は頼んだ本というのがあの神殺しと竜因果の覚書です。以前先生にお話したあの本ですよ」

すると先生は何かを思い出したらしく発言から数秒遅れてこちらを見る。

「黎明って竜でしたっけ。僕の考えだともしかしたら黎明について何か知れるんじゃないか期待していたんです」

「黎明……桐生さんが話されたのですね」

すると先生は唸りながらぐるぐるとその場を周る。

「解読方法について何か黒姫さんからは聞きましたか？」

「古代の鳴葉の言語だとか。いや、私はさっぱりですけど確かに自分でも少し読めました」

携帯で鳴葉の言語の Wiki のページを開いて先生に渡す。先生はまじまじと画面をスクロールし表を眺める。

そして画面を閉じてスマホを返すと一度バックヤードに帰った。再び出てきた時タブレットを片手に神殺しと竜殺しの原板の画像と対応表を交互に見比べていた。その様相は今までのどこか余裕のある雰囲気とは違い明らかに焦りが見える。

「納得が……納得が出来ないっ……！」

「あ、あの……先生？」

「どうして、何故気が付かなかったのでしょうか。こんな身近にあったのに重要な資料をすぐに読み解けなかったのか、過去に一度閲覧したはずであるのに。どうしてでしょうかね、ほんと」

何だか一人だけで突っ走って納得している。情報が来ない分は蕾さんから保管するとしてこの人の学者肌な傾向に任せていれば情報は得られそうだ。

「黎明が何故……鳴葉とは……彼は……彼が、黎明？いやまさか……」

うわ言のように独り言をつぶやきその場でぐるぐる回る彼女は完全に一人の世界に入り浸っている。こちらから話しかけても反応は返ってこないからもう帰ってしまおうか。

「待ってください」

順路道理に進もうと踏み出すと後ろから呼び止められた。

「現在黎明の生息するであろう場所への道は苗床の体に塞がれています。恐らくこの情報を機龍が知れば苗床を殺し、竜秘宝で黎明への道を広げるでしょう」

語る言葉には既に確かだ。迷いなく確信に近い言い回しだ。

「先生、解説を始めたのは……」

「解説しました」

簡潔に説明されたそれは理論では可能であるが、それでも並では、まして所見からではあり得ないであろう早さだ。資料がよく纏まっていたのと彼女自身の才能から成される神業なのだろう。

「あなたも人を殺すお覚悟をお忘れなく。叡智とは一度知れば引き返せない、逃れられない責任をお忘れなく」

引き込んだのはあなた達じゃないか。先生も竜と神の叡智の最先端だというのに。彼女はそれだけを言うと言おうとスタッフルームへ戻る。

「先生は……もしかしてあるんですか？」

ついらしくも無い意地の悪い質問をしてしまった。扉に手を駆けたまま止まった先生に気が付きはつと今の発言を訂正する。

「あ、ご、ごめんなさい。失礼しました」

何だか気まずい雰囲気となってしまった。先生は優しい顔だけど逆に裏に抱える物が怖い。私は順路の方向へと逃げるられるように体が疼く。

「ふふっ、確かにあなたばかりに責任を背負わせるのも悪かったです」
そんな悪い予感に反し先生は笑った。

「私はまだありません。けれど私はきつと殺してしまうとは思いますがよ。抑え難いもの衝動は、意外と簡単に吹き飛んでしまいますから」
先生はまるで冗談のように疑問に答える。一応怒ってはいないようだ。この妙に振り回される感覚はナツメと似て心臓に悪い。彼女は「この資料を基に色々調べさせていただきます」と今度こそスタッフルームに戻った。

先生と別れた後、近現代の歴史資料を見て回った。先生との出会いで意図せず止まったもののまだ展示は続いている。近現代となると展示品もこの街のありきたりな成立までの流れがまとめられているだけで特筆すべきものはない。特に面白い物も無くいよいよ出口の前に辿り着く。あとの残りは企画展示だけだ。

企画内容は「鳴葉駅前の歴史」創立当時から大陥没の前後までが詳細にまとまっている。あの時、私は実家において被害は受けなかった。

しかし被害の程は克明に覚えている。

一年前の夕方、日が落ちてからの出来事だった。ドン、と鈍い振動と共に停電が起きた。直観で異常事態と判断した私はすぐにスマホで情報を仕入れると鳴葉駅の周辺一帯の地盤が大規模に陥没したと知った。

その日の夜は祭りだった。節電モードとモバイルバッテリーで一夜をつなぎ止めるとその次の日に現地に出向いた。バスに乗り、野次馬根性で大穴に出向いて下を覗いた。深く暗い穴はどこまでも深い。今思えばとんだバカだった。しかし……

『……ああ、そうでした。足も治してもらったんでした。この足はその神様から譲り受けた物です』

今思えば今自分が手を出しているもので最悪何が起きるのかよく知る事が出来るいい機会だったかもしれない。事実ニエは災害ともいえるような事件を起こした。あれからもう一週間以上経過していると考えると私も……あれ？

『私』……おかしい、つい前までは……『俺』って……」

瞬間、背筋が凍った。いつの間に変化した？分からない。確実に変化した瞬間を知っている、だがそれでもまだ日常的に使用するまでではなかった。拍動が激しく呼吸も荒れる。

「落ち着け……落ち着け……」

冷える壁に頭を当て深呼吸して落ち着かせる。ふきでる脂汗と自我崩壊の四字をシャットアウトしながら俺は俺だ、ただそれだけを念じる。自我を保て、心を落ち着かせる……

「フーツ……フーツ……ハアハア……はあ……はあ……」

数分経ってようやく落ち着いた。もう大丈夫、俺は俺だ。正気に戻った俺はそのまま順路に逆らい歴史館から去った。外に出た頃にはもう夕暮れだ。電車に乗り、帰宅ラッシュで段々と増える乗客を席から眺め帰路につく。

本当に不思議な一日だった。今までの日常が一気に崩れ去り、そしてまた新しい日常が始まった。今日という日をどう振り返っても非現実感が拭えない。

「あー、疲れた……」

電車を降り、駅を出るといつもの鳴葉の見慣れた風景が目に入る。先ほどまでの体験は夢幻であったかのように思えるくらいに普段通りの光景だ。

「さて、帰るか」

紅白の竜

ここに閉じ込められてもう何日だったの。少なくとも一週間以上この狭く重苦しい部屋に幽閉されている。ほとんど裸のまま口枷をはめられ手足を縛られて、汚れたベッドの上で拘束され続けるのは辛い。何よりあのイカれ女が定期的に訪れるのがムカつくつたらありやしない。

「んっ……」

小さく喘ぐとともに液体がじんわりと下半身を温める。私はまともにもベッドの上から動けないのを理由にオムツを履かされている。漏らすたびにすぐに冷え、グチュグチュになり気持ち悪い。定期的に苗床かメイドが掃除のついでに換えに来るまでの辛抱だ。あくまで、気持ち悪さについては。あいつらはそんな余裕すらも屈辱に変える。

コンコンコン ガチャ

「掃除に参りました」

「……」

掃除の道具を持ったメイドが返事も待たずに部屋に入る。ああ、今日の交換の時間だ。不快な感触がやっと解消される待ちに待った時間だ。だがあいつらはそんな余裕すらも屈辱に変える。

メイドは私のおむつの中身を確認する。むわあ、と寒色に見合った相当の異臭が広がる。汗ばみ、穢れ、糞と尿に濡れたそれを前にメイドは顔色一つ変えない。メイドは私を物としか考えてないのか無感情な冷たい視線で淡々と自身の汚物を処理する。余りにも哀れで醜い私に泣きそうになる。

メイドは慣れた手つきで私のオムツを脱がせる。私は抵抗する気力もなくされるがままになるしかない。汚れた場所を念入りに拭かれ、ついでに全身を濡れたタオルで綺麗にされる。そして新しいオムツを穿かせられる。まるで介護されているようで惨めさが加速していく。

「んう……うう……」

体をなぞるように丁寧に拭かれる度にくすぐったさと心地良さに

悶える。こんなことされたって嬉しくなんか無いはずなのに体は正直に反応してしまう。そしてその反応を見て苗クソが喜ぶことも知っているから余計悔しくて情けなくて泣いてしまった。

「ひつく……えぐっ……」

唯一の良心は泣いてなおメイドは反応を示さない事だ。私の事が済むと今度は換気と部屋の清掃を始める。ゴミ箱の中までしっかりとチェックし終えるとそのまま部屋から出た。

「ふーっ！ふーっ！」

救いの手欲しさに怒りに任せて暴れようにも手足の自由を奪われているせいで何も出来ない。ただ芋虫のように身じろぎしながら涙を流すだけだ。こんな生活になったのも数日前にレイトの所に脱走し特に拘束が酷くなってからだ。

ガチャ

「おはようございます、緋刃さん」

メイドと入れ違うようにこの状況を作り出した元凶、苗床が来やがった。鼻をくすぐる朝食のいい匂いと先程までの惨状に吐き気がするが食べられるだけマシだ。いっちょ前にいい物を使っているだけはある。

苗床はテーブルに朝食を置くと私の体の上に乗る。大人の体は小さな私には少し重い。真っ直ぐとこちらを見つめた彼女はそつと顔に手を伸ばし口枷を外す。一晩中かまされた口枷は唾液で濡れ、外した後を追うように糸を引いていた。

「今日の寝覚めはどうですか？」

「最悪……」

「元氣そうですね。早速朝ごはんにしましょう」

そう答えると満足げに微笑んだ。食事中にも拘束は解かれることはない。だから必然的に誰かに食べさせてもらう必要がある。苗床はスプーンを手に取りスープを一掬いし私の口に運ぶ。野菜たっぷりのポタージュは美味しいけど味なんてわからない。

「おいしいですよね？・ね？」

「……」

黙っていると強引に口を開けさせられ無理やり流し込まれる。飲み込むとまた一口運ばれる。何度繰り返したか分からないがようやく終わる頃にはすっかり冷めきっていた。

「ごちそうさま」

「はい、よくできました」

頭を撫でられる。子供扱いされるのは嫌いだけど今は素直に受け入れる。それくらい今の私は精神的に弱り切っている。

「次は「身体検査？さっさとしたら？」」

自暴自棄になり彼女を受け入れる体勢にする。拘束された範囲で出来るだけ手足を開いた。

「では失礼します」

苗床はベッドに乗り、私に覆いかぶさるように抱き着いた。彼女の体からはいつもえづくような甘い香りが漂ってくる。同じ血潮に濡れているのにどうして私と目の前の淫獣がどうしてここまで違うものなのか疑問だ。

「ん……ああ、やっぱり緋刃さんの肌はすべすべしていきもちいです」

「それはどうも」

朝食後は決まって身体検査という体で体のあちこちを弄られる。私は人の体には詳しくないのだけれど多分これが私的な目的だとは確信できる。はつきり言って気持ち悪いつたらありやしない。

私の体を抱きしめながら首筋を舐める。そして時折強く吸う。まるでマーキングでもしているようだ。多分今日もまた一日中好き放題されるのか、面倒くさい。たった短い間にこの汚物には何度も犯され、尊厳も何もかも奪ってもまだ私を求めるのか。

過去にレイトとめちやめちやになった時も似たような事はしている。あいつとは純粋に快樂だけを貪る、ある意味淡々とし熱い夜だった。あれはいい、今思い出しても人型で良かったと思える程だ。レイトには秘密だけだね。今はちよつと恥ずかしい。

けれど本当に不思議だ。こんな糞との交わりなんかよりたった数回のレイトとの思い出が鮮明に残っている。こんな状況で思い返せ

ばあの時の感情が蘇る。

「緋刃さん、もういいですよ」

彼女の抱擁が解かれると共に突き飛ばすように苗床を突き飛ばす。

「早く退きなさい。重い」

「うう……酷いです……」

泣きそうな声を出す苗床を無視し私は目を閉じる。こんな奴と交わったところで虚しくなるだけだ。そんな私の態度を見て苗床はため息をついた。

「今日も戻らないのですね」

苗床が私の頭を優しく撫でる。白の消えた真紅髪は指通りがよく、定期的な苗床直々の手入れされているのが良く分かる。ここにぶち込まれて初めて知ったのだけれど苗床の気持ち悪い部分は意外と早く終わる。その波が過ぎて落ち着くと今度は愛おしそうに、だけどどこか悲しく私を愛でるのだ。

「このままずっと白く染まれば……どれだけ望ましいのでしょうか」

「じゃあ帰してよ。向こうじゃいつも白じゃない」

「緋刃さんが私を恨めしい、憎いと感じ、感情のまま殺してしまいたいという気持ちは分かります。ですが彼女は悔しいですが私の手に負えないのです」

むう、そう上手くはいかないか。私は小さく舌打ちした。苗床はそんな私をまた優しく撫でる。数日間こいつに好き放題されたからこの展開にも慣れた。

しかし同時に数日かけて知った情報もある。どうにもコイツは私は勿論、病的に愛してはいるがどうにも白い姿の私も執拗に愛しているのだ。

神域の先、竜の住む領域にて。私は常に狂気だった。

咆哮、咆哮、斬撃、返り血。赤い血よりもっと白い剣を振るい同族の竜を殺す。そして誰もいなくなった静かな世界でその血肉を食べる。夜は殺した竜の家で眠り黎明の静か時にまた去る。孤独で、だ

けど満足した生活だった。

私が戦闘に身を投じるのは単に目の前の竜が邪魔だからではない。殺した相手からの刺客、同類の戦闘狂、普通に生存競争、他原因は色々ある。しかし私でも臍げにししか詳細は知らない。顔を合わせる事には既に紅白の液体に彩られた死体だから痕跡でしか知りえない。それに加え何故か覚えられないのだ。

咆哮と同時に意識が薄れ、一度切る度に肉体的、精神的な興奮で頭がどうにかなりそうだった。ついこの前のメイドとの殺し合いも実は体が昂りすぎて致命傷を一撃貫つてから覚えていない。

しかし共通しているのは見に覚えのない白濁液と今のような髪色の白変が起こる。殺す度に現れるそれらは逆説的に私が戦闘した痕跡だと全てに発するからかさならなる強敵を呼び寄せるから気に入ってはいた。記憶はほとんどないけれどたしかに白い私は存在した。

……だけど、ここまであつちの私に固執されるとねえ!? 流石にうつとおしいんだよアバズレ!

「はあ……知らない女の話聞いていても面白くないんだけど」

知らない誰かについての話つまらない。だから包み隠さず口に出す。だが苗床は私の予想より鳩が豆鉄砲を食らったような阿呆面を晒している。何? 私が私を何でも知ってると思ってたの?

「私こそごめんさい。あなたについては全て調べ終えたと考えていたのですが……まさかあなた自身が知らないだなんて……あの美しさを知らずにいたのですか」

? 美しいって何なのよ、気持ち悪い。吐き気がする。

「脳の焼かれる美しさ、あなたに教わった希望の光です」

「どうしたの? あんた、いつにも増して今日はどうした……どうしたの? 」

様子のおかしい苗床を確かめるのにそつと目を開けると苗床は泣いていた。あの腐れ頭で狂愛と外面しかない笑みが外れる瞬間を初めて見た。なんて醜い顔なのかしら、体格に見合わない哀れで卑小な竜が私を求め泣いている。

「死ぬのは私だけでいい、だからこそ彼女に私を愛して私だけを殺し

てほしいのです。その為に、まずはあなたを物にしたい」

「……」

「愛するには、まず愛す必要がある。どこかで聞いた話ですがどうにも私には難しいみたいです。多分まともに愛なんてしなかったからでしょう。あるいは彼女に全て犯されてしまったから、ですかね」

苗床は私をベッドに押し倒し、そのまま覆い被さる。苗床の表情は見えないけどきつといつもの薄気味悪い笑顔だろう。私を墮とそうとする時の気持ち悪い顔が浮かぶ。

「二人で愛し合いましょう。醜い体は嫌いですか？」

「大っ嫌いに決まってるだろこの死に損ないの腐れ野郎！」

力任せに手足の拘束を引き千切り、苗床を思いつき蹴り飛ばす。そしてベッドから転げ落ちた苗床を睨んだ。

「あゝっ♡いいですねその顔！」

「何が美しさだ、何が愛だ、いちいちうるさい！私は私の好きに生きる、誰を愛すかも、誰に愛されるかも好き勝手やらせろ！」

止められるもんなら止めてみる！立ち止まらせる気にしてみるよ！てめえ無駄にだけえ図体なら何でも出来るだろうが！」

叫ぶように、叩きつけるように、私は苗床へ言葉を吐き出していく。枷により押さえつけられた反動は止まらない。

そうだ、私は私の好きな様に生きてきた。だからお前を捨てて生きてやる。それが私の最も自然な唯一の生き方なのだから。

だからもうお前なんか要らない。泣くなら勝手にしやがれ。蹴られた腹を押さえる苗床を放置し私は部屋を出る。後ろで何か言っているが知った事じゃない。扉を開ける前に見えた奴の顔は、とても不愉快なものになっていた。

「だけど私に殺しを頼むなら高く付くわよ。覚悟はあるんでしょうね？」

「うゝ…：…勿論です♡。あなたの為ならばどんな犠牲も厭わないつもりです♡」

「てめえをマジでぶつ殺す！ここで一回ケリ付けてなあ！さっさと自由になりたいんだよ！」

扉には鍵が掛かり、鍵穴はない。普通の方法では開かないのは目に見えている。厄介な事しやがって。

指を切り、出血から剣を造り扉を切り裂く。前ステップと共に扉に突っ込むように放たれた斬撃は勢いあまって数部屋を貫通しながら扉と屋敷の外壁を切り裂いた。久々の激しい動きでも体と技量は訛ってはいない。

森の清々しい空気の中大きく背伸びをし、新鮮な酸素を肺一杯に取り込む。窓から見える空も快晴だ。

血潮を浴びるにはきつと良い日だ。

そして運命は動き出す

駅のホームで一人ベンチに座り帰りの電車を待つ。ゆっくりと白い尻尾を揺らし、角を収縮させながら私は眠気から静かに目を閉じていた。午後の人が再び動き出す時刻であるのに、不思議とここには私以外にはいない。不気味な程に静まり返ったホームは世界に私一人しかない不気味さを感じる。

「あんな奴でも……一応、友達だったのに」

夢現の最中に思い浮かぶのはナツメへの尽きぬ疑問だった。神出鬼没な面があったのは認める。しかしそれ以上にまた自身が原因で死亡した事を悔いている。私が原因でもう何人死んだ。駅の騒動に親しい友人、母親も今だ意識がない。

「(竜なんて知らなければずっと幸せだったのかな)」

考えている内に目的の電車がホームに止まる。私は飛び起きて乗り込んだ。電車の窓から見える街はたった数日で惨状を忘れていた。ただ事件は確実に起きたのだ。あの夜、街が落ちたように。

ただ少しだけ面白くも感じる。ニエと出会い、命を賭し、落とした存在はきつと私だけだ。ひいろの本性も苦しみも知らなかっただろうし神様もきつと架空の存在としか考えなかった。そう考えると以外と悪い話じゃないのかもしれない。

「今日はいいデートだったかも♪」

大切な友人が死んだのに不思議と気分は場違いに高揚していた。ここ最近の鬱気味な気分を切り替える役目はしつかりと果たしてくれた。あの本が借りパクされちゃったのは残念だったけれどナツメならまたふらつとどこかで会えるかな？

「~~~~♪」

誰もいない電車で一人揺られながら鼻歌を歌う。騒音にかき消されながら流行りの歌のうろ覚えの歌詞が車内に響く。

そこに更にスマホから電子音が響いた。誰もいない車内だしそのまま電話を取る。

「もしもし、黎人君!？」

すると通話を始めた途端どうやら月輪先生の解説が大声で呼ばれた。音量を下げて要件を再び尋ねると蕾さんに伝わったらしくその詳細について私に話を聞きたいらしい。

「今すぐ帰ってきてくれないか。君の貸した『竜殺しと……』」

「その本、借りパクされました。今は行方知らずです。ごめんなさい」「うそっ……!? すまない、少しだけ席を外す……ホアアアアア!! シリョウガアアアアジンルイノエイチソノモノガアア!! フンシヨハ、フンシヨダケハアアアアアアアアアアアア!!」

電話の向こうからヒステリックな叫び声上がる。多分、先生の予想を大きく上回る被害が出てしまったらしい。蕾さんの電子音にも似たバグった声初めて聴いた。私は少し罪の意識を感じながらも電車の中で愉悦に浸っていた。

「ははっ。蕾さん、落ち着いてください」

「君、随分と落ち着いていられるな……こっちは一世一代の研究成果に繋がりがかねない資料を焚書されかねない状態だぞ!」

「原板の情報はあるんですし翻訳法も今月輪さんが検証中だそうです。特に問題はないかと」

「そ、そうだけどねえ! とにかく帰ってきたら会議だ!」

雑に電話を切られ通話が途切れた。この前から段々と可愛らしいというか、やつと人間らしい所を見ている気がする。賢い人は好きだけれど、やっぱり興味深い人はそれ以上に好きかもしれない。ひいろも私の基準では彼女側だろう。

ただ二エだけは違うと思うな。二エは何をするか分からない自由さと気ままさが今思えば恋しいのだろう。二エの様態が落ち着いたらまたゲームや漫画でゆっくりしたい。知らない場所にお出かけでもいいかな?

「今思えばあの逃亡生活も悪くなかったな」

最寄り駅に着くまでをスマホで最新のゲームを調べながら過ごす。全てが終わって、体を元に戻して、大学生活と人外とも楽しく生きる。そんな空想を懐きつつ私は帰路に着く。

蕾さん経由で迎いの車を頼み屋敷に戻る。ついでにいつの間にか送信されていた事前の詳細資料を確認しておくか。

「えーっと、実験室だっけ。要件は……」

スマホを出して覗き込む。と同時に凄まじい破壊音が森に響いた。音源は屋敷の中からだ。走ってそちらへと向かうと破片がいくつか飛び散り、どれもが綺麗な切断面であった。

「つニエー！」

「あ”あ”誰?！……あ、レイトじゃん！久しぶり！」

彼女は俺を見つけると鬼の形相から一転いつもの無邪気な笑顔に戻ってこちらにやってくる。しかし私はすぐに視線を彼女から逸らした。あの、正直裸ならまだ何度か見ているんだけど療養中の恰好なんだ彼女。うん、療養中なら裸におむつだけなのも納得……うん、納得しておこう。手足の痣はきつとさつき暴れたせいで付いたものだろう。

「こっち見なさいよ。何目反らしてるの?」

「服着て！」

指摘して自身の格好の異常さに気がついたらしくそうね、と履いていた物を眼の前で脱ぐ。一切の躊躇もなく自然に脱いだもので少し見えてしまった。役目のないそれをそこらに投げ捨て血で服を作り出してやつと真面目に私達は数日振りに顔を合わせる。

「レイト、雰囲気変わった?成長?妙に落ち着いてるわね。下僕の癖に気持ち悪い」

口では酷い言われようだけど彼女の顔は先程までの修羅から一変、普通の少女の嬉しそうな笑顔である。私も久々に元気そうなニエと会えて心から嬉しい。

「気持ち悪いはないでしょ。私はただ自分が竜の子供だと知って両親が兄弟で母親を病院送りにして……ニエの療養中に色々あったんだ」「ふーん、随分楽しそうに話すじゃない。元気だったなら私も引つ張り出して欲しかったんだけどー!」

「暴れたら傷口開くよ」

「苗床使えばどうせすぐ治るわ」

そういう問題ではないと思うけど、まあいいか。動きに不自然な点はないし身体も健康そうだ。本当に良かった。体について知り、次にどうして屋敷を壊したのかを問う。また何か暴走で横していたのか、と心配だった。

「苗床が余りにもウザくて今からぶち殺すところだったの」

が、思っていた方向の心配ではないがまた何かしようとしていたらしい。ニエの世話にひいろが頻繁に訪れていた。だから相当のストレスが溜まっている分が終に爆発したのだろうか。

「ちよつと、早くしてよね」

「なんのつもりだよ」

「決まってるでしょ！あんたが連れ出したらいいだけじゃない」

「あー……あー……うん、そっか。もしかして、私も？」

ニエは少し頬を赤らめつつも当然とばかりに胸を張る。なるほど、殺すのは自分の手として移動と厄介事をさせる気だな。

「勿論！ぶち殺す以外の面倒はレイトに全部やらしてもらおう予定だからね！」

前言撤回。やっぱり彼女はニエだ。人の都合など考えない自己中心的な思考回路をしている。私はため息を吐いて、仕方ないと覚悟を決めた。それに、これはこれで面白いかもしれない。

……って出来るか！

「なーに、簡単よ！ちよつと神域経由で向こう行って本体から蹴散らすだけ」

「待て待て待て！引つ張らないで!?!せめてもっと相談してから！」

「なーにビビッてるの。私が負けると思ってる訳？」

「ニエなら多分できそう」

「OK、レッズゴー！」

慌てて繋がる手で綱引きをする。が、全く動かない。流石に力勝負じゃ勝てる気がしない。こうなったら力業以外の何かで止めるしかない！私は必死に頭を回転させ、ニエが喜びそうな言葉を探す。そして、あつた！

「まだ今じゃない！蕾さんに相談しよう！」

二エの体がピタリと止まる。彼女は興味深そうにこちらを見つめる。息を整えてから私は更に続ける。

「苗床を殺したいのはお前だけじゃない。ひいろを殺せば竜秘宝に一歩近づくと、『元に戻れるかもしれないんだ』！俺を元に戻すって約束しただろ！」

効果は抜群か!?私を掴む手が緩んだ。今なら行ける。そう思った時、二エは俯きながら呟く。あれ?なんか嫌な雰囲気。私は冷や汗をかきつつ様子を伺っていると二エは大きく笑い始めた。え、嘘でしょ。まさかの逆効果!?

「あつはつはーここにきてアイツが仲間になるの!?さいつこー！」

どうやらお気に召してくれたらしい。彼女は嬉しそうに笑いながら屋敷中に戻る。私も後を追った。

——
現在時刻 同刻

現在位置 実験室

地下深くの実験室に一人、蕾の体は実験用にて倒れていた。

「(不味い)」

机上には白く強い粘性を持つ溶液が倒れた小さなビーカーから零れている。零れた粘液はメモ代わりに使ったであろう文字の書きこまれたレポートを濡らす。内容は数体のマウスの死体と粘液の注射器、計量器具、それと竜の生態データがまとめられたパソコンがある。

「ぴい……ぴい……」

その道具に紛れ珍しく本体を露出させた激雷がじつと丸まり呻いていた。

「頭が割れるように痛い。身体に極力影響が出ないように抑えてもこれだけ変質するとは計算外だ」

先程まで彼女は注射のシミュレーションをマウスで行った後に自身に粘液を飲んだのだ。この粘液は黎人の角の内部から採取した成分を培養、精製した物である。結果は割れるような頭痛と若干の意識の混濁、幻覚と幻聴、彼女には経験は無いがきつと薬物の後遺症には相応しい副作用だと症状から感じとった。

一方で凄まじい副作用に犯されつつもその中に僅かな作用を彼女はまた感じていた。脳の中身をかき回す高揚感と心拍の増加、心身で感じ取れる興奮という興奮を苦痛と同時に感じる。苦しく、快い。相反する二つの感情の中で僅かな理性でこの現象について考察を巡らせた。

「詳細な性質は不明、だが私達竜には恐ろしい代物に踏み込み過ぎたのだ。しかし確信は出来た、これは神性そのもの、神から言わせれば空の信仰そのものだ」

脳が焼かれるというのも納得だ。こんな物を原液のまま感じてしまえば焼き付いたまま離れないのは同情する。しかし得体のしれない物を実験目的とはいえ自ら進んで飲んだ事を後悔していた。

「緋刃や苗床には馬鹿だ馬鹿だといいつつも私も同じ穴の貉だな」
いつまでも寝ているわけにもいかない。時間をかけて蕾の義体を遠隔操作し自身に症状を抑える薬を投与した。5分程で効果が表れ彼女は蕾の義体に取り込み蕾は息を吹き返した。関節の拳動を確かめてため息交じりに実験道具の片付けを始めた。

「今後は黎人君と緋刃との接触は抑え……」

パソコンの画面が表示されメールの連絡が通知される。送り主は黎人、要件はまた緋刃の面倒事であった。

……不運とは続く物だ、改めて彼女は実感した。

「鳴葉大社」月に吠える獣

現在時刻 同日深夜

現在位置 鳴葉市街 車内

空席のあるマイクロバス中、竜の関係者が久しぶりに1箇所が集まっていた。鳴葉稲荷を過ぎ人気の少ない方へと進む車は運転手の一人を除き苗床を殺す為にここにいる。月輪先生だけは別に目的地に向かっていているらしい。

「遂にこの日か。苗床」

「ええ、いよいよですね。皆様にご迷惑をおかけするのは今日が最後になりますね」

前方の席に列を挟んで蕾とひいろは最後への相談をしていた。

「作戦の最終確認をする。事前段階として苗床、やり残したことはないか」

「はい。既に全ての指揮権を本体と分体の私に移行しました。この状態で私と本体が死亡すれば個体ごとの相互性は消滅し、会社の中核に関わる分体指揮権が移ります」

蕾は窓の外を眺めたため息をつく。屋敷周りの木々が市街に入れ代わり景色が開ける。空は月の無い曇り空で、暗く、予報では今すぐにも雨が振りそうだ。家の明かりも消えており、人々の多くはもう寝静まっているだろう。神域で大規模に活動を行うには最適な条件である。

「遺書は残したか」

少しの間会話に間が空く。そしてひいろが少しずつ意図を理解し優しく微笑んだ。

「珍しいですね。あなたから聞かれるとは思いませんでした」

「……実験体には感情移入するつもりない。ただ大学の友人へだったり、プライベートな処理はお前に任せただけだ」

蕾は研究者としては優秀でも表現は不器用である。勿論通報のプロトコルでは想定されていない。一人の実験体への人として終わるがための唯一の情けであった。

元々蓄自身、実験までの数日はひいろが何を起こしても見逃す気でいた。しかしむしろ立つ鳥跡を濁さず、今まで通りの生活と会社の引継ぎをして過ごす彼女に疑問を抱いていた。無論、情など持つても良いことはない。と当の昔に知っている、自身も何度も実験の為に犠牲を増やしてきたものだ。

「必要ありません。彼らはあくまで普通に生き、私を忘れて人として生きぬいて欲しいのです」

「そうか。態々監視して損した」

「それに、最後の言葉を伝えたい人はすぐ後ろにいますから。一人の実験体として最後までお付き合いしていただきありがとうございます」

そう言う。蓄は深く頭を下げた。死ぬには潔いその姿勢は、人の為の実験体ではなく、一人の人間としての意思表示であり、決意でもあった。

「……ならこれも伝えてほしい」

「なんででしょうか？」

「嫁に黙れと」

「レイトレイトレイト！明日の朝どこ行きたい？私は海を見たいんだけどお勧めはある？」

「鳴葉駅から一本で句蔵の海水浴場が一番近い。今の時期なら水族館が閑散期で人もいないな。今度の休みに2人で行ってみようよ」

「うん、楽しみだね！」

バスの後部には私とニエ、それと月輪先生が私達の後ろに座る。ニエが勝手に出してきたスマホで旅行先を楽しげに調べ見せてくるので一緒に考えていた。

「贅龍！こっちは真面目に仕事してるのだ！遠足か!？」

声が大きかったのか真面目に仕事してないのがバレた。椅子から身を乗り出した蓄さんから怒られる。私はスマホをニエから取り上

げて元の場所に戻す。眠気を覚ますのにもちようどよかつたのにちよつと残念だ。

「あ、スマホ返しなさいよ！」

「蕾さん、すみません」

「黎人君も話に乗るんじゃない、まったく」

スマホを取られた二エはすぐにスマホを取り返そうと私をポカポカ叩く。だが二エは窓際の席で通路側は私が座って道を塞いでいる。静かにさせるための行為がより一層騒がしくしてしまいそうだ。

「やだやだやだー！明日は久々にレイトと一緒にいたいのに!!」

見た目より幼く駄々をこねる二エに思わず苦笑いを浮かべる。出会った頃から本当に自分勝手な性は変わらない、むしろ悪化した？昼間から車に乗る前も何かしら理由を付けて側を離れず振り回され続けている。

きつとこれも数日間の監禁生活でストレスが溜まっていたせいなのだろう。騒ぎ立てる中で語られた愚痴の数々はどう考えても医療目的からはかけ離れていた。

「可愛いな、二エ。子供みたいだ」

つい本音が口から漏れる。時は深夜、少しおかしなテンションで頭が緩みかけている。まるで悪酔いのように自分が自分でないような不思議な感覚だ。

「子供は余計よ！可愛いだけでいい！」

子供扱いが気に食わずそっぽを向く。しかし顔は赤く傍から見ても分かるくらいニヤけている。元気な二エが近くにいと私も落ち着くな。

……と、前方から様々な視線が刺さり落ち着いてもいられない。大通り前の赤信号で止まった車にエンジン音、それから蕾さんの咳払いが響いた。いよいよ私達の運命が動き始める時だ。

「全員、作戦の最終確認だ」

蕾さんの提示した作戦はこうだ。これから鳴葉大社の神域を経由して苗床の急所周辺の座標に移動する。大社は現在鳴葉市、神社運営の3団体で共同に管理している。翻訳の解説結果の事実確認をした

ところ覚書が事実と発覚、蕾さんの上司がつい5時間前に緊急で手配したらしい。

また内外問わず非常に重大な案件である為、増員は輸送担当一人以外されず、物資の支給等の援護は最低限に留められる。実質この車と先に現地向かっている月輪先生以の持ち込み品以外は物資はない。しかし本当の問題は他にあるようだ。

蕾さんは深くため息をついてからタブレット端末を取り出し操作する。

「しかし移動に関する懸念点として神域の管理は神社所属の狐が管理している。黎人君はすでに見せたがこいつらだ」

彼女が見せたタブレットには鳴葉稲荷前の大通りを二人で観光する写真が表示されていた。撮影日は鳴葉駅前の1ヶ月前だ。

「彼らは形式上神社側には所属しているものの実質はこの組織にも属さないフリーだ。彼らの管理者にコンタクトを取り一応の参加は確認できたが……不思議いざとなれば武力行使もいとわない」

「(そんな危ない人達には見えないけどな)」

物騒な発言に反し写真ではクレープの買い食いをしている年頃の少女にしか見えない。狐の耳と白髪と金髪の組み合わせは珍しいのだがそれでもだ。

あれ、でも私が以前出会った時は……

「……神域侵入後は餐龍に一任する。苗床を殺害の後、分体の状態の確認が取れた後ひいろを殺害して欲しい。竜秘宝の回収、その後の調査はこちらが持つ。作戦は以上だ」

バスが神社の石段の前で停車すると共に作戦の確認は終わる。車内はいつになく真剣で皆俯いて重い空気に満ち、蕾さんの説明を最後に言葉は続かない。鬱蒼と茂る木々のように暗く淀んだ重圧は私の体にまとわりつく。

これがきつと人の死に直面するという事なのだろう。覚悟はしていたがやはりまだ恐怖が抜けきらない。

「ところで……黎人君、私から質問がある」

沈黙の中、口を開いたのは蕾さんだった。

「君の正直な意見を聞きたい。プライベートな質問で無理に答えなくていい」

彼女は私を見つめたまましばらく無言だったが意を決したように言った。

「黎人君、君は何故私達に付いてきた。元々一般人である君は特定の技能に秀でる訳でもない。なのに何故危険を冒してまで神域に向かう？君が望めば安全な場所へ送り届ける事も出来るし、今回の件を忘れるのも一つの選択肢だと思う。その気がないなら君だけは今すぐ作戦から降りてもいい」

彼女の目は真剣そのもので嘘偽りを言っている様子ではなかった。恐らく私の安全を本気で考えてくれている。

「私が一緒にいて欲しいからよ」

ニエが会話に乱入してくる。

「レイトにコレから離れるのと体をどうにかする約束してる、ね？」

ひいろを指差しながら得意げに言う。対して蕾さんは頭を抱えながら大きなため息をつく。

「君はそれで充分だろうが……黎人君はどうなのか？」

そう言われても特に思いつかない、ニエが一緒だからという理由もどこか違う気がする。ただ、私自身がどうしたいのか分からないだけだ。それでも私が唯一心の底から言える事は……

私は蕾さんの目を真っ直ぐ見据え、迷いなくはっきりと言う。

「友人の最後をこの目で確かめたいんです。例えばどんな結果になってもそれが私の選んだ道です」

私の意思を聞いた蕾さんは顔を伏せて黙り込む。ひいろもニエも黙って見守っている。数秒か数分経った後、顔を上げてこう言った。

「……ありがとう。すまない、君のような優しい若者を巻き込んでしまつて」

彼女の決意表明を受け全員が車を降りた。

「鳴葉大社」は近年公開された鳴葉で最も古い神社である。過去の災害の後、禁足地として指定されていたこの神社は数年前の陥没の供養

の一環として何故か解放された。「鳴葉稻荷神社」と名前が似ているためか同じく紹介され始めてはいるものの知名度はあまりよろしくない。当然こちらの神社は参拝客は滅多にいない。

しかしそれも納得だ。見かけは完全に廃墟で全てが酷く劣化している。ゴミも酷くコーラのペットボトル、コーラの缶、2リットルコーラ……何故にコーラが多いのかは不明だが、とにかくそこらゴミが落ちている。これが観光地の姿か？

枯れ葉と整備の不完全な足元に慎重に石段を登る。しかしその途中で先を歩いていた蕾さんとひろろが立ち止まる。突然で、私は気づけず彼女の背中にぶつかつた。

「あの、行かないんですか？」

回り込んで二人見ると蕾さんは顔面蒼白、ひろろは恍惚していた。

ニエはチグハグな反応の二人に私と同じく困惑していた。

「血と……レイトみたいな雰囲気とする」

ニエが小さく呟いた一言で石段の先の闇の中に何があるのかを想像してしまった。全員が息を殺し、武装のあるニエと蕾さんは戦闘可能な状態で石段を再度登る。

血の生臭い鉄臭さが段を上がる度に強まり中腹に差し掛かると足の不安定さがただのみ整備ではないと嫌でも教えられた。石段や木には何かが貫通したような痕跡が幾つか見つけた。それらは到底人が可能な物とは思えず、経年劣化の類ではないのだろう。

頂上の鳥居が見えてきた頃、私の目に映ったのは地獄絵図だった。石畳は赤黒く染まり、所々に大きな穴が空いている。辺りは酷い有様だ。折れ曲がった柱は地面を突き刺し、屋根瓦の一部は吹き飛び無惨にも壊れていた。

そしてその光景の中心に一人の黒髪の少女がいた。私が駅で出会った狐だ。四肢が欠損し、体からは赤い液体が出ており、肌は月明りの様に青白い。彼女の体は至る所に大小様々な傷跡がありそこからは未だに血が流れ続けている。少女は焦点の合わない瞳孔の開ききつた瞳で宙を見つめていた。

しかし、彼女などどうでもいい程に私達は「彼女」に目を奪われていた。

「母さん、おまたせ！私でも神様を殺せました！醜く、独善的で、何も知らない畜生を今概念に昇華してやった！」

死体のそばで獣の様に月に絶叫する一人の白く醜い彼女。その瞳は真っ赤に染まり全身に穴が開いている。左腕はなく、右腕は肘から先がひしゃげて潰れていた。

「あっはっはっは！こんの畜生め。あの夜お母さんと私の足を潰しやがって。時間も空間も年も心も、何もかも何もかも何もかも！お前と出会い殺すだけにぶっ壊して！やっど、やっど何もかもを奪い返せましたああ！」

彼女はそこで言葉を止めた。そして私達に気が付いたらしくこちらに顔を向けて何事も無かったかのように微笑みで挨拶する。

「こんばんは、皆さん。いよいよ作戦結構ですね」

神域

「こんばんは、皆さん。いよいよ作戦結構ですね」

「え……っ、月輪……本当に君なのか？」

絶句、私達は作戦すら忘れ目の前の地獄と化した神社で狂う彼女をただ呆然と眺めるしかなかった。彼女の姿は余りにも異様過ぎたのだ。

「馬鹿じゃない……」

二エも珍しく動揺を隠せない様子だ。だが、何度も顔を合わせていた二エ以外は豹変に理解が追いついていない。私達を見ているようで何処か違う場所に居るような彼女の視線は蕾さんを捉えるところと言った。

「確か沈んでから3年、いや、実時間に直すと3年でしたっけ、体だけ大人になっちゃって。きつと驚きますよ。私、まだ9歳なんです。10年以上心身の齟齬で……終わりのない怨嗟をまたやつと終わりにできました」

「月輪……一体君は何を言っているんだ？」

返事はない、彼女は最後にそれを言い残すと力無く地面に倒れ込んだ。もうピクリとも動かない。私は彼女に近づき頬に触れた。

「つまだ脈あります！」

「黎人君でかした、今すぐ治療すれば治るかもしれない。神域の今、緊急で救急隊を呼……」

だが彼女はそこで言葉を止めた。私の顔と月輪先生を交互に視線を変え、まるでその選択をしてはいけなかったかのように迷っている。

「機密性と作戦予定時間を鑑みて救出に割かれた人員は作戦の離脱を余儀なくされるだろう。少なくとも一人、応急処置と救助の手続きの為に残る必要がある」

「……へ？」

「私達はこのまま神域に直行する。黎人君、頼んだ」

そう言う彼女が端末を私に渡す。私は彼女達の行動が意味する事を理解してしまった。この場で役割を持たないのは私しかない。

だから月輪先生を私が保護するのは当然な流れだ。

しかし通信機に手を伸ばそうとしかけたところで、横から蕾さんの手を二工が叩いた。

「レイトは私と約束があるの。奪わないでくれるかしら」

困惑している私の手を掴むと、二工は神社の奥へと引つ張っていく。

「餐龍！私の命令に背く気か!?!」

左手の仕込銃で頭を狙いつつ蕾は叫ぶ。しかし、そんな事を気にしていないのか彼女は不敵に微笑むと逆に刃を蕾に向けた。私に。

「うっさい、ぶち殺すのは私よ！私が連れてくって言ったら連れてくの！」

そう言つて二工は強引に神社の奥へと私を連れて行つた。私も抵抗してみたものの、結局振り払う事ができなかつた。

「仕方がない。乗り気な彼らには悪いが管轄内で死者を出す訳にはいかないのだ」

今日の作戦決行は中止だ、彼女はそう考えた。地面に落ちた通信機を拾い上げ蕾さんは舌打ちをする。明らかに想定外での負傷者と命令無視、2つの想定外に焦燥を隠しきれない。

「あの、蕾……激雷さん」

「ああ、苗床か。私としたことが済まない。今作戦の中断を本部に伝える」

「いいえ、そうではなく私からも彼の同行を希望します」

「二工はともかく、彼は別に君に必要ないだろう」

淡々と苗床の意見を切り捨て作戦中止の指令と各所への謝罪文を準備する。蕾は処分対象の苗床には全く気を留めていなかった。勿論話を聞くつもりはない。

もし苗床に止められるなら殴つても止めるだろう。しかし戦う術を持たない竜には蕾に返り討ちにされるだけだ。それを理解している苗床はただ黙つて横でただ見ているしかなかった。

「……」

これも願いが無下にされるなど彼女にはもう慣れたこと。それでもいつもより少しだけ彼女にも堪えた。

だからこそ、救いの神はいるものだ。社の奥、静寂の闇の先にさくさくと落ち葉を踏む音が彼らへと近づく。

「その者は我に任せてみないか」

声の主は彼らの協力者の狐の神、鳴葉であった。

「狐か、神域の仕事はどうしたんだ!」

「既に調節は済ませておいた。社の後ろの林を抜ければ神域に辿り着ける。帰りも同じクラス出た場から入り直せ」

鳴葉はそれだけを言うと言うと満身創痍の月輪を担ぎ上げる。だが鳴葉と蕾の間での契約はあくまで神域の制御のみである。契約外の行為には蕾は何かしら対処が日露だ、蕾は仕込銃を突きつけた。

「救助行為は契約の範囲外の筈だろう。何故だ」

「神として困ってる者は見過ごせん。ただまあ、ちーとばかし賽銭を恵んでくれればやらなくもないぞ。お主らともういんういんじゃろ?」

月輪を担いでいない方の手で人差し指と親指でお金の形を作り蕾に交渉を持ちかける。こんな状況ではあるが鳴葉のお茶目な姿に蕾は冷たい視線を送る。

「この拝金主義者め……」

同時にひいろは神域の奥へと一心不乱に走り出した。蕾の静止を振り切り、静止の命令も無視して神域の中へ二工と黎人を追った。

「ああ!?!また命令無視か!」

「はっはっは!こりやもう交渉成立じゃな!」

「交渉!?!ああもういい、金でも何でも賽銭箱に振り込んでおく!月輪は頼んだぞ、白狐!」

悪態をつきつつも結局月輪を鳴葉に任せ蕾もすぐに全員の後を追う。一人取り残された鳴葉は二人の背中を見送ると月輪を担ぐ手に力を入れる。

「誉れある人の子よ、よく成し遂げた。かの邪神をよくぞ還してくれた」

鳴葉は月輪を抱え直すと、その勢いのまま神社の境内から姿を消した。

――

神社の奥の森を二人で駆け抜ける。深夜の森の見えない不安定な足元に何度も転びそうになった。

「レイト、見て。あっちの光へ走るよ」

「ま、待って！まだひいろ置いてってるから！」

振り回され、だが一步踏み込むたびに鼓動と歩幅がニエに近づいていく。次第に彼女の隣で手を繋いで走っていた。ふと、後ろを振り返れば社は最早遠く、深い闇の沼に沈んでいる。

光の中へ走り続け枯れ葉を踏む感覚も少しづつ硬い石の感覚に変わる。微かな光を頼りに見上げれば朝焼け前の薄暗い赤と巨石の影の黒の色彩で鮮やかだった。

「あと少しで神域なのか？」

「うん、出るよー」

私達は掛け声とともに跳ねるように闇から光へと飛び出した。暗い岩の間を抜けると暖かな日差しが私達を照らした。

「ここが……本物の『神域』」

ようこそ、神域へ。竜の生まれ故郷へ、そう呼ばれた気がした。

神域は「壯観」、その一言に尽きる。

神域の出た先は高い崖の上、眼下にはどこまでも続く雄大な自然。大地を飲む森林、天を穿つ岩山、生命のうねり絶えぬ大河、人工物の一つもないありのままの大地は本能を駆り立てる強大な美しさを私に与えた。

現実味のない絵画のような光景に言葉も出ない。崖際で止まったその場所で神域に見惚れていた。ニエも私の隣で静かに崖の下を眺めている。彼女の視線の先には眼下の空を悠々と群れて泳ぐように

飛ぶ竜であった。いつの間にか剣を抜いてじつと竜を観察していた。「神域もすつかり戻ったわね。ここにいない間にも何年経過したかしら」

「年は大げさじゃない？知り合う前を加味しても2ヶ月くらいでしょ」

「いいえ、あの崖下丸々苗床の体の下だった筈なのよ。体が地形にめり込んだ形に似てる」

「そんなことって……」

二エの言葉を聞きながら私はゆつくりと周囲を見渡す。そして気づく、この世界はどこかおかしい。断崖絶壁の続く先を辿ると霞で不明瞭ながら地平線の向こう側まで続く。ここはどう見ても地球上の何処かではない、いやそもそも此処は本当に私の知る世界だろうか。

私の疑問を感じ取ったのか、二エが先に口を開いた。

「ま、色々考える前にちゃっちゃとぶっ殺すわ！」

そう言うと彼女は右手に持った剣を頭上に掲げる。年相応の無邪気で幸せな笑顔が出来るのならきつと何があっても余裕だな。根拠の無い彼女の頭の中は私には眩しく輝く物が詰まっているのだろう。その代わり、私の頭には白く不思議な物が充填されている。手綱の管理は私がしないと。

「ひいろの本体って相当な巨体だったけどどこから見えないのか」

「今探してる。うーん、見えないわねえ。3日くらい離れば姿を思い出せる気がする」

「3日……」

補給は無い作戦なのに数日かかるの!？つまるところ現地で補給は済ませろと……突貫の作戦とはいえ蕾さんも無茶だ。適当な石に腰を掛けると足を投げ出して休んだ。春のような陽気と優しい風、目の前に広がる雄大な景色に心まで洗われるようだ。

「あー二エ、ここらの地形って詳しいのか?」

「全く、結構変わってるからダメダメ」

「ならさーいいカメラ買ってきてここを散歩するのも楽しそうだけど」

「それ、名案かも」

「じゃあ帰ったら皆で旅行行こうぜ！俺も写真撮るのが好きだしさ」

「うん、楽しみにしてる」

二人で笑い合ってからまたしばらく沈黙が続く。穏やかな時間が流れると、二エが私の隣に座って肩を寄せた。

「皆様、お待たせしました」

「済まない黎人君！月輪は狐を頼った！」

声のした方へ振り向けばそこにはひいろと蕾さんが走り私達の元へ合流していた。私達は互いの安否を確認し合い、ひとまず全員揃ったところでこれからの事を話し合った。

「ひいろの肉体が見当たらない、と。君の指摘の通り補給の無い今、この作戦を成功させる以前に命に係わる。早急に発見をしたい所だ。苗床、肉体は？」

「私の肉体は「あ!?!そういう事なの!?!」……ど、どうした?」

突然の二エの大声に驚いたのか蕾さんがビクツとする。

「レイトおー！ここ苗床の頭の上だよ!!」

「はあっ!?!」

二エの言葉に驚き立ち上がると辺りを見渡してみた。確かに私の足元は断崖絶壁、だが遥か彼方より地鳴りが響くと眼下から空へ竜の群れが飛び立ち黒く埋め尽くす。つまりこの高台そのものが彼女の体の上だったのだ。

「白狐が相当上手くしてくれたらしいな」

「はい、本当に、本当に有難い限りです」

苗床

屍竜【苗床】

水竜コーポレーションの実験により生み出された神域最大の竜。触れた物を肉体に取り込み、また自身の強力な再生能力により延々と肥大化を続ける不死の体を持つ。結果、数多の何かを取り込み続け地球の大陸程に巨体となった。

そんな彼女の肉体のある神域は当然ながら彼女の挙動に甚大な影響を及ぼす。爪先の1つが台地に、角は高山に、幾年の月日により堆積した老廃物が土砂隣体を保護し比喩ではなく彼女は正に自然の一つである。

――

全員が合流後、ひいろは竜の肉体の整理状態の最終確認をするのに遠くを眺めながら静かに石に座っている。時々眺める方角を変えるとその方向から地響きがここまでやって来るから何をしているからすぐに分かる。

蕾さんも彼女の隣で端末の地図を片手にひいろの調節の相談をしていた。

「――次に本体の露出部に薬剤を散布し連鎖的な作用を発生させ肉体を人工的に腐敗させる」

「消滅後の生態系の配慮は出来ていますか」

「肉体の影響が広範囲過ぎる、流石に水竜にも不可能だ。埋没した部分の崩落による生態系の変化には最新の注意を払い調整してほしい」

成程、これだけ大きな体の生物だと生きているだけで環境の一つとして扱えそうだ。それを影響の出ないように色々配慮しているんだ、盗み聞きしながら一人感心した。

一方で私は準備運動を見てほしいと二エが剣を振るう所をぼーっと眺めている。血の両刃剣を器用に素振り風を切る音を響かせながら美しく舞っている。私にも一芸があればもうちよつと面白い事できたのに。

「私の剣なんて見てて面白い？」

「うん、結構面白い。二つも刃があると頭がこんがりそう」

「そう？でも私は普通に使えるわ。今度特別にレイトにも教えてあげようか？」

笑いながら冗談っぽく言う彼女に苦笑しつつ私は二エの振るう剣の軌跡を遅れながらに目線をずらしていく。その動きは洗練されていて無駄がなく速い。そして、二エの手の動きに合わせて動く二枚の刃。まるで本当に踊っているようだった。どこで剣技を教わったのか、竜に文明はあるそうだが彼女ははみ出者だった。となると親か独学か。どちらにせよ、素直に凄いと思った。

「激雷からも同じ事言われたわね。私って人にシユー何とか？した竜で頭がいいらしいの。私は知ってたわよ、知ってたけどあえて言われたの」

「……ふくん」

蕾さんはきつと収斂と言ったのだろう。

異なる種や亜種間で形態・生態などが類似した現象を指す言葉である生物種が別の動物種へ「似た姿かたちになる」という性質を示す場合に使われることが多い。

そして、その収斂進化の成れ果てが二エか。彼女の剣捌きは何処で学んだものでもない、おそらく本能的に身に着けたものなのだろう。それはそれで凄いな。

だけど、もし本能だしたら彼女の親とは誰なのだろうか。人の源流は猿であるなら人の竜である彼女は同じ竜が祖先だろうか。あるいは人より上位とされる――

「(神……様?)」

「よしっ！これで準備万端！」

ひいろが大きな声を上げて立ち上がった。それに反応して私達も立ち上がる。

「苗床、どこ切ったらしい？」

「落ち着け、まずここから450m地下に苗床の本当の急所が存在する。露出した肉体には触れず、そのまま地下まで穿け。合計1000mを頼む」

しれっと1000mと指示しているが軽い山一つより高いじやないですか。ひいろだって流石に無茶だと言うだろうに。と、いつの間にか隣で僕の腕をひいろは抱いていた。彼女の柔らかい体に腕が埋まり柔らかい感覚が腕を包む。

「このまま落下して私の体に当たると黎人さんも私になっちゃいますから。私の体であれば吸収されないの、一応私といっしょに落ちましょう」

「あー、やっぱり本当に出来るの？」

「あつたりまえよ！レイト、ちゃんと見ててね！」

素振りをしながら割り込んで二エが答えた。自慢げな返事に離れた蕾さんの目線もこのなしか柔らかいような。そのまま蕾さんは二エを呼び出して場所を指示し始めた。蕾さんの高圧的な態度と傍若無人な二エとではやっぱり話は拗れ気味。だけど芯のノリは近いらしい、割とあっさり話が済んだようで今度はひいろと私に話があるらしい。

「待たせた、只今より作戦開始をしたい。しかし最後に一つ私からの個人的な頼みをさせてもらう」

すると彼女は私を一度目を向けた後ひいろを見つめた。

「ひいろ、黎人君の角を絶対に潰すな」

蕾さんにしてはおかしな忠告だ。私の角は何度も割れては再生するのにもっと腕とか気を付けるべきところはあるだろうに。無理して付いてきたから心配なのだろう。だけどそれにしては警戒をしているような。ひいろも普段との違和感を感じたのか少し怪しんでいる様子。

「怖気づくとは珍しいですね。私と関わり続けなお正気なあなたがここまでするのだからそれなりの理由があるのでしょうか」

「……まあ、そうだ。悔しいが私も見えた気がしたんだ。脳の焼ける景色という物が」

それを聞いてひいろは何か察したらしい。

「ありがとうございます、私の事を最後にあなたにも理解してくれて嬉しいです」

二人は目を合わせて微笑み合った。この二人にどんな関係があったか私は知らない、しかしその悲しい笑顔を見て「手遅れ」、虚しいがそんな言葉が頭に浮かんでしまった。

「皆ー早くしてー!」

遠くで手を振るニエの呼び声で我に返った。もうこんな状況なのに感傷に浸っている場合ではない。

「――さて、行こう」

そう言うと蕾さんらとニエの元に向かう。

「じゃーあと10秒で切り始めていい?」

「なるべく真下に切り続け、薬剤の入りの球を投げつけろ」

「緊張してきました……」

各々が思い思いに口走る中、私は一人不安だった。

これからどうなるのか、どうなってしまうのか。

その問いが浮かぶ度、だが不安と希望の混じった不思議な高揚感が湧き上がる。それはまるで初めての土地に行く時の様な期待感に似ている。そして同時に私はきつとこう思うのだ。

「(きつと、私達はまた会える)」

祈りに近い確信だった。根拠も何も無いけど、何故か私はその時が来れば分かるかと確信していた。

「……5、4、3、2、1――!!」

ニエのカウントダウンの後、天から一閃が走った。

瞬間、体が重力から解き放たれる感覚。

重力加速に投げ出され眼下に続く一気に吸い込まれる感覚がして思わず声が出そうになった。

すぐに視界にはニエと蕾さん、ひいろの姿が見える。彼女達も一緒に落ちていて、恐らく同じく計算外だったのだろう。蕾さんは今だ自らの状態を理解しきれいていないのか困惑と冷静さが事故を起こした見たことが無い表情だ。ニエは更にその先の穴の最も深い場

所をより深くしながら落ちている。

私達三人は必死に体勢を保とうとしたが蕾さんは多分どうにかなるだろう。

それよりこの状況どうする！

「うわああああああああ!!」「きゃああああああああ!!」「私までええええええええ!!」

落下中奇跡的に蕾さんの服を掴むひいろと私だったが、勢い余って二人とも投げ出されてしまった。支えの無い完全な自由落下が始まる。

「レイトさん!」

ひいろの腕が私に伸びる。それを掴もうと肩の関節限界まで手を伸ばし指先が触れ合う。もう少し、あと関節一つだけ何か切っ掛けがあれば届く。何か切っ掛けさえあれば手を取れる。

私かひいろに特別な力が使えれば……

「苗床! 黎人君を肉で包め! 今だけは『増殖』しろおおお!」

今までにない必死の蕾さんの声だった。

「はいっ!」

同時に彼女の指示通り私に何か覆われる感覚がした。半液体状態で温かい血肉の羊水は私の肌を包み込み体の隅々までを覆いつくすように私を包む。温かく、生きとし生ける物である柔らかなそれは今まで感じた事のない力に溢れていくのを感じる。まるで母の胎内にいるような安心感に包まれて、落下の恐怖など何処かに消えてしまった。

「(大切な人が私の胎内にいるなんて。ああ、夢みたいです)」

腹の中で拍動と共に声が響く。頭の中に静かに染み入る声は言葉は穏やかで、だが一時の幸福を噛みしめるようなありのままの言葉。

「(今まで色々な子を孕み、産み、死にを繰り返すそのどれもより満たされます。柔らかな初めての優しさです)」

私も肉に埋もれる感覚には既視感を覚えている。しかし後少しと

いう所で何か引つかかり思い出せずにいる。不思議と嫌な予感はない。まるでゲームを記憶を消して遊びたいからわざと自ら記憶に蓋をしているような既視感だ。

「もし私がこんな醜い体でなければ彼とは真つ当に何も知らずにくずつといたい、たとえ記憶がなくなっても私は同じ答えに辿り着くでしょう」

わずかに早まるひいろの鼓動、より強い包容を体液越しに感じた。熱い液と冷たい液が複雑の対流が更に勢いを増す。

「おかしいですね。私が泣くだなんて。何も遺してきてはいけないのに、どうしてでしょうか」

ひいろは泣いている。どこか退廃的な彼女も心の内は辛かったのは当たり前だ。生まれた事が罪と殺され続け誰にも愛されなかった。しかし人としてのひいろはどこを切り取っても魅力的で愛された人物であった。短い間だが確かに側にいられた私はその一部を見てきた。だから私は彼女に叫んだ。

—— 全てを遺さなくていいんだ

生は呪いではない、愛は呪詛ではない、等しく尊くあるべきなのだ。泡沫に消えた肺の空気に乗せてぼこぼここと綴られた言葉。聞こえているか定かではない、それでも届いて欲しい。ただ心の内で祈った。

しかし時間とは無慈悲な物である。

「おらおらおらおら！激雷、あとどんくらい!？」

「50mだ！」

落下から約10秒、肉を切り裂き続け遂に目の前に苗床の巨体が日に照らされた。土に汚れた緑の肉体は古く朽ちた肉は酷く悪臭を放ち思わず顔をしかめる。この時空での苗床は悠久な時を経て地に埋もれ腐り果てていた。

「緋刃、投げろ！」

「オツケー！せい！」

蕾の声に合わせ二エは眼の前の肉塊に球を投げつける。

瞬間、薬剤により肉体は急速に化学変化が発生。また生成物が連鎖反応を起こし肉体の急速な分解が発生する。龍とて肉体は生物と似

た作りをしている。分解して最後に残るのは土と「ガス」だ。

「うっ……臭っ!？」

「酷い臭いもそうだがこれからだ、爆発に耐えろ！」

連鎖反応で発生したガスはその巨体の体積の何倍にも膨張する。狭い穴の中で逃げ場を失ったガスは当然彼女らの落ちてきた穴に向う。しかし、それでもなお間に合わないガスは穴の外壁を壊し広げ爆発する。

苗床も同じく爆風を受け内部にも衝撃を感じる。衝撃で肉壁に頭が当たり柔らかく包み込んだ。しかしいつの間にか何倍にも肥大化頭の角は水風船のように破裂した。

「……あ」

ああ、目の前が白く染まっていく。自分の中の奥の奥、その全てにまで頭の中身が染み込んでいく。

脳が焼け、頭の中に美しい模様、因果律、神域の宇宙、全てが流れ込む。人知を超えた未定義の抽象概念が細分化され見える世界の解像度が指数を超えて澄んでいく。

「……あ、ああ」

神秘に触れた頭はその叡智を理解するより瞬間、黎人の全てが弾け飛んだ。

楽しかったですね、お遊びはもういいでしょう。

黎明が今始まる。

その日、神域はキノコ形の雲と世界を跨ぐ巨大な竜の最後を見た。

龍の黎明と竜の始祖

視点変更 餐竜【緋刃】

激雷い……爆発なんて聞いてないよー！せつかく意外と話が分かるって気が合い始めたのに！

「あの野郎、全部終わったら皮剥いでやろうかしら」

血の服を再生成し砂埃を払う。見上げれば雲ひとつない綺麗な空だ。爆発で体が削れ周りも平地になっている。すっかり元の地形の面影は無くなってしまった。

ここからどうやって帰るのか私には最早分からない。近場の移動できる場所もここまで崩れたら役に立たないと思う。ま、そういう時こそ激雷とかレイトと一緒に……

「って私は帰える必要ないじゃん」

元々私はこつち側の生き物だったしむしろ神域にいるのが自然なのよね。どうせ帰れないなら逆にレイトをこつちに引越してもらおうかな。

「レイトー？クソメイドー？苗床……はいいや、皆ー死んでないよねー？」

大岩の転がる荒野に一人で叫ぶ。苗床は死んでもいいや、レイトと激雷を探して面倒事させないと。こういう時にすぐに私のもとに来ないからレイトは下僕なのよ！

アイツは私より弱い。出会い頭での反応は遅い、判断も微妙、でも動くときには考えなし。だから私がちやんと面倒見ないと危ない。

けれど私が出来ないことはレイトに安心して任せられる。頭を使ったり、人と話したり、あと面白い事はよく知ってる。逃げる場所も遊ぶ場所もレイトの向かう先はどこも楽しかった。

けれど、多分私一人じゃつまらないんだろうな。街も山も海も私が立てば狩り場にしかないから。

足元には飛べない竜が落下死した死体がいくつかあって壮観だ。岩で潰れてるの含めてここまで積み重なると私の剣じゃ骨が折れる。

意識をふつとばして本気を出せば多分同じの状態には出来そう。

「おーい、どっこー?」

二人を探して彷徨い続けて日が暮れ始めた。神域の時間経過は不安定だ、いつの間にか空は赤く染まり月が登っていた。夜は竜の活動が増す。危なくなる前に帰ればいいけれど……

「うーん、どこだろう……?」

現在位置 叡智の終着点、あるいは虚無の産む呱呱

餐龍【緋刃】

紅く血の双刃を操る竜。竜の体を捨て得た人体は卑小で、だが己の知能と戦闘能力から生き抜く術を見出した。

その体を得た過程は不明瞭で出自にも諸説がある。故に彼女の自由のための生贄から跡を辿る他ない。

――

しばらく歩き続けてどうやら私は爆発によつて吹き飛ばされたらしい。だからもう無い穴の深く、深くへと走り続ける。理由はないがあそこに行けば誰かがいるだろう、無根拠な直感を頼りは走り続けた。

顔を見上げて方角を見ると見覚えのある山が夕闇に紛れて影を映す。となると距離はあんまり離れてないわね、方向を変えギアを一つ飛ばして速度を上げる。

流星の如く地を駆ける一人の竜、白い月明かりが照らすその竜は赤と白の髪を靡かせ二人を探す北極星にすら見えただろう。差し色のように血に交じる白は彼女が暴走した時の色である。

「……？（また意識が飛んでた？にしては戦闘したような感覚が無い）」

何だか普段のルーティンの1つが無くなった空回りな違和感を感じていた。私の知る永い人生の中でもこのような感覚は初めてだった。

しかしそれはそれ、これはこれ。

「（ま、そんなことどうでもいいや。レイトどこかなー）」

諸々の雑さは誰にも負けない。そこは私の強みだ、激雷曰く。

「……つとと、何これ？」

走り続けて穴のあった場所への窪地に白い泥が溜まっていた。触れてみると生暖かくドロリと白濁していた。レイトの角の液体に近い感覚かな？

「レイトー？」

ちよつと量が多いけどレイトっぽい何かがあるらしい。底の深さを剣で確かめると膝くらい。そのまま中に入ってゆつくりと歩む。

沼の泥を足でかき分けながら奥へ、奥へ。

静寂に水の音が響く、時折聞こえる虫の声も風が吹く音もない。まるでこの世界に私だけしかないような錯覚と孤独感に少しだけ背筋がぞつとした。でもそれも一瞬のこと。すぐに私はいつも通りになる。

馬鹿さえ殺せばレイトと激雷が影でこそそこそしてるから体の問題は勝手に解決してるでしょ。後は帰る方法だけど、レイトに頼めばいいかな？それとも激雷に頼むべきかしら。

中心に近づく度に地面の傾斜は緩まりやがて平らな場所になる。そこには小さな肉塊の陸地があって、その中には2匹、一人は苗床、そして「何か」がそこにいた。

「ははは……本当に死んじゃいましたね、私」

心身共に弱々しくなった正気の苗床は「何か」の腕に抱かれていた。多分剣を使わずとも体をを少し締めるだけで簡単に脆く砕けてしまえそう。

ゆつくりと細腕を「何か」の顔に伸ばす。愛おしそうに、つい数日

「正氣に戻れアホ！」

ザバザバと沼をかき分けて少しでもアレから離れよう。身長差で苗床の下半身は沈んでいるがそのまま放置するよりはずっといい。で、どうして助けたのかだつて？実のところ私もさつき決めたからちよつとだけ頭を動かした。

「あんたに閉じ込められてさつきまでは怒ってた。けれどさつきので気が変わった」

「気が……変わっただけ、あなたまで私を愚弄するつもりですか！」

普段温厚な苗床の数少ない怒りは激しい。

「ここで生きてたらあとどれだけ死ねばいいんですか、もう嫌なんです！あなたが殺してくれるって期待してたのにどうして生かしたのですか!？」

「……」

「私は……死ぬ為に生きて迷惑をかけ続けてきました。だから……！」

しかし体が弱り涙声の苗床にはそれ以上の明瞭な言葉は続かない。啜り泣く声彼女が落ち着いてからポツリと小さく呟いた。

「助けて欲しそうだったから」

今まで散々言ってきた相手だから顔を合わせづらい。少し顔を赤らめて顔を苗床から反らした。本当にただ同情したのよ。目の前の問題全部背負って潰れる馬鹿にちよつと横に引っ張ってみたくなかったのよ。

「バカね。竜なら逃げたきや逃げなさいよ。そんで頼ればいいじゃない」

「私は水竜の機密の塊です。幾ら親しいとはいえ頼ることなど出来るはずありません」

「そこが馬鹿なのよ！私なら全部殺せるのよ、指示だけ貰えたら水竜も全部やってやるわ。それ、に！レイトなら最後の最後に文句の一つ言ってるでしょ。私でも思いつくの私の下僕が知らないとしても？」

返事はない。代わりにまた苗床が泣き出してしまった。本当体

ばっかり大きいだけの子供ね、全く。涙が私の体にも伝い、呼吸を荒らげ、ヤバイ時の吐息が耳に吹きかかって気持ち悪い。この野郎ここに来て発情してるの!？」

「せめてこんな時くらい盛らないでもらえるかしら」

「はあ……はあ……ごめんな、なさい、あなたのせいじゃないんです……」

「どういうこと?？」

「実は……先程から耐えてはいたんですけどね、体が熱いんです」

「つんとに盛ってんの!？」

半分冗談だと振ったのに本当にしているとは。けれど何だか様子がおかしい。暴走気味の状態とは違い抑えがたい衝動を理性で留めている。

「多分この白い液体のせいです」

「あ?この泥?？」

そういえばこの泥、私の戦闘後のアレに似ているような。でもこれがそんな危ないものだったの?もう足とかずぶ濡れだから色々手遅れだ。今何も起きてないし今更っばい。

「あの感覚、実は全く無関係な場所で感じたこともあります。例えばあなたの美しさとはまさにあの高ぶりです。今更ですが謝らせてください」

……珍しく正気じゃないコイツ。で、当然のように今まで関わってきたこの白いのが危ないと。私は普通に触れてたしレイトなんて何回も角潰す度にぶち撒けてたしあんまり実感ないなー。

緊迫すべき自体なんだろうけど今一気が抜けたまま泥沼を歩む。その時、私の前はの水面から波紋が広がってくる。暗い中目を凝らして先を見ると……

「激雷さん?？」

「違う、雰囲気か別人」

見かけこそ激雷でも体が不自然だ。なんとというか体中から生気を感ずる。雰囲気も何だか不気味で気持ち悪い。

「ねえ、血は好き？」

闇の先からそれは問いかける。知ってる人の声なのに知らない誰か声がする。一応、不気味で意味の分からない問いだか私は答えることにした。

「翔るのも翔られるのも嫌じゃない」

私の答えにそれはしばし黙る。そしてこちらが視認できる距離まで近づき答えた。

「群れの虐殺は楽しいよ

混血は特に凄

多種族混合特有の異常な発色の血が嵐みたいに散って水たまりで混ざるの

そのとき肉と一緒に砕けた甲殻と骨が体を貫いて更に傷を増やして興奮で血が出る

首を狩った時の吹き出る血を浴びるのもいい

さつきまで生きてた生暖かい血で濡れて

時々水圧で私も大けががするけれど痛みなんてどうでもよくなるくらい楽しい」

目を見開き狂氣的な笑顔で語られる言葉には確かに私も同じことを言った覚えがある。しかし明らかに幼くなった言い回しだ。普段まともなのがこんなことになるかと面倒くさいな。

「……気が合うじゃない。苗床、これで分かったでしょ」

「ええ、彼女は激雷さんではありません。あなた、誰です？」

「智竜【白痴】赤い私の中にいたの」

私の……中？という訳？苗床は驚きのあまり言葉を失っている。とりあえず殴って切ってとは私も違うし何をするにも躊躇する。

「つまり敵？味方？」

「んー、私は敵であって欲しい。一応どっちも芯は同じだろうし頭よりこっちで分かり合いましょ」

目の前の竜、白痴の両腕が割れ右手にチェーンソー、左手に銃に変化する。そういえばこんな武器使ってたわねアイツ。私も血で両刃刀を造り出し構えると、向こうも同じように武器を構える。

緊迫した空気の中、私達はどちらも一向に動かない。だからどちらか一方が少しでも動いた瞬間に戦いが始まる。苗床は私の背中の上に背負ったままだ。正直邪魔で戦いづらいつらいつら降ろしたら絶対に殺される。

「来なさい」

「そつちこそー」

互いに間を取りながらジリジリと距離を詰めていく。

「白痴、待ってください」

だがその緊張も新たな竜の一声に解けた。

「あ、ママ。また遊んでたの？」

「ええ、とても楽しかったですよ」

現れたのはレイトに似た誰か。態度、立ち振る舞い、一挙一動全てが別人の白い竜は顔や姿は大切な姿だった。今まで見たことのない優しく、悪意に満ちたレイトを見せるな。気持ち悪いつたりやしな、今すぐ切り捨てて殺したかった。

「緋刃さん、冷静に！」

けれど知らなきや、殺すか助けるか、それから決めないと。震える刃を抑えて私はそいつに話しかける。

「誰なの。レイトの体で何をしている」

「ああ、ごめんなさい。白痴、久々の再会を喜ぶのはお話の後にしましょう」

「はい」

そう言う和白痴と呼ばれた竜の姿が消え白い竜が残った。

「さて、自己紹介が遅れました。私は『智龍【黎明】』、自称『世界一自由な竜』です」

そう言うて白い竜、黎明は無邪気に笑った。年相応の少女らしいある意味レイトとはかけ離れた表情だ。無駄に余裕のある態度に無性に腹の立ち私は距離を詰めて刃を喉元に突きつける。それでもこいつは怯むことなく、むしろ嬉しそうな顔をしている。それが一層不気味で、気持ち悪くて、吐き気がする。

「待つて！・黎人さんの体を「分かつてる！・苗床は黙つてて！」

分かつている。この体はレイトのもの、だから殺せばきつとあいつも死ぬ。そんなこと分かっているんだ。でも、でも……!! 私が迷っている間に、彼女はそつと剣を退けさせた。そして私の頬に手を添えて微笑みかける。

まるで子供をあやす母親のような優しい手つきだ。

「流石あの子の素体です。不出来とはいえ目元が私とよく似ています」

そして、そのまま唇を重ねられた。

……そして、そのまま唇を重ねられた。何が起きたのか理解するのに時間がかかり、やっと頭が追いついた頃には本能的に彼女を殴り飛ばした後だった。こいつ頭おかしい。何でいきなりキスされたの？意味不明こいつの何もかもが意味不明だ。

私は怒りに任せてもう一度斬りかかろうとする。しかし背中からひいろが自ら降り、私の前に立ち塞がった。

「ツ……ああっ!?!ふーツ……ふーツ……!」

「ひいろ!?!」

「いいです！・黎明、黎人さんはまだ……まだ生きていますか!?!」

嬌声混じりの絶叫での問いかけに彼女は一瞬きよんとした様子を見せたがすぐに笑顔に戻る。

「残念ですが彼の人格は完全に私に上書きされ消滅しました」

興味なさげに告げられる言葉は残酷で非情なものでしかなかった。

同時に私の中で何かが壊れる音がした。

彼女の言葉を聞いた瞬間に私の理性が砕けた。

登り竜

間合いに入り剣を頭に振るう。出来る限り最高速で最高火力を叩き込む事だけを頭に残したただ一発に全力を注ぐ。

目の前の竜はレイトの姿をした多分化け物だ。レイトが苗床を殺す筈がない、赤な私でもそのくらい知っている。どこまでも馬鹿みたいに誰かを気遣って一生懸命なレイトがじれったいけれどレイトらしいって思ってた。

「えちよ」

この竜はそのレイトを簡単に踏みにじり、私の大切なものを汚し壊し奪っていった。奪われたなら、私に出来る事はコレしかない。

感情のままに切り殺し、それから考える。手遅れでも間違ってもいい、停滞こそが許されない。

私の刃が白い竜の首を捉えた。

「ママー」

だが首は落ちず、代わりにチエーンソーを盾に受け止めている。白痴だって？激雷にそっくりな竜が斬撃の邪魔をした。なら殺せばいい、黎明に向けた二撃目を中断し射出された弾丸の切断に切り替え跳弾で逆に狙ってやった。

けれどその攻撃も防がれ斬撃を水面に叩き込み白痴が水しぶきに隠れ、同時に私の背後に現れると背後からの蹴りが入る。吹き飛ばされた先で体勢を整え着地した。

「やるわね！私とトントントンじゃない？」

楽しそうに白痴が笑う。対等なレベルの戦いは心が躍るのは同じだ、けれどあんたみたいなのとは覚悟が違うんだ。

「うるさい。お前は殺す。絶対に殺す」

両刃剣を構え直し、殺意を込めて睨みつけた。焦点の合わない不気味な目で彼女は笑った。

それはそれとして白い泥の上では足元の悪さから戦いにならない。だから私は血の斬撃を飛ばしながら全速力で後退する。当然のように追いかけてくるが、アレが私と同じノリで助かった。

にしても激雷の奴と同じ体ねえ。左右の手をおっぱずして銃と剣とは覚えている範囲では初めての相手。リーチは銃の遠距離攻撃だから相手の方が上だし、あの回転鋸の相手のしかたは接近に入っただけでいいや。

走りに走って沼をついに出了。ただどこから先の地形は……うん、爆発の後で何も無い。よしっ！

「じゃあここら辺で決着つけましょうか!!」

私が叫ぶと同時に徐々に竜に戻る。そして久々の竜らしい力任せな斬撃を地面に叩き込んだ。大地が大きく揺れ動き足場が崩れる。思ったより大きい、もしかして地下空洞ぶち抜いた？

「うおおああああ!?落ちた!?」

頭が悪いのか予想外だったのか白痴の動きが遅れ、更には地面の崩壊に巻き込まれて一緒に落ちて行った。私も重力に任せて落下しながら後を追う。

ドドドドドドドドド

「ガアッ!?(ちよ!!?)」

突然の衝撃と共に視界がブレた。一瞬だけ見えたけど、どうも白痴が弾を撃ち込んで来たらしい。咄嗟に身をよじったが右肩を貫かれた。甲殻があるのにぶち抜きやがったのか、これは迂闊に被弾できないわね。残りは遅れて剣を回して適当に弾く。

「(痛いわねえ!!!うっざいし!)」

心の中で叫びながらも下を見る。白痴は既に立ち上がっており、銃を構えたままこちらを見上げていた。

「うーん、遠隔は苦手……」

「アギヤア! (どこがだー!)」

撃ち込まれる銃弾を避けつつ急降下し、そのまま剣で引き裂こうとしたが避けられてしまう。

けれど、それで良い。これはフェイントであり本命は別にある。

「グオオアア!!!」

雄叫びを上げながら剣を心臓にぶん投げる。空を裂き風を切る音

を響かせる。亜音速で飛ぶ刃は最早私の目にも捉えるのがキツイ。しかし彼女は一切避けず片手で剣を受け止めた。衝撃を踏ん張り耐え、その上ノーダメージで平然としているのを見ると身体能力は私より上だ。

「ぎしや！あああああああ！（もーあんた何なのよー！）」

「いいねいいね！震えて興奮してきちゃったあ！」

次の瞬間、彼女の姿が消えた。一体どこに？と思ったが白い泥が元の場所から飛んでいる。曲線を描きすぐ横の岩場の高台に伸び……

衝撃、視界がチカチカする。首元の鱗が剥げる感覚と腹と背に一直線に並んだ空虚感。横には白く歪んだ顔。白い液体が穴という穴から漏れて気持ち悪い。

「ギリヤアアアアアアアアアア！」

混乱、あまりにも急激かつ致命的なダメージに久々に取り乱した。彼女は大チャンスに首元の回転鋸を更に食い込ませ、振り切った。

「あっーはっは！あなたの血は赤いのね！」

高速で回る回転鋸が私の血肉を乱雑に飛散させる。白と赤が混じり文字通り首の皮一枚で繋がった状態。お腹も内蔵に弾丸を際限なく叩き込まれミンチ状にまでぐちゃぐちゃだ。明確な死の間際、とんだ首から見える景色に絶叫と共に埋め尽くされた。

何が違った。あの程度の敵なんて私は何度も殺してきた筈だ。なんなら同じ実力で過去に勝ったような気がする激雷を相手にして……彼女と私のどこが違った。私といえば意識がトんでないだけ……

……もしかして、目の前のこいつが？

「済まない、遅れた！」

ブスリ、と背中になんかが差し込まれる。砕けた腹を貫通し白痴を同じく貫いた。続けて砕けた腹と首に暖かい物が当たる。血ではない、だが触れた覚えのある肉塊？が体内に空いた空間を埋める。

「（もしかして苗床の肉!?しかもあの声って激雷!?!）」

「あああああ!?!誰!?!」

両者空中で体勢を崩し地面に落ちる。先に白痴が落下して地面に激突しクレーターを作った。私もその後引き続き墜落するも寸前で誰かにキヤツチされた。

「っ、やはりか。再生力が尋常じゃないな……異常なまでの回復力、緊急とはいえ流石は苗床だ」

激雷だ。腕が外れ足も細い鉄の骨組み。爆発で相当のダメージを負ったみたい。あーでも、ちよつと覚えてるかな。銃と剣だっけ、確かそんなのを使ってた気がする。でもなんか見た目が違う？

「グツギヤ……ギギシャ？（ぐあー……体痛い、あんた武器変えた？）」「対竜用の武装だ。直剣と貫通弾、当たっても文句は言わないでくれ！」

そう言いつつも銃を構える。彼女の銃は腕と一体と一体で、また剣も同じく関節を用いて擬似的に通常と同じ用法を実現している。

「あくれ？もしかしてあんた、前に殺った竜じゃん。なんで生きてる？」

クレーターの底で白痴が起き上がった。彼女は激雷の顔を見るなり目を輝かせて牽制に銃を2、3発撃つ。それらを私が防ぐと「違う！」と文句を言われた。

「生憎私の体は換えが効く。というより覚えているのだな」

「うん！大きな音がしてまた強いの！って起きてみたら白いのとあんたがいたよね」

……音？

あの時の事は一応苗床が全部教えてくれた。あの時の映像も一通り見せてもらったけれど大きな音なんてどこにも写ってなかったよ。うな。あの頃の記憶を覚えているらしいのにどこにも大きな音なんて覚えがない。

そう言いかけた瞬間、頭の中で記憶と記憶が一致した。叫ぶんだ、竜との戦いの始まりは一つの咆哮から始まる。小さな体を揺らすほどに低く激しい爆発にも似た爆音が全身を包む。

あの時、暴走の直前に交通事故が起きていた。竜のそれより小さい

とはいえあれ程の至近距離で意識の外からだ。闘争本能を刺激するには十分過ぎる。

「……ああ、スッキリした)」

「緋刃？」

「(いいえ、こつちの話)」フルフル

よくこんな簡単なことに気づけず生きてこれたわね。まるで私が馬鹿みたい。ついでにこいつが私の記憶の欠落した部分を覚えているらしい。欠落するタイミングとこいつが出ているであろう条件は大体合致する。

納得する私達についていけず白痴は不思議そうにしている。

「でも生き返ったなら便利ね。青い竜が前に強かったから私もちよつと体を真似してみたの」

白痴は再び銃を構える。回転鋸も火花を散らし再び戦闘態勢に入る。

「また、殺し会えるからね！」

狙いは白痴の眉間。疑問は尽きないが、とりあえず殺すか。

「緋刃！」

「OK！」

開戦の合図に2発の銃弾が放たれる。同時に白痴はチェンソーを盾にして防いだ。しかし弾は囷だ。同時に背後に回り込んだ私が両刃剣を白痴の首を目掛けて振るう。

「惜しい！」

嘘でしょ!?!ほぼゼロ距離から振ったのに振り返って防がれた!?!路線変更、このまま力でゴリ押しして押し通せ!回転する刃を相手に鏢迫り合いに持ち込んだ。

「ぎしやああ!!(死ねええ!!)」

「いいねいいね!もつと!もつと!熱くさせてよお!!」

叫びつつ気合を入れ力任せに押すも向こうも同じくらいの力だ。拮抗状態が続く武装の性能差で力比べでは負けると悟った。即座にその場を離れ激雷が私の背後から銃口を覗かせる。そして私ごと撃ち抜いた。白痴の胴体に弾丸が直撃し私も衝撃で吹っ飛ぶ。

「突っ込みすぎだ馬鹿！」

激雷は私を受け止めつつ更に数発撃っていく。白痴も銃撃を喰らいながらも怯まず白い液体の弾丸を見境なくぶっ放す。

コイツ、火力のゴリ押しと捨て身で被弾を辞さないスタンスが最悪に噛み合ってやがる！私以上にパワープレイで逆に付け入るスキが全くない。ぶっぱは厄介だ、雑に放っていても大抵はそれだけで攻撃となる。加えて彼女はそれを乱射しているせいで威力も高い。

だからサポートが聞いた瞬間が私の次のチャンスだ。激雷は私を投げ捨てて回避に専念する。

「っ私のターンって言いたいかニエ！」

当然私が何も言わずに切り替えたから激雷も同様する。しかし流石激雷、無識に戦闘スタイルを接近に切り替えていた。無骨で、だが業物である事を示すように刀身がギリリと光る。

「緋刃！援護頼むぞ！」

「ギリヤア（隙見て叩くわ）」

激雷の背中を押しながら私は虎視眈々と一撃の隙を狙う。

「(さて、接近はできればやりたくないのだが……)」

彼女の装備は機動力を重視しており装甲も最低限しかない。故に銃での中距離以上からの牽制と接近での戦いを組み立てる必要がある。

「(まあ、やるしかあるまい)」

覚悟を決めて斬り込む。白痴の回転鋸をバックステップで避け、着地と同時に加速。一瞬で距離を詰めて首を狙って剣を振るう。白痴は即座に銃を切り替えて空いた手で掴み取る。

「おそーいー！」

「(やはりこの程度は読まれるか)」

そのまま銃を剣のように振るい剣を受け止めた。

「そんなんじやダメだよ！全然足りない！」

それよりも掴まれた状態から彼女の馬力では抜け出せない。力勝負は分が悪いな。しかしまだ片手が空いている。剣が振ればどうにかなるはずだ。

「ふっ！」

「きゃっ」

足払いをして体勢を崩させる。銃を捨て両手で支える形になり力の向きが変わった。

「（今！）」

剣から手を離して拳を握る。腕を捻り腰を入れて思い切り殴りつける。鈍く重い感触が手に伝わり白い液体が血の代わりとばかりに飛び散った。

白痴は倒れはしないものの踏ん張りきれず膝をつく。その隙を逃すほど甘くない。激雷も攻め時だと畳み掛ける。横薙ぎの一閃。白痴は咄嗟に銃を捨てて後ろに跳んで避けるも肩から脇腹にかけて斬られる。傷口からまた液体が流れ出すも今度はすぐに治らない。

「ぐううう、痛いなあもう！なんで邪魔ばっかするの!?!せっかく楽しく遊ぼうとしてたのに！」

「遊び、か……」

「そうそう、楽しいよ？あんた達も混ざる？」

「断る」

瞬間、白痴の死角から風が吹く。生暖かく酷く鉄臭い風だ。白痴の首がごろりと地面に転がった。

「え？」

首をはねた後も白痴は不思議そうな顔をしたまま固まっている。断面からは相変わらず白い液体が溢れ出していた。その剣技の軌道には饗龍の剣に続く。

戦闘時に出せる速度は白痴に軍配が上がる。逆説的に戦闘を絡めない瞬間の速度では彼女に勝る事は可能である。瞬間的な加速を見極め抜刀、彼女首一直線で捨て身で一撃を入れた。

白痴の体は前のめりに倒れ、そこに激雷がゆつくりと歩み寄り白痴の頭を踏み潰す。グチャリという音が聞こえた。

「あ、最後取った」

「死ねば同じだ。苗床は後で一時撤退しよう」

竜の死骸に背を向ける。あの竜は私達が考えていたよりも遥かに

弱くあつけない死にぎまだった。竜を殺した後はレイトどうしようかと二人で考えながら帰路に着く準備を始める。えーっと、苗床は一体どこにいるかな……穴登るのめんどくさいし。しかし、突如爆音と共に地面が大きく揺れる。

地震か、否、これは自然現象ではない衝撃。振り向くとそこには先程殺した白い竜が立っていた。

「は……はは、あつはつはつは！痛い痛い痛い！でもね、まだまだ私は止まらないよ！」

「ッはあ！？緋刃！？（死体が生き返っただと！）」

「黙れ、武器！また殺すから解析！」

意味不明意状況に混乱しつつも激雷は私の指示通り戦闘態勢に入る。しかし、相手は私達の予想の遥か上を行っていた。その体は手足の形はそのまま、体は私が大人にまで成長した姿となる。しかし体中に白い血管のような筋が浮かび上がり、体のあちこちに鱗のようなものが生え、背中に巨大な翼が生えた。

何よりも白い液は白く燃え盛る炎へと変わり、それが全身を包み込む。白き炎は勢いを増して辺りを焼き尽くしていく。一瞬で目の前が白い世界へと一変した。

あなた達への説明

「うう……くっ……あっ♡……」

熱い、体が焼ける。脳が焼けるだの綺麗事を並べ有難がっていたけれどいざ原因が分かると邪魔でしかない。無力ながらも緋刃さんの助力になる為に案が得ないといけないのに焼ける脳が邪魔をする。本能的な衝動が抑えられない。常に理性崩壊寸前の衝動を抱えながら陸地を目指し沼を歩く。

「はぁー……ッはぁー……ッ」

息が上がる。足取りは重く、激しく昂る体に力の抜けた足腰では意識が遠のきそうになる。それでも進む。進まなければ愛している人が死ぬ。それだけを胸に抱えて、ただひたすらに。

「(けれど……ちよつときつついかな……あ!)」

地面の石に足をとられ白い泥に頭から突っ込んだ。あ、限界だ。そう思った時、後ろから抱き上げられた。温かく冷たい、優しい抱擁の主が誰なのかはすぐに分かった。

「レイトさ……」

「ごめんなさい、人違いです」

黎人さんと同じ顔だけど違う人。

「……黎明さんですか。」

「はい、白痴もとい緋刃の母です」

憎いくらいにいい笑顔な彼女は私の体を抱える。そして恐らく敵対しているにも関わらず陸地まで運んでくれた。降ろされてしばらく呼吸を整え興奮を抑えている間彼女は私の隣で座り緋刃さんと白痴の戦いを闇の向こうに見ていた。

「大変そうですね。私の撒いた種といい壮観です」

冷酷に、だがどこか楽しげで無責任な感想を黎明は漏らした。

「実は私、恥ずかしながら戦闘技能はからつきしなんです。戦えない者同士ここで彼らの戦いを観戦しましょう」

金属音と爆裂音が闇に響く。満月の月明かりすら無く舞う二人、心を通し祈りを捧ぐ。何をすべきかまだ分からない私はただ隣の愛した人と安全圏から闇の奥を眺めるしかない。

「おー、あんな映画みたいな効果音初めて聞きました」

「……気楽ですね」

「まあ、どうせ娘は止められませんし息子は見つかりませんし私もなーんにも動けないんです。楽しまないと損ですよ？」

「……」

「あれ？もしかして乗り気じゃありません？」

言いようもない不気味さを彼女から感じる。諦観でもなく傍観でもなく、本当にただこの状態を気楽に楽しんでるらしい。

「じゃ、私と黎人さんについて少しだけ面白い話をしましょう」

彼女はその場で立ち上がるとぐるぐる周回りながら話の順序を考え込んでいる。遅れて私がハッと彼女の方を見た。

「私がかつての神から発生した概念の神にして因果の竜です。人類が文明を築き、理論という存在に目覚めた時に生まれました。その生き様は……息子を見て頂けると大体分かってくれるでしょう」

適当な説明なのに出てくる情報は上位者のそれであった。竜の知識でも大学までの知識でも確かに神の特性もあるのだがどこか俗らしさが抜けていない。しかしこの空気、昔どこかで感じたことがある。

「しかしある日私は竜秘宝を研究し作り出そうとする者が誕生してしまいました。当然因果に依存する神でもあるので根幹も揺るぎ、一時はあなたの肉体の一部として取り込まれる可能性すらありました。実際取り込まれてましたし」

「取り込まれたとして、意識が残っているとは思えないのですが……」

「さあ？私としてはどうして突然巻き込まれたんだ、とも思います」

そんな話あり得るのか。触れれば同化してしまう特性上自己を保つなど考え難い。が、私の誕生に関しては不明な点も多い、概念や因果律を巻き込んだ変化が発生した……？

「さて、ここからが本番。私があなたの発生に巻き込まれてピンチです。そこで私は何をしましたでしょう」

白い泥の沼の中に入り歩きながら彼女は問いかけた。授業の後の復習を出し合うような軽い感覚で出すには難しい。答を少し考える。

「正解は役割別に3つに分割しました」

しかし黎明は私の言葉を待たず目の横に指で3を作りながら振り返った。

「一つは竜としての存在と現実の改変です。目の前の娘、白痴がその竜です」

ぎばぎばと闇の奥に進み指を指す。時々大きく動かし、恐らく彼女らを示しているのだろう。

「彼女は貧弱ながら私の神秘を生成する力を使い因果律の改変が可能……ですが固めて武器にしているだけとはもったいない。彼女は今以外の全てが眼中に無いみたいですね。楽しんでる最中には無粋でしたか」

彼女は説明が済むとまた陸地に戻り私の隣に座る。ずぶ濡れの服のまま土が尻についているが気にしていない。関係なしに指で2を作り説明を続ける。

「2つ目は時空間の干渉能力、これは息子の【不羈】が継ぎました。最も彼は私が考えた以上に自由な性でやりたい放題で役に立ちそうにありません。何なら教えても無いのにこれを読んでる方々も認識してますし」

彼女は深いため息を付く。ただでさえ掴み所のない彼女が明らかに嫌そうな顔で語る「息子」とは一体誰だろう。今回の戦闘に参戦していないことだけが救いである。

「そして最後に神としての神性です。神秘や信仰ともいいます。これは私が本体として成立するためにずっと私が保持していました。自己生産できるとはいえ一応神様なので信仰がないと死んじやいますし」

「神様……」

「不満ですか？」

「いいえ、むしろ神様らしいです。神話上のトリックスターらしい性格です」

すると彼女はいえいえ、と謙遜する。しかしとても自慢げな表情でよほど嬉しかったのだろう。もしかして意外と単純なのかな。

「……で、どうして彼を乗っ取ったのか答えましょう」

「興味があったから」

黎明が答える前に即答。彼女は呆然としてからつまらなそうにした。そして大の字に地面に寝転がる。

「あゝ先を越されたっ！どうして当てられたました!？」

「緋刃も今の白痴とよく似た知人も、本質的に表せば自らの好奇の赴くままに簡単に一線を越します」

人は規範が無ければ簡単に深淵に踏み込む。それが自分の求める物ならばたとえ規範の中であっても簡単に邪魔を排除してまで行うだろう。

私の体も散々弄ばれ、侵され、殺された。誰も私の扱いに何の躊躇もなかったのは邪魔だったから以上に私が弱者であり、彼らは強者だ。苗床に収穫物以上の情を抱くことはない。

緋刃さんは彼女自身もそうだが私の罪も重い。今でこそ美しさと神秘が同質と見抜けなかった私も悪い。だが独りよがりにも暴走し、追い詰め、挙げ句友人を失った。

誰も彼も自分勝手に跡を濁す。それが誰かを狂わすとも知らずに。

「だけど楽しかったでしょう?」

心の中を的確に射貫く黎明の一言に何も返せない。

「まあ、落ち込まないで下さい。私が現れてしまったのはこの体の前の持主である黎人さん自身が『啓蒙されて(わかつて)』しまったものがあります。私みたいに手段だけに抑えられれば楽だったのでしょうけれど……」

彼女は寝転がりながら月の登る空を見上げていた。湖から延びる足元の白い濡れた跡までも月灯りが反射していた。

「自分勝手なのはこれに関わった人と同じです。たまたま面白そうな物語があつて、たまたま続きを読んだり、私の場合少し手が出せる立場だからたまたまに遊んでたりした、それだけです」

「そうですか」

「怒つたりしないんですか？」

「まだ、今は怒れません。でも教えてください……彼は無駄でしたか。誰か生き様を見世物にして満足しましたか？」

その言葉に彼女の動きが止まる。しばらく沈黙が続き、自傷気味に軽笑した。

「私さえ出てなければ面白かった気もしますね。突然私みたいな何でもありな全能が現れたら誰だって興奮ぎめするかと」

彼女の語る小説や映画のような人生はきつと楽しかったのだろう。誰だって彼女の立場であれば同じことをしていたかもしれない。

しかし、私はどうだろうか。

私は、この世界に来て何を成せた？ 私は、この世界に何を残せる？

私は……

私は……

私は……

私……

私……

私……

気付けば体は動いていた。

生贄の竜の緋刃

昔レイトと遊んだゲームがある。ボスの体力が半分を下回ると見た目と行動が変わるボスが何体もいる。とても一晩ではクリア出来ない難しいゲームだった。

特に強い敵ほど倒れて「やっと倒した」と徒労と歓喜を一度に感じ油断した時に限り立ち上がり、挙げ句強くなって帰ってくる。その度に私は心折られた。

目の前の白く燃える化け物もきつとその類なんだろう。一度切った戦闘の感覚は瞬時には戻らない。約0. 数秒、数字だけなら極短時間の瞬きすらままならない僅かな空白。私は長らく野生から離れたせいか生態系の超上位帯の戦闘を忘れていた。

武器を構えたと同時に体から重さを忘れる。向こうには私の下半身が力なく膝を折りつつあった。そして顔に衝撃が加わるのに遅れずぐ横で鉄屑が飛散した。

「っあー！」

数発の跳弾と共に飛ぶ折れた刃。攻撃すら目で追えない、声すら間に合わないその一瞬。だが、それでも何が起きたか嫌でも知った。

殺せ、考えるな、動け。

幸い怪我で血は出ている。冷静に、心拍が上がり血流が乱れる前に体の一部を服と同じ感覚で補修する。骨、筋繊維、神経、肌と臓器は無くていい。その3つだけの簡素な足を多量の出血から作り出す。頭痛と意識が不味いがどうせどうにかなる。

無理やり血のワイヤで横に飛ぶ。白痴はまだ激雷の追撃をするつもりだ。駄目だ、その前にまた一撃を入れて間に合わせろ。無駄でも、まだあと一歩だけ、奇跡さえ起きればいいのだ。

「激雷逃げてー！」

閃光、白い神秘の朝焼けが月の夜空へと瞬く。声も虚しく夜を切り裂く汚え火柱が空に飛んでいった。でも敵ながら悔しいが、糞ほど綺麗に散らせやがる。激雷の鉄の体があそこまで見事に消えてやがる。

「激雷いいっ！くっそあのや……ろ……」

月と星空、白く燃える景色。一面に輝く星空に舞う白い竜はかつての自らであるのに今までの何よりも心奪われた。初めての人との関わり、夜の街の光、神社での神秘の景色、それらを下地を剥いで塗り替えられる、割り込むような美しさ。頭が割れそうで反吐が出る。同時に苗床が私に狂ったのにも理解出来た。

ああ、綺麗だよ畜生。どいつもこいつもこんな汚い物に狂わされてやがったのか。白い炎の海の中で心揺さぶる景色を見上げて思う。同じ時をして私の体を突き動かした怒気も絶望も、そして殺意もスーツと熱が引いた。こんな不思議な感覚は初めてだ。

「苗床もレイトも、多分激雷も、皆これが好きだったのね」

私と苗床の初めての出会いは臍気だ。それでも苗床との初めての出会いには確かに白いそれがあった。目をつけられて訳の分からないうちにレイトと出会っても、最後には白が溢れた。激雷も一度私が殺した。

最初から最後まで私はこの得体の知れない物に縛られていた気がする。永久にも、短くも感じる間で見出した結論は珍しくある一つの疑問を生じさせた。

殺戮、排除、放浪。根幹を成していた全て。私の人生を狂わせ、レイトや苗床との出会いの切っ掛けだったもの。それら行動原理の殆どが敵である白痴が担っていた。

ならば今残された、絞り粕のみ残る私には何があったのだろう。その意味が今は誰かに教えてほしかった。

「(情けないなあ)」

全身から力が抜ける。剣を手放し金属音が地面に響き血液として蒸発して消えた。敵の前であるにも関わらず、どういうわけか棒立ちのまま何も出来ないままだ。

臭い。レイトが焼ける匂いがする。白い泥全部からレイトと同じ肉の香りが漂う。最後に話して何分経っただろう。彼を殺して何日だろう。戦いの最中だというのにレイトを殺した感覚が離れない。

「戦わないの？」

隣では銃を突きつけ首を傾げる白痴がそこにいた。この間合いなら互角に戦えそうなのに今一剣を振る気にならない。銃を降ろし剣の間合いに入られても、顔に触れられても尚私の心は動かない。

「笑って」

初めて顔に触れた。伸ばせば手が届くのに退けることすら無く無抵抗にされるがままであった。血染めの指で頬の肉を押され曲げられ白痴により歪な笑顔に固定された。

「ごめんね。私もちよつとやり過ぎちゃった」

「なん、なの?」

気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。

得も言われぬ不快感が全身を這いずり回る。

こいつの殺意は未だ絶えない。ここから少しでも殴ったり攻撃に出れば多分また殺し合いに戻る。なのにどうして、どうしてコイツは不気味な位に笑っている。

混乱の渦中、白痴は私の肩に手を置こうとする。だが私は反射的に払い除け、同時にまたふつふつと感情が湧いて出てきた。

「どうして、何で殺さないの?」

頭の中がグチャグチャのまま口から出た言葉は疑問だった。グチャグチャのままだから涙も出てきた。怒りの余りに泣いているのか、悲しいから泣いているのか自分で全く分からない。

白痴もおかしいと気がついて同情の視線を向ける。しかしすぐに結論が出たようで答えを言った。

「ママが私に殺されるかも知れないから頼まれたの」

ゆつくりと頭で言葉を噛み砕く。あの白糞を活かしたいから私を殺す、と。単純だけど私にも良く分かる感覚だ。私も大切な人の為に戦う時はきつと同じことをすると思う。でも、それでも、どうしても、許せないことはある。

「青い人が死んじやったけど悲しい?」

「激雷はあんまり、気が合うだけ」

彼女前回殺した時もなんか生き返っている。飛び散った死体も金属片でふつうの体ではないのは明白になった。ああ言うのは大抵そ

のうち生き返る。

意外とレイトも殺さずとも頭を一発ぶん殴ればレイトに戻ったりしないかしら。なんて、少しだけ思ったがやっぱり駄目だ。

……否、たった今駄目じゃなくなった。

「……はあ」

最悪だ。中途半端に混乱した中で奇跡とも思える「駄目じゃなかった」方法を思いついた。

そーだったそーだった。あんたも私も似たようなのだったわね。どこまでもアホだった私は馬鹿で弱いんだろう、でも同じ位に白痴も同じだけ馬鹿で、そして強い。でも、それでも私は私の願いを叶えた。い。

「白痴、勝負しない？」

だから私は賭けをする。勝ち目のない、どうしようもないくらいに不確定な勝負を挑む。涙を拭き、数歩距離を取って剣を構える。

「今から命がけで殺し合って私が勝ったらレイトを返せ」

白痴は一瞬キョトンとしたが、直ぐに理解してくれたようだ。そして、子供のように無邪気な笑顔を見せてくれた。本当に憎い位に可愛いらしい笑顔だ。私達と似てて、私達の正反対。

「いいわ。私が勝ったらママを助けてあげるんだから！」

本能で走って来たのなら徹頭徹尾、単純なままに押し通せ。少なくとも死体は残るはずだ。

緋色の刃よ、私を弔え。今の私は黎明を迎える。

先に動いたのは私、白痴に向けた銃から放たれた弾を大きく横に避ける。弾丸の軌道上には白い泥が尾を引き放射状に燃え上がる。範囲攻撃になりそうに使われすぎれば動き大きくが制限されそうだ。

しかし、それまでだ。剣を大振りして炎を切り裂く。一瞬だけ炎の海に一筋の道を拓き最高速で突っ込む。

「通れ！」

銃口から急所まで僅か2センチ、撃たれた着火前の弾丸が体を貫通し、だが私も通った。接近のリーチ差では私が勝っている、そのまま片腕の銃を切断した。

流れるように逆の刃で追撃をする。白痴の右手の剣の振りが届く前に胸を一突きして離脱する。

「っしやあー！一撃！」

しかし油断してはいけない、切られた腕からあふれる白濁が出血と比べて少ない。思考を進め切る前に切れた腕を私に向けて液を射出した。銃から口径が広がり威力だけを維持しながら放射状に広がる。被害が拡大した分銃弾の小ささに隠れていた地形の削りが大きい。視界の隅に写り込むはずの無い側面まで破壊が及んでいる。当れば即死が更に近づく。足を止めてしまえば的になるだけだ。止まらず走り抜ける。

「（見極めろ、冷静に）」

「むーっ！逃げてばかりじゃ勝負じゃないじゃん！」

白痴が声を上げて走る。時間経過で流れ落ちた白い泥の塊を蹴り飛ばし、時には私と同じように剣として振るいながら距離を詰めてくる。崖が崩れて地上に貯まる白い液が流れ込むのも時間の問題だ。

「（こつちだつてまだ負けられないんだよッ！）」

さて、彼女の言う通り逃げてばかりでは勝負じゃない。高出力と高速な技の数々は流星の私にも対処が難しい。しかし私と比べて明らかに劣る点が一つある。

両刃剣で棒高跳びで飛び白痴の右腕の突きを踏みつける。攻め続けて防がせない、だから搦手は意外かしら？初めてお前が怯えた顔を引き出せた。

「はえっ!?え、なにそれ!?!」

「戦闘バカには知らないでしょうね。受けてから殺す、ゲームじゃ常套手段よ！」

銃は間に合わない、剣も使えない、距離も完璧。あと一撃、あるいは致命傷だけでも残してやる。

「（殺れ、殺れ、殺れ！刺せ、あと一撃を！）」

それでも、運命は嘲笑った。

防がれる勢いそのまま胴体に一閃を入ようとしたその時、白痴の体が爆発した。厳密には暴発だ。幸か不幸か、銃の機構が破壊されてなお

遠距離を続けた白痴の左腕はついに体内で起爆して重症を負わせた。しかし私にとつてはチャンスではない、寧ろ致命的だ。爆煙で前が見えないのだ。ただでさえ息苦しい上に体に付いた甲殻の破片が皮膚に食い込んで痛い。

「がっ……ゲホッ」

咳き込みながらも状況を確認する為に目を凝らす。耳も爆発で何も聞こえない、鼻も余裕はない、その上で白痴の姿が見えない。自爆で動けなければいいのに、と思ったがそんなことは有り得ない。私はそんな事をする程弱くないだろう。

「ど、どこに……っえ！」

索敵より反応するよりも早く私は地面に叩きつけられた。

「(何が起きた!?)」

背中を強く打ち呼吸が出来ない。それでも無理矢理肺から空気を押し出す。口の中に入った砂を吐き出すと同時に、私の腹に強烈な衝撃が入る。

「げほっ……ぎっけんなおま……」

「大丈夫？」

心配しつつも今度は顔面を蹴られた。一切躊躇してないな、一気に口の中に血が入り、鉄臭い味が広がる。

「舐めるなああああ！」

怒りに任せて剣を振る。白痴は剣で受け止めるがその隙を突いてもう一撃入れるがそれも同じく剣で受けられた。

剣と剣がぶつかり合い、鏢迫り合いの状態となる。押し返そうと力を入れるがびくともしない。白痴の顔がすぐそばにあり、白痴の瞳がこちらを覗いている。

剣と剣がぶつかり合い、鏢迫り合いの状態となる。押し返そうと力を入れるがびくともしない。白痴の顔がすぐそばにあり、白痴の瞳がこちらを覗いている。

「私の勝利いっ！」

白痴が叫び遂に私の剣を弾き飛ばす。そのまま私に刃を振り下ろす。

振り下ろされた刃が肩に直撃し、鮮血が噴き出る。肉が裂け骨が砕ける感触が伝わってきた。痛みで意識を失いそうになるが、歯を噛み締めて堪える。ここで気を失えば確実に殺される。命さえあれば……逆転の一手を使ってもいいだけ殺してやる。

剣が引き抜かれると、私はその場に倒れ込んだ。起き上がれ、立ち上がって戦え。そう言い聞かせても体は動かない。

白痴が剣を構え近寄ってくる。彼女は私がまだ辛うじて意識を保ってる事に気付いたのか動きを止めてくれた。

「血、あるでしょ？立ちなよ」

「……無茶……言う……な……」

「剣を早く握りなさい、じやないと本当に殺すわ」

白痴が私を見下ろしながら話しかけてくる。

「もう……私の血だけじゃ……カハツ……ゲホっ……足んないな……」

私が話している間も口から吐瀉物が零れ落ちる。いつの間にか流れ込んでいた大量の白く燃える泥の中に倒れ込んだ。怪我のダメージが先か、丸焼きか、はたまた泥のせいで溺れ死ぬ、素直にぶち殺される。どちらにせよクソみたいに死ぬだろう。

「……………『私の』？私みたいに血を操れるんじゃないの？」

「……………」

ああ、クツソ、冗談じゃなくこれは死ぬかも。白痴が言っている事ももう聞こえない。その明らかに弱ってしまった体に今更になつて恐怖心が湧いて出てきた。いつかは一人で死ぬとは考えてたけど……思ってたより辛いな。

「贄」の竜としてただ一度も本気を出していないだなんて私は悔しくてたまらない。

私は血肉を捧げ、剣を持ち舞う者。

だが孤独であるが故に私の血を私に捧げ、武器を作る以外は無い。何も持たない私には私を差し出すしか無かった。

だからレイト、ごめんね。あなたの残した体、全部私に使わせて。
私を手遅れになる前に約束守るから。

「たす……け……て……レイ……ト」

暁と龍の明日

指先を切り血を出す感覚を能力に乗せる。力が抜ける感覚とその失った力が道具となる。捨て身に戦えば戦う程に攻撃的になれるように自分の一部を捨てれば捨てる程私は強くなれた。

けれど野生ではそれが限界だった。竜のはみ出し者で群れることなく白痴を中に飼っていた私には私以外に差し出せる物は無かった。あの竜の体も人の体も武器も何もかも作れたから確かに便利であった。ま、戦闘の主導権はどういう訳かアイツに持っていていかれて技量が折半されてたけれど。

そんな戦闘の陰で一番活躍していた力も実は血を操る位にしか考えていなかったのも事実だ。

でもレイトと出会ってからだろうか、最近は苗床もそうだ。何故か本能が疼くのだ。というよりより強く惹かれていたのかもしれない。気が付かないように逃げていたのだ。レイト達もまた私の血と同様に扱ってしまうんじゃないかって。

そしてたった今初めてレイトの体を捨てられるのに賭けた。

白い泥、レイトの中にある液体は地上へと続いている。私は溺れながら自らの血を捨てる感覚でレイトに能力を使った。

「終わりましたね」

黎明の眩きと共に音が鳴り止み夜の闇に静寂が支配する。黎明は膝を抱えて座っていた。

「ところで、どうして竜が興奮するか知っていますか？」

苗床は答えず沈黙を続ける。黎明が彼女の反応を待ちきれず彼女へと視線を向けた。

苗床は祈っていた。手を組み、闇の先にまだ熱く確かな物を彼女に向けていた。

「あのー、苗床さん？」

「彼女はまだ戦います」

「はっ？」

「だって、私の緋刃さんです。いくら醜くあっても、私を初めて殺してくれた彼女が全て虚構だとは思いません。たとえ望み薄であっても、あの闇の奥から姿が見えない限りここで祈りたいのです」

今一話が噛み合わない。最もどちらも最初から合わせる気は無いから当然だが白痴は流石に頭がおかしいと思いはじめた。元よりこの場でまともな感性を持つ生物など既に存在しない。

「……因みに私の問題の答えは全ての竜は私の子供だから、私が信仰を得て生きるように神秘により神としての本能を刺激される、故に昂ぶるのです」

「煩い。黙れ外道」

「うわいきなりの暴言。釣れませんねえ……」

さて、暴言を吐かれながらも黎明は既に彼女はいよいよ彼ら2人の戦闘が終わり帰る気である。体を伸ばして欠伸をし、ゆっくりと体を起こす。

グッ

「……？」

グッ グッ

「……………あれ？」

離れない。白痴は手足が地面から離れない。

彼女には戦闘という概念はない。自身の生物学的な虚弱さを自身の能力で補い続けた結果、当然のことながら攻撃に対する警戒も相応に無い。それこそ竜はおろか一人間よりも劣る警戒心の無さである。

脳がこれが攻撃と理解するまで30秒が経過。もしこれが黎明以外であれば既に動いていた。だからこそ彼女は初めて恐怖した。

明確な「死」に狂いつつあった。

「だ、誰……何で離れないの!?!」

青ざめ地を蹴り、引っぱり、だが無意味に手足は地面から離れない。手足に重い枷を嵌められたように、そう形容する前に考えを否定した。

「(苗……床……)」

「動けませんか？」

混乱のさなか苗床が黎明に話す。

「結局緋刃さんでも私を殺すのは不可能でしたね。腐敗した瞬間のあの爆発で幸か不幸か腐敗前の肉体も同時に周囲に吹き飛び同一個体として結合しました」

「私に何をしたら!？」

「私の肉体にあなたを繋げました」

苗床は白い神秘の液体の湖に残る小島の地下に爆発で四散した竜の肉体を伸ばしていた。そつと、黎明に感づかれないうちに相手を縛るのだ。そしてその思惑通り、細く繋がる肉体は肉眼での視認は困難であり網状に張り巡らされたそれを黎明は気づかず餌食となった。

苗床の竜の体に触れた者は苗床と一つになる。長い年月の中で竜の中でも理不尽な性質を知らないものはいない。彼女も例外でなく手遅れだというのに暴れ始めた。

「も、戻って！白痴、馬鹿やってないで私を助けなさい！ねえ！」

離れない手足に焦り、涙目になりながら必死に足掻く。だが苗床と癒着してしまった後では切除以外では離れる事は出来ない。無駄に藻掻き情けなく助けを求めて暗闇の穴に叫ぶ姿は哀れとしか言いようがない。そして、そんな彼女の声に応えるものはいない。

「放して、このままだとつ、私また、殺される!!」

黎明は白痴に助けを呼ぶが返事は無い。能力の全てを譲渡した人と変わらない状態で吸収されてしまえば消滅する。今までもずっと孤独だったけれど、今度は違う。もう二度と会えないかもしれない。「苗床っ！白痴さえ戻ればどうってことないんですよ！こんな無駄な事しても意味が無いですよ!!早く離せ！」

青ざめ震えながら、それでも苗床へ怒りをぶつけ続ける。プライドも何もをかなぐり捨てて、ただひたすらに懇願する。

「私はあなたと共に殺されるつもりです」

無常にも彼女は黎明は一蹴する。苗床はもう黎明など眼中にない。彼女の視線は彼女の愛する彼女に向けられていた。

白い沼が波立つ。彼女らの立つ小島の水量が増していく。次第に

2人の周りを覆いつくし、苗床と黎明は静かにその中へ飛び込んだ。
「(やめろおおおおおおおおおおお！)」

緋人さん、私はここで罪を背負い続けます。あなたにした愚行も、
街も、到底許される時は来ないでしょう。

でも、最後まで私の我儘をお願いします。

ほんの恨まれても、破片でもいいです。ほんの少しだけ、私もあなたと一緒に連れて行ってください。

あんたも来るのね、苗床。

いいわ、受け取ってやるよ。このまま私が全部背負ってやる。

「レ……イ、ト……」

大切な人を能力の為の代価として消費する。生まれたままの感性で流れ出る血を剣に変える感覚で2人から逆転の一手を作り出す。命を燃やし、魂を削るように、喪失感すら糧にして全身全霊で力を振り絞った。

能力が発動すると体の傷が塞がる。苗床の持つうつとおしい位の再生力がここまで頼もしいのは初めてだ。欠損した下半身がみるみるうちに復元していく。足りない血液も取り戻し体調は平時より活性化している。

「ッ動け！」

能力は次に体を成長させた。子供の小さな体は瞬時に人間の成人のそれへと変わり果てる。体の節々には鱗や甲殻が鎧として急所を隠すように生え始め、手足の先は鋭く鋭利な爪となっている。背中には大きな翼が生え、全体の様相はまさに竜の女、そうと形容できた。身体能力の向上も凄まじく白痴との強弱は完全に逆転している。頭から漏れる白い液が延焼しテールランプのように後方に回り込んだ。

「早っ!？」

油断も含め反応に遅れた。振り返り剣を構えるよりも早く接近されぎりぎり頭を下げて回避する。

「ちいー!」

舌打ちしながら後隙への攻撃の前に体勢を立て直す。攻撃を回避したとはいえまだ危機的状况に変わりはない。

「何々!?いきなり強くなりすぎだつて!」

私の動きはさつきまでとはまるで別人の動きだ。攻撃も防御も速度も全てが桁違いに上がっている。白痴には何が何だか分からないという感じでまだ受け入れられていないらしい。だけど今の緋刃は強いという事は理解出来たかな。あんたならこの勝負、すぐに互角に戻せるでしょ?

白痴は私の読み通り攻撃後を狙ってきた。でも遅い。

振り下ろされる剣を紙一重で避け、そのまま白痴の腕を掴み、捻じり上げる。腕に激痛が走り苦痛に顔を歪める。掴んだまま引き寄せ、空いた手で顔面に拳を叩きこんだ。

「かつ……!」

「謝らないわ……だってまだ最後が残ってるからね!」

そう吐き捨てて怯む白痴を蹴り上げた。彼女でも流石に顔面に攻撃が当たれば反応も出来ない。空中に打ち上げられれば猶更だ。

「これが私達の力だあああああ!」

大きく振りかぶり心臓目掛けて剣を投擲した。流星は強化された肉体だ。白痴の体は私の目で追えるギリギリの速度で飛び、剣はそれをさらに超えて投げた直後に彼女の体を置いて空の星に紛れて見えなくなった。剣の引き起こした凄まじい衝撃波は遥か離れた私にも肌で感じ、彼女の上半身の一部が弾ける姿が月に写る。

白痴の受け身すら取れなかったのか土埃で汚れながら地面を転がる。そろそろ運よく心臓が刺さって死なないかなと期待しているかな。と、剣を構えていたらまた立ち上った。

剣が当たった位置が良かったのか白痴の上半身の右側、右肩から先が無い。出血らしき白液の出も尋常ではなく、だがいよいよ死にかけなのか思ったよりは量は無い。というか私も同じ状態になったら立っていないであろう怪我でまだ立ち上がるコイツがおかしい。

「気持ち悪い……!」

思わず本音が漏れた。白痴は肩口を押さえながら苦し気に息を荒

げている。その顔は苦悶に満ち、痛みに耐えながらも笑っていた。

「きしっ……あ……」

だけど勝つたみたい。彼女の下半身は膝を突き、やがて前のめりに倒れ込む。下半身は白い液体となって崩れ落ちた。

「は、はは……ママ……ごめん……」

クソほど殺意を向けていた相手だが死ぬ時はあつけない。体が下半身を皮切りに胴体、腕、胸と溶けゆく程に白痴の目から光が終えていく。馬鹿な私でももう彼女に何も残っていないと直感で理解した。

「……ねえ、あんたと私ってどこから同じだったのかしら」

「私も……し……ら……あ……」

最後の言葉すら満足に言い切る前に彼女は息絶えた。念の為未だ燻る間際の火を液体まで誘導し彼女の跡を燃やす。そこを剣で刺しても白痴が泥を使つて蘇る、なんて展開は無かった。

そしていよいよ深呼吸して一言。

「……終わった。終わ……ちや……た……」

彼女の最期を見届けると、私はその場に座り込んだ。終わったのだ。緊張の糸が切れ、一気に疲労感と眠気が襲ってきた。戦闘が終わって眠るのは珍しい。普通はまた新たな敵を探しにふらつと放浪するの。

けれど今日はもう疲れた。意識が落ちる感覚に身を任せ燃える白泥に囲まれながら眠る。

お兄ちゃん、ママってまた帰ってくると思う？

多分帰ってこないよ。少し呆気なさ過ぎて今更蘇っても……ま、僕の反面教師にはさせてもらうかな。じゃ、最後に。母さんのバーカ。

夢の中、誰かの声が聞こえた気がしけれどきつと気のせいだろう。

ハレの日ケの日、饗宴の終わり

寝て起きて、朝日が登っていた。

白い泥は焦げ臭く地面に残り香を残すがその姿は無い。私の体も無事だけど……ま、たまたま都合よく私は燃えず蒸発したでいいじゃない。

ゆっくりと体を起こし辺りを眺める。穴に差し込む日の光が暖かく眩しい。こんなに穏やかな神域も久々だ。私以外の誰もいない世界とは意外と心休まるものね。

安心すると今度は風の音に腹の音が響く。どんなに辛くてもお腹は無常に減るものだ。ここに来て何時間経過しただろう。朝ごはんにはきつともう遅いだろうな。

「……帰ろう」

取り敢えず帰ろう。体の中の苗床もレイトもまだ近くに感じるから帰るまでは安全だろう。崖を登り、歩いて歩いていく。日が暮れて元いた場所を思い出し同じ道のりで歩み続けると白昼の神社の境内に出た。

……赤い跡は最早残っていない。積もった雪が穢も神秘も覆い隠して見えやしない。肌を刺す寒さに震えて薄い服で新雪に一步踏み出す。

「さっむ……鳴葉って結構冷える……」

積もる雪の冷たさに耐え、敷地を出た後は建物の屋根や木々の上、暗い路地裏を経由してなるべく人目の付かない道のりを直線に動く。この神社から家までは徒歩だと流石に遠い。勿論、今度は多少見られなくても誰も殺したりはしない。

人の世界に来たばかりの時は勝手が分からなくて見られた先から殺していた。人を食べるのにも抵抗が無かったから隠蔽も楽だったし。

けれど私は変わった。人って意外と食べられる部分が無いのよね。それに同じ事をするならお金の方を……って、やっぱり変わったというの嘘かもしれない。レイトならきつと物騒だって止めるだろう。

屋根の上から大通りの人らを横目に思い出した。

あの先には何があるのかしら。大通りに近づいて見下ろすと、道には紅白の飾りと木が飾られていた。明らかに場違いなそれらの意味は分からない。でも道中に掲示されたクリスマスだのお正月だの、それらに関係しそうとは考えた。人も道の端から端までみっちり埋まっけていて買い物だったり店に入ったりしている。

「……あれ？」

人混みの中で誰かと目が合う。こちらをじっと見つめる彼女は狐の耳が生えた他とは違う雰囲気である人外である。だが彼女も人混みには抗えず人の流れに沿ってすぐに建物の影に隠れてしまった。

「竜、久しいな」

「こちらこそ、神様」

と思っただら都合よく彼女の方から来てくれた。よく見れば彼女に見覚えがある。神域に行く前にいた狐だ。以前とは違い頭から足元まで温かそうな洋服で神様らしい雰囲気は見た目からは感じない。

「あれからどれ位経った？」

「お主の仲間と仕事をして3年、先に言うが彼は生きておる」
「どうも」

7年か、神域にしてはまあまあ短い。年数は私にとってそこまで問題にならない。それよりもこの寒さの中に長時間屋外で話し込む方が辛い。神様が竜に用なんて余程の用なのだろう。

不意に北風が吹く。雪の残る曇り空で風の通りの良い高所のコンクリートの屋上だ。体を震わせて身を縮めた。

「へきちツ……寒。狐、今何C？」

「ここ数日毎朝霜が降りている」

狐は自身の上着を脱ぐと私に羽織らせる。人肌の体温の残るそれは私には小さいがとても暖かく、それだけでありがたい。ふわふわと柔らかな質感は血の服では作りにくい。慈しみとは、孤独では知れぬ物。一応私も上着以外を自分で作った。

「神として積もる話も多くある。ここは一度暖かな室内で話したいのだが。竜、いいか？」

「朝食も付けてくれるかしら。まだ食べてないの」

「……は？」

「巫女の家だ。血で汚さぬように頼む」

「ふーん、邪魔するわ」

連れられた場所はそう遠くない一軒家。怪しい気配はしない。本当にただの家。玄関には2種類の大きさの靴が並んでいる。誰かは検討つかないけれどもう一人が巫女なのだろう。

奥の部屋に通されソファーに足を組んで座る。狐は冷蔵庫の中身を温めている。

「お主、名は？」

「私？二エ」

「我は鳴葉、土地神だ」

土地神ねえ、どうでもいいや。頭を支配するのは淀んだ感情の処理とレンジからの香りの生理的欲求。どこまでも自分勝手な体は目の前の問題から逃げ出している。ああ、目の前に置かれた物からいい匂いがするよ。

「握り飯と昨日の肉じゃが、味は保証する。熱い茶はもう少し待て」

「……ありがとう」

レイトと食べた物はおいしかった。この料理だって、きつととてもおいしい。渡された箸を手に取り口に運ぶ。暖かいご飯が喉を通る感覚に安心感を覚えながら食べる。

「うまいか」

「……味がする」

味の染みたまが温かく美味しい。きつとおにぎりは狐がさつき作ったみたいだ。不格好で味も場所によりまばら。だがどちらも腹は満たされ頭が回る。すると途端に空虚になる。

味の染みたまが温かく美味しい。きつとおにぎりは狐がさつき作ったみたいだ。不格好で味も場所によりまばら。だがどちらも腹は満たされ頭が回る。すると途端に空虚になる。

今までは殺して食べて寝れる事が唯一と思っていたけれど、今は人に慣れ過ぎた。人並みの幸せを知ってしまった。レイトとずっと一緒に居たかっただけなのに。

鳴葉は席を立ちお茶を入れ私の前に湯呑を置く。湯気が立ち昇り到底飲める筈もないそれを冷ます。息を吹きかけ、少し口をつけ、また吹きかける。繰り返して最初に飲んだ一口は薄く涙の味がした。

「何も見とらん」

「……」

「竜、これから話す事は他言無用で頼む。約束出来るか？」

狐は私の向かいに座り、姿勢正しく正す。

「我の助けた人間は無事引き渡した。体調も大分マシになって復帰したらしい」

そんな奴どうでもいい。知らない奴の話をしたいならもつと適任がいるだろうに。

「まあまあそんなに気を落とさんで。それよりお主、帰る場所はあるのか」

「……一応」

嘘をついた。帰る場所も迎え入れる人も誰も彼ももういないのだ。レイトも苗床も今は能力だけで帰ってこない。もしかしたら都合よく激雷が拾ってくればいいのに、そうすら思ってしまう。私は目を逸らして俯き、鳴葉も察してかそれ以上は聞いては来なかった。

「して、本題はこれだ」

テーブルの上には一つの原石。白く透き通ったそれは滑らかで何とも言えない形状だ。照明の光を反射し輝くそれは神秘的で見たことのある白だった。これが何故ここにあるのか、どうして狐が渡したのか、疑問ばかりが頭に浮かぶ。私は確信する。これはレイトの一部だ。

狐は私にそれを布袋に入れて手渡す。手に取って見ると「良縁祈願」と袋に書かれていた。どうしてこれを私に渡すのか、狐の意図が分からない。

「恩を売るのが仕事なんだな。意図は知らん。むしろ我が尋ねたい。」

その信仰の塊は一体如何なる物か？」

「……竜秘宝」

だけど、これ自体が幸運だった。何故幸運なのか知らない、分からない。だけど使い方とその先の結末は本能が知っていた。狐にお礼を言い今度こそ私は家に帰る。貰ったそれを握りしめ、寒空の下あの屋敷へと走る。

しかし……

「誰も……いない」

苗床の屋敷の中は無音だった。窓や扉には鍵が閉まり表からは入れそうにない。仕方なく裏口から入ると中は最低限の管理がされているだけで人の気配は無く、全ての部屋に入っても誰ひとりとして見つからない。

レイトの部屋はその中でも特異であった。レイトの部屋には何も無かった。文字通り、ベッドや家具、私物、服、その全てがまるで初めから何もないような、あるいはもう出払った後のようだ。

「……」

私はその部屋の真ん中に立つ。袋から竜秘宝を出して右手に握りしめていた。私は何も知らない。竜秘宝のある意味も、何で出来ているのかも、私は求めてこなかった。だけど私はひしひしと感じていた物がある。

孤独な私はなんと惨めなんだろう。

悲しい詩の最後に私は願いを語った。

「因果よ、私達を救え」

――

― 現実改変発生

― 因果律改変

― 黒龍【不羈】が世界崩壊に介入、一部の因果律を改変

現在時刻 現実不全の発生から6時間後

屍竜【苗床】の処分についての報告書

責任者 雷竜【激雷】

担当エンジニア 月輪皐月 黒姫ナツメ

外部協力者 贄竜【緋刃】 洋野黎人

技術協力者 鳴葉 燐火

作戦概要

本作戦は屍竜【苗床】の本体の処分を行う。本作戦前に試験的に開発された専用の薬品を苗床の本体を連鎖的に化学変化を発生させ本体の再生を阻害と分解を同時に行う。薬品の詳細な作用は別途資料を参照すること。また本作戦は主に時間経過倍率が1s:0. XX^
| XXXX^1. XXXXsまでの範囲が観測された場合に行う。

〜中略〜

結果報告

作戦は成功した。計画の通り苗床に薬品を散布し苗床の肉体は神域の広範囲を巻き込み爆発を発生させながら消滅した。詳細な被害状況は別途資料を参照すること。

しかし作戦外で発生した技術協力者とのトラブルにより作戦前に3名が参加不可、その内技術参加者の1名が死亡。トラブルを起こした月輪博士の事情聴取を実施した結果、参加した技術協力者との過去の接触の際の私怨から殺害したとの事。

また竜1匹との交戦により参加エンジニアの1名は死亡、もう1名は神域の時間経過倍率が上昇する危険性から帰還を放棄した。

備考

資料 a 作戦で発生した諸問題についての処理

技術協力者1名は殺害した月輪博士との面談で重篤な精神疾患が認められ現在は専門施設で療養中である。後の交渉で協力者とは和解した。

資料 b 次ページに詳細を載せる。

「お姉ちゃん、また宿題サボって秘密結社みたいなやつてる」

夕食前の6時半、お姉ちゃんの作ったプリントの束をベッドに寝ながら読んでいた。相変わらずそれっぽい文章書くのが上手い。分量もクオリティもあるし高校に進学してからクオリティも上がっている。本当の事って言われたらちよつと信じちゃうかも。

「(こういうのがホラーSFって言うのかな。私も中学から高校に入学したいなー)」

「仁恵、そろそろ夕食だ。ってまたか」

「あ、蕾姉」

お姉ちゃんが私を呼びに来た。蕾姉のベッドを使ってたから不満げ。いつも通りプリントを取り上げベッドからお姫様抱っこで床に降ろされる。

「毎度思うがなぜ私の？同室とはいえ別にベッドはあるだろう」

「さーね、何となく気分がいいの」

蕾を置いてリビングに走る。廊下にも夕食のいい匂いが少し漏れていた。うーん、このトマトの香りはいい物の予感がする。普段はパパと私、たまに蕾姉で料理を分担する。昨日は私、だから今日はパパが作る番だ。きつと帰りのスーパで良いものを見つけてきたのかな。期待を込めてリビングの扉を開けると予想と反してソファアで寝ていた。

「お疲れ。パパ、今日のご飯は？」

「今日はママと帰ってきたんだ。珍しく料理を作ってる」

へえー、ママも一緒なのは珍しい。お母さんは社長業が忙しくて一度家を出ると3日以上は見えない日が無い。だからただでさえ家の中では珍しい存在なのに料理は珍しいのだ。

「ママって料理できたんだ。上手いの？」

「仕事が楽だった頃はパパよりも上手だった」

テーブルに目を向けると4人分の食器と料理が並んでいた。鍋が大皿が丁度一つ入るようなスペースがあるだけだ。

「まだ出来てないの？」

「いやもう出来たよ。後は盛り付けて完成です」

キッチンから数日振りのママの声が聞こえた。

「今日はトマトパスタですよ」

えっへんと胸を張るママ。久しぶりに見たな、ドヤ顔。大体ああいう反応をするときは思いつきで何かしらふざけた事をする時の暴走モードである。事実、ゴミ箱の中には1kgの太麺のパスタの袋が2つ捨ててあった。

「パパ、ちゃんと止めなさいよね」

「まあまあ、明日の朝にでも食べればいいじゃないか」

「私は良いとして蕾姉は絶対胃もたれするじゃん」

私は席について大人しく席に座るのを待つことにした。しばらくするとパパとママも席に座り奥の部屋からお姉ちゃんが出てきた。案の定呆れていた。

「……」

そんなこんなで食卓の準備が終わったところでみんな席につく。手を合わせていただきますをして食べ始める。

パスタは絶品だった。トマトソースの酸味と甘みのバランスがちょうど良くていくらでも食べられそうな味だった。多分パパが買ってきたトマトも使ってると思うけどそれでも十分過ぎるくらい美味しい。

しかし減らない。

早々に父と母は離脱した。姉も部活動の仲間との電話で離席したまま戻ってこない。各々が一皿を分け合いながら麺の山を崩すが半分まで高さを低くした所で手が止まった。

「いやー、久し振りの一家団欒に久々に本気を出してしまいました」

その山を前にママが一言感想を漏らす。うん、やつぱりママはちよっと変わっている。パパもどうしてママと出会い好きになったのか私には理解できない。

だけどきつとこの家族は運命なのだろう。例え世界中が敵に回ってもこの3人がいれば幸せだ。だからこの幸せな日常はきつと世界

が代つても何も変わらないんだと思う……つて柄にもなく思ってしまった。

だって、こんなに楽しい日々なんて今まで無かった気がするから……ま、そんな訳無いけど何故か、ね。

明日の朝の分を残して夕食を食べ終える頃には夜の9時を回っていた。お風呂に入って歯磨きを済ませ自室に戻りベッドに寝転ぶ。

ふと机の上の写真立てを手に取る。

写真に写っているのはパパとママと私とお姉ちゃん、そして蕾姉。

これは去年、私が中学に入学する時に記念撮影をしたものだ。

写真の中の皆は笑顔だ。

「……………おやすみ」

現在位置 鳴葉市街 天菜家 ベランダ

「もしもし、私だ。3年、いや2年と1か月か。久しぶりだな、狐。こうやって話すのは仕事以来だ」

「どうして私が電話番号を知っているのか。どうやら妹、餐龍が狐の友達なのは……思い出して何よりだ。どうやら私達2人だけは平行世界の自身に憑依したらしい」

「ああ、言いたい事は同じだろう。つい6時間前に世界が崩壊した」

「待て待て、そう捲し立てられては話も出来ない。まずは一旦お互い知っている事を話し合おう」

「……………今までの信仰を感じられなくなった、と。狐がいうならばつまりはそういう事だろう」

「ああ、実を言うと前々からこうなる事は予想していたが如何せん私も管理しきれなかった。まだ竜秘宝を使う物がいたとはな」

「実は私も竜の肉体を捨てた、というより今までの義体だった物が今の肉体になっている。今となつては確認の余地も無いが今の私の体は竜よりも人間に近い物だ。竜だった時に使えた能力も今では使え

ない」

「……ああ、狐は神だから因果律改変については耐性があるだろう。混乱を招いて済まない、能力が変化しただけで本当に良かった」

「ところで今もまだ人間の世話になっているのか」

「……私と同じか。黒い方と巫女、それに月輪と……はは、中学が楽しそうによかった。是非とも家の妹をよろしく頼む」

「……妹のあの赤い竜は仁恵と名乗っている。私は蕾だ」

「……ああ、ここは一度あの神社で待ち合わせをしよう。不思議とあの神社だけはいつでもあるみたいだ」

「それでは、神秘亡き世界をお互い楽しもう」

【END】